伊坂城跡発掘調査報告

二〇〇三年三月　三重県埋蔵文化財センター

三重県埋蔵文化財調査報告227-2

近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT建設事業に伴う

伊坂城跡発掘調査報告

－三重県四日市市伊坂町－

２００３年３月

三重県埋蔵文化財センター

はじめに

日本人は歴史好きな民族といわれます。その中でも人気が高い時代が戦国時代です。戦国時代を題材としたテレビドラマは数年とおかず制作されますし、歴史小説も多く出版されています。私たちが住む東海地方は、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康という「英雄」を生んだ土地でもありますし、ドラマや小説での、天下統一をめざす彼ら「英雄」の活躍には心躍らせることもあります。

しかし一方で「英雄」たちに敗れ、あるいは服属していった人々に対して、私たちはどれほどの知識を持ち、どのようなまなざしをもって接することができているでしょうか。中世という時代を通じて各地に生まれてきた様々な集団が、統一の障害となるもので、「英雄」たちと比較して未熟で弱小なものという考え方のみでは、歴史の一面しかとらえていないといえましょう。

今回、第二名神高速道路の建設に伴って行いました伊坂城跡の発掘調査では、戦国時代を通じて営まれた城跡を形成する多くの屋敷地を確認することができました。これらの屋敷地は、戦乱や社会の変動に際した侍や百姓たちが、それを安全に乗り切るために築いたものであると考えられます。この発掘調査の成果が、豊かで厚みのある戦国史の把握の一助となれば幸いです。

発掘調査にあたりましては、地元の方々をはじめ、関係各位から多大な御協力と御配慮をいただきました。文末ではございますが心から御礼申し上げます。

平成15年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　吉　水　康　夫

例　言

1　本書は、三重県埋蔵文化財センターが平成９～12年度に調査を実施した伊坂城跡の発掘調査報告書である。
2　伊坂城跡・丸内遺跡については、既刊『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター1999年）と『近畿自動車道名古屋神戸線第二名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』（三重県埋蔵文化財センター　2000年）、『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県埋蔵文化財センター　2001年）にその概要を公表しているが、本書をもって正式報告とする。
3　調査は三重県埋蔵文化財センターが主体となって行った。発掘調査調査体制と調査面積は、下記の通りである。

年　　度	調　査　内　容	調　査　面　積	調査担当者	調査受託者
平成９年度	伊坂城跡事業予定地内測量調査	測量調査96,000㎡	服部　芳人	(株)パスコ
平成10年度	伊坂城跡範囲確認調査	範囲確認調査674㎡	服部　芳人	(株)四門
	丸内遺跡範囲確認調査	〃　　120㎡	田中　久生	リメックス(株)
平成11年度	伊坂城跡第1次発掘調査	発掘調査　7,172㎡	服部　芳人 木野本和之 原田恵理子 田中　美穂	アジア航測(株)
平成12年度	伊坂城跡第2次発掘調査	発掘調査6,142㎡ 範囲確認調査130㎡	竹田　憲治 木野本和之 服部　芳人 赤松　一秀	岡三リビック(株) (株)四門
	筋狭間池範囲確認調査	範囲確認調査130㎡	竹田　憲治	

4　報告書作成の体制は下記の通りである。

平成13年度　調査第二課
主幹兼課長　新田　洋
主査兼係長　森川幸雄
主　　事　松田珠美
〃　　竹田憲治
業務補助員　有満俊江
〃　　才木　薫
〃　　斎藤里枝
〃　　新貝里美
〃　　長野恵子
〃　　福森雅子
〃　　山中陽子

平成14年度　調査研究グループ
グループリーダー　山田　猛
主　　査　松田珠美
業務補助員　有満俊江
〃　　才木　薫
〃　　新貝里美
〃　　福森雅子
〃　　山中陽子
〃　　樫野幸子
〃　　古川由香

5　本書の執筆（第Ⅰ～Ⅴ章、第Ⅶ章）と編集は竹田が行った。
6　出土資料の環境考古学分析を環境考古研究会に依頼し、その結果を第Ⅵ章に掲載した。
7　本書に掲載した遺構・遺物図版・表の作成・遺物写真の撮影は竹田の指示のもと、松田珠美が行った。
8　本書で示す方位は国土座標第Ⅵ系の座標北を用いた。なお、磁北は６度50分西偏する（平成元年、国土地理院）。
9　本書で使用した土層および遺物の色調については、小山・竹原編『新版標準色帖』（９版1989）を使用した。
10　本書に用いた遺構表示略記号は、次のとおりである。
ＳＡ：土塁・石垣　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＦ：屋外竈
ＳＨ：竪穴住居　ＳＫ：土坑　ＳＲ：道路遺構・虎口　ＳＺ：性格不明遺構
11　調査期間中には地元の方々をはじめ、下記の方々・機関にご指導・ご協力を頂いた。記して感謝の意を表します。（順不同・敬称略）。
伊藤徳也（三重県立川越高等学校）・内堀信雄（岐阜市教育委員会）・尾野善裕（京都国立博物館）・笠井賢治（上野市教育委員会）・小玉道明・鈴木正貴（愛知県埋蔵文化財センター）・高田徹（城郭談話会）・多田暢久（姫路市教育委員会）・寺岡光三（伊賀中世城館調査会）・中井均（米原町教育委員会）・中西裕樹（城郭談話会）・中野晴久（常滑市民俗資料館）・福井健二（伊賀中世城館調査会）・藤澤良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）・播磨良紀（四日市大学）・藤田達生（三重大学）・松井一明（袋井市教育委員会）・村田修三・山本浩之（中世城郭研究会）・四日市市教育委員会・朝日町教育委員会・川越町教育委員会
12　発掘調査は近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市ＪＣＴ建設に伴って行われ、調査にかかる費用は、日本道路公団中部支社の負担による。
13　本書で報告した記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

本文目次

Ⅰ　前言

1　調査に至る経過……（竹田）　……　1

2　調査の方法……（竹田）　……　2

Ⅱ　位置と歴史的環境　……（竹田）……　4

Ⅲ　発掘調査前の伊坂城跡　……（竹田）……　9

Ⅳ　発掘調査の成果

1　基本的層序……（竹田）　……　9

2　室町・戦国時代の遺構と遺物…（竹田）　…　9

3　弥生～平安時代の遺構と遺物…（竹田）　… 119

4　江戸時代の遺構と遺物……（竹田）　… 122

Ⅴ　範囲確認調査　……（竹田）…… 140

Ⅵ　自然科学分析

1　伊坂城跡における花粉分析
（金原正明・木寺きみ子・金原正子）　…… 140

2　伊坂城跡における寄生虫卵分析
（金原正明・金原正子）　…… 142

3　伊坂城跡における樹種同定
（金原正明・金原明）　…… 144

Ⅶ　発掘調査のまとめ

1　遺構のまとめ　……（竹田）　…… 146

2　遺物のまとめ　……（竹田）　…… 149

3　伊坂築城の契機　……（竹田）　…… 154

4　伊坂城の廃絶　……（竹田）　…… 157

挿図目次

第１図　調査区位置図(1:2,000) …… 1

第２図　調査区地区割り図(1:5,000) …… 3

第３図　遺跡位置図(1:100,000) …… 5

第４図　調査前測量図、調査後遺構概略図
（1:2,000）…… 10

第５図　区画2北壁土層断面図(1:100)　…… 11

第６図　区画1･2･3･9平面図(1:500)　…… 12

第７図　SB1、3･4、SA2実測図(1:100)　…… 13

第８図　SB5･SA6･248･249、SZ7実測図
（1:100）…… 15

第９図　区画1･2出土遺物実測図(1:4)　…… 16

第10図　区画2出土遺物実測図(1:4)　…… 17

第11図　区画2･西側斜面出土遺物実測図
（1:4）…… 18

第12図　SD43土層断面図(1:100) …… 20

第13図　SA281～285(1:100)、SK61･62
(1:50)実測図　…… 21

第14図　区画3出土遺物実測図(1:4)　…… 22

第15図　区画4～8平面図(1:500) …… 23

第16図　区画4･6･8土層断面図(1:100)　…… 24

第17図　SB257(1:100)、SK340～343(1:50)
実測図　…… 25

第18図　区画4出土遺物実測図(1:4)　…… 26

第19図　SK334実測図(1:50) …… 27

第20図　SB253～256、SA279･280実測図
（1:100）…… 29

第21図　区画7･8土層断面図(1:100)　…… 30

第22図　SA325･338実測図(1:100)　…… 31

第23図　区画5～7出土遺物実測図(1:4) …… 32

第24図　SR301出土遺物実測図(1:4)　…… 33

第25図　SB250･278実測図(1:100)、SK307
･308遺物出土状況図(1:50)　…… 34

第26図　SB252･SE303実測図、SD316･
SA293･SR301土層断面図(1:50) …… 35

第27図　SA277･289、SA347(1:100)、SR313
(1:50)実測図　…… 36

第28図　区画8　SB250、SE303出土遺物
実測図(1:4) …… 38

第29図　区画8　SE303出土遺物実測図
（1:4）…… 39

第30図　区画8･9出土遺物実測図(1:4)　…… 41

第31図　区画9土層断面図(1:100)　…… 42

第32図　SR12土層断面図(1:100) …… 43

第33図　SR12出土遺物実測図(1:4) …… 43

第34図　区画10～12平面図(1:500) …… 45

第35図　区画10･12土層断面図(1:100)　…… 46

第36図　SB246･247･274実測図(1:100)　…… 47

第37図　SA100･275実測図(1:100)　…… 48

第38図　区画10出土遺物実測図(1:4) …… 49

第39図　区画10　Pit、包含層出土遺物
実測図(1:4) …… 50

第40図　SB102(1:100)、SK88(1:50)、SA121、
273(1:100)実測図　…… 51

第41図　SB103、SA104実測図(1:100)　…… 52

第42図　SR12･99･SA104実測図(1:100)　…… 53

第43図　区画11出土遺物実測図(1:4) …… 54
第44図　区画12土層断面図(1:100) …… 55
第45図　SB107実測図(1:100)、SK69・70
　遺物出土状況図(1:50) …… 56
第46図　SK71(1:50)、SB108・SA270、SB109
　(1:100)実測図 …… 57
第47図　SB110、258・SK77(1:100)、SK82、
　86、81・91(1:50)実測図 …… 59
第48図　SK90、92、93、96、SZ87実測図
　(1:50) …… 60
第49図　SZ79・83、84・97実測図
　(1:50、1:100) …… 61
第50図　SB150・151実測図(1:100) …… 63
第51図　SK128(1:50)、SB149(1:100)
　実測図 …… 64
第52図　SB141、142、145、154・155実測図
　(1:100) …… 65
第53図　SB143・144、146・147、148、153実測図
　(1:100) …… 66
第54図　SB152(1:100)、SK129、135、
　136、137(1:50) …… 68
第55図　SE157実測図(1:50) …… 69
第56図　SA134(1:50)、SA156・SD138・139
　(1:100) …… 70
第57図　区画12掘立柱建物関係遺物
　実測図(1:4) …… 71
第58図　区画12井戸・土坑出土遺物
　実測図(1:4) …… 73
第59図　区画12　SR120、SZ83、87出土
　遺物実測図(1:4) …… 74
第60図　区画12　SZ79、Pit、包含層出土
　遺物実測図(1:4) …… 76
第61図　区画12包含層出土遺物実測図
　(1:4) …… 77
第62図　区画12包含層出土遺物実測図
　(1:4) …… 78
第63図　区画13・16・17平面図(1:500) …… 79
第64図　SB202、203、259～261実測図
　(1:100) …… 81
第65図　SB140(1:100)、SK190、191、193、
　197(1:50)実測図 …… 82
第66図　区画13出土遺物実測図(1:4) …… 83
第67図　区画14・15平面図(1:500) …… 85
第68図　SA101・245・271実測図(1:100)、
　SD10土層断面図(1:50) …… 86
第69図　区画15土層断面図(1:100) …… 87
第70図　SB115実測図(1:100) …… 88
第71図　SB233実測図(1:100) …… 89
第72図　SB111、112、114、244・SA105実測図
　(1:100) …… 90
第73図　SB239実測図(1:100) …… 91
第74図　SK27・28遺物出土状況図(1:50) …… 92
第75図　SB235・272、236、237実測図
　(1:100、1:50) …… 93
第76図　SB238、241、242、243実測図
　(1:100、1:50) …… 94
第77図　SK15、25・26、44、54、63・64、65、66
　実測図(1:50) …… 95
第78図　SA106・234、240(1:100)、SD16
　(1:50)実測図 …… 96
第79図　SR21・22実測図(1:100、1:50) …… 98
第80図　SR23実測図(1:50) …… 99
第81図　区画15　掘立柱建物、土坑、溝、
　通路出土遺物実測図(1:4) …… 100
第82図　区画15　Pit、包含層出土遺物
　実測図(1:4) …… 101
第83図　区画16土層断面図(1:100) …… 103
第84図　SB210～212実測図(1:100) …… 104
第85図　SK170～173遺物出土状況図
　(1:50) …… 105
第86図　SB207実測図(1:100) …… 106
第87図　SB204、205、218実測図(1:100) …… 107
第88図　SB208・209、213、216実測図
　(1:100) …… 108
第89図　SB116・206、214、215実測図
　(1:100) …… 109
第90図　SB217実測図(1:100) …… 110
第91図　SK52、169、181実測図(1:50) …… 111
第92図　SK201、SD59遺物出土状況図、
　SD174、175・177・179、180土層
　断面図(1:50)、SA232実測図
　(1:100) …… 112

第93図　区画16掘立柱建物・土坑出土
遺物実測図(1:4) …… 114
第94図　区画16溝・包含層出土遺物
実測図(1:4) …… 115
第95図　区画16・17出土遺物実測図
(1:4) …… 116
第96図　包含層出土遺物(1:4) …… 118
第97図　SH41、312実測図(1:100) …… 119
第98図　SB311、SB348・349実測図
(1:100) …… 120
第99図　弥生～平安時代　遺物実測図
(1:4) …… 121
第100図　SB251(1:100)、SF315(1:50)
実測図 …… 123
第101図　江戸時代、丸内遺跡出土遺物
実測図(1:4) …… 124
第102図　主屋クラスの建物の比較 (1:200)
…… 148
第103図　出土遺物グラフ …… 150
第104図　遺物の出土分布① …… 151
第105図　遺物の出土分布② …… 152
第106図　遺物の出土分布③ …… 153
第107図　戦国期の伊坂 …… 155
第108図　各地の中世遺跡出土遺物グラフ
…… 158

表目次

第１表　掘立柱建物一覧表 …… 125
第２表　遺物観察表① …… 126
第３表　遺物観察表② …… 127
第４表　遺物観察表③ …… 128
第５表　遺物観察表④ …… 129
第６表　遺物観察表⑤ …… 130
第７表　遺物観察表⑥ …… 131
第８表　遺物観察表⑦ …… 132
第９表　遺物観察表⑧ …… 133
第10表　遺物観察表⑨ …… 134
第11表　遺物観察表⑩ …… 135
第12表　遺物観察表⑪ …… 136
第13表　遺物観察表⑫ …… 137
第14表　遺物観察表⑬ …… 138
第15表　遺物観察表⑭ …… 139
第16表　伊坂城跡における寄生虫卵・花粉分析結果
…… 143

写真目次

巻頭カラー　発掘調査状況、出土遺物
写真図版１　区画１(東上空から) …… 163
区画１(南上空から) …… 163
写真図版２　区画２(北上空から) …… 164
区画２(直上から) …… 164
写真図版３　区画２・３(直上から) …… 165
区画３～８(直上から) …… 165
写真図版４　区画10～12、14～16
(直上から) …… 166
区画10～12、14～16
(北東上空から) …… 166
写真図版５　区画10、11(直上から) …… 167
区画12(直上から) …… 167
写真図版６　区画12南東部(直上から) …… 168
区画13・16(直上から) …… 168
写真図版７　区画14・15(直上から) …… 169
主郭(直上から) …… 169
写真図版８　区画１全景(北から) …… 170
区画２全景(北から) …… 170
写真図版９　区画９　SB3・4(東から) …… 171
区画２　SB5(東から) …… 171
写真図版10　区画３　SD43(北から) …… 172
区画３　SD43(南から) …… 172
写真図版11　区画６　SB253付近
(北東から) …… 173
SR301(北から) …… 173
写真図版12　区画８　SB250付近(東から) …… 174
区画８　SE303付近(北から) …… 174
写真図版13　SR12 (東から) …… 175
区画11　SB102(西から) …… 175
写真図版14　区画11　SK88(北から) …… 176
区画11　SB103(西から) …… 176
写真図版15　区画12　北西部(北西から) …… 177
区画12　SB150・151付近
(北西から) …… 177
写真図版16　区画12　SK128(西から) …… 178

区画12　SE157(北西から) …… 178
写真図版17　区画12　SK135礫出土状況
(北西から) …… 179
区画12　SK135完掘状況
(北西から) …… 179
写真図版18　区画12　SK136礫出土状況
(南西から) …… 180
区画12　SK137礫出土状況
(北西から) …… 180
写真図版19　区画12　SR120(南東から) …… 181
区画12　SZ79 …… 181
写真図版20　区画13　SB203(北東から) …… 182
区画15全景(北から) …… 182
写真図版21　区画15全景(北西から) …… 183
区画15　SB105付近
(北西から) …… 183
写真図版22　区画15　SB239、SK27・28
(北東から) …… 184
区画16全景(北東から) …… 184
写真図版23　区画16建物集中部
(北西から) …… 185
区画16　SB204(北西から) …… 185
写真図版24　区画16　SB205(北東から) …… 186
区画16　SB212(南東から) …… 186
写真図版25　区画16　SB210、211
(南西から) …… 187
区画16　SK172遺物出土状況
(北西から) …… 187
写真図版26　区画16　SK172遺物出土状況
(南東から) …… 188
区画16　SK201礫出土状況
(北西から) …… 188
写真図版27　SH312(南東から) …… 189
SB311(南西から) …… 189
写真図版28　出土遺物① …… 190
写真図版29　出土遺物② …… 191
写真図版30　出土遺物③ …… 192
写真図版31　出土遺物④ …… 193
写真図版32　出土遺物⑤ …… 194
写真図版33　出土遺物⑥ …… 195
写真図版34　出土遺物⑦ …… 196
写真図版35　出土遺物⑧ …… 197
写真図版36　出土遺物⑨ …… 198
写真図版37　出土遺物⑩ …… 199
写真図版38　出土遺物⑪ …… 200
写真図版39　出土遺物⑫ …… 201
写真図版40　出土遺物⑬ …… 202
写真図版41　出土遺物⑭ …… 203
写真図版42　出土遺物⑮ …… 204
写真図版43　出土遺物⑯ …… 205

Ⅰ　前　言

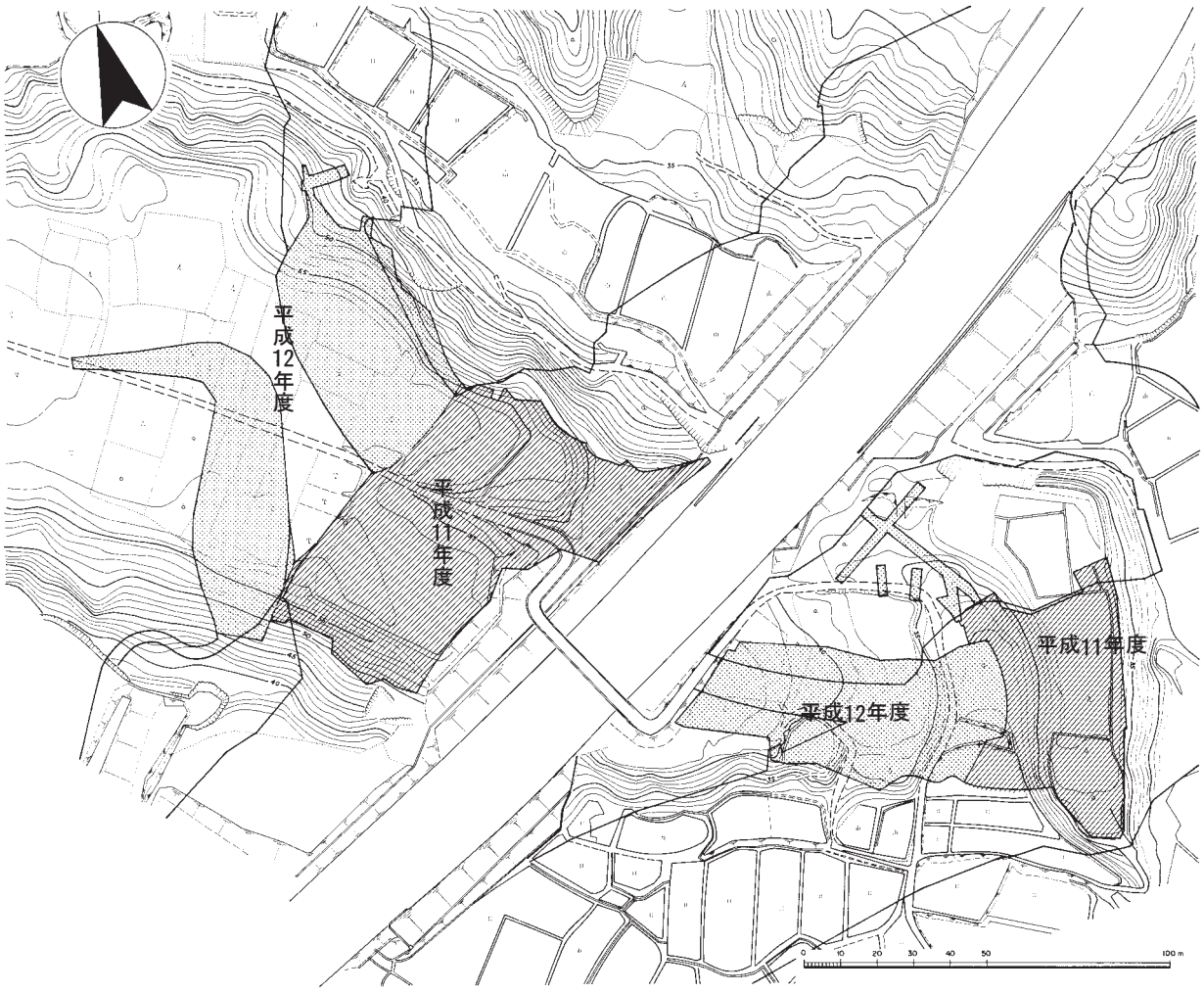
1　調査に至る経過

近畿自動車道名古屋神戸線の概要

東名・名神高速道路は、我が国の基幹交通を担う大動脈として産業・文化・経済活動に大きな貢献を果たしてきた。しかし、供用開始後30年余を経過した現在、ほぼ全線にわたり混雑が著しく、本来の高速性・定時性が低下しつつある。このままでは量的増大に加え、多様化する将来の交通需要に対応することが困難であると予想されている。

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神高速道路）は、第二東名高速道路と共に、これらの問題に対応し先発路線である東名・名神高速道路と一体となって四全総で提唱されている交流ネットワーク構想を推進するための高規格道路網の根幹となるものである。

三重県内では、愛知県境から四日市市伊坂町の近畿自動車道名古屋関線（東名阪自動車道）との交差箇所である四日市JCT までの約14㎞について、平成14年度供用を目途に急速な工事が行われている。その経路は、愛知県境から長島町・桑名市と伊勢湾岸を南下し、川越町で方向を大きく西に転じて、朝明川北岸の沖積低地から朝日丘陵南縁の朝日町・四日市市を通るものである。なお、この経路は第二東名



第１図　調査区位置図（1：2,000）

高速道路の一部を含めて伊勢湾岸道路とも呼称される。

調査に至る経緯

調査に至る経過については『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2002年）に詳しく述べられているので、ここでは伊坂城跡に関連する事項のみをふれることにする。この地点に城跡が存在していることは、すでに江戸時代から知られていた。幕末の元治元年（1864）に作られた『桑名御領分古城跡之図』には、「伊坂村城主　伊坂太郎左ヱ門」の城跡として伊坂城跡の絵図[①]が載せられている。また、江戸時代や明治時代の地誌類にも「伊坂城跡」の名が見える[②]。

伊坂城跡が埋蔵文化財として把握されるようになったのは昭和40年代になってからである。昭和45年にまとめられた『三重県遺跡地図』（三重県文化財連盟　1970年）には、「土塁よく残る」とされている。

その後三重県教育委員会が行った中世城館の悉皆調査で、主郭とその東の屋敷地が図化され、その詳細がつかめることになった[③]。しかし、この時点で埋蔵文化財として把握されていたのは主郭から東へ200m程の部分までで、そのころ行われた東名阪自動車道に伴う埋蔵文化財の調査では施工部分は記録保存の対象にはならず、この部分は発掘調査が行われないまま破壊された。

第二名紳高速道路の計画が具体化し、分布調査が行われると、その結果をもとに路線内の遺跡の取扱いについて道路公団・県土木部高速道推進室・県教育委員会・県埋蔵文化財センターで協議を実施することになった。この時期になると、より詳細な分布調査が行われ、尾根先端の畑地にまで城に関連する遺構が広がる可能性が高まり、ようやく尾根全体が埋蔵文化財として把握され、伊坂城跡が三重県でも有数の大規模な城跡であることが明かになってきた[④]。そのため県教育委員会からは、四日市JCT 予定地に所在する伊坂城跡について路線変更による現状保存を要望し、協議を重ねたが、路線は都市計画決定後のために変更困難との結論に達し、伊坂城跡は記録保存の取扱いに決した。

以上のような経過を経て、平成９年度に事業地にかかる96,000㎡の測量調査、平成10年度に674㎡の範囲確認調査、11年度に7,172㎡の第１次調査、12年度に6,140㎡の第２次調査と260㎡の範囲確認調査を行うことになった（第１図）。

2　調査の方法

調査体制

調査の体制については、『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』に詳しく述べられているのでここでは割愛する。伊坂城跡に関しては、本書の例言に記した。

調査区の設定

発掘調査にあたり、調査前測量の成果をもとに、国土調査法の第Ⅵ系国土座標にあわせて、Ｘ＝-106500、Ｙ＝57000を基点として、北西の主郭から南西の尾根先端までを網羅するＡ～Ｔまでの100×100ｍの大地区を設定した（第２図）。

さらに大地区内に４×４ｍを１単位とする小地区を設定した。各小地区は北西隅を基点として、北から南へはａ～ｙまでのアルファベット、西から東へは１～25の数字で表示した。

便宜上、国土座標による地区とは別に発掘調査中には、東名阪自動車道より東側を東区、西側を西区と呼称した。本書では極力、大・小地区か遺構群としてのまとまりをもつ「区画」にて報告している。

掘削と遺構番号の付与

調査にあたって、表土掘削は重機（バックホー）を用いて行い、包含層及び遺構の掘削は人力で行った。

遺構番号は、建物や土坑などの遺構は全体での通し番号を、ピットについては各グリッドごとに通し番号を与えた。

記録

遺構実測は１/20の手書きを基本とし、遺物出土状況は１/10の手書き、斜面については一部を１/50の光波平板で行い、縮小編集して１/50、１/200の遺構図・等高線図・平面図を作成した。

写真はモノクロネガとカラーリバーサルフィルム

を用い、35㎜、ブローニー判、４×５判を使用した。

調査の経過

平成９年度の測量調査、平成10年度の範囲確認調査を踏まえ、発掘調査は平成11年７月から13年１月に行った。その間の経過については調査日誌の抄録を記す。

調査日誌（抄）

第１次調査

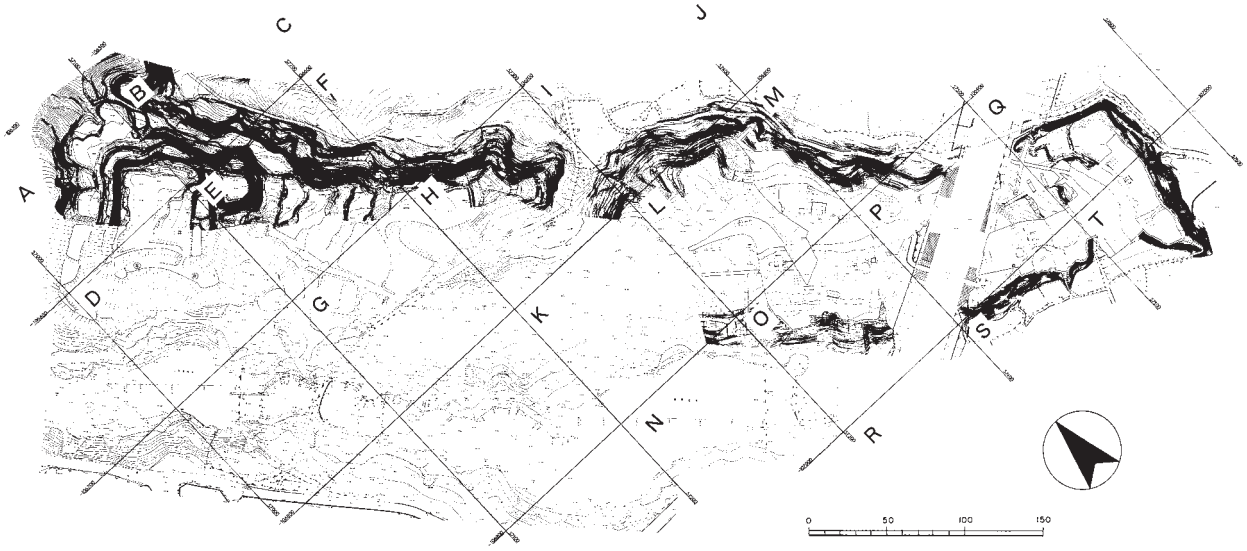
平成11年７月１日(木)　区画１・２測量基準点の確認
７月７日(水)　区画１・２・10～12調査前写真撮影
14日(水)　区画１重機による表土掘削開始
21日(水)　区画１遺構検出・掘削開始
８月２日(月)　区画２重機による表土掘削開始
４日(水)　区画１、遺構掘削ほぼ終了
６日(金)　区画１、ラジコンヘリによる空撮・全景写真撮影
10日(火)　区画１、遺構実測開始
12日(木)　区画１、遺構実測終了
19日(木)　区画１・２の西側斜面の重機による表土掘削開始
10月５日(火)　区画15の表土掘削開始
８日(金)　区画２の遺構検出・掘削再開
20日(水)　区画２でＳＢ３・４を検出
21日(木)　区画15の遺構検出・掘削開始
22日(金)　区画２の写真撮影
26日(火)　区画２の遺構実測開始
28日(木)　区画10～12の表土掘削開始
11月８日(月)　区画２の遺構実測終了
10日(水)　ＳＲ12の土層断面実測
16日(火)　区画３の表土掘削本格化
24日(水)　ＳＤ43の掘削開始
25日(木)　ＳＫ27から花瓶出土
29日(月)　区画10～12の遺構検出・掘削
12月１日(水)　区画３で土坑・柱穴を検出
17日(金)　ＳＤ43の掘削ほぼ終了
20日(月)　区画15の遺構実測本格化
21日(火)　区画３の写真撮影、遺構実測
27日(月)　区画３のラジコンヘリによる空撮

平成12年

１月５日(水)　区画15の全景写真撮影
17日(月)　中井均氏の指導を受ける。
26日(水)　区画10～12・15、ラジコンヘリによる空撮
29日(土)　第１回現地説明会。見学者370名
２月３日(木)　ＳＲ12の農道下部分掘削開始この後掘削続く
３月１日(水)　ＳＲ12の作業ほぼ終了

第２次調査

平成12年６月26日(月)　区画12の調査開始
28日(水)　遺構検出・遺構掘削開始
７月11日(火)　先行部分の調査ほぼ終了
14日(金)　区画９の表土掘削
17日(月)　区画９の遺構検出、遺構掘削
21日(金)　区画９付近のＳＤ43の状況を知るためトレンチを追加
26日(水)　区画12北西部分の表土掘削開始



第２図　調査区地区割り図（1：5,000）

８月４日(金)　区画12の遺構検出・掘削開始柱穴多くみつかる
７日(月)　区画３～８の表土掘削・遺構検出・掘削開始
23日(水)　ＳＥ303から土師器羽釜が大量出土
29日(火)　区画12内の掘立柱建物の検討
９月４日(月)　区画12の遺構掘削ほぼ終了
７日(木)　区画12の写真撮影
12日(火)　三重県北部地方は記録的大雨により被害を受ける。発掘調査現場も斜面の崩落など多数
13日(水)　大雨被害地の復旧・区画12遺構実測開始
18日(月)　区画３～８の遺構実測開始
25日(月)　区画16の表土掘削開始
28日(木)　区画３～８・15のラジコンヘリによる空撮
10月１日(日)　第２回現地説明会。見学者220名
４日(水)　ＳＥ303の断ち割り
10日(火)　ＳＥ157の断ち割り開始。区画16の遺構検出・掘削も本格化
16日(月)　寒川旭氏の指導を受ける
11月４日(土)　ＳＥ157の断ち割り終了
９日(木)　ＳＫ172から土師器羽釜出土
12月１日(金)　区画16の遺構掘削ほぼ終了。遺構実測開始。この後徹底的なダメ押し
５日(火)　ラジコンヘリによる空撮
10日(日)　第３回現地説明会。見学者90名
27日(水)　区画16の遺構実測終了
平成13年１月９日(火)　区画10の追加調査終了をもって伊坂城跡の第１次・第２次調査終了　(竹田憲治)

［参考文献］

服部芳人・水橋公恵ほか『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2002年

［註］

①絵図は『山田城跡発掘調査報告』(東員町教育委員会、1984年)に掲載されている。
②藤堂元甫『三国地志』1763年(上野市古文献刊行会『定本　三国地志』による)、安岡親毅『勢陽五鈴遺響』1833年(三重郷土資料刊行会、1975年)や、宮内黙蔵『伊勢名勝誌』1889年(三重郷土資料刊行会、1974年)などに春日部太郎左衛門の居城として伊坂城跡の名がみえる。
③『三重の中世城館』三重県教育委員会、1977年
④駒田利治「中世城館跡」(『四日市市史』第３巻、四日市市　1993年)、『四日市市遺跡地図　改訂版』(四日市市教委、1994年)、伊藤徳也「北伊勢における中世城郭の現況」(『研究紀要』三重県埋蔵文化財センター、1997年)

Ⅱ　位置と歴史的環境

伊坂城跡周辺の通史的な歴史環境については『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』に述べられている①ので、ここでは、中世後期における伊坂城をとりまく状況を、やや広い範囲（旧朝明郡・員弁郡・桑名郡・三重郡）について触れることにする。

(１)城跡

当該地域の城跡でこれまで発掘調査が行われているのは部分的なものも含めると、大井田城跡・丹生川上城跡（員弁郡大安町)、山田城跡（東員町）桑部城跡（桑名市)、力尾城跡（三重郡菰野町)、赤堀城跡・茂福城跡・平尾城跡・広永城跡（四日市市）などがある。このうち発掘調査により遺構の状況がある程度把握できているものをあげる。

丹生川上城跡（員弁郡大安町）　昭和58・59年度に発掘調査が行われた。標高約180m・比高約70mの山頂に築かれた城郭の麓に土塁や溝で囲まれた多くの区画が存在する。国道建設にともなって山麓の10区画の発掘調査が行われた。発掘調査区内の区画群の多くは、中世前期から構築され、区画内やその周囲には中世墓が存在する。16世紀の遺構・遺物が確認されているのは「郭Ⅴ」「郭Ⅶ」である。このうち「郭Ⅶ」からは大形の礎石建物が検出されている②。

発掘調査部分の性格について発掘調査報告書でも寺院・墓域・城館かを決めかねているが、山頂の城郭の麓に形成される区画群は、寺院や墓域をも含んでいたと解釈したほうがよさそうである。

山田城跡（員弁郡東員町）　昭和57年度に主郭を含めた全域の発掘調査が行われた。掘立柱建物・礎石建物・井戸などが検出され、染付・交址三彩などのほか瀬戸美濃・常滑製品が出土している。遺構・遺物とも主郭周辺に集中して分布している。城の存続

■ 中世城館

第３図　遺跡位置図（1：100,000）〔国土地理院1：50,000地形図『桑名』・『四日市』より〕

時期は16世紀前半と考えられている[3]。

桑部城跡（桑名市桑部町）　平成７～10年度に発掘調査が行われた。標高約50m・比高30mの山頂に2つの曲輪があり、その周囲に小規模な帯曲輪が展開する。遺物は16世紀を通じてみられるが、特に16世紀前半のものが多い[4]。

力尾城跡（三重郡菰野町）　平成10・11年度に主郭部周辺の発掘調査が行われた。標高約110m・比高約45mの尾根上に築かれている。最高所には東西約15m・南北約25mの、土塁と横堀にかこまれた土壇状の曲輪があり、その周囲に方形の区画がある。土塁の下層や整地土から15世紀を中心とした遺物が出土している[5]。

平尾城跡（四日市市平尾町）　平成５年度に発掘調査が行われた。東西約40m・南北約35mの方形の主郭（郭Ⅰ）があり、その北側にも土塁に囲まれた曲輪（郭Ⅱ）がある。主郭の土塁盛土からは15世紀後半の信楽製品の擂鉢が出土している。従来から、郭Ⅰ・Ⅱの外側に区画群が存在するのではないかと予想されていたが、発掘調査の結果、主郭の北東側に、土塁と堀で囲まれた区画があることが確認されている[6]。

（２）集落遺跡

城跡の発掘調査が多いのに比べ、中世後期の集落遺跡の発掘調査は極めて少ない。

西ヶ広遺跡（四日市市伊坂町）　伊坂城跡の南隣の尾根上に立地する。中世後期の道路遺構、掘立柱建物、区画溝、井戸が検出された。道路遺構は伊坂集落と西ノ広城跡を結ぶものである可能性が指摘されている[7]。

上野遺跡（四日市市阿倉川町）　海蔵川の北岸に営まれた遺跡である。平成元・２年度に発掘調査が行われた。区画溝と屋敷地群が検出されている。建物群は調査区の南側に集中している。調査区北側にも建物がみられるが、規模は小さい[8]。発掘調査報告書では建物群の時期が13世紀中葉、区画溝の埋没時期が15世紀代としているが、区画溝と同一の方位の建物がほとんどであることや建物の集中地を避けるように掘られている区画溝があることから、両者の時期差は縮まる可能性が高い。

（３）寺社

南北朝時代に各国に設けられた安国寺跡（四日市市西日野町）や観応２年（1351）の年号をもつ慈恵大師坐像胎内墨書銘[9]がある垂坂観音寺（四日市市垂坂町）、後奈良天皇の勅願寺になっている六呂見観音寺（四日市市六呂見町）[10]、醍醐寺文書に足利将軍や歴代守護からの寺領安堵や禁制を残す金剛寺（四日市市山村町）など、朝廷や幕府とつながりをもつ寺院が多い。また、一向一揆の拠点となった長島願証寺（桑名郡長島町）など、多くの寺社が存在していたが、発掘調査により明らかになった寺社は少ない。

米田遺跡（四日市市小古曽町）　内部川の北岸に営まれた遺跡である。遺物は中世を通じてみられるが、「西坊」などの墨書がある山茶椀や、瀬戸美濃製品・常滑製品とともに、木製の鬼板が出土している[11]。報告書にもあるように神社や寺院との関わりが深い遺跡であると思われる。

（４）中世墓

中世墓に関する資料は比較的多い。以下に記す発掘調査で確認されたもののほかにも、中世後期の記年銘を持つ石塔も多い。

経塚中世墓群（員弁郡大安町）　昭和48年（1973）に発掘調査が行われた。丘陵の頂部に径10m・高さ1.5mの塚があり、その下の斜面に５段程の削平地がある。削平地上には礫が方形に敷かれ、礫下には方形の土坑墓が掘られていたり、蔵骨器が埋納されていた。蔵骨器の上に五輪塔を据えるものもある。丘陵の裾には火葬施設も検出されている[12]。

杉谷中世墓群（三重郡菰野町）　昭和39・40年（1964・65）に発掘調査が行われた。古瀬戸や常滑の蔵骨器、火葬墓、200基近い宝篋印塔・五輪塔が確認されている[13]。

菟上遺跡（四日市市伊坂町）　谷の斜面に沿うように、100基以上の火葬墓が検出されている。火葬墓はほとんど重複がなく、短期間に造営された可能性が高いとされている。銭貨や数珠を伴うものがある[14]。

山川遺跡（四日市市貝家町）　内部川の北岸に立地する。１棟の掘立柱建物と、墓と思われる土坑がある。また調査区南側には古墳の周溝を利用した火葬墓が集まっている[15]。

（５）陸上交通

北伊勢を南北に走る東海道と、東西に走り、近江や美濃に至る陸路がある。中世には近世のような街道としては単純化しておらず、それぞれが錯綜していたようである。

東海道　古代以来、畿内と東海とを結ぶ最も有力な陸路である。中世後期には桑名から日永（四日市市）の間に60ヵ所の関があったという記述もある。近世の東海道は桑名から南下して茂福・羽津を通り、四日市に至る。中世の東海道もほぼ同じルートであったようで、連歌師の宗牧は、天文13年（1544）に尾張から海路桑名を経て「馬上物語」りながら栗原（四日市市赤堀）に向かい、「牧月斎の城」に着いている[16]。「牧月斎の城」については不詳であるが、桑名から浜田・赤堀の間にある羽津城である可能性が鶴崎裕雄氏により指摘されている[17]。

八風越　近世の八風街道は、近江国境の八風峠から田光（菰野町）に入り、そこから朝明川に沿ってくだり、富田（四日市市）あたりで東海道につながっているが、中世には田光から梅戸（大安町）に入り、員弁川沿いにくだって桑名に到達するというコースが最も交通量の多い道であったと考えられる。

近江今堀郷を中心とする保内商人が近江から桑名にむかったのがこのルートである。永禄元年（1558）の「保内商人申状案」によれば、保内商人は、この道を通っての「あさのを、紙、木わた、土の物、塩、一切のわげ物、あふら草、若め、一切鳥の類、のりの類、あらめ、一切魚の類、伊勢布」などの流通独占を主張している[18]。これらの品物は伊勢のほか、美濃・尾張・三河などからもたらされたものであろう。

連歌師の宗長は大永６年（1526）５月に駿河から桑名を経由し、八風越で近江に入っている[19]し、山科言継も天文２年（1533）７月に近江から八風峠を越え、梅戸城に入っている[20]。織田信長も永禄２年（1559）に京都から清州への帰路にこのルートを通っている[21]。長島の一向一揆に際して、近江衆が八風を越えて桑名に兵を出している[22]が、そのときに通ったのもこのルートである。

千草越　八風越とともに、近江への重要な交通路とされた。根の平峠から千草・杉谷（いずれも菰野町）を経て、桑名あるいは四日市に向かうルートである。八風越とともに保内商人が流通路の独占をはかったとされている。

弘治２年（1556）に山科言継は９月15日に千草越で伊勢に入り千草有吉を訪ねたが会えず、同日夕方に楠城（楠町）に入っている[23]。元亀・天正の争乱時には織田方が北近江の中仙道が使えなくなると、信長の京都・岐阜間の往来にも使われた。元亀元年（1570）には、信長は千草越で岐阜に向かう途中、杉谷善住坊に狙撃されている[24]。

その他の峠　このほか、伊勢と近江を結ぶ峠には、鞍掛越、治田越、石榑越、武平越などがある。鞍掛越については、天文13年（1544）に連歌師の宗牧が近江から白瀬(藤原町)、桑名を経て尾張に向かったという記事が『東国紀行』にみえる[25]。

また、桑名から員弁川に沿って遡り、現藤原町から美濃に抜けるルート（近世の濃州街道）も存在している。

（６）水上交通

伊坂城跡の約６㎞東には伊勢湾がある。湾には員弁川や朝明川が流れ込んでいる。近江・美濃から桑名・四日市に向かう陸路はこの両河川に沿っているので、当然河川による水運も行われていたであろう。東西方向の水運が河川交通によってなされているのに対し、南北方向の水運は、伊勢湾岸の海上交通によってなされていたと考えられる。これらの港湾については伊藤裕偉氏の研究がある[26]ので、それを要約する。

桑名　北伊勢（桑名・員弁・朝明・三重）において、最も有名な港町である。文献史学の立場から網野善彦氏の研究[27]がある。河口部に立地し、氾濫が激しい地形から、中世の状況は分かりにくいとされる。伊勢湾と木曽三川・員弁川に近接しており、美濃・尾張と伊勢との出入り口という性格を持ち、水陸交通の結節点となる港である。

茂福　伊勢湾に面する砂堆上に立地する。長さ約0.5km・幅約0.5kmの砂堆上の港町が想定されている。その中を近世の東海道が縦貫する。明治期の地形図によると、港町からやや離れた水田中の微高地に茂福城跡がある。

羽津　茂福と同一の砂堆上に立地する。長さ約

1.2㎞・幅約0.2㎞の港町が想定されている。茂福と同じく、近世の東海道が縦貫している。港町の南西端の丘陵上には羽津城跡がある。

四日市庭　小規模な潟湖と砂堆を中心とした、長さ約１㎞・幅約0.8㎞の港町の存在が想定されている。また、近世東海道沿線の砂堆上の集落も含めた良好港町が存在した可能性も指摘されている。明治期の地形図によると、港町からやや離れた水田中の微高地に浜田城跡がある。

（７）社会的諸関係

15世紀中葉から16世紀前半の北伊勢には際立った大名は存在せず、員弁郡を中心とする北方一揆、朝明郡を中心とする十ヵ所人数などという中小国人の連合があった。

北方一揆　『花営三代記』によると、応永２９年（1422）年に伊勢参宮途中の足利義持を、鈴鹿郡新所で「北方一揆」が、有力国人である関持盛・雲林院・加太平三郎・長野満高とともに出迎え、昼食の接待を行っている㉘。

矢田俊文氏によると、中央の権力者が伊勢参詣を行うときに、旅行中の将軍を出迎え、接待することは設営する側の義務であるとともに、接待を行う側の者のその地域での権益を認め、権利を生む場であったとされている㉙。このことから、「北方一揆」は15世紀前半に、関・加太・長野・雲林院などど同等の権限を有していたと考えられる。

飯田良一氏の研究㉚によると、北方一揆の構成員の国人は員弁郡を中心に分布し、朝明郡では萱生・伊坂氏がこれに含まれているとされている。また飯田氏は、北方一揆は文明年間(1469～86)ごろまで一揆的結合を保ったが、15世紀末には解体し、16世紀になると、梅戸氏・萱生氏などは足利幕府の奉公集に加わったり、六角氏の被官化するなど、国人層の独自の活動がみられるようになるとのことである。後に述べる十ヵ所人数と比較すると、北方一揆は「より弱小で、在地性が強い」とされている。

十ヵ所人数　北方一揆とともに飯田良一氏の研究がある。飯田氏によると、十ヵ所人数は、朝明郡に集中し、三河国に出自を持つ者が多いこと（朝倉・佐脇・富永・疋田)、足利氏の根本被官及びこれに類する者が多いこと（海老名・横瀬・疋田）などから、足利幕府によってこの地域に配置された奉公衆たちの組織と考えられている。集団としての結合は弱いが、結合自体は天文年間（1532～54）まで確認されている。　（竹田憲治）

［参考文献］

『三重県の地名』平凡社、1983年
『四日市市史』第３巻、第7巻、第16巻　四日市市

［註］

①服部芳人・水橋公恵ほか『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2002年
②『丹生川上城跡発掘調査報告』三重県教育委員会、1985年
③『山田城跡発掘調査報告』東員町教育委員会、1984年
④発掘調査担当者である桑名市教育委員会の斎藤理氏のご教示を得た。
⑤片岡博・新名強『力尾城跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2001年
⑥加藤淳次『平尾城跡』四日市市教育委員会、2001年
⑦片岡博「西ヶ広遺跡」(『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報③』(三重県埋蔵文化財センター、2000年)、田中久生「西ヶ広遺跡」(『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報④』(三重県埋蔵文化財センター、2001年)
⑧春日井恒『上野遺跡』(四日市市遺跡調査会、1991年)、同『上野遺跡２』(四日市市遺跡調査会、1992年)
⑨「垂坂観音寺慈恵大師坐像胎内墨書銘」(『四日市市史』第7巻－159)
⑩「後奈良天皇綸旨」(『四日市市史』第7巻－676)
⑪清水政宏『米田遺跡』四日市市教育委員会、2000年
⑫『三重県の地名』平凡社、1983年
⑬前掲註⑫と同じ。
⑭田中美穂ほか「菟上遺跡」(『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター、2000年)
⑮赤松一秀ほか『山川遺跡・山川古墳群』四日市市教育委員会、2000年
⑯『東国紀行』天文13年10月・11月・閏11月条(『群書類従』第18輯下)
⑰鶴崎裕雄「東海地方国人一揆の諸様相―宗牧「東国紀行」を史料として」―」（有光友学編『戦国期権力と地域社会』吉川弘文館、1986年)
⑱「保内商人申状案」(『四日市市史』第７巻－698)
⑲『宗長手記』大永６年5月条(『群書類従』第18輯下)
⑳『言継卿記』天文2年7月条(『四日市市史』第7巻－651)
㉑『信長公記』首巻廿六（角川書店刊、1969年。以下『信長公記』は角川書店本による)
㉒『信長公記』巻六　十七
㉓『言継卿記』弘治２年9月条(『四日市市史』第7巻－690)
㉔『信長公記』巻三　五
㉕『東国紀行』天文13年10月条(『群書類従』第18輯下)
㉖伊藤裕偉「伊勢湾西岸部における中世港町の状況」(『ふびと』50、三重大学歴史研究会　1998年）以下、中世の港
町に関しては伊藤氏の研究成果による。
㉗網野善彦「伊勢国桑名」(『日本中世都市の世界』ちくま学芸文庫、2001年)
㉘『花営三代記』応永29年9月19日条(『群書類従』第26輯)
㉙矢田俊文「室町・戦国時代と北畠氏」(『伊勢北畠氏と中世都市・多気』美杉村教育委員会、2001年)
㉚飯田良一「北伊勢の国人領主～十ヵ所人数、北方一揆を中心にして～」(『年報中世史研究』９、1984年)
㉛前掲註㉚と同じ

Ⅲ　伊坂城跡の構造

立地　伊坂城跡は朝明川の北岸の丘陵（朝日丘陵）上から東に派生する尾根上に立地する。麓の水田との比高差は約40mである。

主郭　尾根の最高所、標高約83.7mの部分には主郭がある。主郭の内部は約45m四方で、奥の北西部分が一段高くなっている。主郭の周囲には最も高い所で約2.5mの土塁を持つ。

さらに外側、主郭の北西・北東・南西の三方には多数の帯曲輪がある。帯曲輪には、井戸跡と思われる窪地が数ヵ所ある。

主郭の北東の隅近くには虎口がある。虎口につながる道はこのあたりで複雑に屈曲し、土塁をもつ虎口前との間を通っている。南隅にも虎口があり、南西の帯曲輪につながっている。

区画　さらに東で、道は直線的となり、その両側には屋敷地が広がる。主郭から東に100m程の所までは、道と区画の間には段差や土塁があり、区画間にも高低差がある。

それより東、尾根の先までは区画間の段差はなくなる。所々で土塁状の起伏や井戸の跡もあり、字古屋敷・丸内の地名が残るが、畑となっているために表面調査では城郭の遺構を見出すことはできない。

（竹田憲治）

［参考文献］

『三重の中世城館』三重県教育委員会、1977年

駒田利治「中世城館跡」（『四日市市史』第４巻、四日市市　1993年）

高田　徹「織豊期における北伊勢四郡の城館」（『中世城郭研究』第8号、1994年）

伊藤徳也「北伊勢における中世城郭の現況」（『研究紀要』三重県埋蔵文化財センター、1997年）

Ⅳ　発掘調査の成果

１　基本的層序

発掘調査を行った部分の基本的な層位は、上から第1層表土（オリーブ灰色から褐灰色砂質土）、第2層遺物包含層（灰褐色土）、第3層基盤層（東区では灰白色から暗灰色砂質土、西区では明褐色砂質土・黄褐色粘質土）である。基盤層は発掘区の西側では目の粗い花崗岩を多く含んでいる。区画造成のための整地は、ほとんどみられないが、区画４や９では整地土らしい層が存在する。耕作土から遺構検出面までの深さは平均して約30から40㎝である。

２　室町・戦国時代の遺構と遺物

区画１（第６図、写真図版１・８）

城跡東南部の標高約36mの尾根先端に立地する、東西約17m・南北約20mの区画である。東・南・西は切岸に囲まれ、北は0.8m程の段差で、区画２と接している。区画内で、掘立柱建物１棟・溝などを検出した。

（１）遺構

①掘立柱建物

ＳＢ１（第７図、写真図版１・８）　区画の北西隅で検出した。桁行２間×梁行２間の総柱の建物である。建物の規模からみると、柱穴は大きくかつ深い。柱穴から土師器羽釜（１）瀬戸美濃製品の天目茶椀（２）、常滑製品の片口鉢（３）などが出土した。

②溝

ＳＤ122　長さ約９m、深さ約0.1mの溝である。区画北端の段差に沿って掘られており、ＳＢ１の手前で南に折れる。遺物は出土していない。

（２）遺物（第９図、写真図版28）

区画が狭かったので出土遺物の量も少なかった。

①ＳＢ１関連遺物（１～３）

第４図　調査前測量図、調査後遺構概略図（1：2,000）

いずれも柱穴から出土した。中北勢系の土師器羽釜（1）、瀬戸美濃製品の天目茶椀（2）、常滑製品の片口鉢（3）がある。1は中形の羽釜である。口縁部は内傾し、端部は直立気味につまみ上げられ、内端に面を持つが、凹線状にはなっていない。外面のハケメは煤のため観察し難い。残存部には穿孔はない。伊藤裕偉氏の編年①のⅡ段階にあたると思われる。2は削り出しの輪高台で、外面には錆釉がかかる。藤澤良祐氏の編年②の大窯第1段階後半のものである。3の口縁端部は内面側に若干突出する。

②包含層出土遺物（4～6）

瀬戸美濃製品の耳付水注（4）、口広有耳壷（5）、筒形容器（6）がある。

4は大窯第1～3段階、5は古瀬戸後Ⅳ期、6は大窯第1段階のものである。

区画2（第6図、写真図版2・3・8）

区画1の北、標高約39mの尾根上に立地する。調査区外を含めると、東西約20m・南北約70mの区画が想定できる。東と西には切岸、南には区画1との間の段差がある。区画内で、掘立柱建物3棟・柵4条などを検出した。

区画はSB3・4とその周辺と、SB5周辺の2つに分けられる可能性もある。区画は、調査区からさらに北の調査区外に続く。

（1）遺構

①掘立柱建物

SB3（第7図、写真図版2・9）　区画の西端で検出した。桁行2間×梁行1間の小規模な建物である。柱穴から鉄釘（7）が出土した。SB4と重複しているが、両者の前後関係は不明である。

SB4（第7図、写真図版2・9）　区画の西端で検出した。桁行2間×梁行2間の総柱の建物である。柱穴から鉄釘、土師器の小片が出土した。SB3と重複しているが、両者の前後関係は不明である。

SB5（第8図、写真2・9）　区画の西端で検出した。桁行3間×梁行2間の総柱の建物で、区画2内では最大の建物である。SA6と重複しているが両者の前後関係は不明である。

②柵

SA2（第7図、写真図版2）　区画の南端近くで検出した。長さ3m・柱間3間の柵である。柱穴が重複しており、造り替えを行っている可能性がある。

SA6（第8図、写真図版2・9）　長さ5m・柱間3間の柵である。SB5と重複しているが両者の前後関係は不明である。

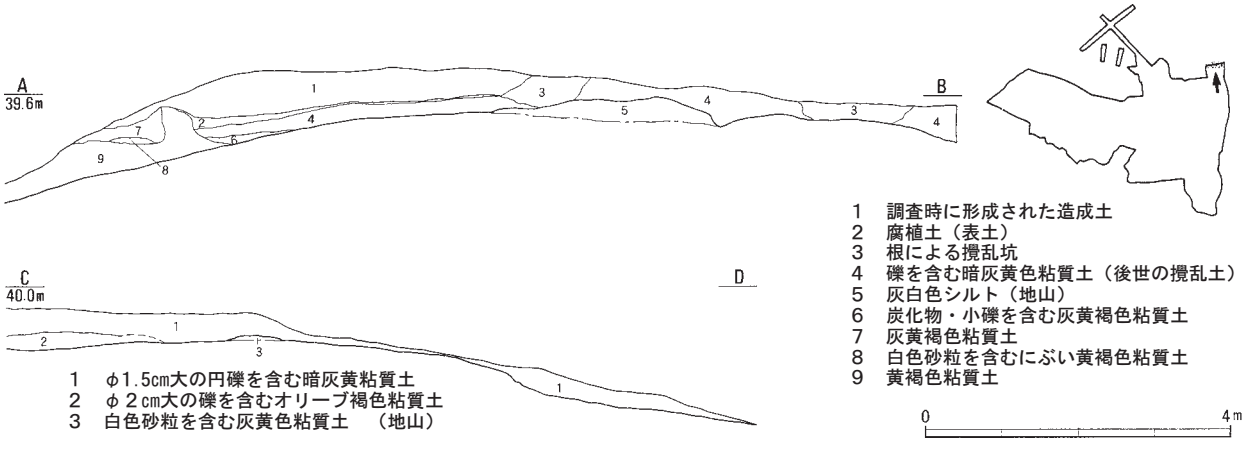
SA248・249（第8図、写真図版2・9）　SA248は、長さ6.3m・柱間3間、SA249は長さ5.4mの柵である。両者は重複しているが、前後関係は不明である。同時に存在していた可能性が高い。

③テラス状遺構

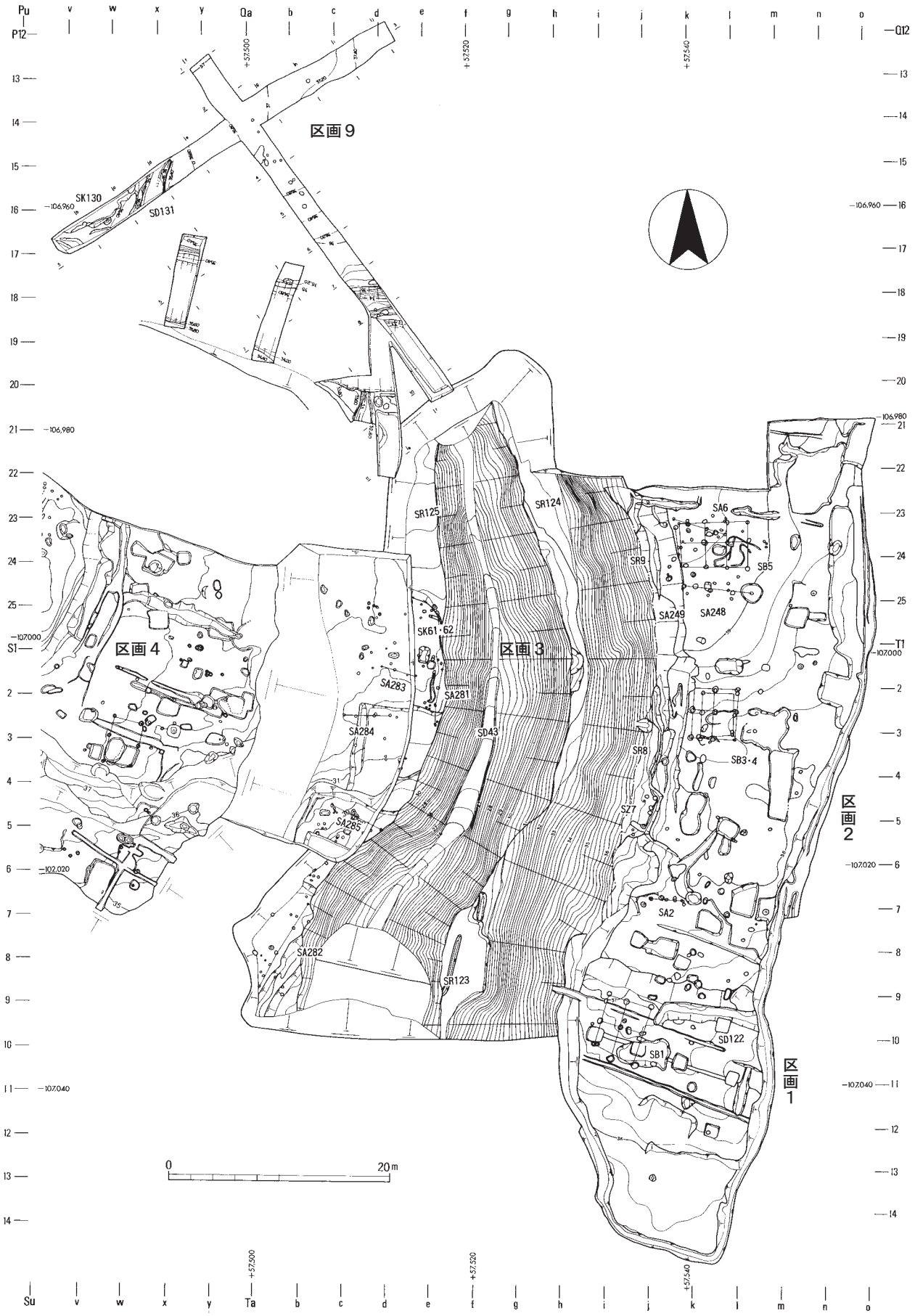
SR8（第6図、写真図版2）　東西0.7m・南北9.2mのテラス状遺構である。SB3・4の西隣に造られている。段切遺構SZ7につながっている。

SR9（第6図、写真図版2）　東西0.95m・南北5.95mのテラス状遺構である。SB5の西隣に造られている。

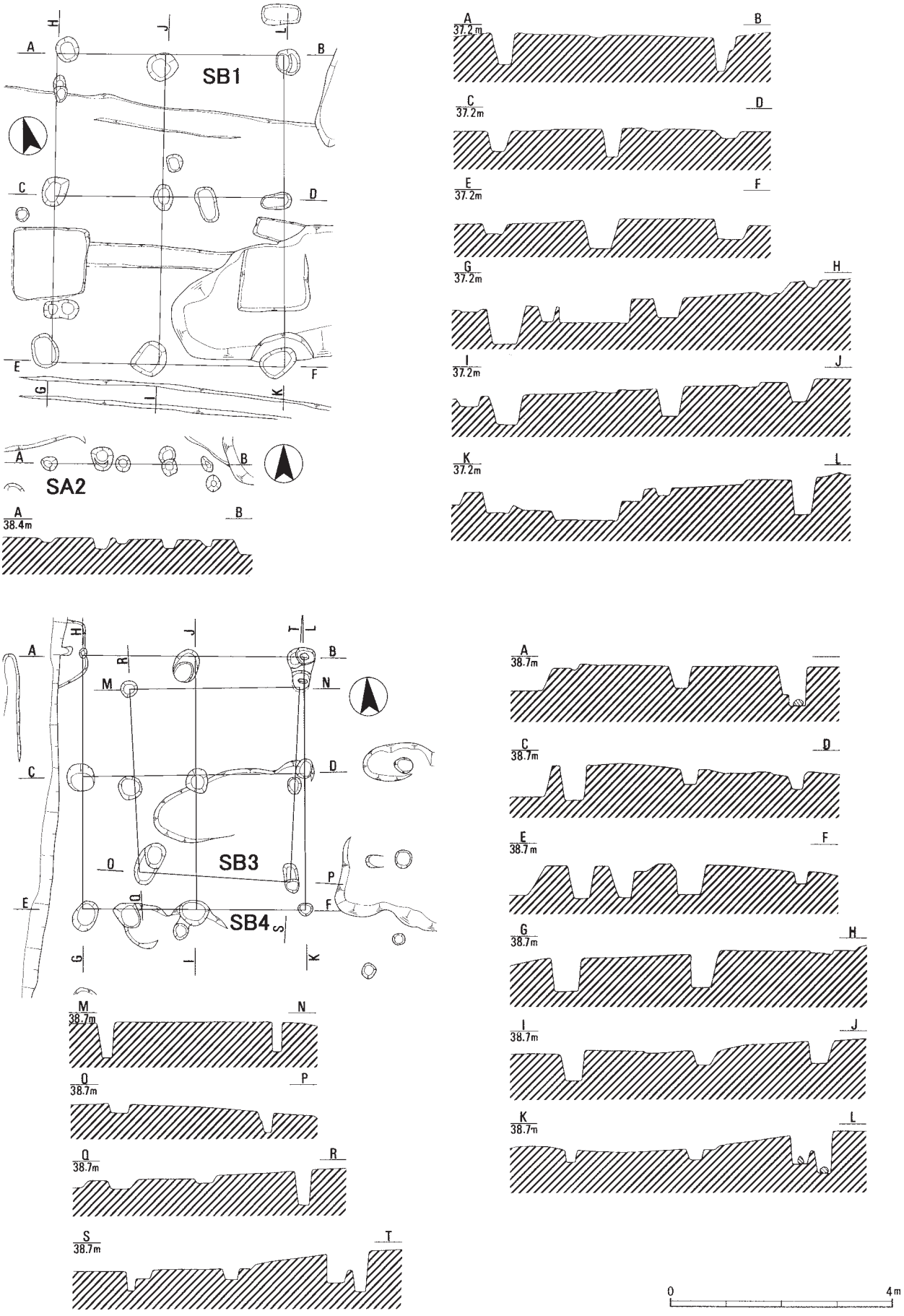
④段切遺構



第5図　区画2　北壁土層断面図（1：100）



第６図　区画１・２・３・９　平面図（1：500）



第７図　SB1、3・4、SA2　実測図（1：100）

ＳＺ７（第８図、写真図版２）　東西1.25m・南北4.6m・深さ１mの段状の切り込みである。テラス状遺構ＳＲ８につながっている。

（２）遺物（第9～11図、写真図版28・29）

遺物量は比較的多い。西側斜面出土遺物としたものは、区画１もしくは２から転落した遺物であろう。特殊遺物としては、鋳型（46・47・54）や五輪塔（43・52）がある。鋳型については、この区画内で金属生産が行われていたことを示唆するものである。五輪塔は区画造成以前にこの区画付近が墓域であったことを示すものであろう。

①遺構出土遺物（７・15）

ＳＢ３の柱穴から出土した鉄釘（７）とピット出土の羽釜（15）がある。15の口縁部は直立気味で、端部は外側に若干突出し、上端に面を持っている。

②包含層出土遺物（８～14・16～47）

土師器　皿（８～14）、中北勢系の土師器羽釜（16～20）・茶釜（21・22）がある。皿には器壁が厚く、丸くたちあがるもの（８・９）、器壁が薄くゆるやかにたちあがるもの（10・11）、直線的にたちあがり、口縁端部にヨコナデが施されるもの（12～14）がある。12の内外面は真っ黒になっている。14は灯明皿として使用されている。

羽釜には、口径23㎝前後の中形のもの（15・17）と、口径20㎝以下の小形のもの（16・18）がある。口縁部が直立気味のもの（17・18）と内傾気味のもの（16・19・20）があるがいずれも口縁端部の内端に面を持っている。16・17・19・20には焼成前穿孔がある。他のものに穿孔があったかどうかはわからない。全体的に新しい傾向のものかと思われる。

茶釜（21・22）の口縁端部はいずれも外側につまみ出され、上端に面を持っている。

陶器　瀬戸美濃製品の天目茶椀（23～27）・灰釉丸皿（28）・鉄釉丸皿（29）・擂鉢（30～32）・筒形容器（33）、常滑製品の片口鉢（35）・甕（36・37）がある。

天目茶椀のうち、23は大窯第１段階、24は大窯第２段階、25は大窯第２段階後半、27は大窯第３段階のものである。26は概ね大窯第２段階のものと思われる。23の内面には同心円状の擦痕があり、25の高台には重ね焼きの灰釉が付着する。皿類のうち、28は大窯第２段階、29は大窯第２段階後半のものである。

擂鉢のうち、30は大窯第１段階前半、31は大窯第１段階後半、32は大窯第２段階後半のものである。33は器高の低い鉄釉の筒形容器である。大窯第１～２段階のものである。34は尾張型第８型式のものである。

常滑製品の片口鉢（35）の口縁端部は内側に引き出されている。中野晴久氏の常滑製品の編年[3]の９型式のものである。甕のうち36の口縁部内側が角張り、37は焼成が悪く、口縁部内側が中に引き出されている。36は11型式、37は12型式のものである。

磁器　白磁端反皿（38～40）がある。

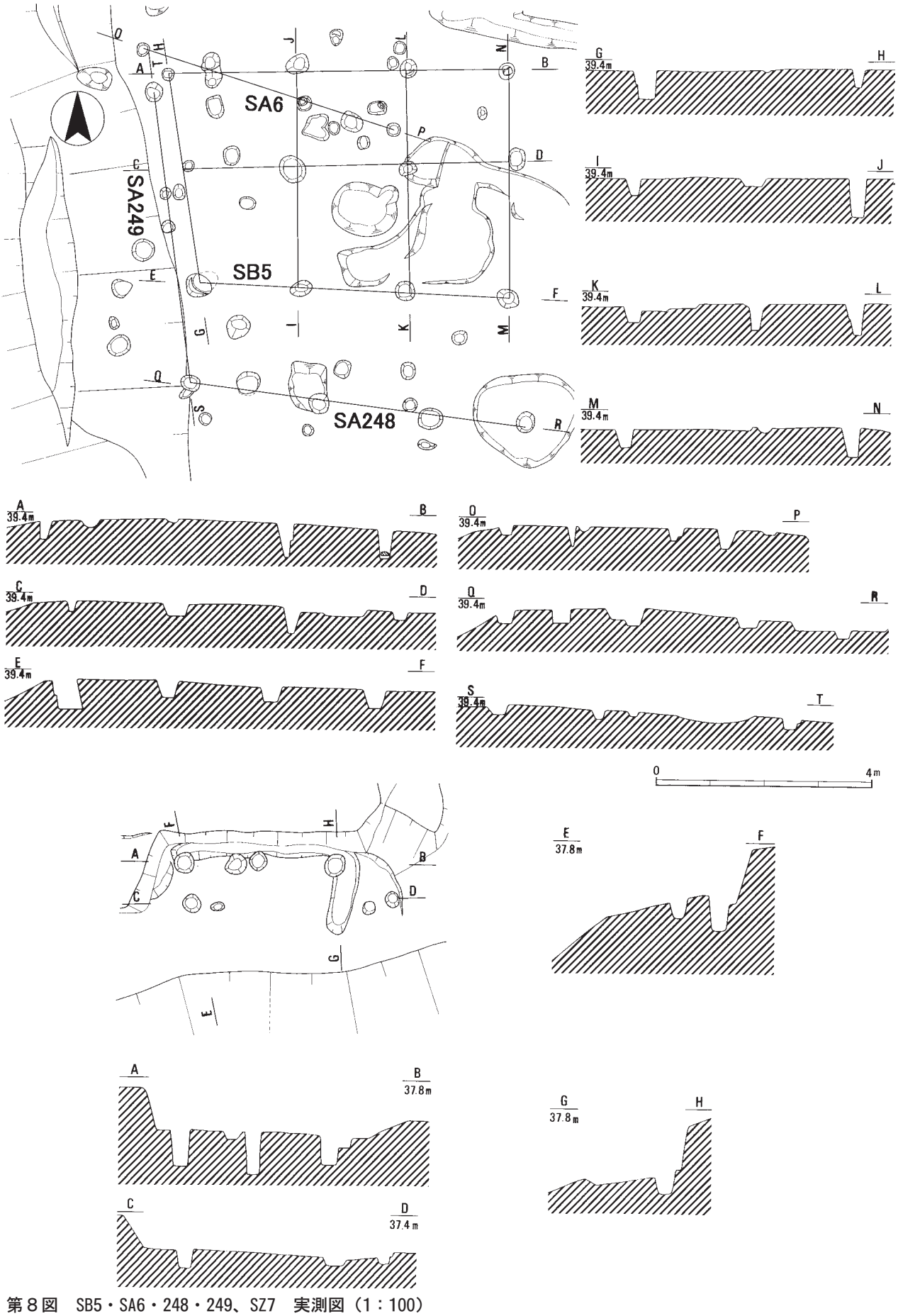
その他　瓦（41・42）、五輪塔の火輪（43）、加工円盤（44）、鉄釘（45）、鋳型（46・47）がある。41・42はいずれも丸瓦である。玉縁の部分は短く、内面には細かい布目が残る。42の外面にはタタキ目が残る。区画１・２の北隣の尾根（伊坂遺跡12年度発掘調査東地区①）からは、天平期の瓦窯の灰原が検出されているが[4]、そこで出土した瓦とは、胎土・製作技法・焼成とも全く異なる。43は花崗岩製で全高が低く、軒先が大きく反りあがる。44には大窯期の天目茶椀が使われている。

③西側斜面出土遺物（48～54）

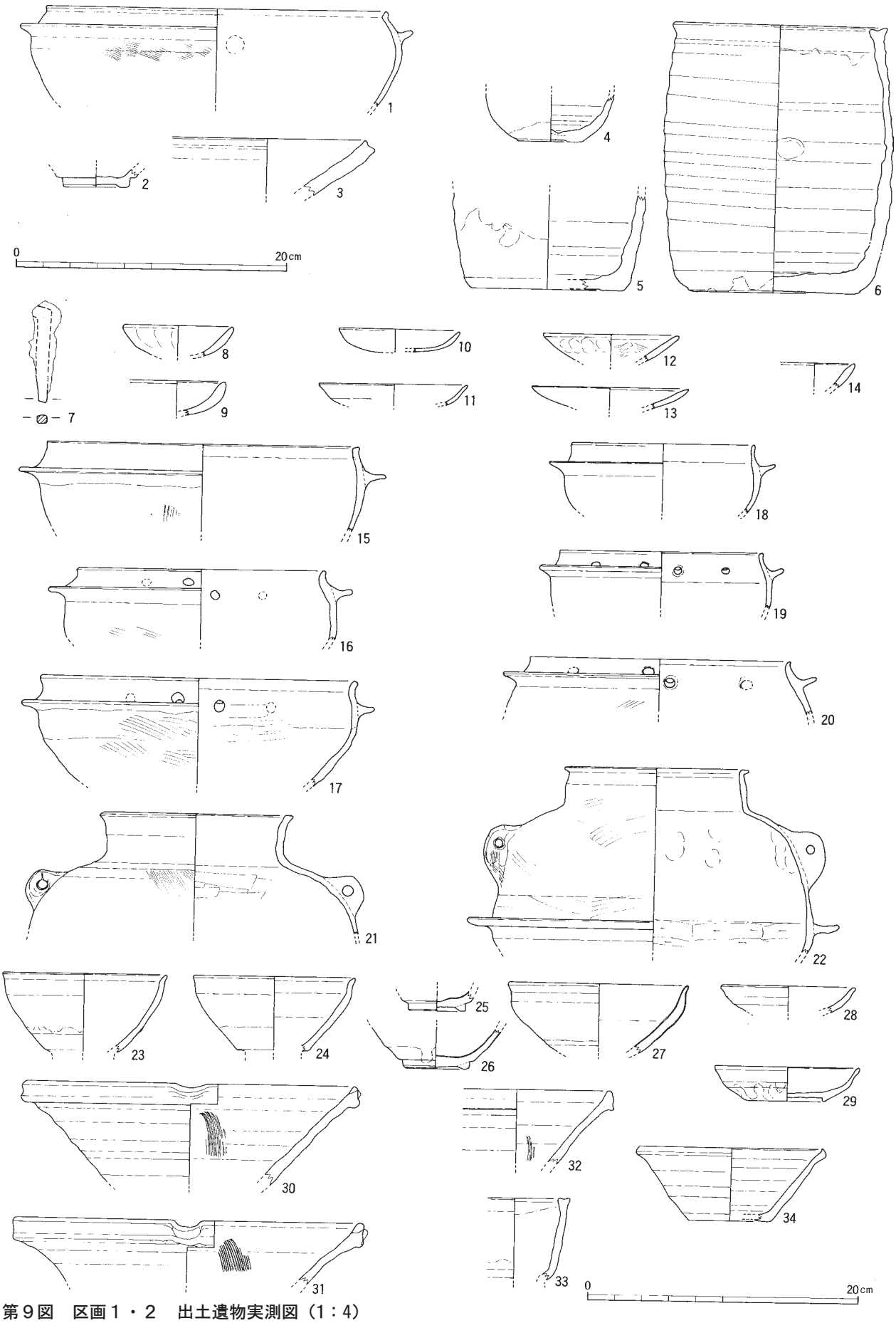
区画１・２の西側斜面から出土した遺物である。このうちの大部分は区画２から転落した遺物と思われる。中北勢系の土師器羽釜（48）・常滑製品の片口鉢（49）・甕（50・51）・五輪塔（52）・石臼（53）・鋳型（54）がある。48は口縁部が内傾し、口縁端部が斜め上方につまみ上げられ、内端に面を持っている。鍔部直上に焼成前穿孔がある。Ⅱａ段階にあたると思われる。49 は焼成が悪く、口縁部が内側に引き出されている。51は焼成が悪く、口縁部内面は若干引き出されている。50は９～10型式、51は12型式のものである。52は砂岩系の石材で造られており、全高が高い。軒先はわずかに反りあがる。53は花崗岩製の上臼である。

区画３（第６図、写真図版３）

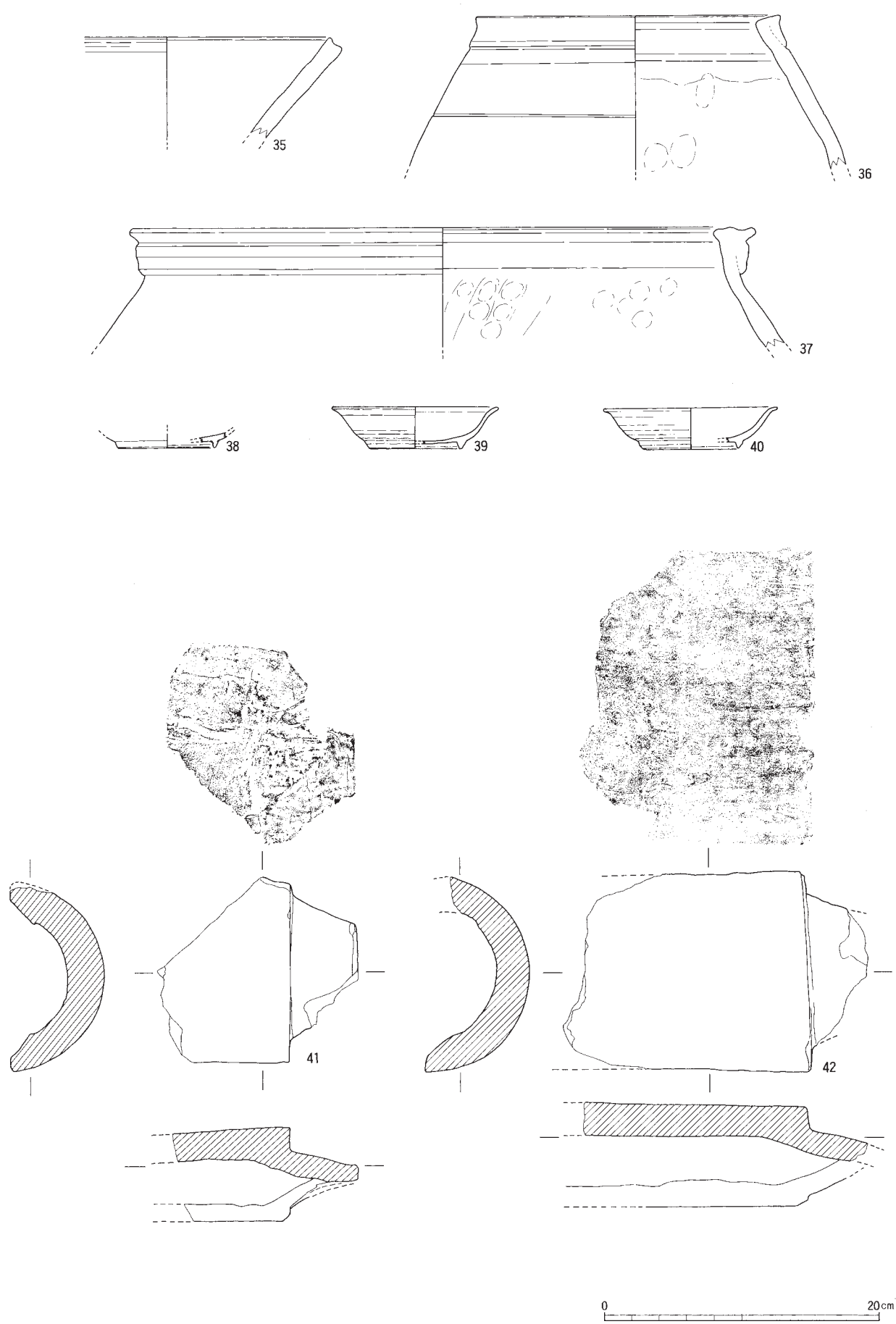
区画１・２の西側、堀状遺構ＳＤ43とその両岸の標高約30mの平坦地を区画３とした。東の区画１・



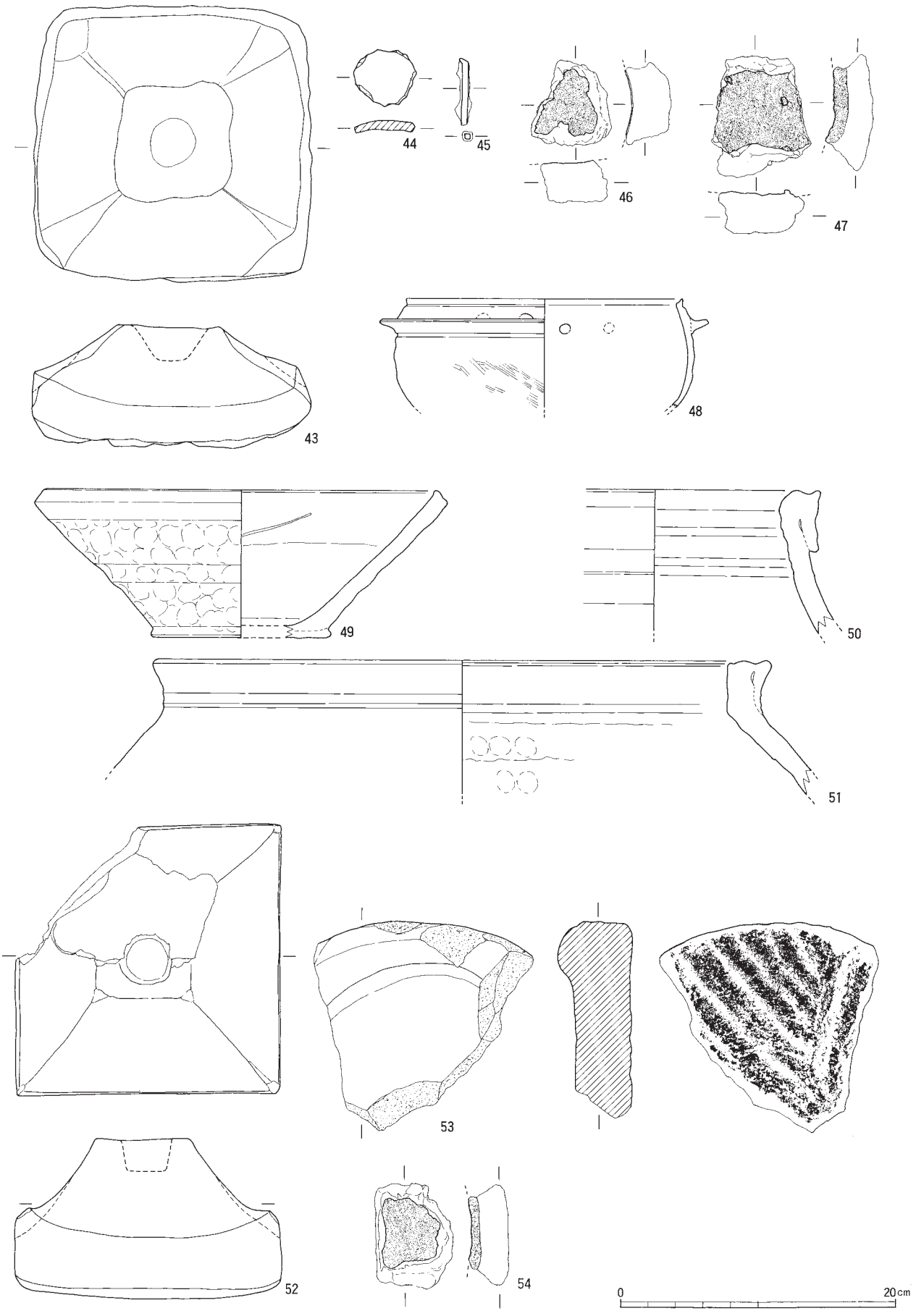
第８図　SB5・SA6・248・249、SZ7　実測図（1：100）



第９図　区画１・２　出土遺物実測図（1：4）



第10図　区画２　出土遺物実測図（1：4）



第11図　区画２・西側斜面出土遺物実測図（1：4）

２との比高差は約６ｍ、西の区画４との比高差は約８ｍある。区画内で、堀状遺構ＳＤ43のほか、柵５条、石の入った土坑２基を検出した。

（１）遺構

①堀状遺構

ＳＤ43（第６・12図、写真図版３・10）　区画１・２と区画３の間の谷を利用して造られた堀状の流路。区画３の北東隅で、ほぼ直角に西に方向を変える。

幅は北側で約７ｍ、南側で約12m、深さは北側で約３ｍ、南側で約４ｍである。

埋土からは古代から近代までの遺物が、南半部の最下層からは弥生中期の土器が出土している。

最下層に弥生中期の土器のみしか含まない層があること、北側の土層観察の結果、１回の再掘削の痕跡が認められることから、元来開析谷であった所に土砂が堆積し、ある程度埋まった段階で堀としての機能を持たせるために再掘削を行ったのではないかと考えられる。また、埋土には近代までの遺物を含むことから、この遺構は廃城後に少しずつ埋没していったと思われる。

②テラス状遺構

ＳＲ123（第６図）　ＳＤ43の東岸の東西約４ｍ・南北12m以上のテラス状遺構である。区画１の真下に造られている。

ＳＲ124（第６図）　ＳＤ43の東岸の東西約４ｍ・南北35m以上のテラス状遺構である。区画２の真下に造られている。

ＳＲ125（第６図）　ＳＤ43の西岸の東西約10m・南北50m以上のテラス状遺構である。区画４の真下に造られている。

③土坑

ＳＫ61（第13図）　テラス状遺構ＳＲ125内にある1.5m×0.9mの楕円形の土坑。埋土は黄褐色粘土である。底に30㎝程の扁平な石が据えられている。埋土から瀬戸美濃製品の徳利（大窯期）が出土している。

ＳＫ62（第13図）　テラス状遺構ＳＲ125内にある0.8m×0.7mの方形の土坑。埋土は黄褐色粗砂である。土坑の底近くに多くの礫を含む。礫の中には煤が付着しているものもあった。

④柵

ＳＡ281（第13図）　テラス状遺構ＳＲ125内にある長さ10.2m・柱間６間の柵。テラスからＳＤ43への落ち際に設けられている。

ＳＡ282（第13図）　テラス状遺構ＳＲ125内にある長さ8.7m・柱間５間の柵。テラスからＳＤ43への落ち際に設けられている。

ＳＡ283・284・285（第13図）　いずれもテラス状遺構ＳＲ125内にある。ＳＡ283は、長さ3.3m・柱間３間、ＳＡ284は長さ4.2m・柱間３間、ＳＡ285は長さ5.1m・柱間４間の柵である。いずれもＳＡ281や282と直交方向に造られている。

（２）遺物（第14図、写真図版29・30）

この区画出土の遺物は、堀状遺構ＳＤ43埋土のものを除き非常に少なかった。ＳＤ43出土の遺物は、弥生時代中期から近代までのものがある。

①ＳＤ43上層出土遺物（55～58）

ここでは中世・近世の遺物を取り上げる。遺物には石仏（55）、中北勢系の土師器羽釜（56）、瀬戸美濃製品の志野丸皿（57）、片口（58）などがある。

55は、上部が三角形になる石仏である。表面は丁寧に研磨されているが、側面や背面は未調整である。表面の上半部に縦13㎝・横10㎝の枠があり、その中に坐像が掘り込まれている。像の顔は楕円形で、目や鼻は線刻により表現される。首の表現もなされているようである。肩が張り、腹の前あたりで合掌している。像の下部には脚あるいは蓮弁が描かれている。区画２から転落した遺物であろう。市内平津町の八幡神社境内にほぼ同一のものがある。

56の口縁部は内傾し、口縁端部には面を持たない。残存部には穿孔はない。57は登窯第１小期のもの、58は18世紀以降のものである。

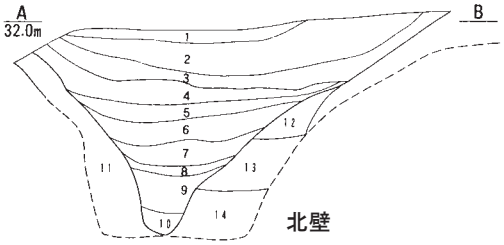
②ピット出土遺物

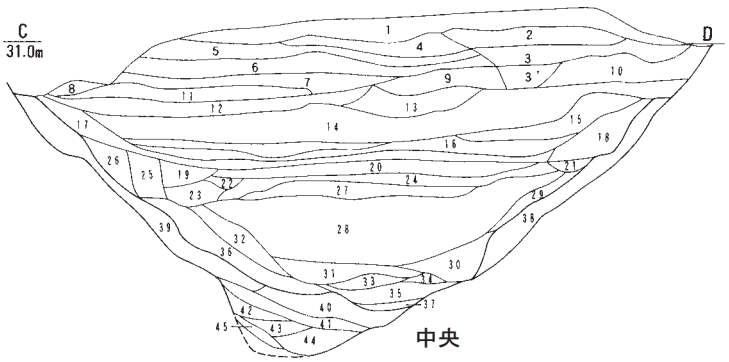
瀬戸美濃製品の天目茶椀（59）がある。大窯第３段階前半のものである。

区画４（第15図、写真図版３）

（１）遺構

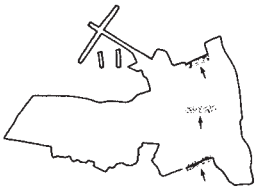
区画３の西、標高約38mの尾根上に立地する。調査区外を含めると、東西約20m、南北約40mの区画が想定できる。東の区画３とは約８ｍ、西の区画

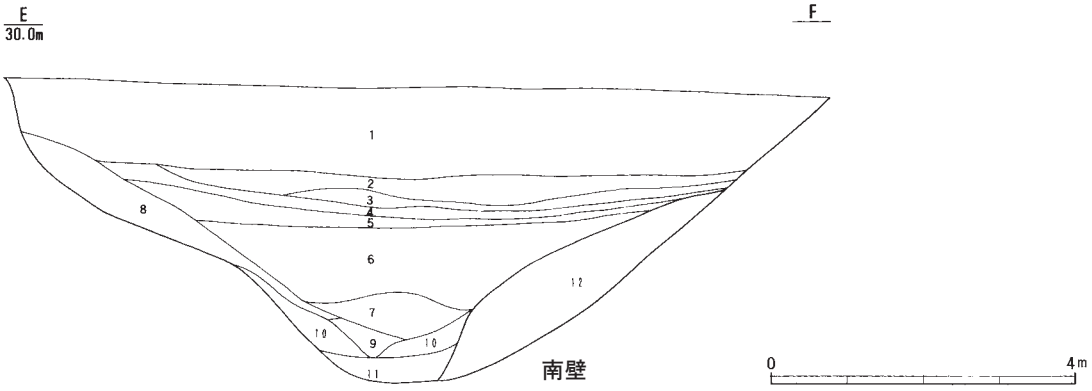




1　黒褐色砂質土
2　明黄褐色砂
3　暗オリーブ褐色粘土
4　オリーブ灰色砂
5　灰オリーブ色砂
6　灰オリーブ色砂
7　φ２cm大の礫を含む灰オリーブ色砂
8　灰オリーブ色砂
9　φ５cm以下礫を含む灰色粗砂
10　拳から人頭大の礫を含む灰オリーブ色粗砂
11　緑灰色粘土（堀堀削以前の流路埋土）
12　明緑灰色砂
13　明緑灰色砂
14　φ２cm大の礫を含むオリーブ灰色粗砂

1　オリーブ黒色砂質土
2　黄褐色砂質土
3　灰オリーブ色粗砂
3´　小礫を含む灰オリーブ色粗砂
4　オリーブ褐色粗砂
5　にぶい黄色粗砂
6　暗オリーブ褐色粗砂
7　黒褐色粗砂
8　明黄褐色土粗砂
9　灰オリーブ粗砂
10　緑灰色粗砂
11　オリーブ灰色粗砂
12　オリーブ黒色粗砂
13　緑灰色粗砂
14　緑灰色粗砂
15　黒色シルト
16　灰オリーブ色粗砂
17　有機物主体の黒色粗砂
18　有機物主体の黒色粗砂
19　灰オリーブ色粗砂
20　暗灰黄色粗砂
21　φ３cm大の礫を含む黒色粘質土
22　黄灰色粗砂
23　灰オリーブ色粗砂
24　φ２cm以下の礫を含む灰色砂
25　流砂を含む黒褐色粘土ブロック
26　黒褐色粗砂
27　黒褐色粗砂
28　植物遺体を多く含む暗褐色粘質土
29　灰色粘質土
30　泥質で粘土ブロック含む黄灰色粘質土
31　φ15cm以下の礫を含む灰オリーブ色粗砂
32　粘土ブロック多く含む暗褐色粘質土
33　灰オリーブ色粗砂
34　有機物ブロックを含む灰オリーブ色粗砂
35　小礫を含むオリーブ灰色粗砂
36　粘土ブロック少し含む暗褐色粘質土
37　礫を多く含むオリーブ灰色粗砂
38　灰色粗砂
39　緑灰色粗砂
40　オリーブ灰色粗砂
41　黒褐色有機物層
42　粘土ブロック多く含むオリーブ灰色細砂
43　有機物を含む灰色粗砂
44　礫を多く含む灰色粗砂
45　小礫を少し含むオリーブ灰色粗砂





1　緑灰色粗砂
2　緑灰色粗砂
3　黒色粗砂
4　灰オリーブ色粗砂
5　黒色粗砂
6　暗褐色砂質土
7　小礫を含む灰オリーブ色粗砂
8　灰色粗砂
9　黒褐色粗砂
10　小礫を含むオリーブ灰色粗砂
11　小礫を含む灰色粗砂
12　灰色粘質土

第12図　SD43土層断面図（1：100）

６とは約２ｍ、南の区画５とは約２ｍの段差がある。北は調査区外に続く。検出面が安定せず、区画内からは掘立柱建物１棟、土坑・溝を検出したのみである。特に区画北半には整地土らしい落ち込み（ＳＺ350）があり検出が非常に困難であった。調査後、重機によりこの部分の再掘削を行ったが、この層には近世以降の遺物も多く含んでおりこの落ち込みの性格は分からなかった。整地土と近世の以降が複雑に絡まり、検出不能に陥った可能性もある。

この区画と区画６の間に、ＳＲ301と同様の道路があった可能性もあるが、硬化面や側溝などを確認することはできなかった。

①掘立柱建物

ＳＢ257（第17図）　この区画内で検出した唯一の建

第13図　SA281～285（1：100）　SK61・62（1：50）実測図

物である。区画の南端で検出した。桁行２間×梁行１間の建物で、建物内土坑（ＳＫ327･328）を持つ。西にさらに1間分のびる可能性もある。柱穴から常滑製品の甕が出土した。

建物内土坑ＳＫ327は長辺2.1m、短辺1.5m、深さ約0.2mの長方形、ＳＫ328は長軸2.3m、短軸1.7m、深さ約0.3mの楕円形の土坑である。まずＳＫ328が掘削され、その埋没後にＳＫ327が掘削されている。ＳＫ327の埋土からは常滑製品の甕が、ＳＫ328の埋土からは中北勢系の羽釜（60）・瀬戸美濃製品の擂鉢（大窯期）が出土した。

②土坑

ＳＫ340･341･342･343（第17図）　連続して造られた土坑群。平面が楕円形に近いもの（ＳＫ339・341）と、長方形のもの（ＳＫ340・342･343）がある。掘削は、ＳＫ343→342→341→340の順でなされている。ＳＫ340の埋土から土師器羽釜が、ＳＫ341の底近くの埋土から拳大程度の礫が、ＳＫ342の埋土から土師器羽釜、瀬戸美濃製品の天目茶椀（大窯期）が、ＳＫ343の埋土から土師器羽釜が出土した。建物内土坑であった可能性もある。

（２）遺物（第18図、写真図版30・31）

①ＳＢ257関連遺物（60）

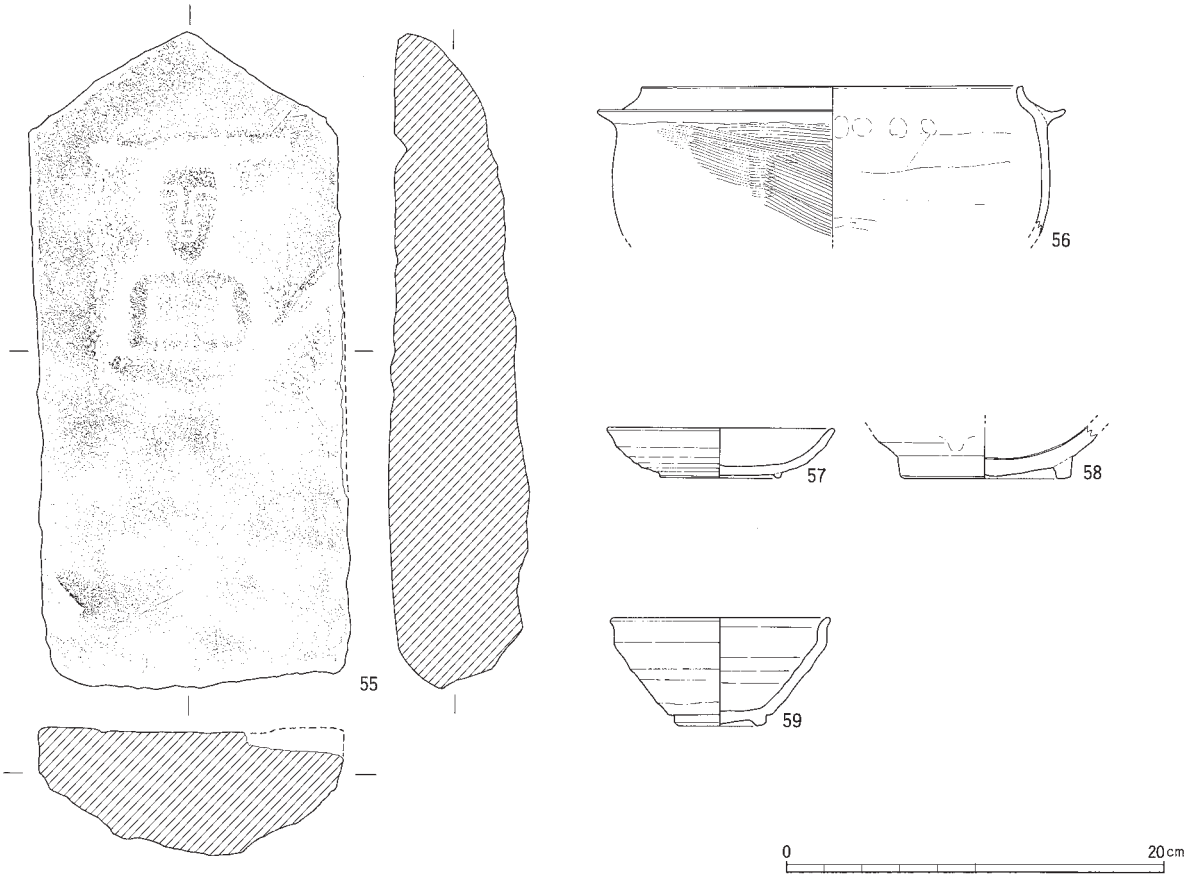
ＳＢ257の建物内土坑（ＳＫ328）から出土した。中北勢系の土師器羽釜（60）がある。口縁部は内傾し、口縁端部は直立気味につまみ上げられ、内側に面を持つ。面には凹線状の窪みがわずかにある。鍔部直上に焼成前穿孔がある。Ⅱａ段階にあたると思われる。

②ＳＫ336出土遺物（61）

土師器皿（61）は、器壁が薄く、直線的にたちあがり、口縁端部にヨコナデが施されている。口縁部の小片であるが、口径はやや大ぶりなものになる。

③落ち込み（ＳＺ350）・包含層出土遺物（62～82）

落ち込み（ＳＺ350）からは多くの遺物が出土しているが、近世の遺物も多く出土しているので、包含



第14図　区画３出土遺物実測図（1：4）

層の遺物とともに報告する。

土師器　中北勢系の羽釜（62・63・65）・茶釜（64）がある。羽釜のうち62の口縁部は内傾し、口縁端部は直立気味につまみ上げられ、内側に面を持つが、面は凹線状にはなっていない。鍔部直上に焼成前穿孔がある。63の口縁部はやや直立気味で、口縁端部は斜め上方につまみ上げられ、内側に面を持つ。面には凹線状の窪みがある。鍔部直上に焼成前穿孔がある。65の口縁部は他のものと比べるとやや長い。いずれもⅡａ段階にあたると思われる。茶釜（64）は器壁が薄く、他の茶釜に比べ鍔がやや下につく。

陶器　瀬戸美濃製品の天目茶椀（66～68）・灰釉端反皿（69）・灰釉片口小瓶（70）・黄瀬戸鉢（71）・擂鉢（74・75）・山茶椀（72・73）が、常滑製品の甕（76～79・82）・壷（80）がある。

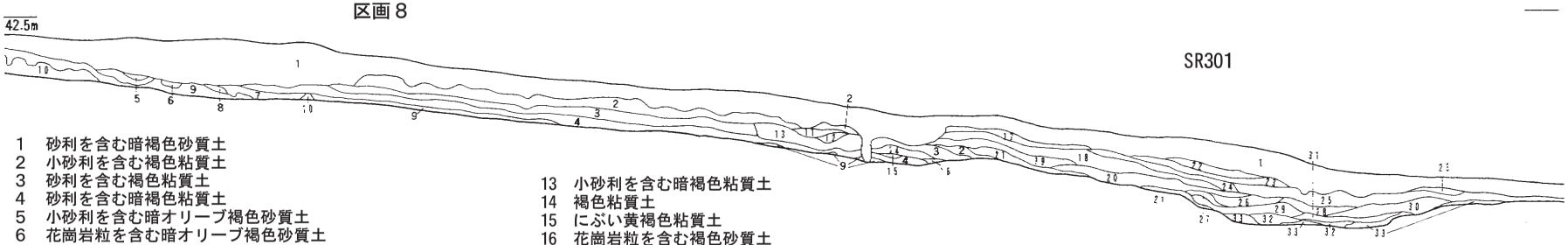
天目茶椀のうち、66は古瀬戸後Ⅳ期新段階、67は大窯第１段階、68は大窯第２段階後半、灰釉端反皿（69）は大窯第１段階後半、灰釉片口小瓶（70）は古瀬戸後期、黄瀬戸鉢（71）は登窯第１～２小期、擂鉢のうち74は大窯第１段階、75は大窯第３段階後半、山茶椀（72・73）は第12型式のものである。

甕のうち、76・77・78・79は口縁部内面が角張っており、いずれ第11型式のものである。82は６ｂ型式のもので築城以前の遺物であろう。

第15図　区画４～８　平面図（1：500）

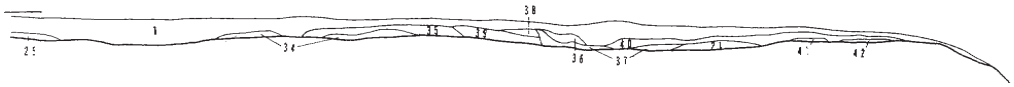
第16図　区画４・６・８　土層断面図（1：100）

区画８



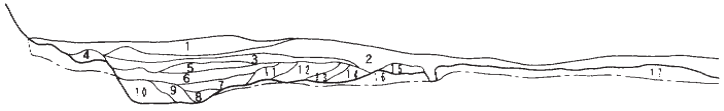
1　砂利を含む暗褐色砂質土
2　小砂利を含む褐色粘質土
3　砂利を含む褐色粘質土
4　砂利を含む暗褐色粘質土
5　小砂利を含む暗オリーブ褐色砂質土
6　花崗岩粒を含む暗オリーブ褐色砂質土
7　花崗岩粒を含む褐色粘質土
8　褐色粘質土
9　花崗岩粒を含む黄褐色粘質土
10　小砂利を含む黄褐色粘質土
11　小砂利を含む暗褐色粘質土
12　花崗岩粒を含む暗褐色粘質土
13　小砂利を含む暗褐色粘質土
14　褐色粘質土
15　にぶい黄褐色粘質土
16　花崗岩粒を含む褐色砂質土
17　酸化鉄分を含む暗褐色粘質土
18　小砂利を含む暗褐色粘質土
19　暗褐色砂質土
20　小砂利を含む暗褐色砂質土
21　花崗岩粒を含む褐色粘質土
22　小砂利を含むにぶい黄褐色砂質土
23　酸化鉄分を含むにぶい黄褐色砂質土
24　炭化物粒を含む褐色砂質土
25　小砂利を含む暗褐色砂質土
26　褐色粘質土
27　暗褐色粘質土
28　花崗岩粒を含む褐色粘質土
29　小砂利を含む褐色粘質土
30　φ５cm大の円礫を含む褐色粘質土
31　炭化物粒を含む褐色粘質土
32　小砂利を含む褐色粘質土
33　拳大の円礫を含む褐色粘質土

区画６

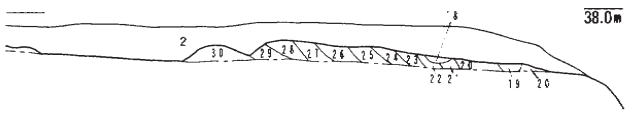


34　褐色シルト
35　酸化鉄分を含む明赤褐色粘質土
36　小砂利を含むオリーブ褐色砂質土
37　にぶい黄褐色粘質土
38　酸化鉄分を含む褐色粘質土
39　褐色シルト
40　小砂利を含む黒褐色粘質土
41　シルトブロックを含む黒褐色粘質土
42　シルトブロックを含む褐色粘質土

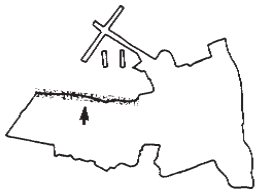
区画４



1　シルトを含む黄褐色砂質土
2　小砂利を含む黄褐色砂質土
3　小砂利を含む褐色砂質土
4　シルトブロックを含むオリーブ褐色砂質土
5　酸化鉄分を含むオリーブ褐色砂質土
6　シルト粒を含む黄褐色砂質土
7　小砂利を含むオリーブ褐色砂質土
8　オリーブ褐色砂質土
9　礫を含む黄褐色砂質土
10　シルトブロックを含む黄褐色砂質土
11　シルトブロックを含む黄褐色砂質土
12　シルトブロックを含む黄褐色砂質土
13　黄褐色砂質土
14　円礫を含む黄褐色砂質土
15　シルトブロックを含む褐色砂質土
16　シルト粒を含む黄褐色砂質土
17　φ３cm未満の礫を含む褐色砂質土



18　φ５cm大の円礫を含む黄褐色砂質土
19　拳大の亜円礫を含む褐色砂質土
20　φ２～３cmの礫を含むにぶい黄褐色砂質土
21　黄褐色砂質土
22　酸化鉄分を含む明黄褐色砂質土
23　礫を含む黄褐色砂質土
24　酸化鉄分を含む浅黄色砂質土
25　礫を含む黄褐色砂質土
26　酸化鉄分を含む浅黄色砂質土
27　礫を含む黄褐色砂質土
28　酸化鉄分を含む浅黄色砂質土
29　φ５cm未満の亜円礫を含む黄褐色砂質土
30　拳大の亜円礫を含む黄褐色砂質土



磁器　白磁の端反皿（81）がある。

区画５（第15図、写真図版３）

区画４の南、標高約36mの尾根上に立地する東西約13m・南北約６mの区画である。東の区画３とは約５m、西の区画７とは約２m、北の区画４とは約２mの段差がある。区画内から土坑・溝を検出した。

麓から区画間を通る道路遺構ＳＲ301は、この区画と区画７との間を通ると考えられる。

（１）遺構

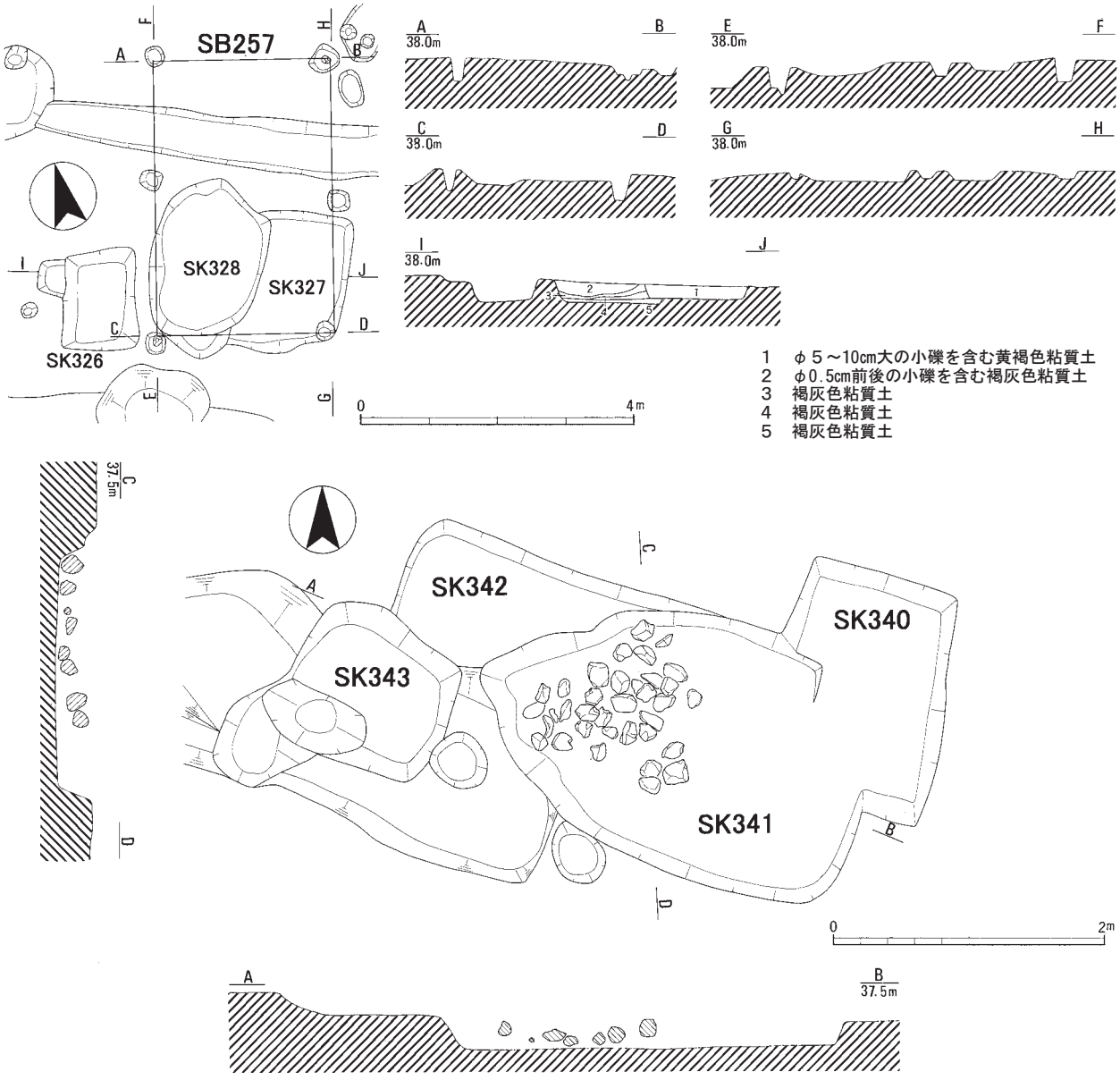
①土坑

ＳＫ334（第19図）　長辺３m、短辺1.9m、深さ約0.3mの長方形の土坑で、埋土は褐色の砂質土である。底近くの埋土から拳大の礫が、このほか埋土から土師器羽釜（84・85）・茶釜（86）、瀬戸美濃製品の灰釉端反皿（大窯第１段階）・擂鉢（大窯第２～３段階）、常滑製品の片口鉢（87・88）・甕（89）が出土した。

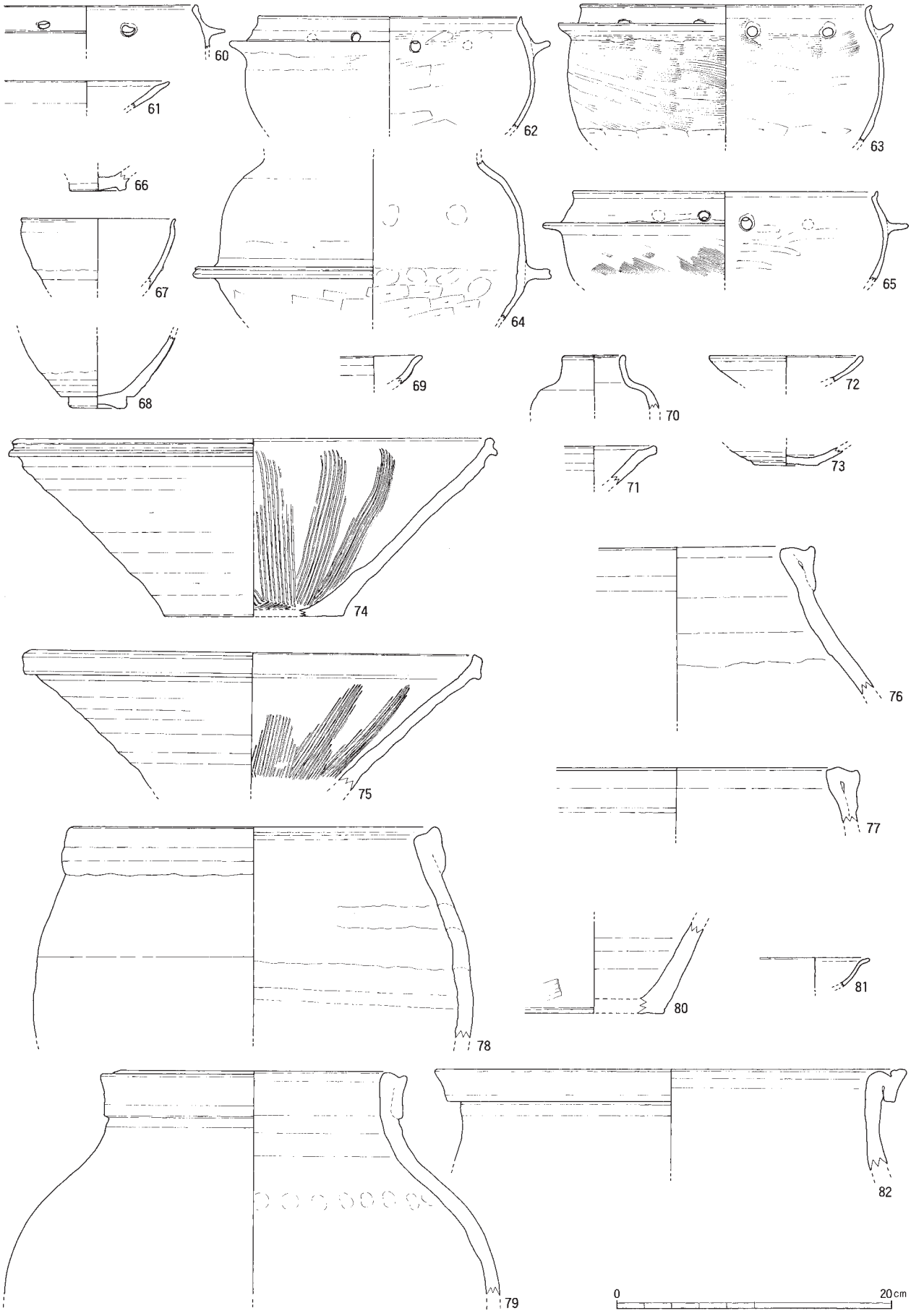
（２）遺物（第23図、写真図版31）

①ＳＫ331出土遺物（83）

83は青磁の皿である。



第17図　SB257（1：100）、SK340～343（1：50）実測図



第18図　区画４出土遺物実測図　（1：4）

②ＳＫ334出土遺物（84～89）

中北勢系の土師器羽釜（84・85）・茶釜（86）、常滑製品の片口鉢（87・88）・甕（89）がある。

羽釜のうち84は小形のもの、85は中形のもので、ともに口縁部は直立気味である。口縁端部は外側につまみ出され、上端に面を持つが、面は凹線状にはなっていない。84の残存部には穿孔はない。85は鍔部直上に焼成前穿孔がある。Ⅱ段階にあたると思われる。茶釜（86）の器壁は非常に薄く、口縁端部はいずれも外側につまみ出され、上端に面を持っている。

甕（89）は、口縁部内側が引き出されており、12型式のものと思われる。

③ピット出土遺物（90）

90は瀬戸美濃製品の灰釉端反皿で底部内面に印花文がある。大窯第１段階のものである。

④包含層出土遺物（91・92）

91は近世の瀬戸製品の擂鉢、92は瀬戸美濃製品、古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期の祖母懐壷である。

区画６（第15図、写真図版３）

区画４の西、標高約40ｍの尾根上に立地する。調査区外を含めると、東西約16ｍ・南北約30ｍ以上の区画が想定できる。東の区画４、西の区画８、南の区画７とはそれぞれ約２ｍの段差がある。北は調査区外に続く。区画内から掘立柱建物４棟、土坑、溝などを検出した。

区画５と７の間を登ってくるＳＲ301はこの区画の南東隅で西に折れ、区画南辺を通り、南西隅でもう一度北に折れ、区画西辺を通り主郭方向に向かうと考えられる。

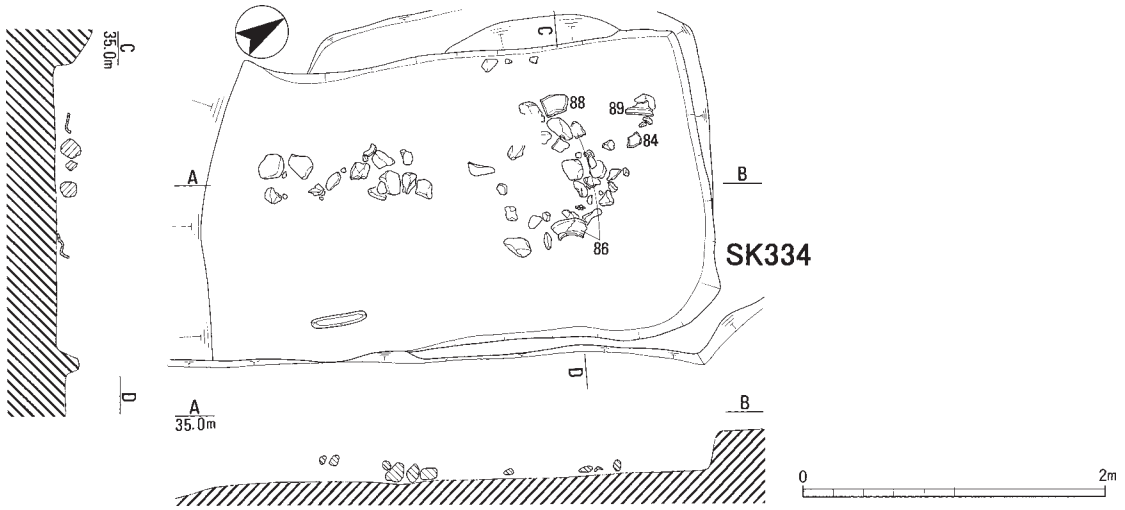
（１）遺構

①掘立柱建物　掘立柱建物には、区画の主屋と思われる大形のもの（ＳＢ253、254）と小形のもの（ＳＢ255、256）がある。

ＳＢ253（第20図、写真図版11）　区画の西端で検出した。桁行４間×梁行２間の建物である。柱穴から焼成粘土塊が出土した。東側に柵あるいは塀（ＳＡ280）を伴う。ＳＫ286･287･288と重複するが、これらが建物内土坑かどうかは分からない。他にもＳＢ255、256、ＳＡ279は、この建物との主軸方向がほぼ一致している。

ＳＢ254（第20図、写真図版11）　区画の西端で検出した。桁行３間×梁行１間の建物で、建物内土坑を持つ（SK319･320･321）。区画６内では最大の建物である。区画内の他の掘立柱建物や柵とは建物方位がかなり異なる。ＳＢ255、256、ＳＡ279と重複しているが両者の前後関係は不明である。

建物内土坑ＳＫ319は、長辺３ｍ、短辺2.3m、深さ0.5mの長方形の土坑で、埋土は炭化物を含む褐色



第19図　SK334　実測図　（1：50）

土である。土坑の南東端に礫・粘土ブロックが集中する部分があった。埋土から土師器羽釜、瀬戸美濃製品の鉄釉丸皿（93）、常滑製品の片口鉢・甕、砥石（94）が出土した。ＳＫ320は長辺３ｍ、短辺1.7ｍ、深さ0.2ｍの長方形の土坑で、埋土は粘土ブロックを多く含む褐色である。埋土から常滑製品の甕が出土した。ＳＫ321は一辺１ｍ程の方形の土坑。埋土は褐色土である。埋土から常滑製品の甕（95・96）が出土した。調査時にはＳＫ319と前後関係があると判断したが、他の類似遺構からみると、ＳＫ319と一連の遺構かもしれない。

ＳＢ255（第20図、写真図版11）　区画の西端で検出した。桁行２間×梁行１間の建物である。ＳＢ254と重複しているが両者の前後関係は不明である。

ＳＢ253、256、ＳＡ279は、この建物との主軸方向がほぼ一致しているが、ＳＢ255とＳＢ253の距離は非常に近く、同時期のものとは考えられない。

ＳＢ256（第20図、写真図版11）　区画の西端で検出した。桁行１間×梁行１間の建物である。ＳＢ255・ＳＡ279と一連の施設であると考えられる。

ＳＡ279（第20図、写真図版11）　長さ7.2ｍ、柱間３間の柵。ＳＢ255・256に伴うと考えられる。

ＳＡ280（第20図、写真図版11）　長さ5.1ｍ、柱間２間の柵。ＳＢ253に伴うと考えられる。

（２）遺物（第23図、写真図版31）

①ＳＢ254関連遺物（93～96）

いずれも建物内土坑（ＳＫ319・ＳＫ321）から出土した遺物である。瀬戸美濃製品（93）、常滑製品（95・96）、砥石（94）などがある。93は鉄釉丸皿かと思われる。大窯第２～３段階のものである。

②SK317、318、323出土遺物（97～99）

土師器皿（97）は、ＳＫ323から出土した。器壁が薄く、直線的にたちあがり、口縁端部にヨコナデが施される。常滑製品の壷（98）は、ＳＫ317から出土した。口縁部内側は丸い。10型式のものと思われる。99は瀬戸美濃製品の口広有耳壷かと思われる。ＳＫ318から出土した。大窯第１段階のものである。

③包含層出土遺物（100～102）

100は瀬戸美濃製品の擂鉢である。大窯第３段階前半の遺物である。101は小形の硯である。墨があたる部分には擦痕が残る。102は染付の椀である。

区画７（第15図、写真図版３）

区画５の西、標高約38ｍの尾根上に立地する。東西約10ｍ・南北約30ｍ以上の区画である。東の区画５とは約２ｍ、西の区画８とは約４ｍ、北の区画６とは約２ｍの段差がある。区画内から、柵２条などを検出した。

麓から区画間を通る道路遺構ＳＲ301は、この区画と区画５との間を通り、この区画の北東隅で西に折れ、区画北辺を通り、北西隅でもう一度北に折れて主郭方向に向かうと考えられる。

（１）遺構

①柵

ＳＡ325（第22図）　長さ4.8ｍ、柱間３間の柵である。ＳＡ338とほぼ同一の主軸方向である。

ＳＡ328（第22図）　長さ7.5ｍ、柱間７間の柵である。ＳＡ338とほぼ同一の主軸方向である。他の柵と比べて柱間が非常にせまいので、造り替えがあるかもしれない。

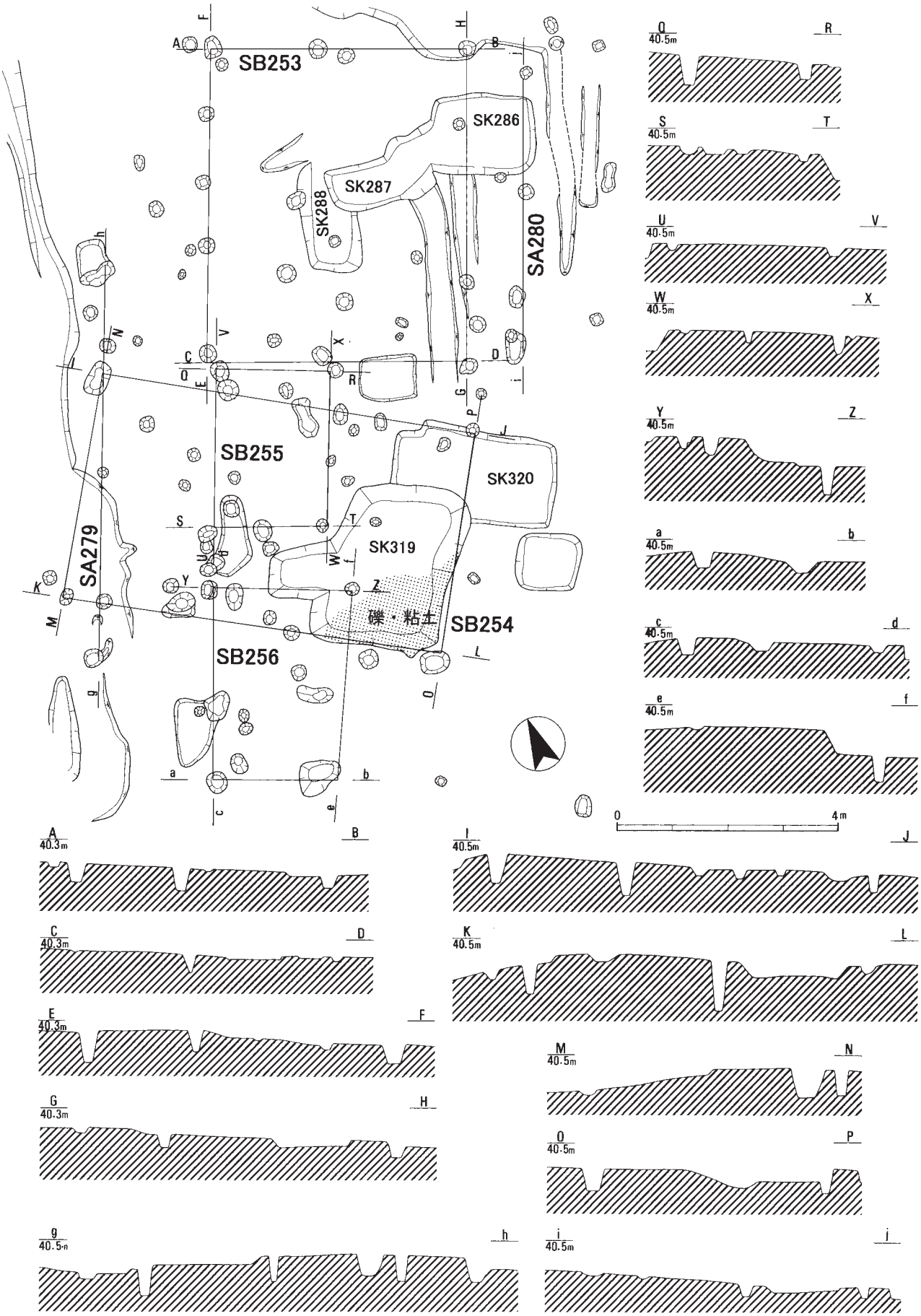
（２）遺物（第23図）

遺物量は少ない。103はＳＫ324から出土した中北勢系の羽釜である。口縁部は内傾し、口縁端部は直立気味につまみ上げられ、内端に面を持つ。面には凹線状の窪みがわずかにある。鍔部直上に焼成前穿孔がある。Ⅱａ段階に近いと思われる。104もＳＫ324から出土した。瀬戸美濃製品の口広有耳壷で、古瀬戸後Ⅳ期のものである。105は常滑製品の片口鉢である。10型式のものである。

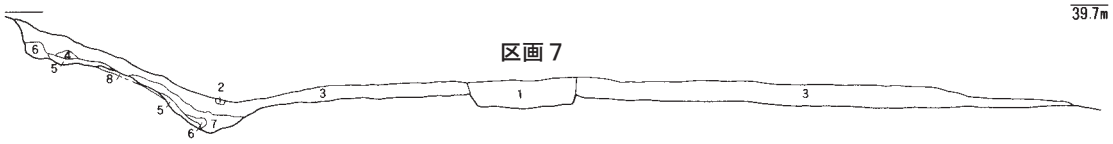
道路遺構

ＳＲ301（第15図、写真図版３・11）　麓から区画６・７間を通り、北に折れて区画７・８の間を通る道路遺構である。道路幅は約2.5ｍで、発掘調査により長さ約50ｍ分が確認されている。北側部分には両側に側溝があるが、南側部分では区画８側のみに側溝がある。埋土からは中世の遺物のほか、登窯４～５小期の灰釉丸皿（109）も出土している。この頃が道路遺構の埋没時期なのであろう。

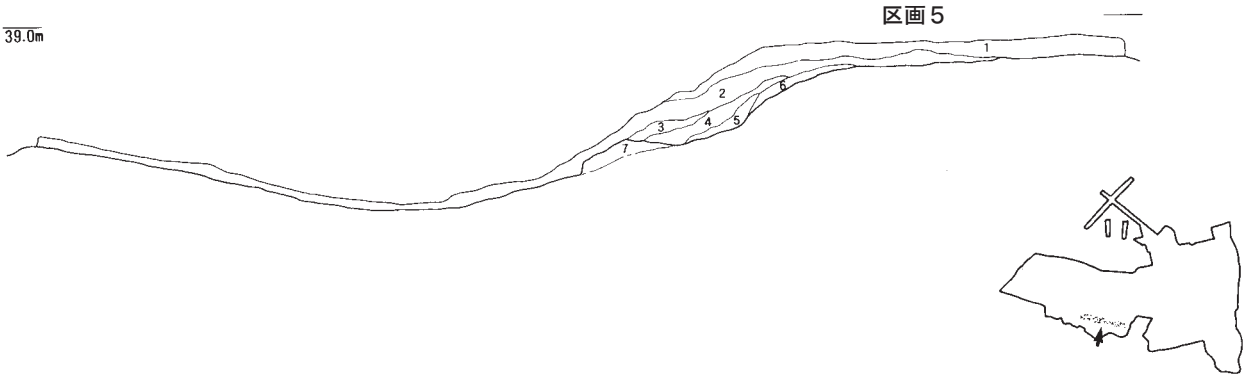
東名阪自動車道開通前、昭和30年代の地形図からみると、この区画の西には比高差12ｍ程の斜面がある。区画８の北東で西に折れ、この斜面を登って主郭方向に向かうと考えられている[5]。



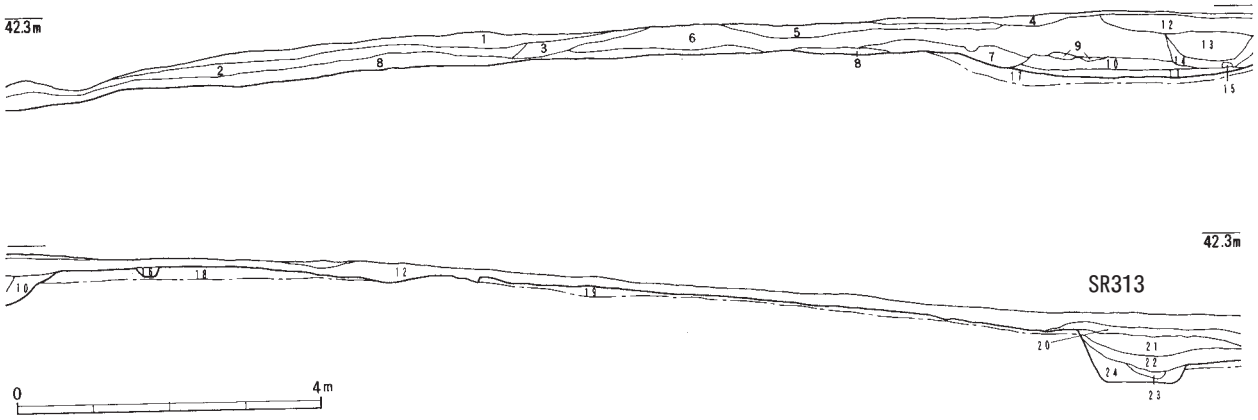
第20図　SB253～256、SA279・280　実測図（1：100）



1　H11年度トレンチ埋土
2　黄褐色粘質土
3　にぶい黄褐色砂質土
4　暗褐色砂質土
5　にぶい黄褐色砂質土
6　橙色・明黄褐色・浅黄色の砂質土互層
7　褐色砂質土
8　明黄褐色・橙色の砂質土互層　（地山）



1　φ１～３㎝の礫を含む暗褐色粘質土　（盛土）
2　φ２～３㎝の礫を含む褐色粘質土
3　花崗岩粒を含む褐色粘質土
4　砂利を含むにぶい黄褐色粘質土
5　小砂利を含む褐色砂質土
6　砂利を含む褐色粘質土
7　木根を含む灰白色・黄橙色・明褐色・橙色粘土層



1　φ１～10㎝の礫を含む褐色・にぶい黄褐色砂質土　（盛土）
2　にぶい黄褐色砂質土
3　にぶい黄褐色・暗褐色土を含む炭化物層
4　花崗岩粒を含む褐色砂質土　（盛土）
5　炭化物を含むにぶい黄褐色粘質土
6　砂利・礫を含む褐色砂質土
7　花崗岩粒を含む褐色粘質土
8　礫を含む暗褐色砂質土
9　花崗岩粒を含む褐色粘質土
10　炭化物・焼土を含む褐色粘質土
11　花崗岩粒を含む褐色粘質土
12　粘土ブロックを含むにぶい黄褐色粘質土
13　木根を含む褐色粘質土
14　炭化物を含むにぶい黄褐色粘質土
15　花崗岩粒を含むにぶい黄褐色粘質土
16　砂利を含む褐色粘質土
17　φ２～３㎝の礫を含む明褐色粘質土
18　炭化物・焼土を含む暗褐色粘質土
19　炭化物・焼土・粘土を含む褐色粘質土
20　花崗岩粒を含む褐色・黄褐色粘質土
21　砂利を含む褐色・にぶい黄褐色粘質土
22　φ１～３㎝の礫を含む褐色粘質土
23　花崗岩粒を含む褐色粘質土
24　礫を含む褐色粘質土

第21図　区画７・８土層断面図（1：100）

出土遺物には中北勢系の土師器羽釜（106）、瓦質土器の風炉（107）、瀬戸美濃製品の天目茶椀（108）・灰釉丸皿（109）・擂鉢（110）、常滑製品の片口鉢（111）・甕（113）、鉄釘（112）がある（第24図、写真図版31）。

106の口縁部は内傾し、口縁端部は直立気味につまみ上げられ、内端に凹線状の窪みのある面がある。残存部には穿孔はない。Ⅱａ段階にあたると思われる。107は風炉の体部と思われる。

瀬戸美濃製品のうち、108は大窯第２段階前半、109は登窯４～５小期、110は大窯第１段階のものである。

常滑製品のうち、111の口縁端部は内側に引き出されている。113の口縁部内側はやや角張っており12型式のものと思われる。

区画８（第15図、写真図版３）

区画６の西、標高約42mの尾根上に立地する。調査区外を含めると、東西約45m、南北約35mの区画が想定できる。東の区画６とは約２m、区画７とは約３mの段差がある。区画内から、掘立柱建物３棟、柵３条、井戸、土坑、溝、土塁、区画に入る通路などを検出した。

（１）遺構

①掘立柱建物　掘立柱建物には、区画の主屋と思われる大形のもの（ＳＢ250）と桁行が長いもの（ＳＢ278）、井戸の覆屋（ＳＢ252）がある。

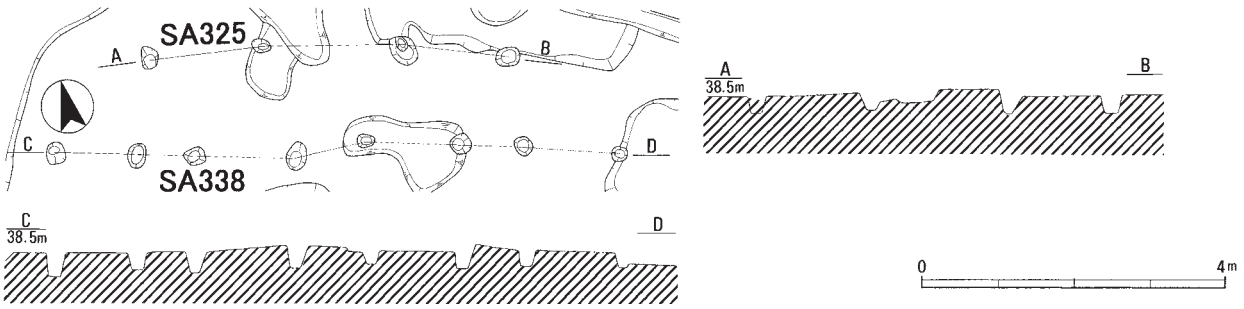
ＳＢ250（第25図、写真図版12）　区画のほぼ中央で検出した。桁行３間以上×梁行２間の建物で、東側１間分の庇は土間かもしれない。建物内土坑を持つ（SK304・306・307・308）。柱穴から土師器皿（114）などが出土した。区画８内では最大の建物である。ＳＢ278と重複しているが両者の前後関係は不明である。

建物内土坑ＳＫ304は長辺約2.5m、短辺0.9m、深さ0.15ｍの長方形の土坑で、埋土は褐色粘土である。埋土から瀬戸美濃製品の擂鉢（115）が出土した。ＳＫ306は長辺約２m、短辺約１m、深さ0.1mの長方形の土坑である。ＳＫ307は一辺約2.3m、深さ約0.45mの方形の土坑で、埋土には10～30㎝程の礫を含む。埋土から土師器羽釜（117）、瀬戸美濃製品の鉄釉丸皿（116）、常滑製品の甕（118・119）、鉄釘が出土した。ＳＫ308は長辺約2.5m、短辺約2.3m、深さ約0.45mの長方形の土坑で、幅0.8mの溝でSK307とつながる。埋土から土師器皿（120・121）・茶釜、瀬戸美濃製品の天目茶椀（122）・口広有耳壷、常滑製品の甕、鉄釘、焼成粘土塊が出土した。調査時にはＳＫ304→306→307という前後関係を想定したが、埋土にはあまり差はなく、他の類似遺構からみるとすべて同時存在していたものかもしれない。

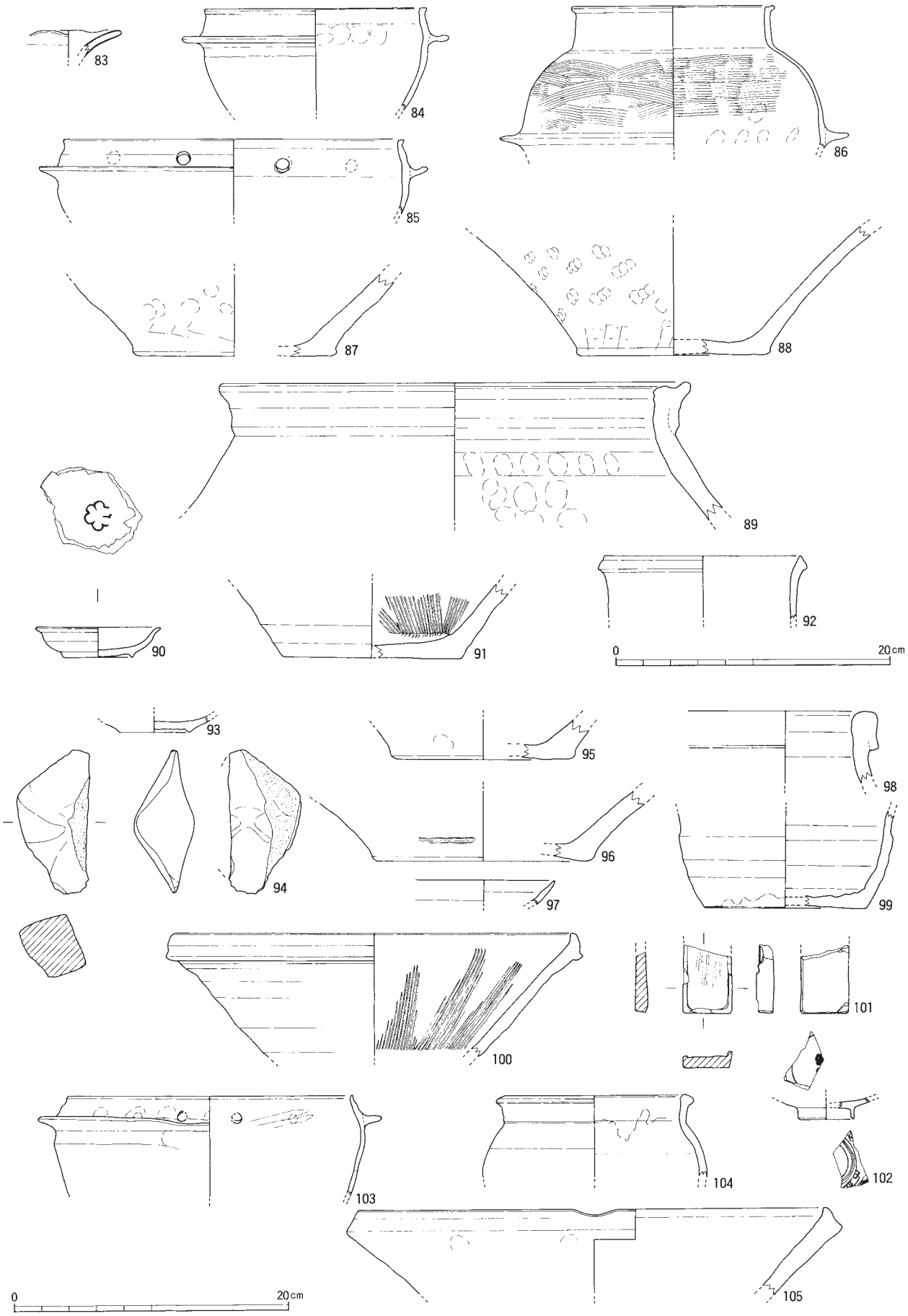
ＳＢ278（第25図、写真図版12）　区画のほぼ中央で検出した。桁行２間以上、梁行１間の建物である。柱穴から土師器小片、瀬戸美濃製品の天目茶椀（大窯期）が出土した。ＳＢ250と重複するが前後関係は不明である。１間×１間の小規模な建物の可能性もあるが他の類似遺構（区画10のＳＢ274、区画16のＳＢ211）からみて桁行の長い建物と考えたい。

②井戸　１基を検出した。区画１～９では唯一の井戸である。

ＳＥ303（第26図、写真図版12）　区画の南東部分で検出した。長径約1.5m、短径約1.3m、深さ約５mの素掘りの井戸である。検出面下約２mまでは人力で掘削したが、崩壊の恐れがあったので、それ以下は重機による断ち割りを行った。透水層である厚い砂層を貫き、灰白色シルトの岩盤層を約１m掘り込



第22図　SA325・338　実測図　（1：100）



第23図　区画５～７　出土遺物実測図　（1：4）

んで水を溜めている。埋土からは土師器皿（123・124）・羽釜（125～132）、瀬戸美濃製品の天目茶椀（133・134）・灰釉端反皿（135）・鉄釉稜皿・擂鉢（137）・桶（138）・山茶椀（136）、常滑製品の片口鉢（139）・甕（140）、石臼（142）・茶臼（143）・金属製品などのほか、漆器椀（141）が出土した。また、最下層からは大量の貝殻（ハマグリ・タニシ・オオノガイ）、獣骨（犬・狐・鼠・イシガメ・スッポン？・蛙・蛇）などが出土した。犬・イシガメの骨には刃物による切断痕跡があり、貝類とともに食用にされていたのであろう。また、狐は両後足の指の骨だけが良好な残存状態で出土していることから、区画内で狐を解体し皮革を取り、残った部分を捨てていた可能性がある[6]。

ＳＢ252は、1間×1間の建物で、ＳＥ303の覆屋と考えられる。

③土塁

ＳＡ293（第15図）　区画８の東側、道路遺構ＳＲ301に沿っていたと思われる長さ約20m、基底部幅約2.5mの土塁である。現状でのＳＲ301との段差は約１mある。盛土が削平されているため、高さは不明であるが、ＳＲ301や土塁側溝であるＳＤ316の埋土の状況からみて、それほど高い盛土はなかったと思われる。

④柵

ＳＡ277・289・347（第27図）　ＳＡ277は長さ7.8m、柱間３間の柵である。柱穴から瓦が出土した。ＳＡ289は長さ６m、柱間３間、ＳＡ347は長さ18m以上、柱間８間以上の柵である。ＳＡ347の柱穴には根石あるいは根巻き石とみられる石がある。柱穴から土師器小片、常滑製品の甕（９型式）が出土した。ＳＡ277とＳＡ289は柱穴の規模、深さとも似通っており、直交する一連の塀であると思われる。ＳＡ277は前二者と比較すると柱穴も小さい。

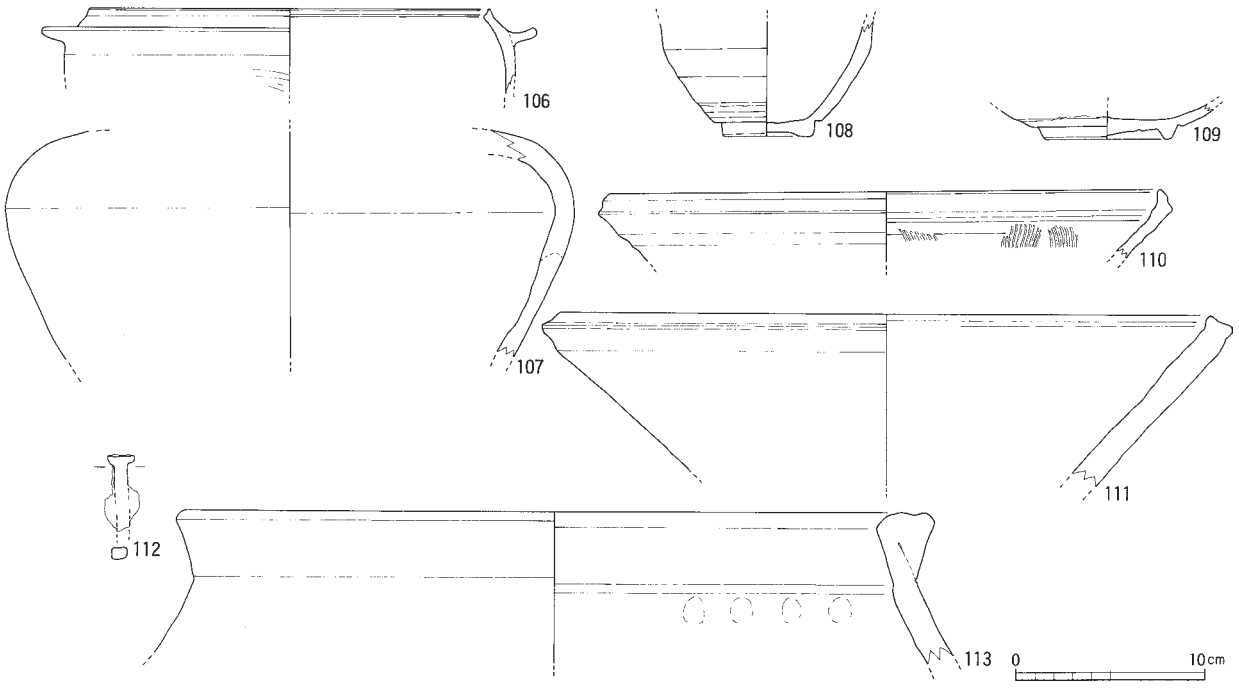
⑤通路

ＳＲ313（第27図）　ＳＲ301から直角に西に折れ区画８に入る、長さ約５m、幅約１mの通路。土塁ＳＡ293はこの通路の手前で途切れる。ＳＲ301との分かれ目付近には２段程の階段があり、その上はスロープ状になっている。埋土から瀬戸美濃製品の擂鉢（古瀬戸後Ⅳ期新段階～大窯第１段階）、常滑製品の片口鉢・甕（144・145）が出土した。

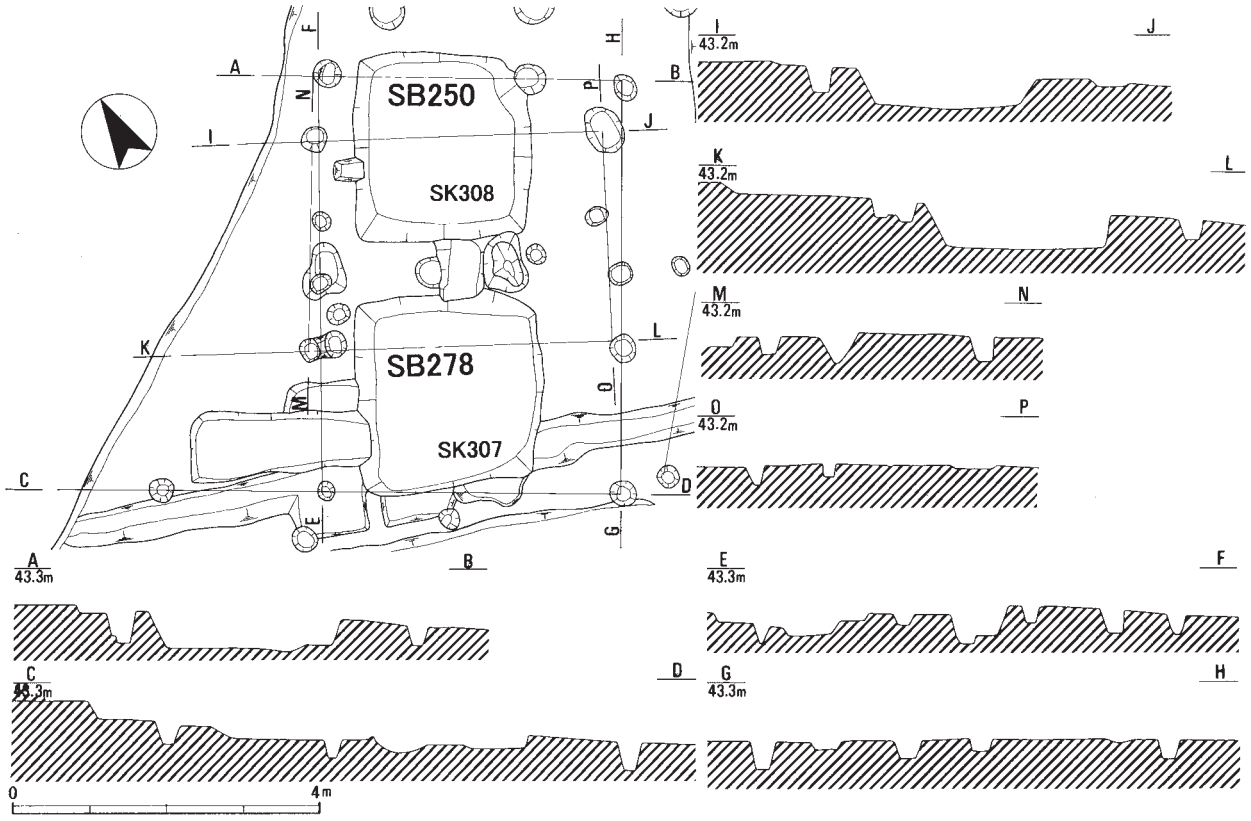
（２）遺物（第28・29・30図、写真図版32・33・34）

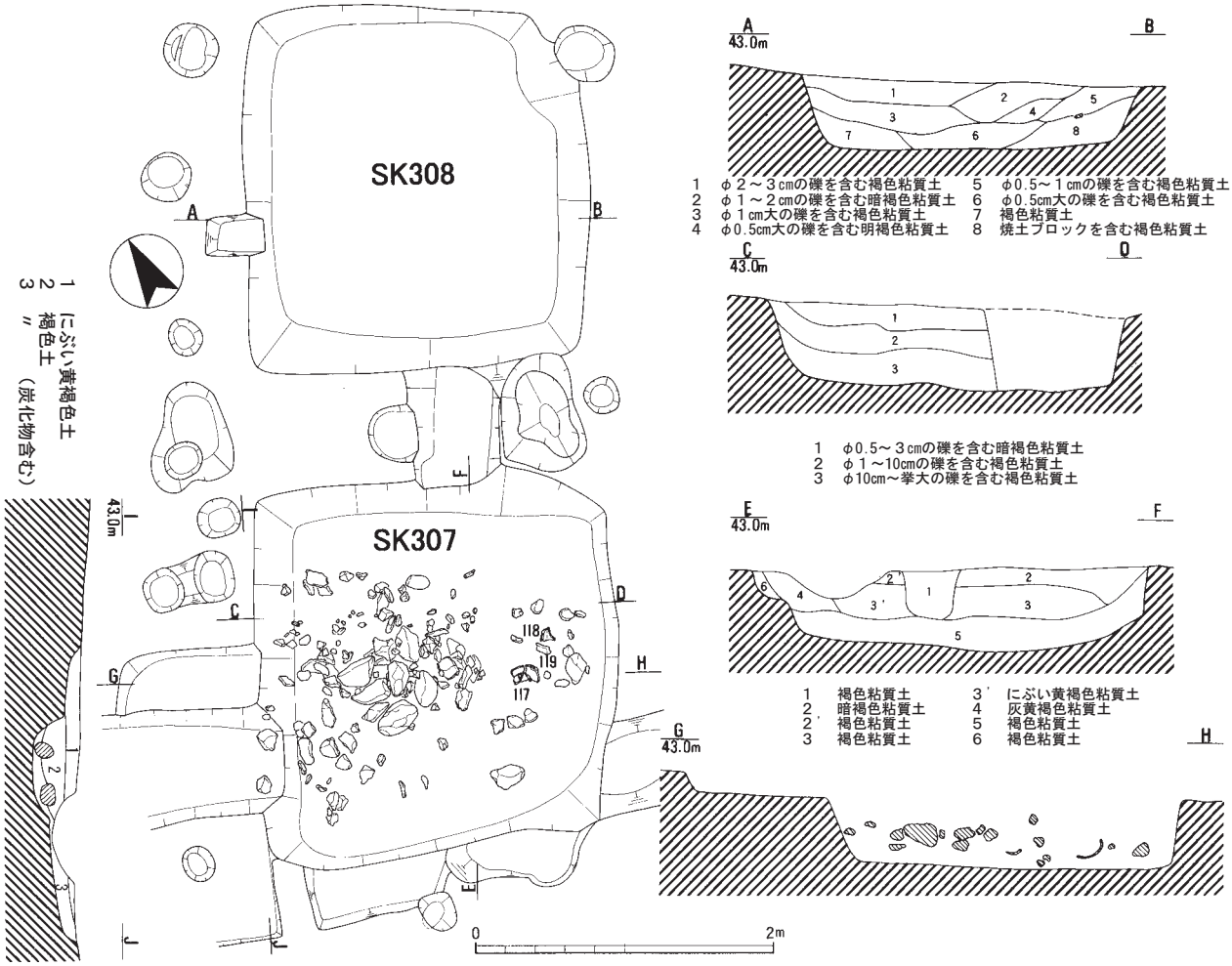
①ＳＢ250関連遺物（114～122）

114は柱穴、115～119は建物内土坑から出土した遺物である。114は土師器の皿。器壁が厚く、丸くたち

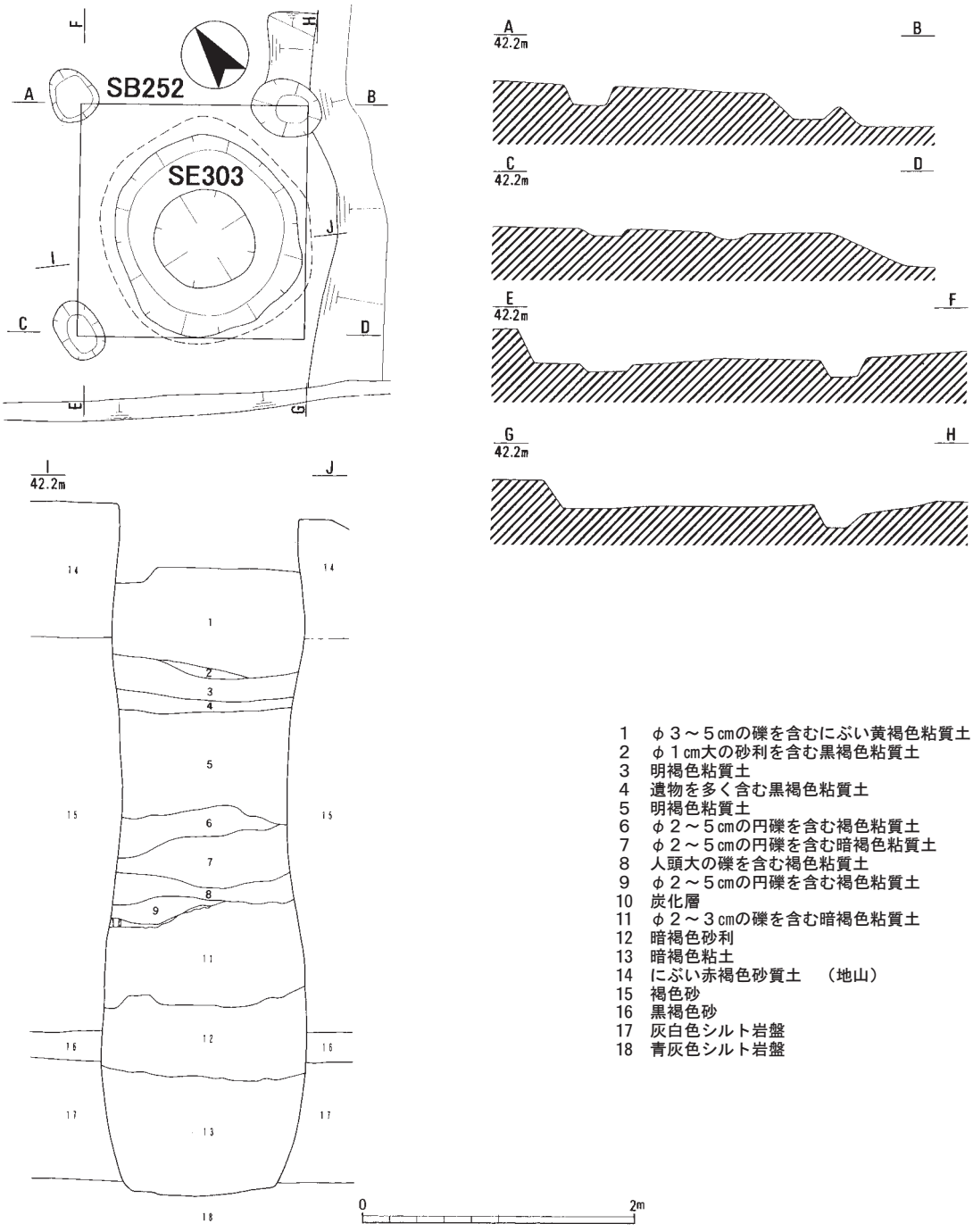


第24図　SR301　出土遺物実測図　（1：4）

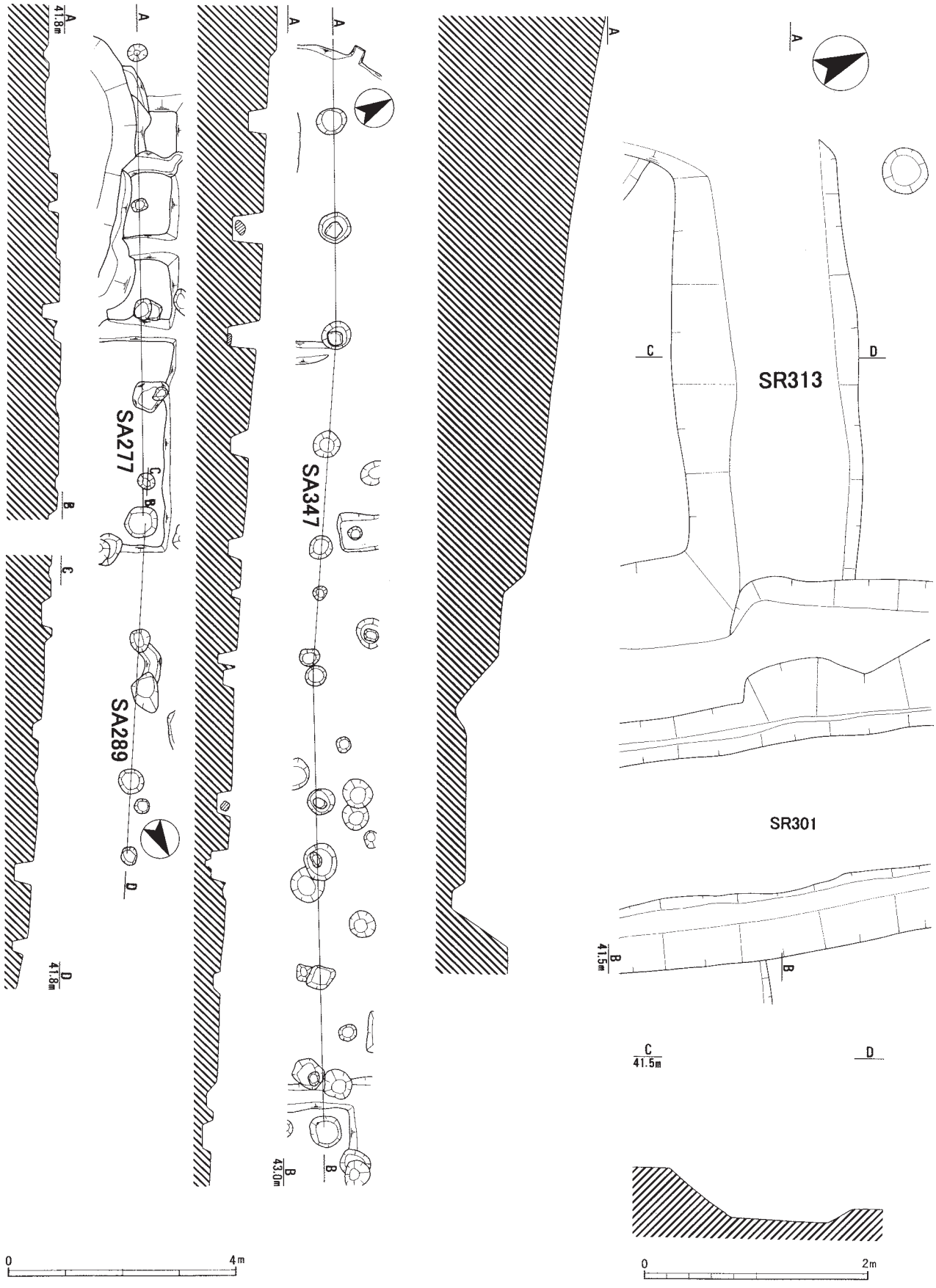




第25図　SB250・278　実測図　（1：100）、SK307・308　遺物出土状況図　（1：50）



第26図　SB252・SE303　実測図、SD316・SA293・SR301　土層断面図（1：50）



第27図　SA277・289、SA347（1：100）、SR313（1：50）実測図

あがるものである。

115は建物内土坑ＳＫ304から出土した瀬戸美濃製品の擂鉢である。大窯第２段階のものである。

116～119は建物内土坑ＳＫ307から出土した。117は中北勢系の土師器羽釜である。口縁部は直立気味で、口縁端部は斜め上方につまみ上げられ、上端に面を持つ。鍔部直上に焼成前穿孔がある。Ⅱ段階のなかでも新しいものになると思われる。116は瀬戸美濃製品の鉄釉丸皿で大窯第２～３段階のものである。118・119は常滑製品の甕で、いずれも口縁部の内側が張出し気味になっている。12型式のものと思われる。

120～122は建物内土坑ＳＫ308から出土した。120・121は土師器の皿。120は器壁が厚く、ゆるやかにたちあがり、121は器壁が薄く、直線的にたちあがり、口縁端部にヨコナデが施される。灯明皿として使用されていたらしく、内外面に煤が付着する。122は瀬戸美濃製品の天目茶椀。大窯第１段階のものである。

②ＳＥ303出土遺物（123～143）

大量の遺物が出土した。土師器（123～132）、瀬戸美濃製品（133～138）、常滑製品（139・140）、木製品（141）、石臼類（142・143）がある。

土師器　皿（123・124）と中北勢系の羽釜（125～132）がある。皿のうち、123は器壁が厚くゆるやかにたちあがり、124は器壁が厚く直線的にたちあがり、口縁端部にヨコナデが施される。

羽釜には口径15～16㎝ほどの小形のもの（125・126）と、口径21～25㎝の中形のもの（127～132）がある。小形のもののうち、125の口縁部はやや内傾し、口縁端部は斜め上方につまみ上げられ、内側に面を持つ。面はわずかに凹線状に窪む。鍔部直上に焼成前穿孔がある。底部は平底に近くなっている。126の口縁部は内傾し、口縁端部は斜め上方につまみ上げられ、内側に面を持つ。面はわずかに凹線状に窪む。鍔部直上に焼成前穿孔がある。底部は丸底に近い。いずれもⅡａ段階にあたると思われるが、125はやや新しい傾向を示す。125は45m程離れた区画５（Sv6）包含層出土の破片と、126は15m程離れた同区画（Pp22）包含層出土の破片と接合した。

中形のもののうち、127の口縁部は直立気味で、口縁端部が外側につまみ出されている。端部には面を持たず丸くなっている。残存部には焼成前穿孔はない。Ⅱｂ段階にあたると思われる。それ以外の羽釜はほぼⅡａ段階のものと思われる。128・129の口縁端部は斜め上方に、130は直立気味に、131・132は外側につまみ上げられている。端部の面は128・130が内端に、131・132が上端にあり、129は丸く終わっている。128の底は丸底であるが、それ以外のものの体部は扁平になっている。132は15m程離れた同区画（Pp22）包含層出土の破片と接合した。

瀬戸美濃製品　天目茶椀（133・134）、灰釉端反皿（135）、山茶椀（136）擂鉢（137）、鉄釉桶（138）がある。133は大窯第２段階後半、134は大窯第３段階前半、135は大窯第１段階、136は第12型式、137は大窯第３段階前半、138は古瀬戸後Ⅳ期のものである。

常滑製品　片口鉢（139）と甕（140）がある。140の口縁部内側は丸く、10型式のものである。

その他　漆器椀（141）、石臼（142）、茶臼（143）がある。141は高台部分で、底部内面には赤漆が、それ以外には黒漆が塗られている。材料の樹種はカエデである。142は花崗岩製の上臼である。幅５㎜程の太い擂り目が粗く入れられている。

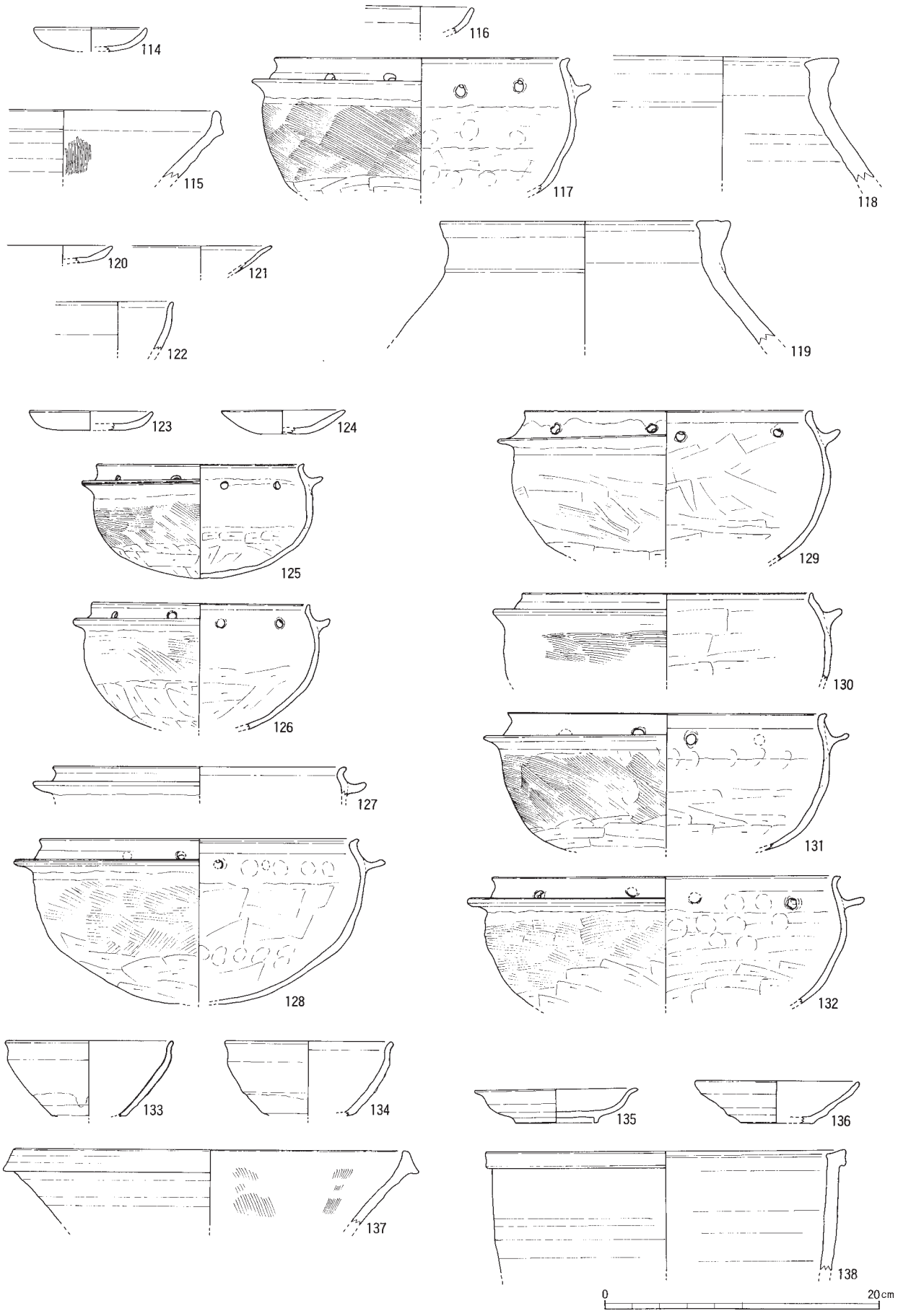
③ＳＲ313、ピット出土遺物（144～152）

144・145はＳＲ313出土の常滑製品の甕である。いずれも口縁部の内面が丸く、10型式のものである。146～152は掘立柱建物や柵としてまとまらなかったピット出土の遺物である。土師器皿（146～150）、常滑製品の甕（151）、青磁の香炉（152）がある。皿には器壁が厚く、丸くたちあがるもの（149・150）、器壁が薄く、直線的にたちあがり、口縁端部にヨコナデが施されるもの（146・147）がある。149は灯明皿として使用されており、煤が付着している。

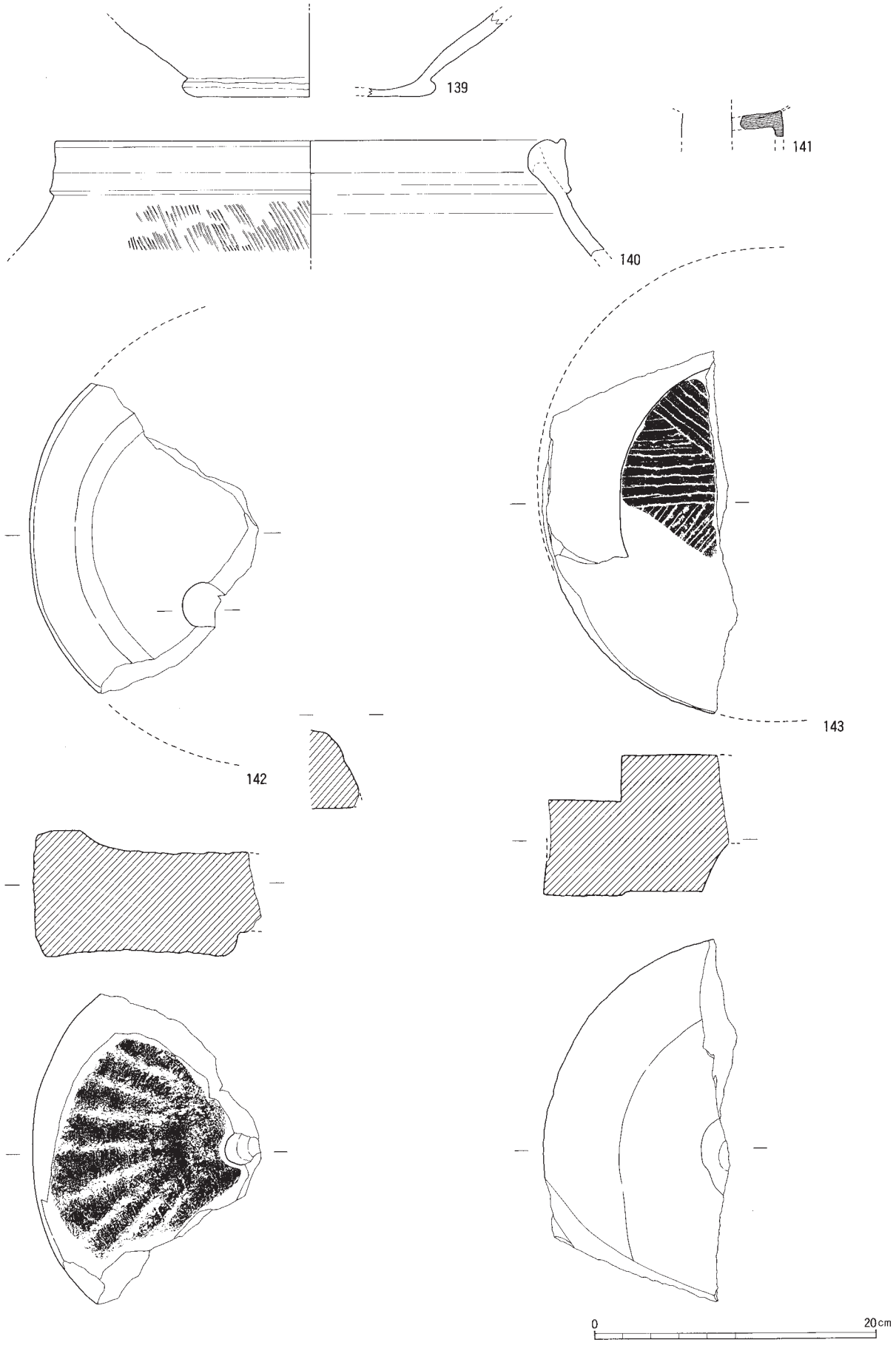
④包含層出土遺物（153～159）

中北勢系の土師器羽釜（153）・茶釜（154）、瀬戸美濃製品の鉄釉小皿（156）、鉄釘（155）、硯（157）、加工円盤（158・159）がある。

153の口縁部は直立し、口縁端部は外側につまみ出され、上端に面を持つが、面は凹線状にはなっていない。鍔部直上に焼成前穿孔がある。Ⅱ段階にあたると思われる。154の口縁端部は外側につまみ出され、上端に面を持っている。鍔部直上に焼成後穿孔



第28図　区画８　SB250、SE303　出土遺物実測図（1：4）



第29図　区画８　SE303　出土遺物実測図　（1：4）

がある。156は鉄釉の稜皿か丸皿と思われる。大窯第２～３段階のものである。158は常滑製品の甕？を転用し、159は18世紀後半のねり鉢を転用している。

区画９（第６図）

区画２の西、標高約36mの尾根上に立地する。調査区外を含めると、東西約35m以上・南北約20mの区画が想定できる。この区画と区画２の間には、約15m四方の未調査の区画がひとつある。東には、未調査の区画との３m程の段差、南には区画３の北東隅で西に方向を変えた堀状遺構ＳＤ43、北には土塁ＳＡ223がある。区画８と同様、東名阪自動車道開通前には、この区画の西に比高差１２m程の斜面があった。

区画内に盛土を行い、第二名神自動車道の建設に伴い移設される水路を取り付けるという工事が行われ、遺構面には掘削は及ばないとの判断から、区画内の遺構の有無と土塁ＳＡ223・ＳＤ43の状況を把握するためのトレンチ調査を行った。その結果、区画内には整地がなされていることを確認し、土坑・溝を検出した。

（１）遺構

①土坑

ＳＫ130（第６図）　トレンチ調査のため遺構全体の規模は不明である。埋土は他の区画内で検出された建物内土坑に似る。埋土から土師器羽釜、瀬戸美濃製品の擂鉢（大窯第２～３段階）・香炉（古瀬戸後Ⅳ期新段階）、常滑製品の甕が出土した。

②溝

ＳＤ131（第６図）　幅約１m、深さ約0.4mの溝。長さは不明である。ＳＤ43と直交する。区画９内の区画溝と考えられる。埋土から土師器羽釜、瀬戸美濃製品の祖母懐壷（大窯期）、常滑製品の甕（12型式）が出土した。

③土塁

ＳＡ223　区画９の北側の、長さ20m以上、基底部幅約６mの土塁、現状での区画９内との段差は約２mある。土塁の外側は急斜面となり、谷に向けて下っている。地山を削り出して構築されている。区画間の土塁と比較すると、きわめて頑強な造りである。

（２）遺物（第30図、写真図版34）

①ＳＫ130出土遺物

中北勢系の土師器羽釜（160）、尾張系の土師器鍋（161）、瀬戸美濃製品（162・163）がある。

160の口縁部は内傾し、口縁端部は斜め上方につまみ上げられ、内側に面を持つが、面は凹線状にはなっていない。残存部には穿孔はない。Ⅱａ段階にあたると思われる。161は器壁が薄く、平たい縦位の内耳がつく。口縁部があまり内弯せず、口縁端部は方形である。鈴木正貴氏の編年[7]のＡ類（Ⅰ－１～２期）にあたると思われる。162は擂鉢で大窯第３段階前半のもの、163は香炉かと思われる。古瀬戸後Ⅳ期新段階のものである。

②ＳＤ131出土遺物

中北勢系の羽釜（164）、常滑製品の甕（165）がある。

164の口縁部はやや内傾し、口縁端部は斜め上方につまみ上げられているが、端部に面を持たない。鍔部直上に焼成前穿孔がある。Ⅱ段階のものと思われる。165の口縁部内面は内側に引き出されており、12型式でも新しいものになると思われる。

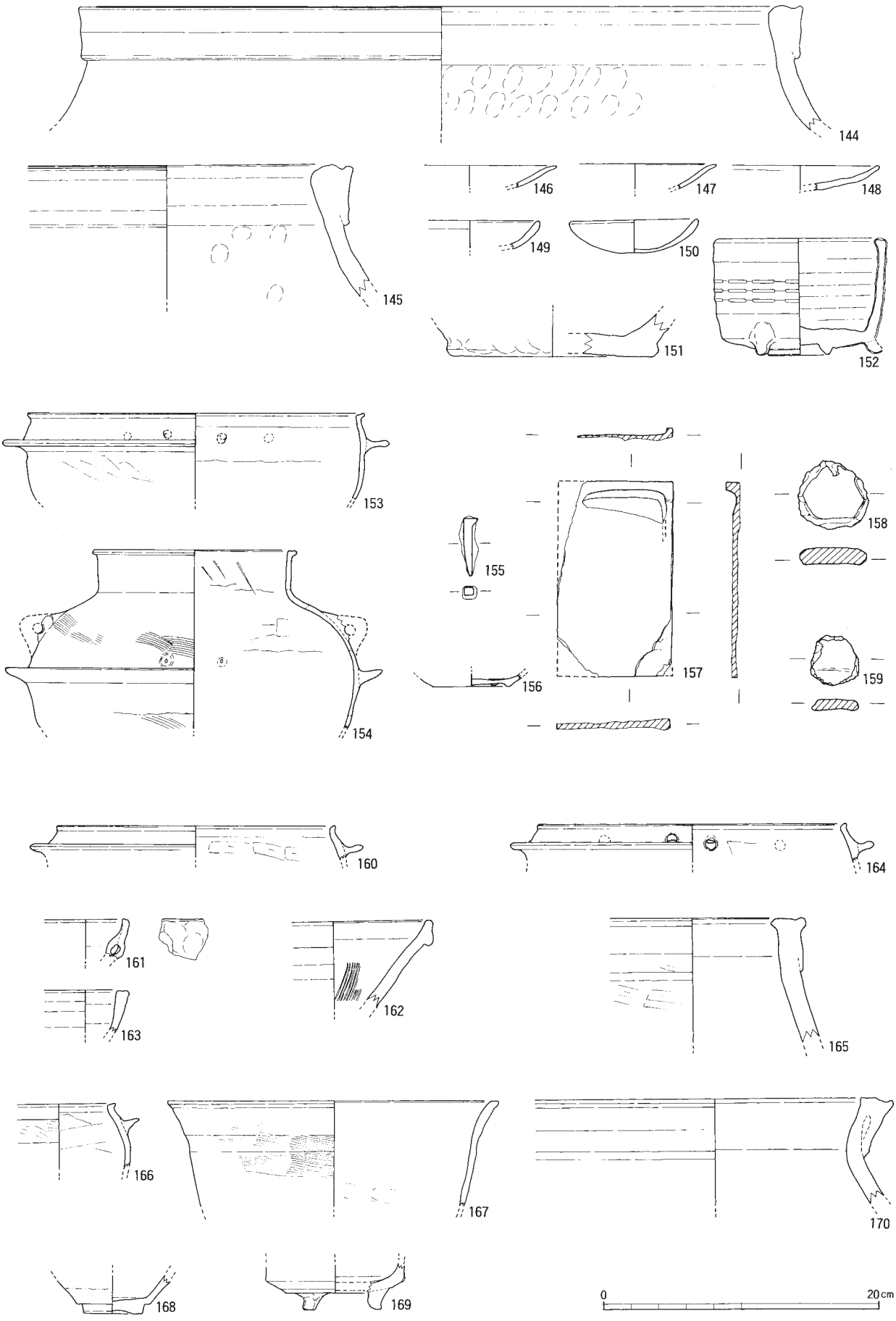
③包含層出土遺物

中北勢系の土師器羽釜（166）・鍋（167）、瀬戸美濃製品の天目茶椀（168）・鉄釉香炉（169）、常滑製品の甕（170）がある。

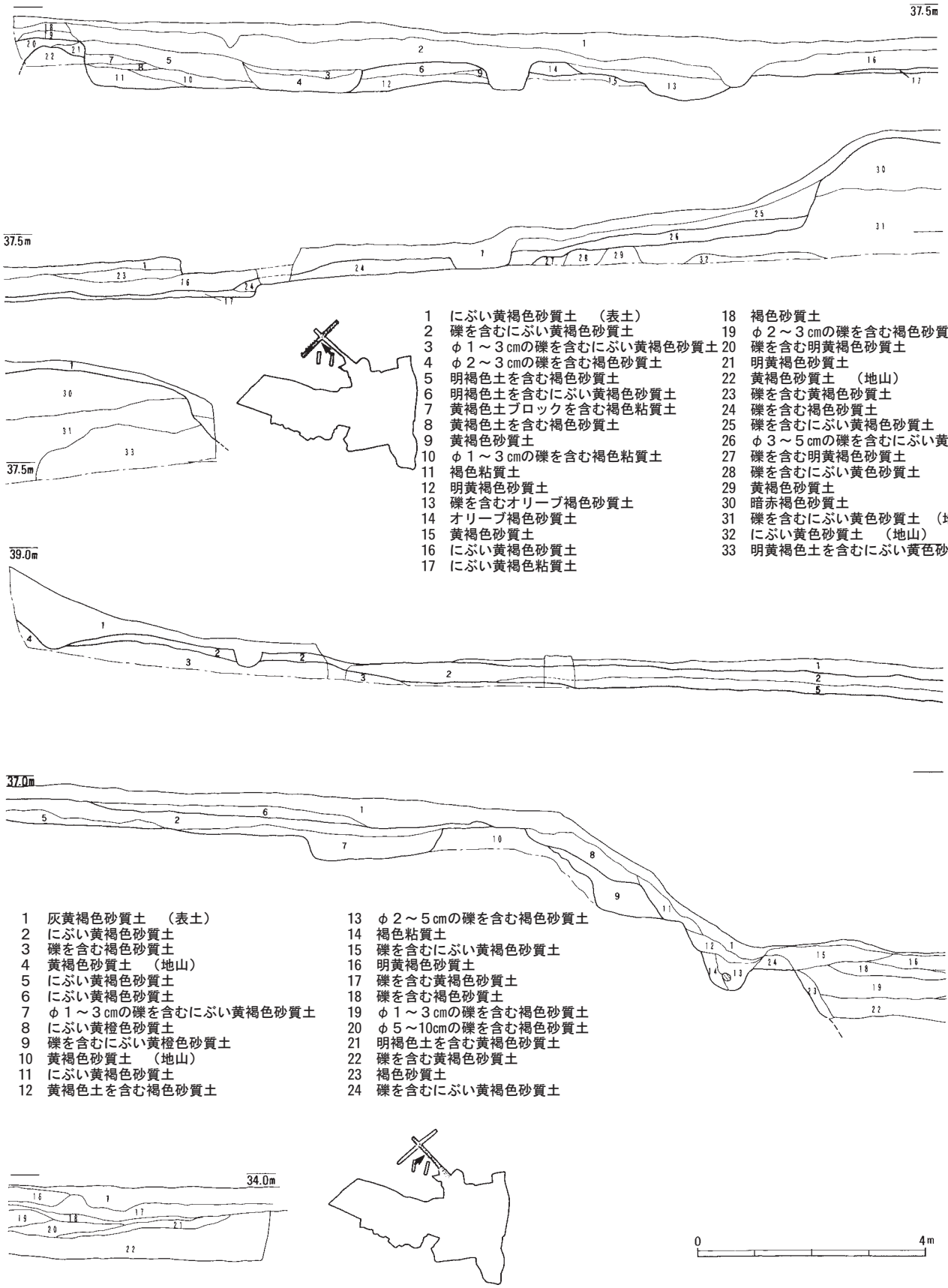
166の口縁部はやや内傾し、口縁端部は外側につまみ出されており、上端に面を持っている。残存部には穿孔はない。Ⅱ段階のものと思われる。165は体部から口縁部にかけて「逆ハ」字形に開く内耳鍋。口縁端部は外側につまみ出され、上端に面を持つ。168は大窯第２段階、169は近世のもので、登窯３～４小期のものである。170の口縁部内面は若干内側に引き出されており、12型式のものと思われる。

道路遺構

ＳＲ12（第32・34図、写真図版13）　区画10～13と区画14～17間を通る道路遺構である。道路幅は約1.5～３mで、発掘調査により、長さ約80m分が確認されている。区画12と15の間で、1.5m程の段差をもっている。埋土からは中世の遺物のほか、登窯４～５小期の灰釉丸皿（109）も出土している。この頃が道路遺構の埋没時期なのであろう。



第30図　区画８・９　出土遺物実測図（1：4）



1　にぶい黄褐色砂質土　（表土）
2　礫を含むにぶい黄褐色砂質土
3　φ１～３㎝の礫を含むにぶい黄褐色砂質土
4　φ２～３㎝の礫を含む褐色砂質土
5　明褐色土を含む褐色砂質土
6　明褐色土を含むにぶい黄褐色砂質土
7　黄褐色土ブロックを含む褐色粘質土
8　黄褐色土を含む褐色砂質土
9　黄褐色砂質土
10　φ１～３㎝の礫を含む褐色粘質土
11　褐色粘質土
12　明黄褐色砂質土
13　礫を含むオリーブ褐色砂質土
14　オリーブ褐色砂質土
15　黄褐色砂質土
16　にぶい黄褐色砂質土
17　にぶい黄褐色粘質土
18　褐色砂質土
19　φ２～３㎝の礫を含む褐色砂質土
20　礫を含む明黄褐色砂質土
21　明黄褐色砂質土
22　黄褐色砂質土　（地山）
23　礫を含む黄褐色砂質土
24　礫を含む褐色砂質土
25　礫を含むにぶい黄褐色砂質土
26　φ３～５㎝の礫を含むにぶい黄褐色砂質土
27　礫を含む明黄褐色砂質土
28　礫を含むにぶい黄色砂質土
29　黄褐色砂質土
30　暗赤褐色砂質土
31　礫を含むにぶい黄色砂質土　（地山）
32　にぶい黄色砂質土　（地山）
33　明黄褐色土を含むにぶい黄色砂質土

1　灰黄褐色砂質土　（表土）
2　にぶい黄褐色砂質土
3　礫を含む褐色砂質土
4　黄褐色砂質土　（地山）
5　にぶい黄褐色砂質土
6　にぶい黄褐色砂質土
7　φ１～３㎝の礫を含むにぶい黄褐色砂質土
8　にぶい黄橙色砂質土
9　礫を含むにぶい黄橙色砂質土
10　黄褐色砂質土　（地山）
11　にぶい黄褐色砂質土
12　黄褐色土を含む褐色砂質土
13　φ２～５㎝の礫を含む褐色砂質土
14　褐色粘質土
15　礫を含むにぶい黄褐色砂質土
16　明黄褐色砂質土
17　礫を含む黄褐色砂質土
18　礫を含む褐色砂質土
19　φ１～３㎝の礫を含む褐色砂質土
20　φ５～10㎝の礫を含む褐色砂質土
21　明褐色土を含む黄褐色砂質土
22　礫を含む黄褐色砂質土
23　褐色砂質土
24　礫を含むにぶい黄褐色砂質土

第31図　区画９　土層断面図　（1：100）

東名阪自動車道開通前、昭和30年代の地形図からみると、この区画の西には比高差12m程の斜面がある。区画８の北東で西に折れ、この斜面を登って主郭方向に向かうと考えられる⑧。

出土遺物には土師器皿（171～173）、瀬戸美濃製品（174・175・178）、常滑製品（176）、染付（177）がある（第33図）。土師器皿には、底部から口縁部へのたちあがりがゆるやかなもの（171・173）と強いもの（172）がある。瀬戸美濃製品のうち、擂鉢（174）は大窯第１～２段階のもの、黄瀬戸鉢（178）は登窯２～３小期のもの、179は近世のものである。常滑製品の片口鉢（176）は口縁端部の内側・外側ともが引き出されており、10型式のものと思われる。

区画10（第34図、写真図版４・５）

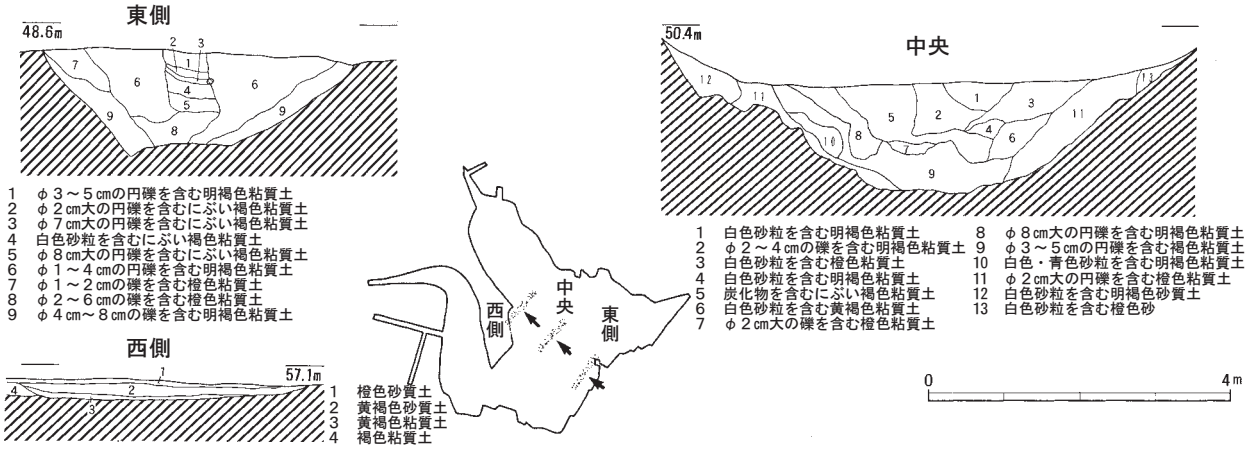
区画９の西、標高約46mの尾根上に立地する。調査区外を含めると、東西約25m・南北約20mの区画が想定できる。西の区画11とは約７mの段差がある。区画内から、掘立柱建物３棟、土坑、柵などを検出した。

この区画と区画14との間には、道路遺構ＳＲ12がある。この道路は、区画８の北から斜面を登ってくる道路遺構ＳＲ301につながると考えられる。

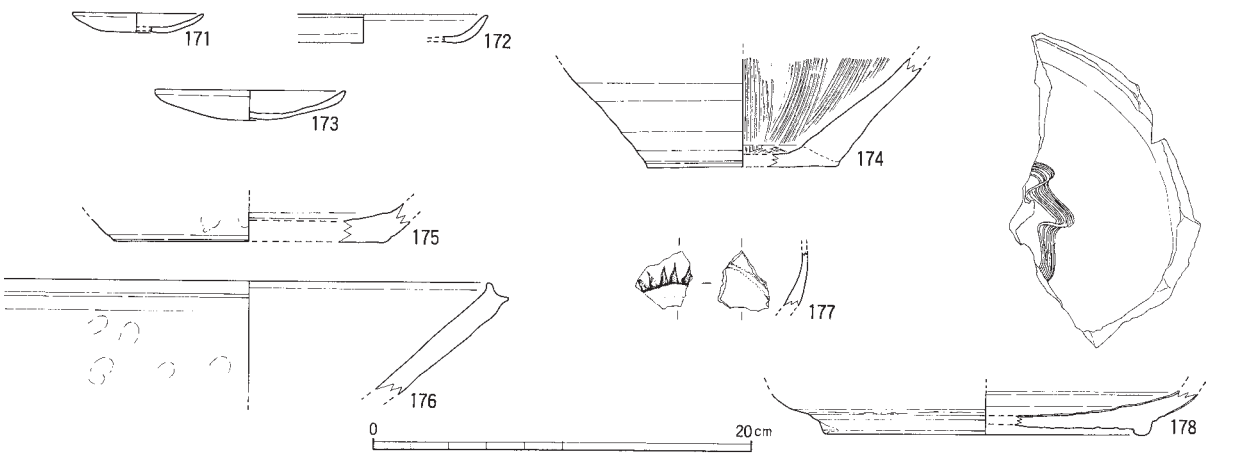
（１）遺構

①掘立柱建物　掘立柱建物には、区画の主屋と思われる大形のもの（ＳＢ246･247）と桁行が長いもの（ＳＢ274）がある。

ＳＢ246･247（第36図）　区画のほぼ中央で検出した。ＳＢ246は桁行５間以上×梁行２間の建物で、西側1間分の庇は土間かもしれない。建物内土坑を持つ



第32図　SR12　土層断面図　（1：100）



第33図　SR12　出土遺物実測図　（1：4）

（ＳＫ36・42）。区画10内では最大の建物である。ＳＢ247は、桁行４間以上×梁行２間の建物である。建物内土坑を持つ。柱穴から土師器小片、常滑製品の甕が出土した。両者とＳＢ274は重複しているが三者の前後関係は不明である。

建物内土坑ＳＫ36は、長辺２ｍ、短辺1.8ｍの長方形の土坑である。埋土には拳大から人頭大の礫を含む。埋土から土師器皿・羽釜、瀬戸美濃製品の天目茶椀・擂鉢（179）・祖母懐壷（180･181）、常滑製品の片口鉢（182・183）・甕、瓦質土器、白磁端反皿（184）、加工円盤（185）、瓦（186～189）が出土した。ＳＫ42は、1.8ｍ×1.2ｍの凸形の土坑である。埋土から土師器皿（190）・羽釜、瀬戸美濃製品の天目茶椀（191）、瓦、鉄釘が出土した。両者の前後関係は不明であるが、同時期の一連の遺構かもしれない。

ＳＢ274（第36図）　区画のほぼ中央で検出した。桁行６間以上×梁行１間の桁行が長い建物である。ＳＢ246･247と重複しているが、三者の前後関係は不明である。

②溝

ＳＤ78（第34図）　区画10の西端で検出した。長さ15ｍ以上、幅約0.8ｍ、深さ約0.2ｍの溝である。溝底は、南西側（道路ＳＲ12側）が高く、北東側が低くなっている。この溝の埋没後、柵ＳＡ275が構築されている。区画10・11間の段差を下る雨水を道路ＳＲ12方向ではなく、北東の谷に流す排水溝としての機能、区画10･11間の段差をさらに高くする機能を持つものと考えられる。

③柵

ＳＡ100（第37図）　長さ10.5ｍ、柱間３間の柵である。ほかの柵と比較すると柱穴が大きい。ＳＡ275とほぼ平行である。柱穴から土師器皿、瀬戸美濃製品の祖母懐壷（大窯期）が出土した。ＳＢ274と重複しているが両者の前後関係は不明である。

ＳＡ275（第37図）　長さ7.6ｍ、柱間２間の柵である。ＳＤ275埋没後に構築されている。

（２）遺物（第38図、写真図版34）

①ＳＢ246・247関連遺物

ＳＢ246・247の建物内土坑と考えられるＳＫ36からは、瀬戸美濃製品の擂鉢（179）・祖母懐壷（180・181）、常滑製品の片口鉢（182・183）、白磁端反皿（184）、加工円盤（185）、瓦（186～189）などが出土している。

瀬戸美濃製品のうち、擂鉢（179）は大窯第４段階のものである。祖母懐壷（180・181）は、大窯期もので、接点はないが同一個体であると思われる。

常滑製品の片口鉢（182・183）は、いずれも口縁部の内側が引き出されており、９型式のものと思われる。184は白磁の端反皿である。185は大窯第２段階の天目茶椀を転用している。

瓦（186～189）は、おおむね中世のものと思われる。玉縁ではないもの（186）と玉縁のもの（188・189）がある。いずれも内面には細かい布目があり、丁寧な調整が施されている。187と189は同一個体である。前述の41・42と同様に、伊坂遺跡出土の瓦とは胎土・製作技法・焼成とも異なっている。

同じく建物内土坑と考えられるＳＫ42からは、土師器皿（190）・瀬戸美濃製品の天目茶椀（191）が出土している。190は器壁が薄く、口縁端部が尖るようにおわる。内外面には煤が付着する。191は内反り高台で、底部外面には錆釉がかかる。大窯第２段階のものである。

③ピット・包含層出土遺物

塼（192・193）、土師器皿（194・195）、山茶椀（196～198）、常滑製品の片口鉢（199）・甕（200・201）がある。

194は器壁が薄く、丸くたちあがるもので、南伊勢系の小皿かもしれない。195は器壁が薄く、直線的にたちあがるもので、胎土や調整は194に似る。

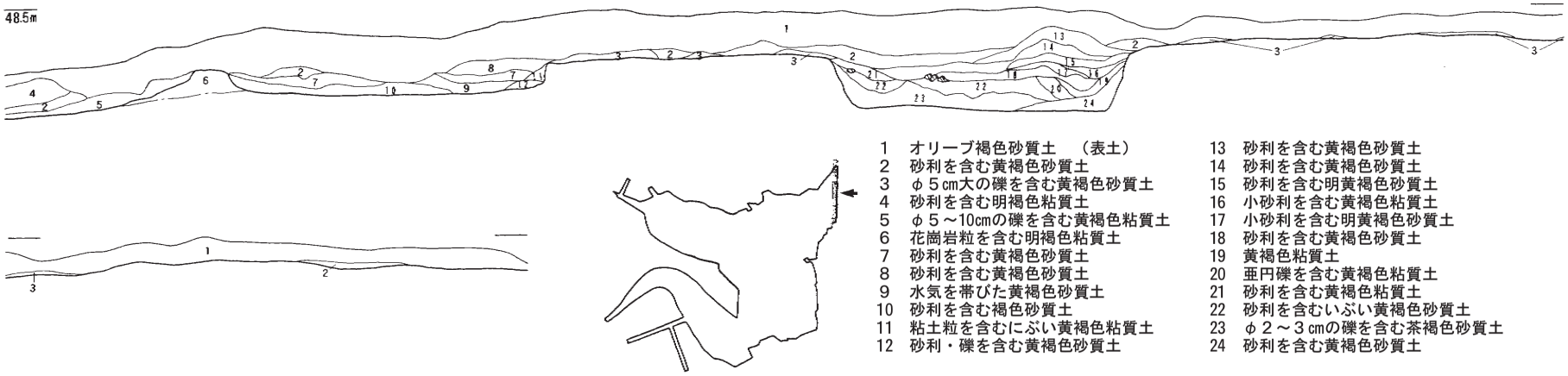
196～198はいずれも第12型式のものである。199は口縁部内側が引き出されており、９型式のもの、200・201は口縁部の内面が丸く、10型式のものである。

区画11（第34図、写真図版４・５）

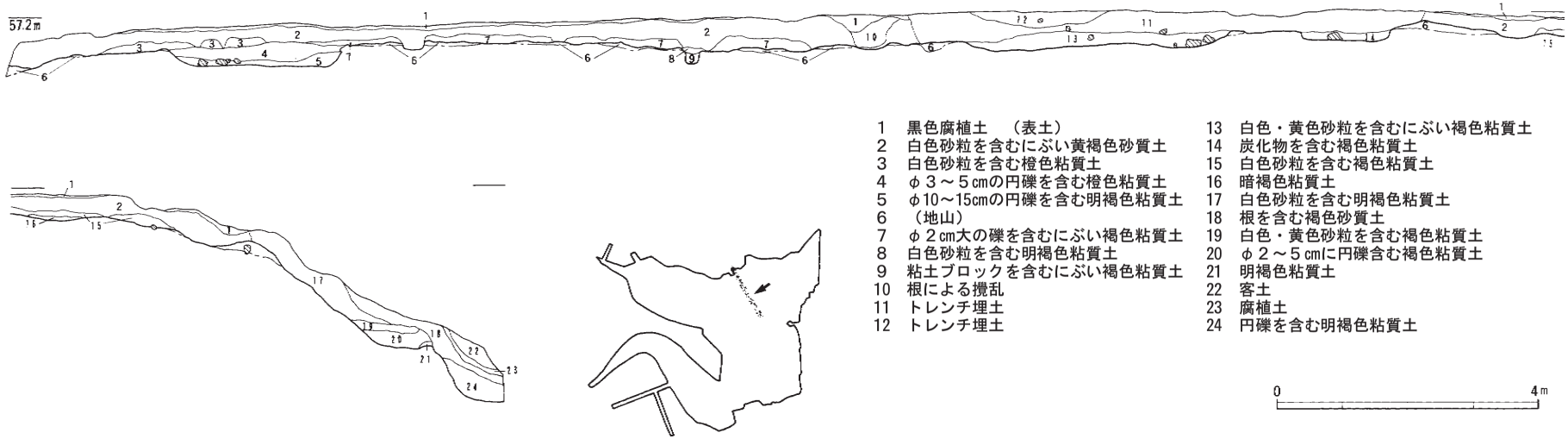
区画10の北西、標高約54ｍの尾根上に立地する約15ｍ四方の区画。隣接する区画10とは約７ｍ、区画12とは約３ｍの段差がある。区画内から、掘立柱建物２棟、土坑、溝、柵などを検出した。この区画の北隅から、区画12の裾をとりまくように、犬走り状の通路ＳＲ120が伸びている。

第34図　区画10～12平面図　（1：500）

第35図　区画10・12　土層断面図　（1：100）

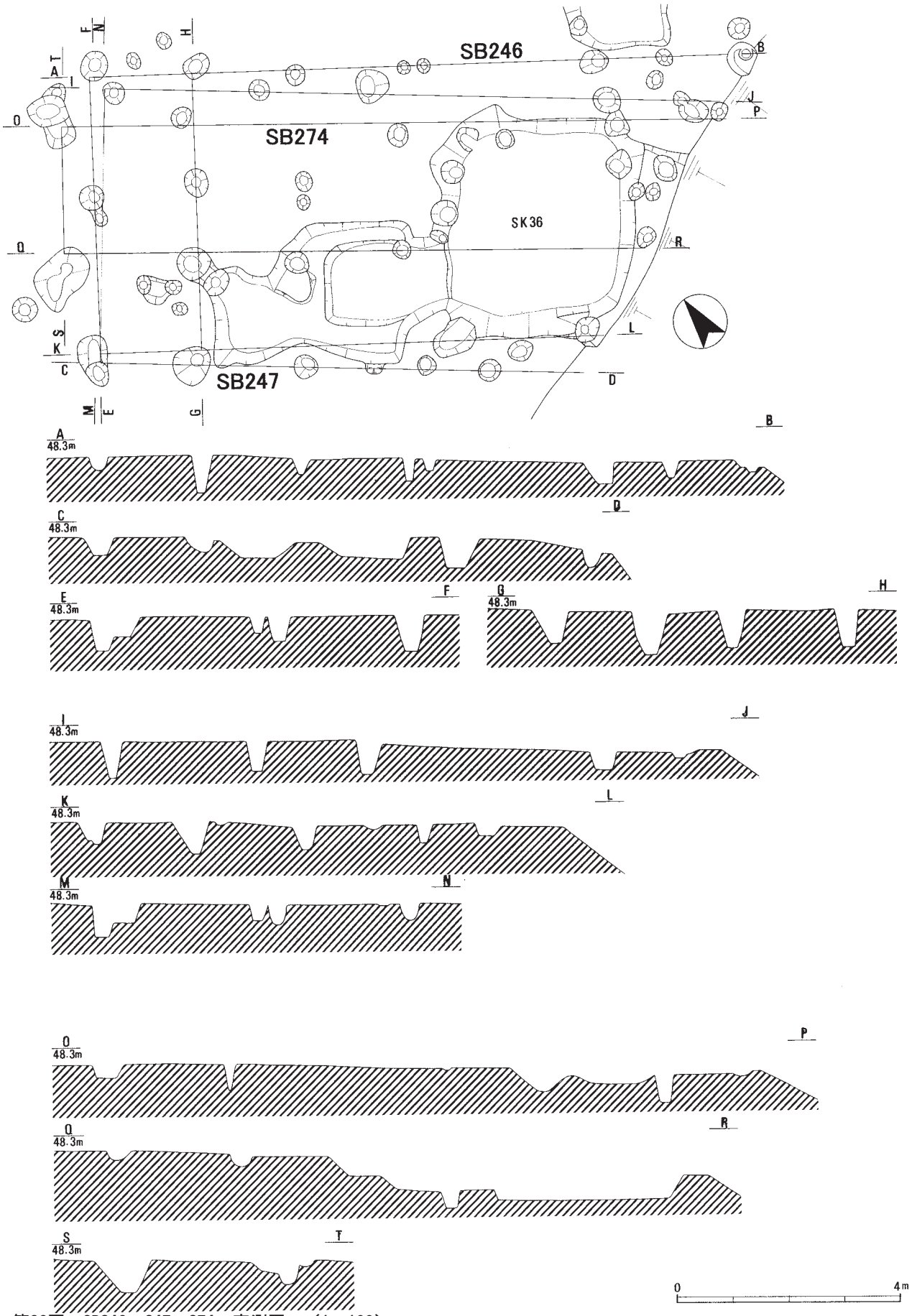


1　オリーブ褐色砂質土　（表土）
2　砂利を含む黄褐色砂質土
3　φ５cm大の礫を含む黄褐色砂質土
4　砂利を含む明褐色粘質土
5　φ５～10cmの礫を含む黄褐色粘質土
6　花崗岩粒を含む明褐色粘質土
7　砂利を含む黄褐色砂質土
8　砂利を含む黄褐色砂質土
9　水気を帯びた黄褐色砂質土
10　砂利を含む褐色砂質土
11　粘土粒を含むにぶい黄褐色粘質土
12　砂利・礫を含む黄褐色砂質土
13　砂利を含む黄褐色砂質土
14　砂利を含む黄褐色砂質土
15　砂利を含む明黄褐色砂質土
16　小砂利を含む黄褐色粘質土
17　小砂利を含む明黄褐色砂質土
18　砂利を含む黄褐色砂質土
19　黄褐色粘質土
20　亜円礫を含む黄褐色粘質土
21　砂利を含む黄褐色粘質土
22　砂利を含むいぶい黄褐色砂質土
23　φ２～３cmの礫を含む茶褐色砂質土
24　砂利を含む黄褐色砂質土



1　黒色腐植土　（表土）
2　白色砂粒を含むにぶい黄褐色砂質土
3　白色砂粒を含む橙色粘質土
4　φ３～５cmの円礫を含む橙色粘質土
5　φ10～15cmの円礫を含む明褐色粘質土
6　（地山）
7　φ２cm大の礫を含むにぶい褐色粘質土
8　白色砂粒を含む明褐色粘質土
9　粘土ブロックを含むにぶい褐色粘質土
10　根による攪乱
11　トレンチ埋土
12　トレンチ埋土
13　白色・黄色砂粒を含むにぶい褐色粘質土
14　炭化物を含む褐色粘質土
15　白色砂粒を含む褐色粘質土
16　暗褐色粘質土
17　白色砂粒を含む明褐色粘質土
18　根を含む褐色砂質土
19　白色・黄色砂粒を含む褐色粘質土
20　φ２～５cmに円礫含む褐色粘質土
21　明褐色粘質土
22　客土
23　腐植土
24　円礫を含む明褐色粘質土

0　4m



第36図　SB246・247・274　実測図　（1：100）

ＳＲ12は、この区画と区画14との間を通っている。

（１）遺構

①掘立柱建物　いずれの建物も、比較的規模の大きな掘立柱建物である。ほかの区画とは違い、検出されたすべての建物が総柱建物であることが特徴である。

ＳＢ102（第40図、写真図版13・14）　区画の北端で検出した。桁行４間×梁行２間の総柱の建物で、建物内土坑を持つ（ＳＫ88）。区画11内では最大の建物である。

建物内土坑ＳＫ88は、約2.5m×約1.5mの不定形の土坑で、埋土に拳大から人頭大の礫が入っていた。埋土から瀬戸美濃製品の灰釉丸皿（202）・徳利（大窯期）が出土した。

ＳＢ103（第41図、写真図版14）　ＳＢ103と接するようにして建つ。桁行３間×梁行２間の総柱の建物である。

建物の周辺は50㎝ほど掘りくぼめられており、北東と北西に浅い溝が巡る。

②柵

ＳＡ104（第42図）　長さ7.5m、柱間４間の柵である。区画12との段差の裾に造られている。

ＳＡ121（第40図）　長さ5.5m、柱間３間の柵である。区画の北東斜面いっぱいに造られている。

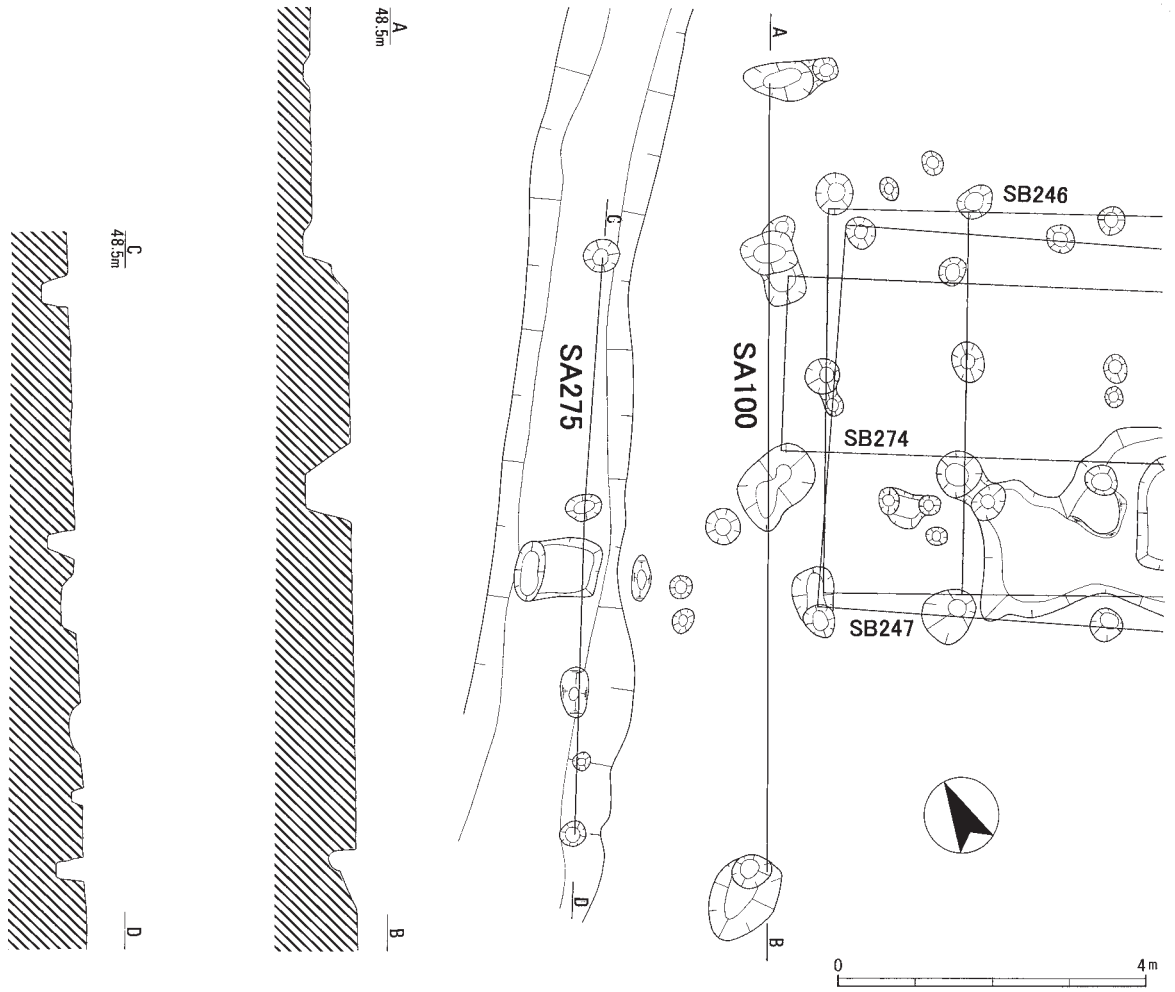
ＳＡ273（第40図）　長さ5.7m、柱間２間の柵である。ＳＢ102、103の南東に造られている。

③通路

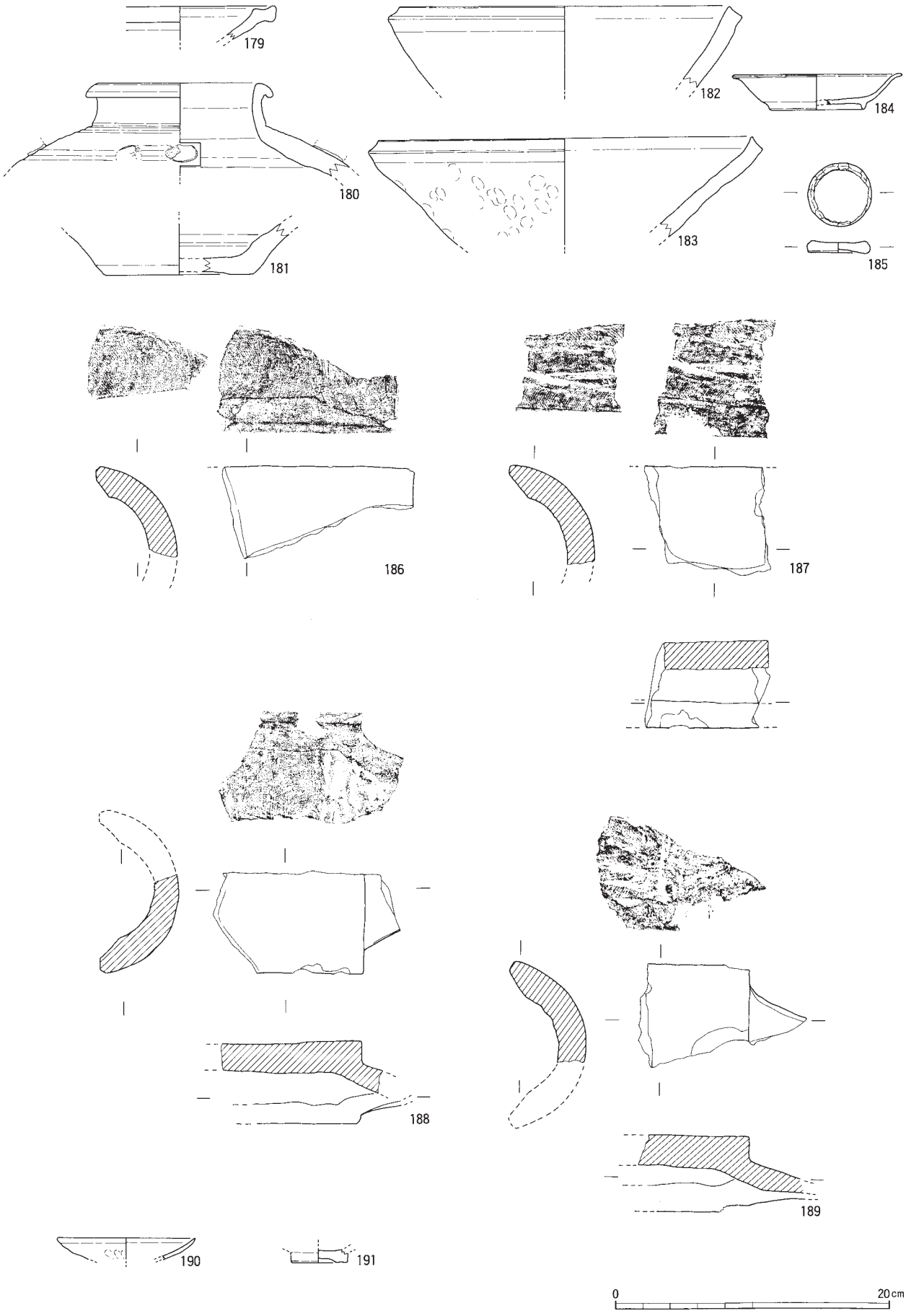
ＳＲ99（第42図）ＳＲ12から区画11に入る、長さ約７m、幅１m以上の通路。ＳＲ12との分かれ目付近は撹乱のため、両者がどのようにつながっていたのか不明である。ＳＲ12は、この通路付近で1.5m程の段を持っている。

（２）遺物（第43図、写真図版35）

遺物の量は少ない。瀬戸美濃製品の灰釉丸皿



第37図　SA100・275　実測図　（1：100）



第38図　区画10　出土遺物実測図　（1：4）

（202）はＳＢ102の建物内土坑であるＳＫ88から出土した。大窯第２段階後半のものである。

203～212は包含層から出土した遺物である。土師器皿（203）は伊坂城跡ではあまりない形態の皿で、器壁が厚く、口縁端部が尖るようにおわる。内面には稜をもつ。204は中北勢系の土師器鍋で、口縁端部が外側に引き出され、上面に面を持っている。205・206は中北勢系の土師器羽釜である。205の口縁部はやや内傾し、口縁端部は斜め上方につまみ上げられるが、端部内面は丸くなっている。鍔部直上に焼成前穿孔がある。206の口縁部はやや内傾し、口縁端部は外側につまみ出され、上端に面をもっている。鍔部直上に焼成前穿孔がある。いずれもⅡ段階にあたると思われる。

207～210は瀬戸美濃製品である。207・208は天目茶椀。207は大窯第１段階後半、208は大窯第２段階後半のものである。209は口広有耳壷。耳の部分がわずかに残る。古瀬戸後Ⅳ期のものである。210は筒形容器。内面には横ピンが付着する。大窯第１段階のものである。211は尾張型６型式の山茶椀である。

212は花崗岩製の五輪塔の地輪である。下面が平らになっていないので、台座に乗るものではないと思われる。伊坂城跡の発掘調査区内から出土した五輪塔の中ではもっとも大形のものである。

区画12（第34図、写真図版４・５・６・15）

区画11の北西、標高約57ｍの尾根上に立地する約60ｍ×30ｍの区画。隣接する区画11とは約３ｍ、区画13とは約１ｍの段差がある。区画の北側では、地山を削りこんで平坦部を作り出している。北東斜面に面する部分は、地山を削り残して一段高くしてある。

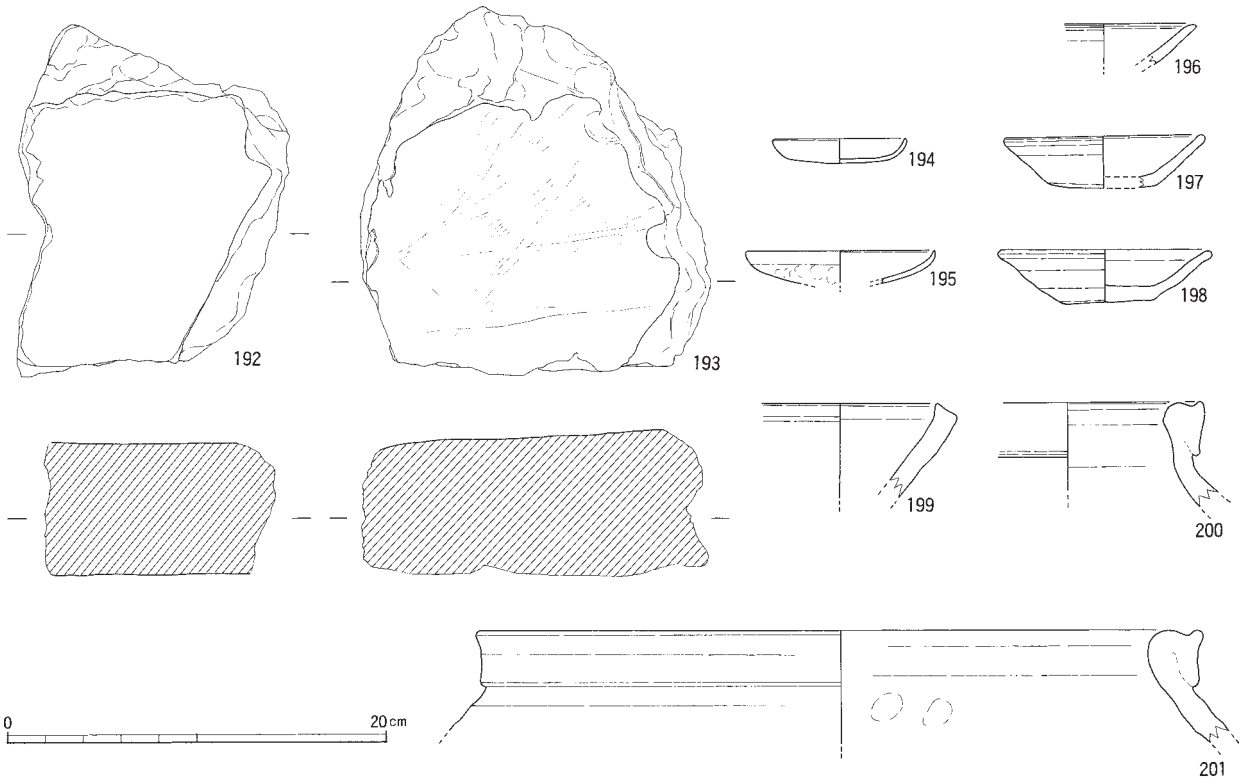
区画溝ＳＤ80により、南東部と北西部に小区分される。

区画内から、掘立柱建物20棟、井戸、土坑、溝、柵などを検出した。

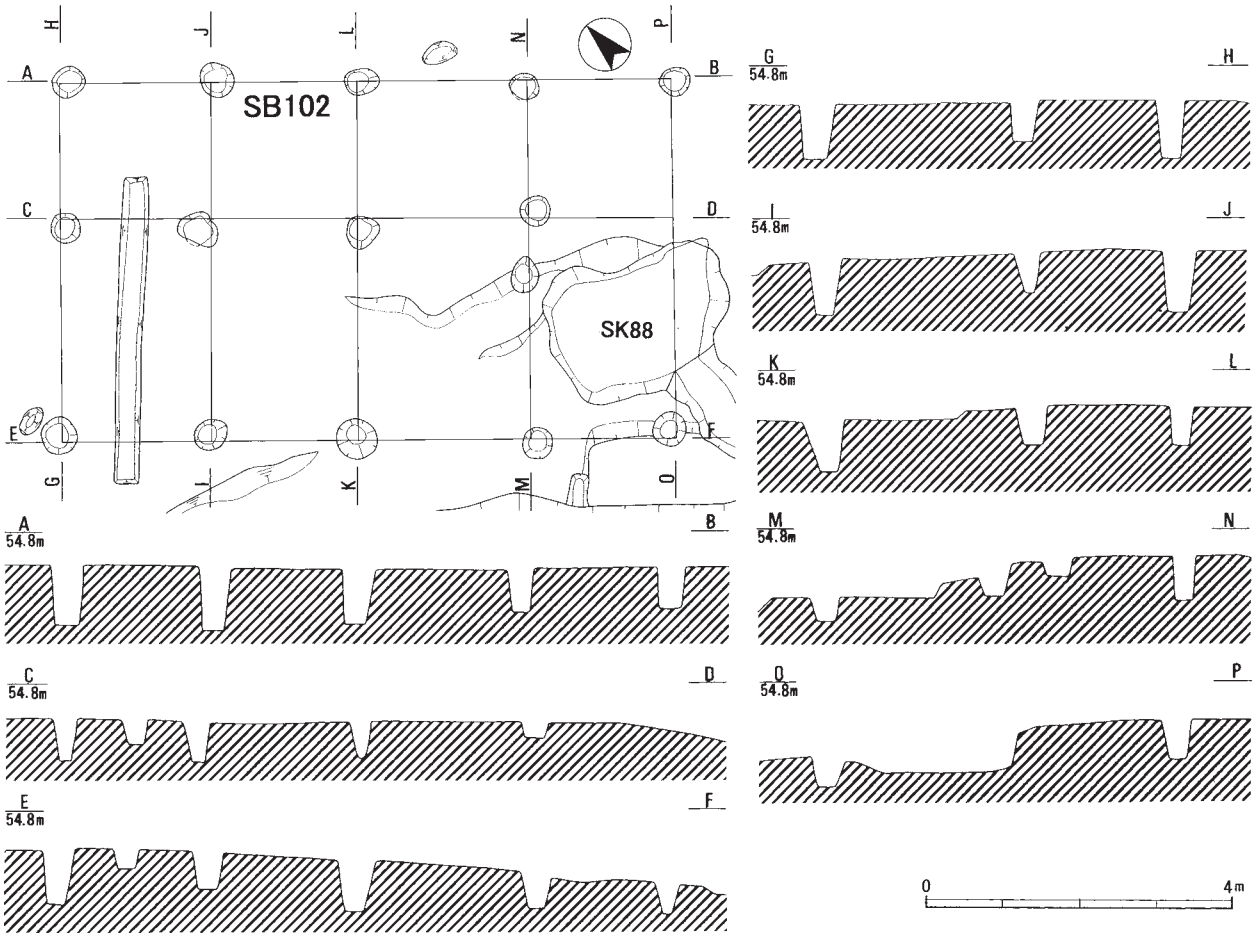
ＳＲ12は、この区画と区画15の間を通っている。

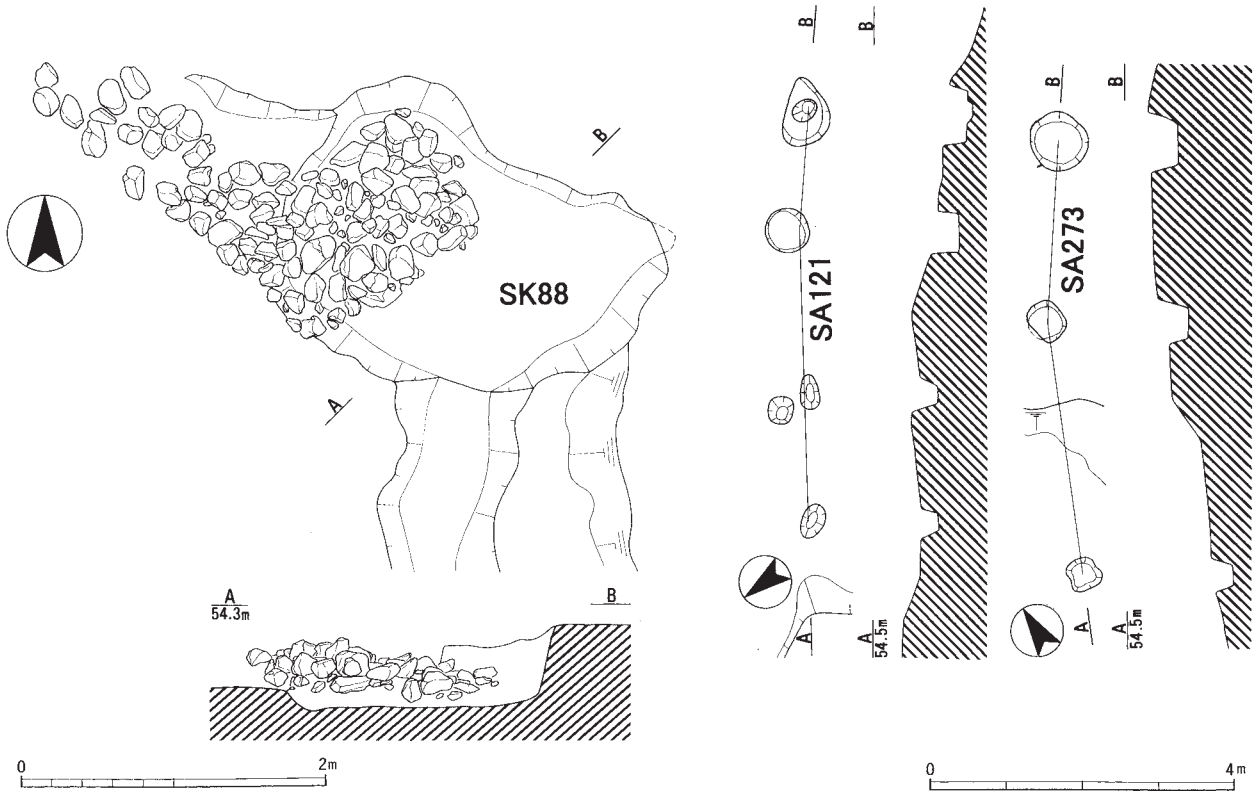
（１）区画南東部の遺構

①掘立柱建物　やや大形の総柱のもの（ＳＢ107）と小規模なものがある。

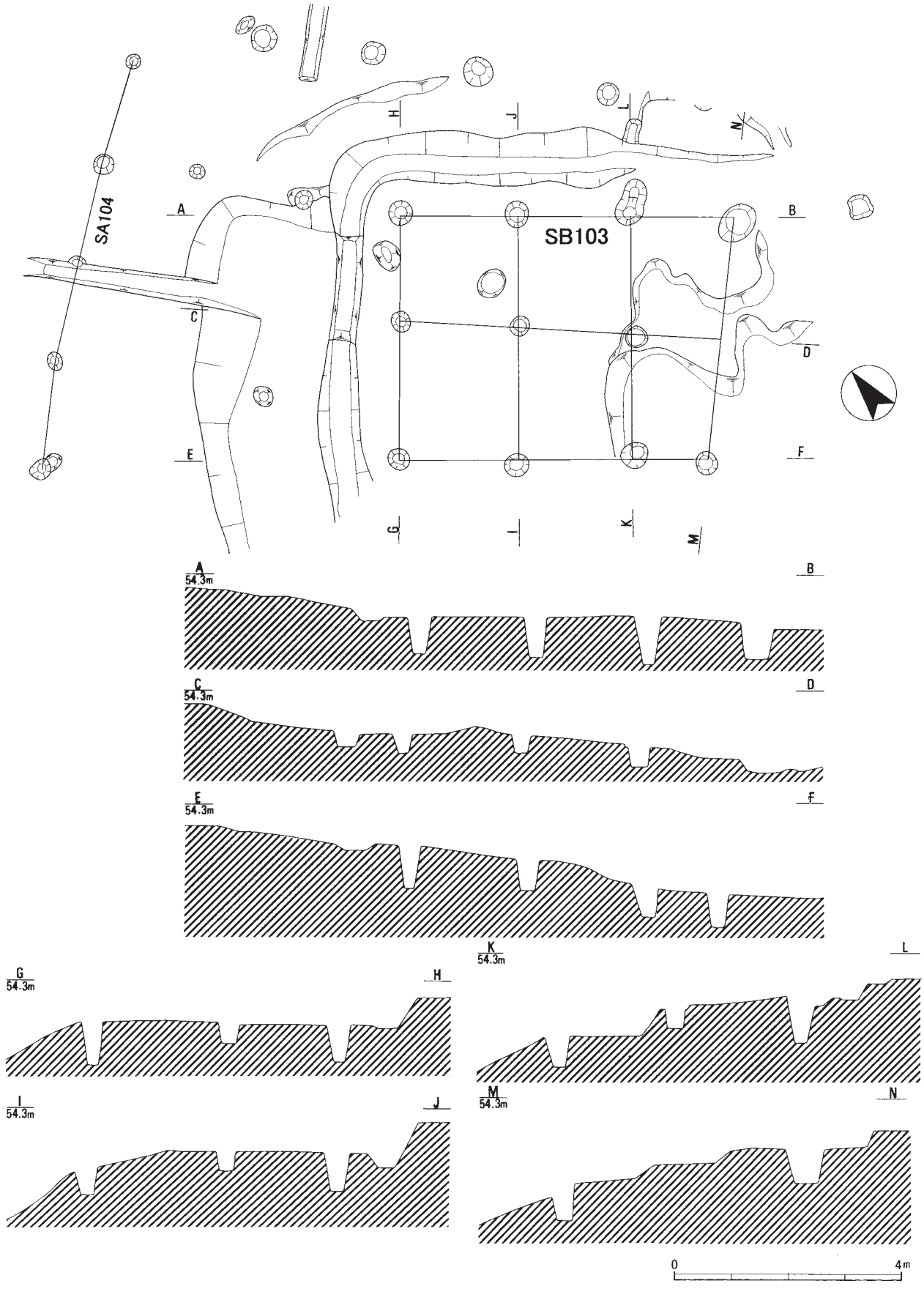


第39図　区画10　Pit、包含層出土遺物実測図（1：4）





第40図　SB102（1：100）、SK88（1：50）、SA121、273（1：100）実測図



第41図　SB103、SA104　実測図（1：100）

第42図　SR12・99・SA104　実測図（1：100）

ＳＢ107（第45図）　桁行３間×梁行２間の総柱の建物で、建物内土坑を持つ（ＳＫ69・70）。区画12南東部では最大の建物である。

建物内土坑ＳＫ69は、長軸約1.8m、短軸約1.6mの楕円形の土坑である。底近くの埋土で20㎝程の礫が出土している。ＳＫ70は長辺約2.7m、短辺約2.1mの長方形の土坑である。底近くの埋土から礫や五輪塔の火輪（213）、石臼が出土している。ほかに埋土から土師器羽釜、瀬戸美濃製品の擂鉢（大窯期）、染付（214）が出土した。この両者とＳＤ72は重複しているが、三者はＳＫ69→ＳＫ70→ＳＤ72の順に掘削されている。ＳＫ71は長辺約2.2m、短辺約1.9mの長方形の土坑で、ＳＢ107のほぼ中央にある。ＳＤ73は、この土坑が埋没した後に掘削されている。

ＳＢ108（第46図）　ＳＢ107に隣接して建てられている。桁行２間×梁行１間の建物である。ＳＡ270と重複しているが両者の前後関係は不明である。

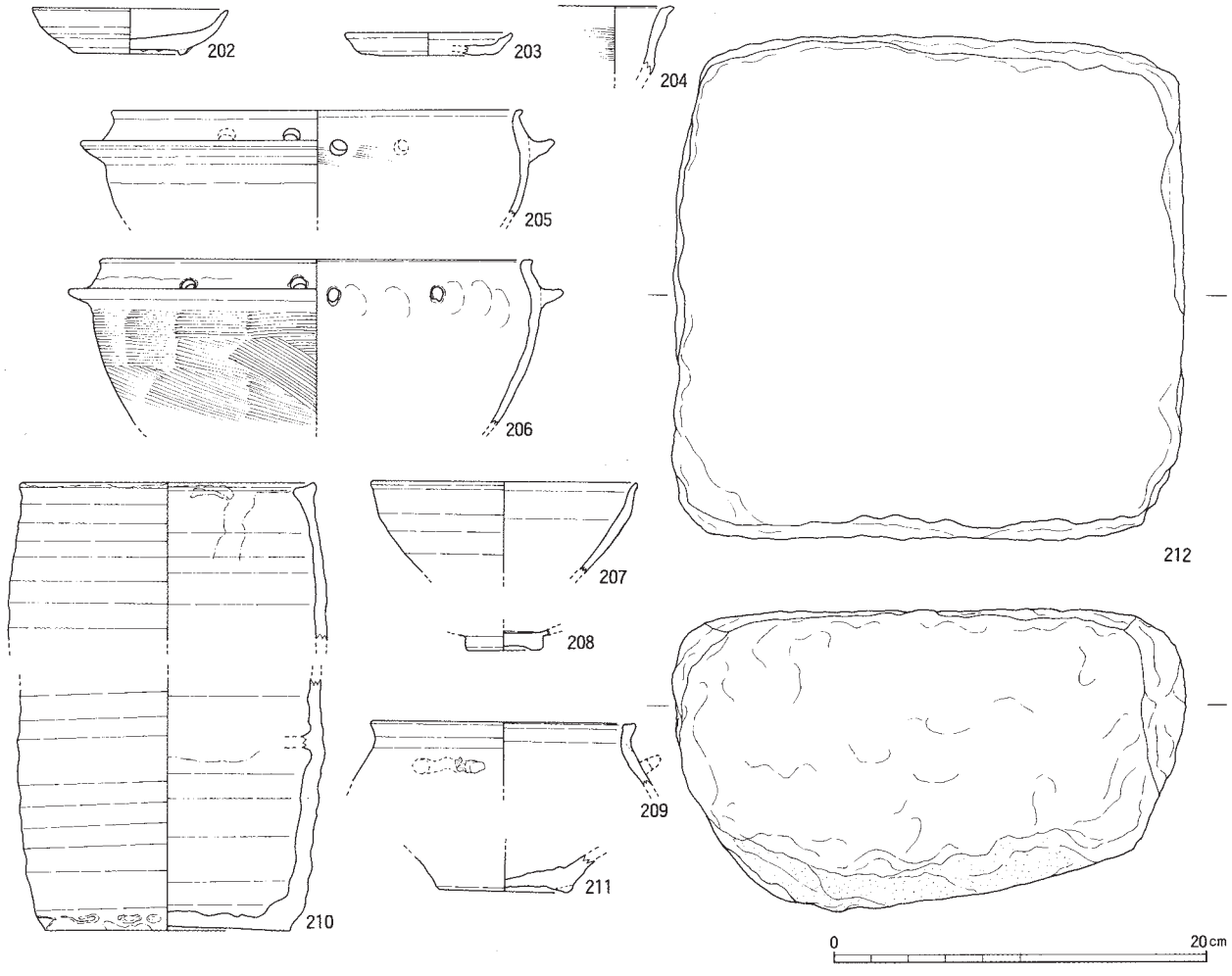
ＳＢ109（第46図）　区画の東端、北東斜面の際に建てられている。桁行２間×梁行1間の建物である。柱穴のひとつが、近世の磁器が出土したピットに切られている。

ＳＢ110（第47図）　区画北東側の段差を跨ぐように建てられている。２間×２間の建物である。柱穴から常滑製品の甕（215）が出土した。

ＳＢ258（第47図）　１間×１間の小規模な建物である。建物内土坑（ＳＫ85）を持つ。建物内土坑ＳＫ85は、一辺約1.4m、深さ約0.5mの方形の土坑で、重複するＳＫ77の埋没後に掘削されている。

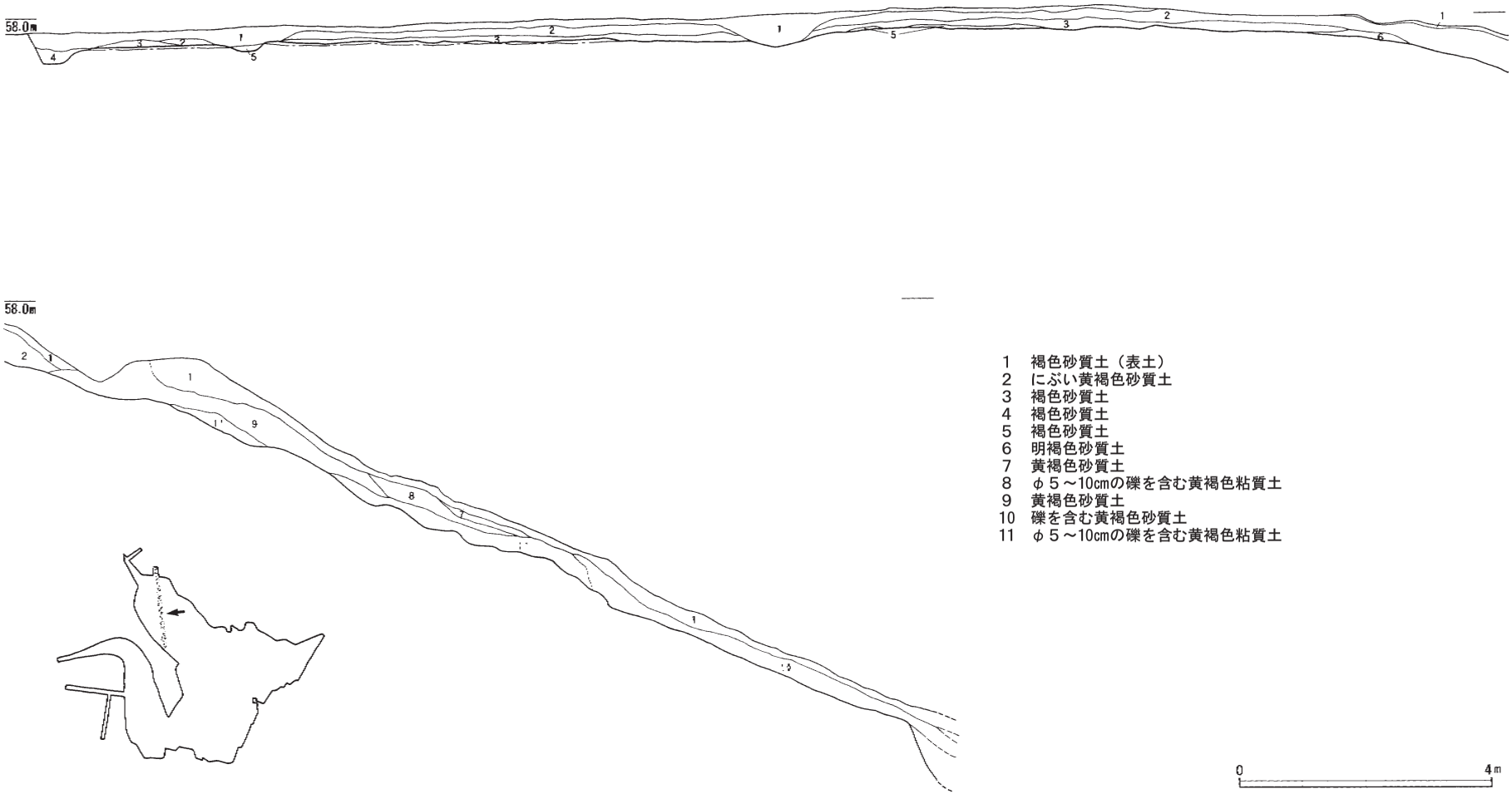
②土坑

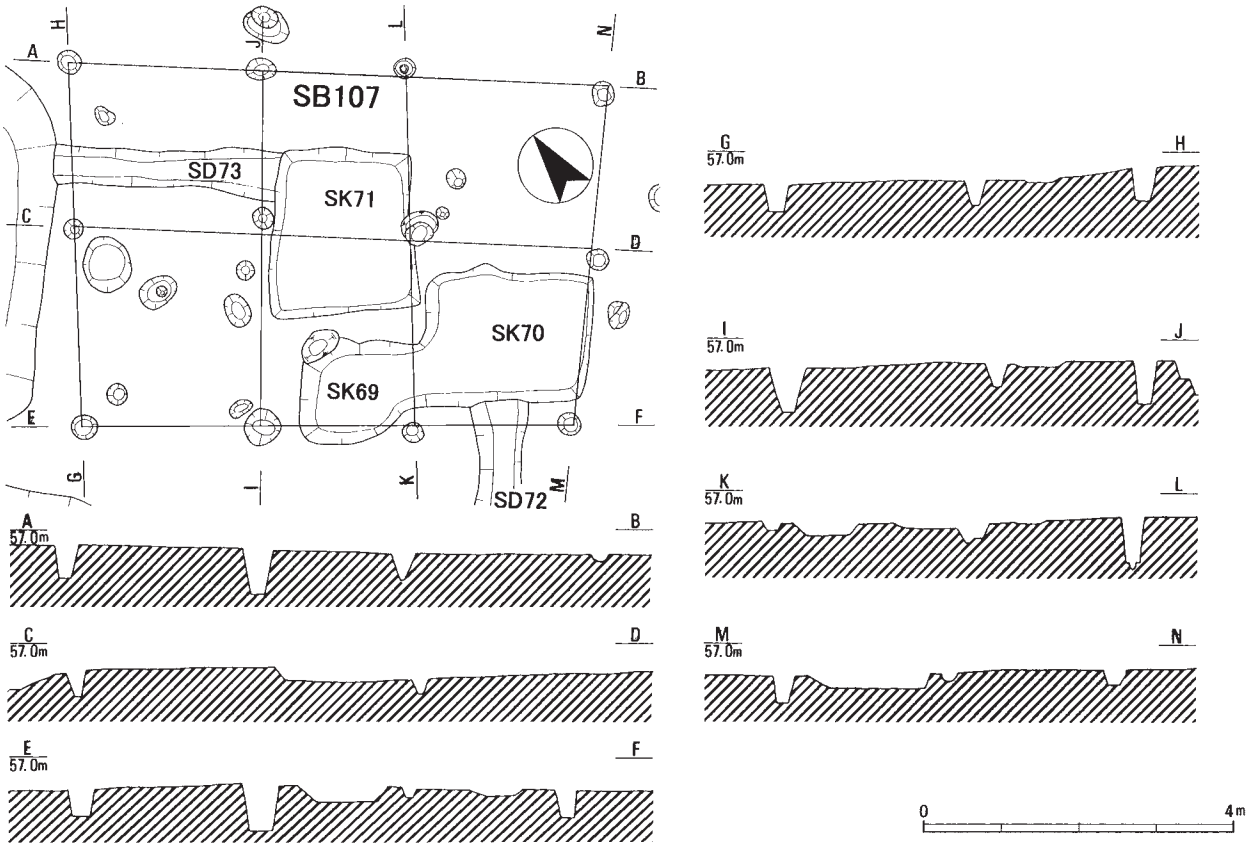
ＳＫ77（第47図）　一辺約６m、深さ約0.3mの隅丸方形の土坑である。重複するＳＢ258は、この土坑埋没後に構築されている。埋土から土師器皿・羽釜、

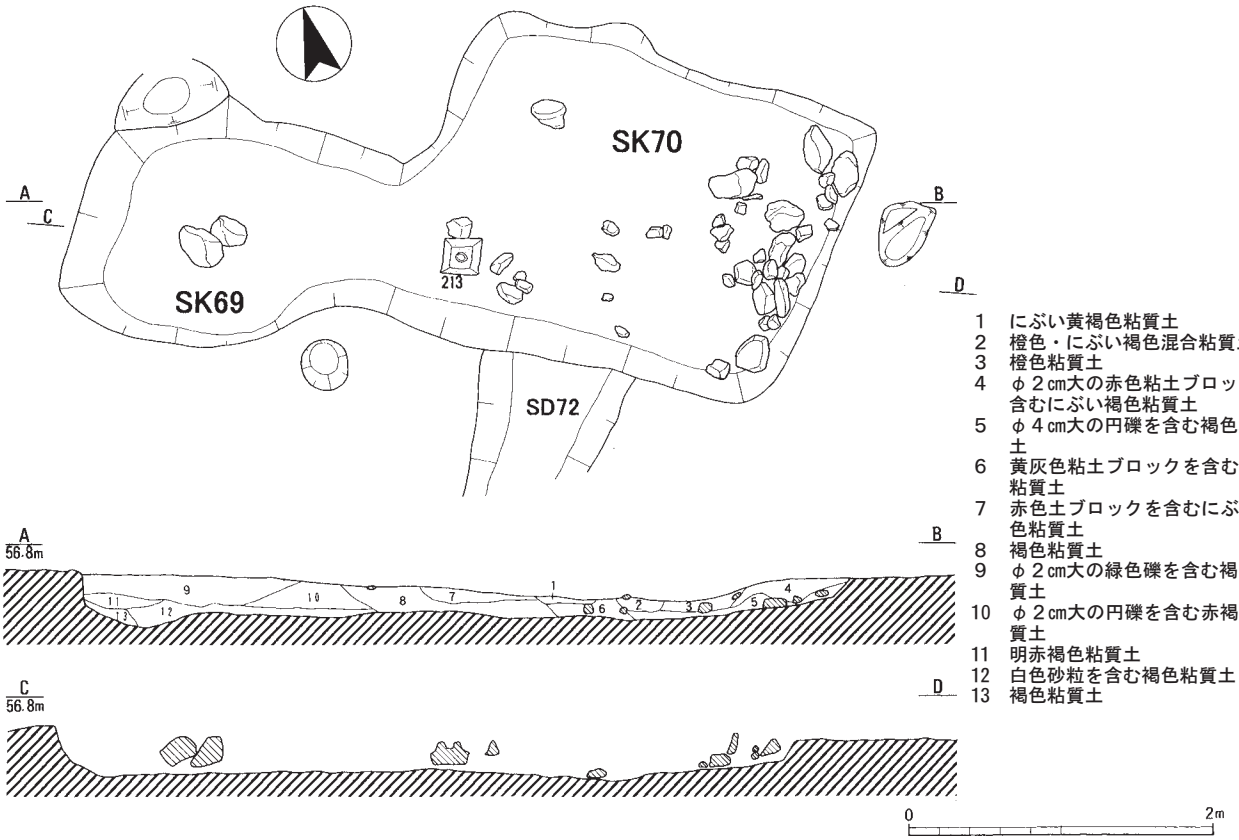


第43図　区画11出土遺物実測図（1：4）

第44図　区画12土層断面図（1：100）

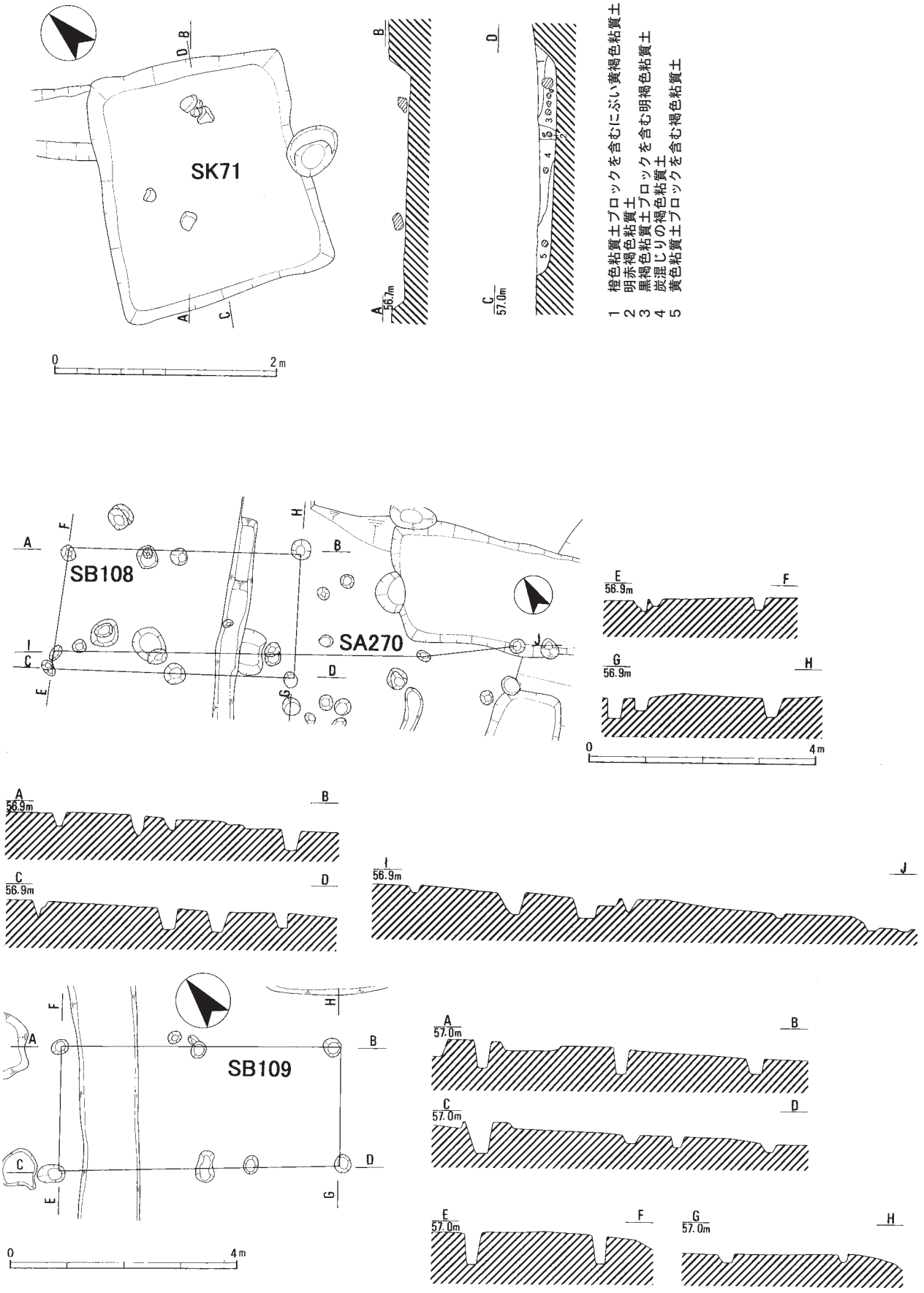






1 にぶい黄褐色粘質土
2 橙色・にぶい褐色混合粘質土
3 橙色粘質土
4 φ２cm大の赤色粘土ブロックを含むにぶい褐色粘質土
5 φ４cm大の円礫を含む褐色粘質土
6 黄灰色粘土ブロックを含む褐色粘質土
7 赤色土ブロックを含むにぶい褐色粘質土
8 褐色粘質土
9 φ２cm大の緑色礫を含む褐色粘質土
10 φ２cm大の円礫を含む赤褐色粘質土
11 明赤褐色粘質土
12 白色砂粒を含む褐色粘質土
13 褐色粘質土

第45図　SB107　実測図（1：100）、SK69・70　遺物出土状況図（1：50）



第46図　SK71（1：50）、SB108・SA270、SB109（1：100）実測図

瀬戸美濃製品の天目茶椀（246）・鉄釉稜皿（大窯第２段階）、常滑製品の甕が出土した。

ＳＫ81・91（第47図）　区画の東端で検出した。ＳＫ81は約３ｍ×約1.7m、深さ約0.15mの不定形の土坑である。掘りあがりの形状からみると長方形と楕円形の２つの土坑かもしれない。埋土から土師器皿が出土した。

ＳＫ91は長軸約1.5m、短軸約0.8m、深さ約0.2mの楕円形の土坑である。埋土から瀬戸美濃製品の天目茶椀（250）が出土した。ＳＫ81は、ＳＫ91の埋没後に掘削されている。

ＳＫ82（第47図）　区画の東端で検出した。長辺約1.2m、短辺約１m、深さ約0.7mの長方形の土坑である。平面では検出することができなかったが、土層観察の結果、柱穴が重複していることを確認した。埋土から鉄釘が出土した。

ＳＫ86（第47図）　区画の南東端で検出した。長軸約2.4m、短軸約2.2m、深さ約0.3mの楕円形の土坑で、埋土から土師器羽釜（247）、瀬戸美濃製品の灰釉端反皿（248）、擂鉢（249）が出土した。

ＳＫ90（第48図）　区画の南東端で検出した。長軸約3.2m、短軸約1.3m、深さ約0.3mの楕円形の土坑。埋土から土師器皿・羽釜が出土した。少量ではあるが、近世の陶器も出土しているので、時代が下る遺構かもしれない。

ＳＫ92（第48図）　区画の南東端近くで検出した。長軸約0.7m、短軸約0.6m、深さ約0.3mの楕円形の土坑である。埋土から常滑製品の片口鉢（251）が出土した。

ＳＫ93（第48図）　区画の東端で検出した。長辺約2.8m、短辺約2.5m、深さ約0.3mの隅丸方形の土坑である。

ＳＫ96（第48図）　区画の南東端で検出した。長軸約２m、短軸約1.3m、深さ約0.25mの楕円形の土坑である。埋土に20㎝程の礫を含んでいた。このほか埋土から土師器羽釜が出土した。

③柵

ＳＡ270（第46図）　長さ8.3m・柱間４間の柵である。柱穴から土師器小片が出土した。ＳＢ108と重複しているが両者の前後関係は不明である。

④溝

ＳＤ80（第34図）　区画のほぼ中央で検出した長さ約10m、幅約１mの溝である。埋土から土師器茶釜（268）、常滑製品の甕が出土した。区画12をほぼ二分する場所に掘削されている点、ＳＲ12をはさんだ向かいの区画15と16の境界と一致することから、区画12をさらに小区分する溝と考えられる。

⑤不明遺構

ＳＺ79・83（第49図、写真図版19）　両者を併せると、長さ約7.5m、幅約1.8m、深さ約0.3mの溝状の遺構となる。道路遺構ＳＲ12とほぼ平行して掘削されている。遺構の北西端に、急激に深くなっていて、埋土中に多くの礫を含んでいる部分がある。また、南東端には礫が並べてある部分もあった。

ＳＺ79の埋土からは土師器皿（296～302）・羽釜、瀬戸美濃製品の天目茶椀（大窯第１段階、第２段階）・擂鉢・徳利・甕・祖母懐壷（いずれも大窯期）・山茶椀（304）、常滑甕、朝鮮製の白磁（305）、石臼（306）、茶臼、鉄釘、炭化物が出土し、ＳＺ83の埋土からは、土師器皿（287）、瀬戸美濃製品の天目茶椀（288）・擂鉢（289）・口広有耳壷（290）、常滑製品の片口鉢（292）・甕（291）、白磁皿（293）が出土した。

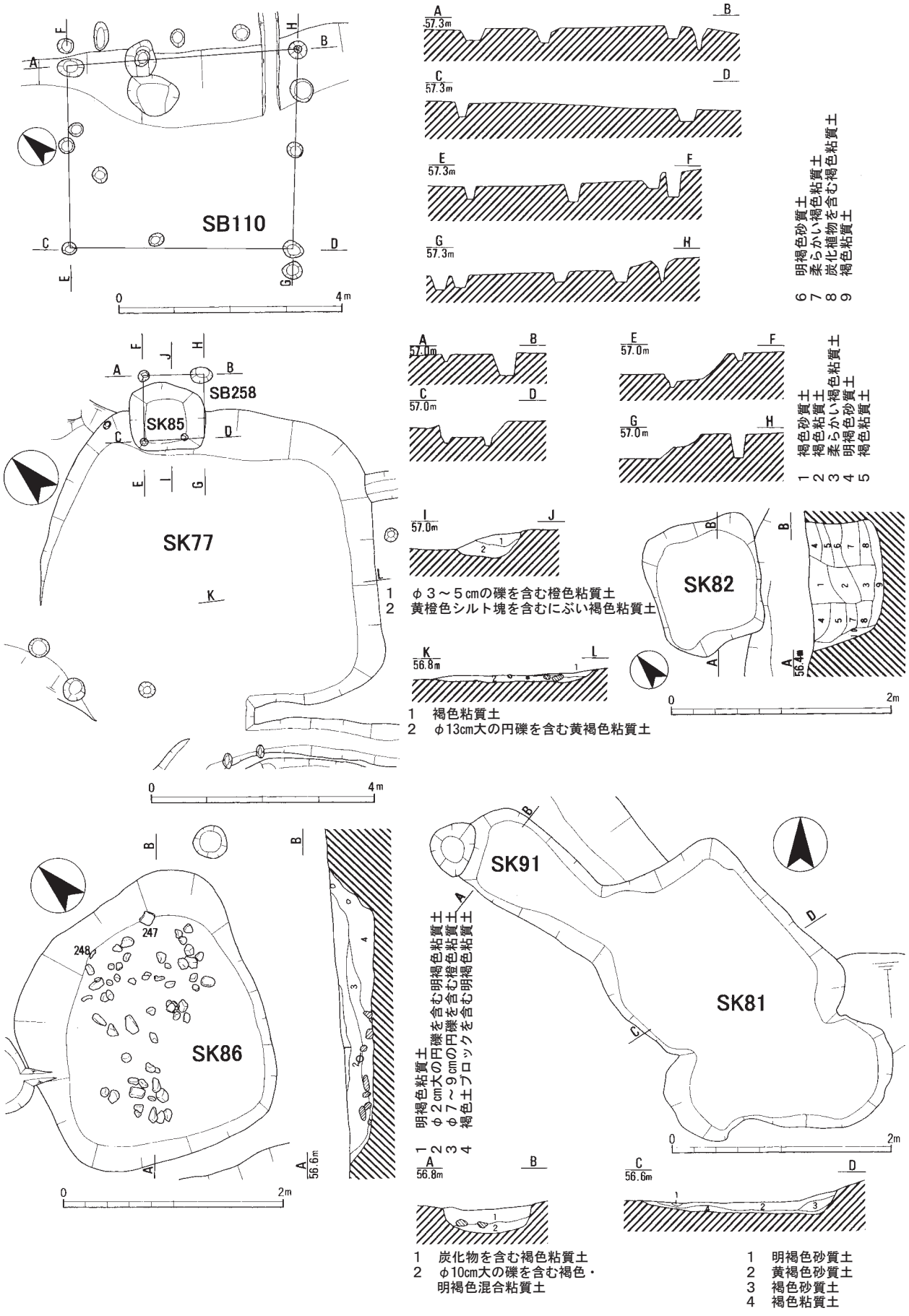
ＳＺ84・97（第49図）　区画の南東端の緩斜面で、段状の切り込みを検出した。ＳＺ84は幅約3.5m、段差約0.6m、ＳＺ97は幅約４m、段差0.2mである。ＳＺ84の埋土から土師器羽釜が出土した。

ＳＺ87（第48図）　区画の南東端近くで検出した。長辺約４m、短辺約２m、深さ約0.2mの長方形の掘り込み。底には約20㎝の礫が置かれていた。このほか埋土から土師器皿（294）、瀬戸美濃製品の天目茶椀（295）が出土した。

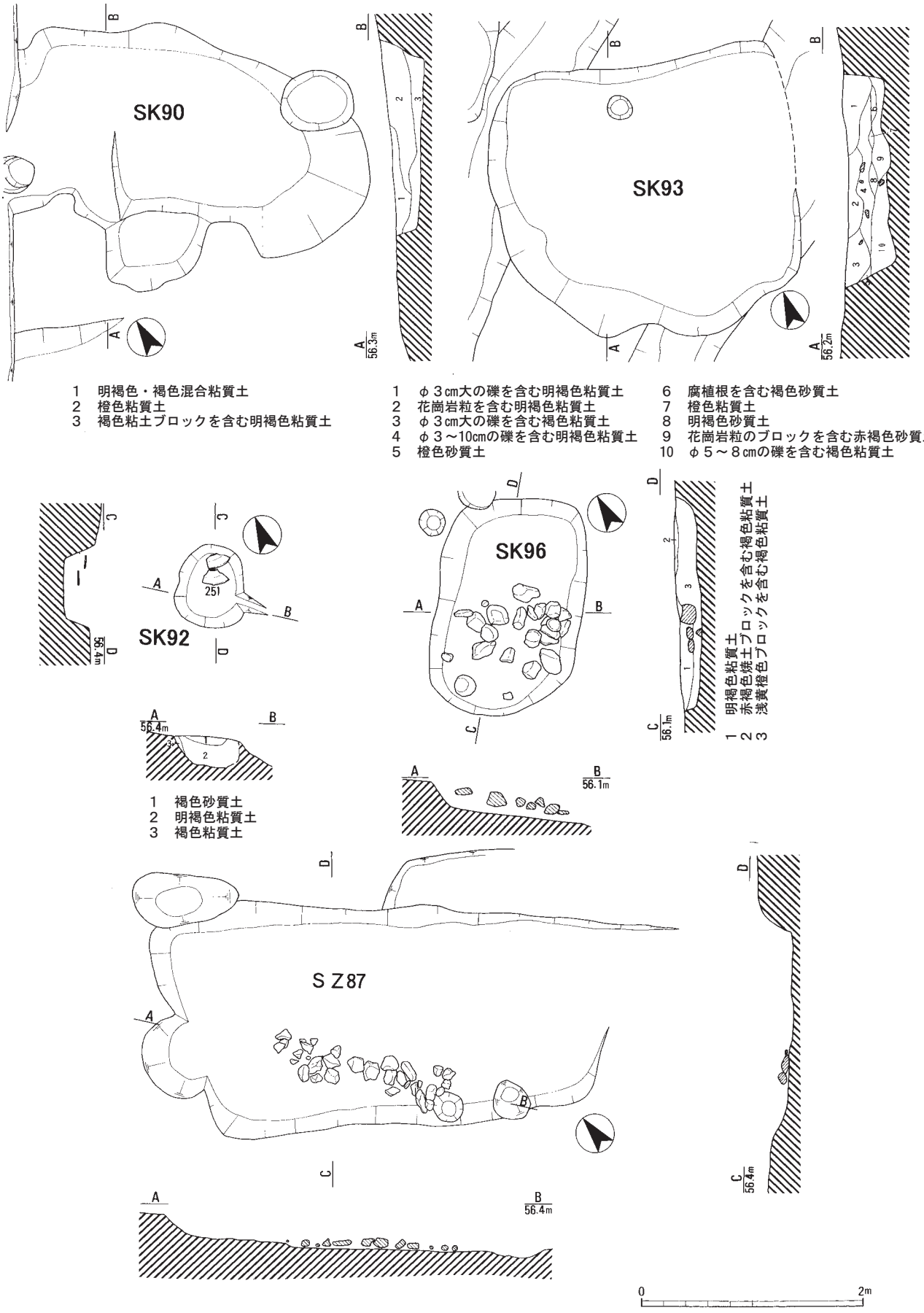
（２）区画12北西部の遺構

①掘立柱建物　掘立柱建物には、区画の主屋と考えられるもの（ＳＢ150、151）、総柱のもの（ＳＢ149、154）、小規模な側柱の建物、１間×１間あるいは２間×１間で、内部に方形の土坑を持つものがある。

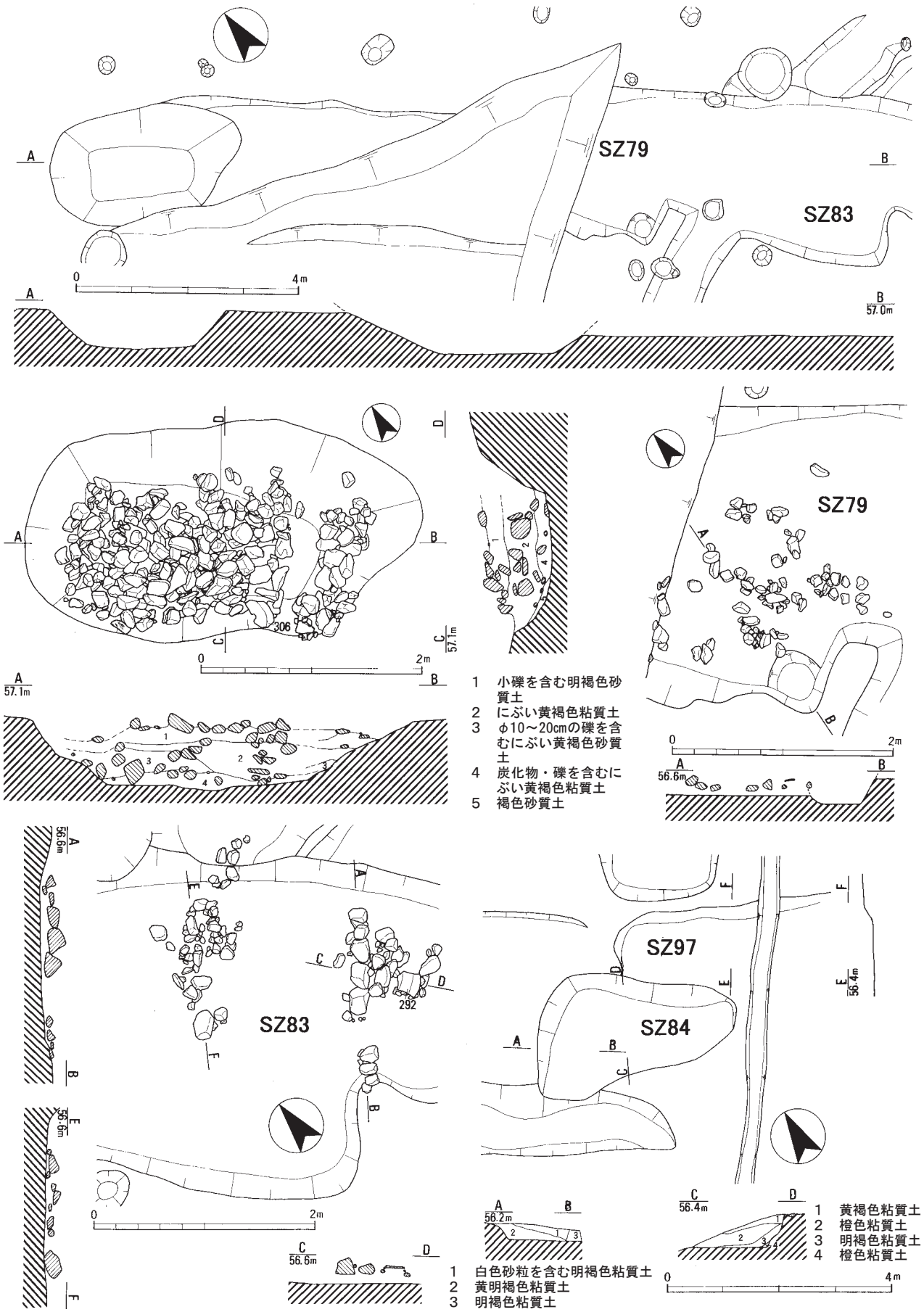
ＳＢ150（第50図、写真図版15）　区画のほぼ中央で検出した。桁行５間×梁行２間の建物で、建物内土坑を持つ（ＳＫ128･132）。柱穴は直径約0.4m、深さ約0.8mで、ほかの建物と比べると大形で柱間も広



第47図　SB110、SB258・SK77（1：100）、SK82、86、81・91（1：50）実測図



第48図　SK90、92、93、96、SZ87実測図（1:50）



第49図　SZ79・83、SZ84・97実測図（1：50、1：100）

い。建物東西の各１間分の庇は土間かもしれない。区画２内では最大の建物である。柱穴から土師器羽釜、常滑製品の片口鉢（226）が出土した。

建物内土坑ＳＫ128（第51図、写真図版16）は、６ｍ×５ｍ、深さ0.45ｍの凸形の土坑である。埋土から土師器皿（218・219）・羽釜（220～222）、瀬戸美濃製品の天目茶椀（223）、常滑製品の片口鉢・甕、染付（224・225）が出土した。

ＳＢ151（第50図、写真図版15）　区画のほぼ中央で検出した。桁行４間×梁行２間の建物で、ＳＢ150に匹敵する規模を持つ。南東側の２間分の柱穴がＳＢ150の建物内土坑によって壊されているので、ＳＢ150よりも古い遺構であろう。ＳＢ148、149とも重複しているが前後関係は不明である。柱穴から土師器、瀬戸美濃製品の天目茶椀（228）、擂鉢（227）、山茶椀（229）、常滑製品の甕が出土した。

ＳＢ149（第51図）　区画のほぼ中央で検出した。桁行２間×梁行２間の総柱の建物である。柱穴から土師器、瀬戸美濃製品の陶器が出土した。ＳＢ150、151と重複しているが前後関係は不明である。

ＳＢ154（第52図）　北東斜面の際で検出した。桁行２間×梁行２間の総柱の建物である。

ＳＢ155と重複しているが両者の前後関係は不明である。

ＳＢ141（第52図）　区画の北端近くで検出した。桁行１間×梁行１間の小規模な建物である。

ＳＢ142（第52図）　区画の北西よりで検出した。桁行２間×梁行２間の建物である。

ＳＢ143・144（第53図）　区画のほぼ中央で検出した。ＳＢ143は、桁行２間×梁行２間の建物である。柱穴から瀬戸美濃製品の擂鉢、常滑製品の陶器が出土した。ＳＢ144は、桁行２間×梁行１間の建物である。両者は重複しているがその前後関係は不明である。

ＳＢ145（第52図）　区画のほぼ中央で検出した。桁行３間×梁行２間の建物である。

西桁行の柱筋が、主屋ＳＢ150身舎の西梁行の柱筋と一致することから、ＳＢ150と同時に存在していたと思われる。

ＳＢ155（第52図）　北東斜面の際で検出した。桁行２間×梁行２間の建物である。

ＳＢ154と重複しているが、両者の前後関係は不明である。

ＳＢ146（第53図）　区画のほぼ中央で検出した。内部に長辺約2.7ｍ、短辺約1.9ｍ、深さ0.1ｍの長方形の土坑（ＳＫ219）を持つ１間×１間の建物である。ＳＫ219はＳＢ146の東側の柱筋から0.6ｍ程出ているが、他の建物の形状からみて一連のものと考えた。埋土は赤褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。柱穴の前後関係からＳＢ146は、ＳＢ147廃絶後のものであると思われる。

ＳＢ147（第53図）　区画のほぼ中央で検出した。内部に長辺約2.2ｍ、短辺1.5ｍ以上、深さ0.1ｍの方形の土坑（ＳＫ220）を持つ１間×１間の建物である。柱穴から土師器、瀬戸美濃製品の天目茶椀（216）が出土した。ＳＫ220の埋土は褐色粘質土で、建物の南側による。遺物は出土しなかった。

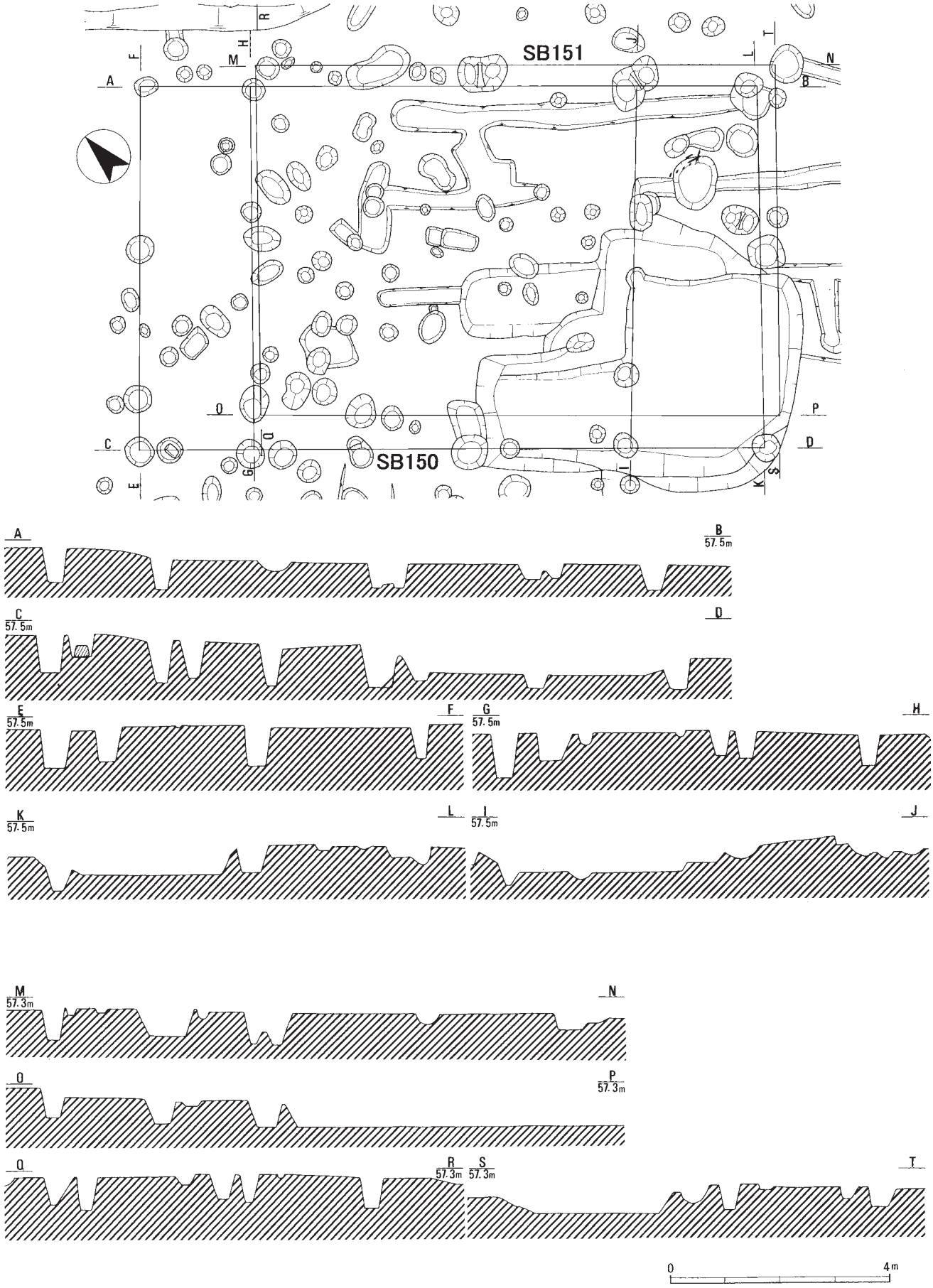
ＳＢ148（第53図）　区画のほぼ中央で検出した。内部に一辺約2.2ｍ、深さ0.1ｍの方形の土坑（ＳＫ222）を持つ１間×１間の建物である。ＳＢ150、151と重複しているが三者の前後関係は不明である。柱穴から瀬戸美濃製品の天目茶椀（217）、祖母懐壷（古瀬戸後期）が出土している。

ＳＢ152（第54図、写真図版17）　北東斜面の近くで検出した。内部に長辺約2.5ｍ、短辺約1.9ｍ、深さ0.6ｍの凸形の土坑（ＳＫ135）を持つ３間×３間の建物である。柱穴から土師器片が出土した。ＳＫ135は建物の東隅に掘削されており、底には拳大の扁平な石や常滑製品の破片などが敷かれている。埋土から土師器皿（230・231）・羽釜、瀬戸美濃製品の鉄釉鉢（235）・擂鉢（232・233）、祖母懐壷（大窯期）、山茶椀（234）、常滑製品の片口鉢（236）、甕（237～239）、瓦、硯（240）が出土した。ＳＢ149と重複しているが両者の前後関係は不明である。

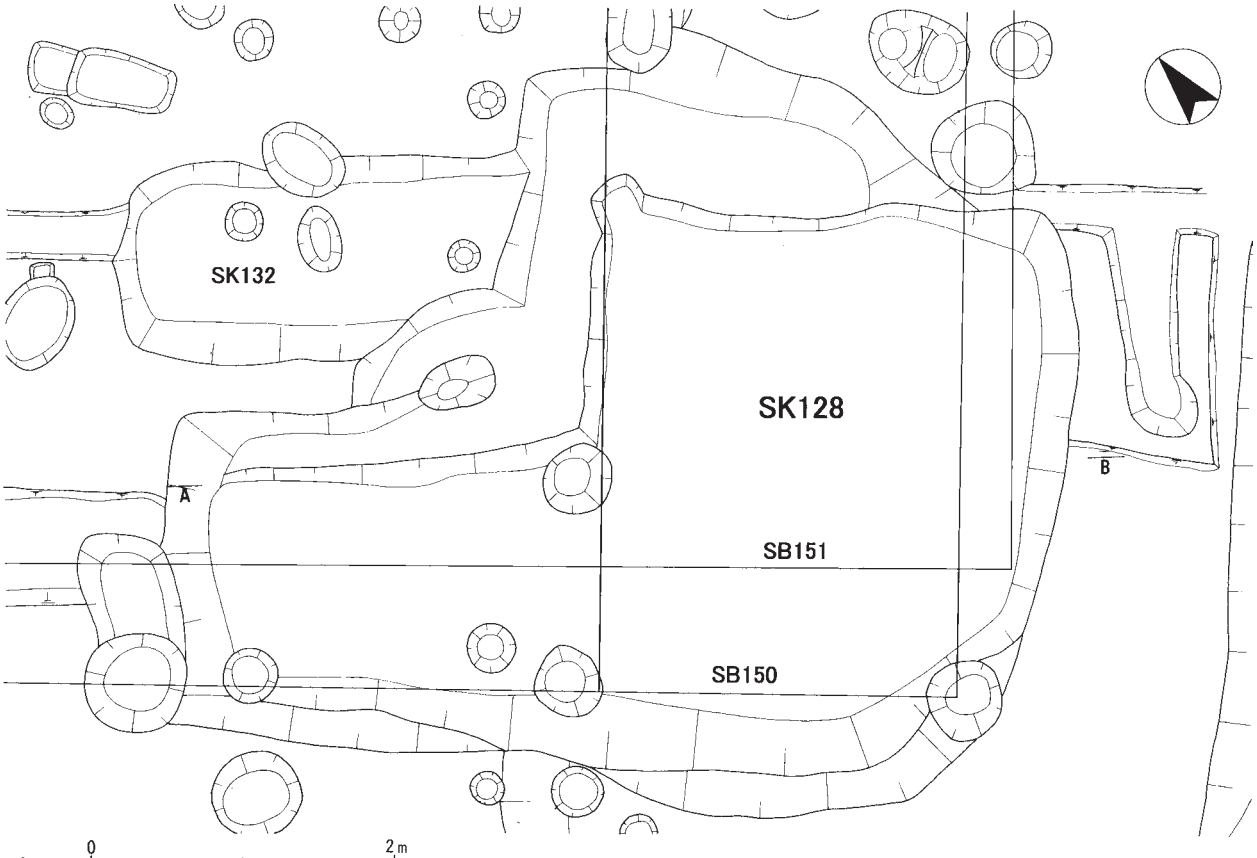
ＳＢ153（第53図）　北東斜面の際で検出した。撹乱により壊されているが、内部に一辺約２ｍ、深さ0.2ｍの方形の土坑（ＳＫ221）を持つ１間×１間の建物と考えられる。ＳＫ221の埋土は暗褐色土で、遺物は出土しなかった。

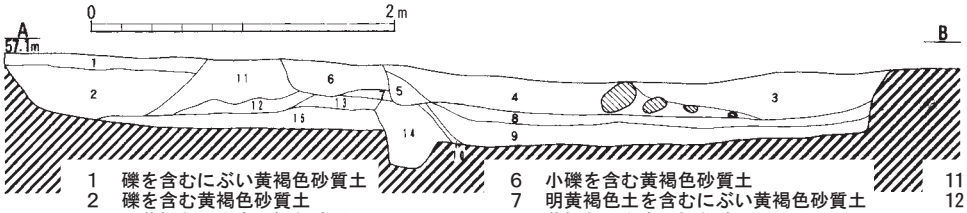
②土坑

ＳＫ129（第54図）　直径約１ｍの円形の土坑。底に灰色粘質土がつめられていた。

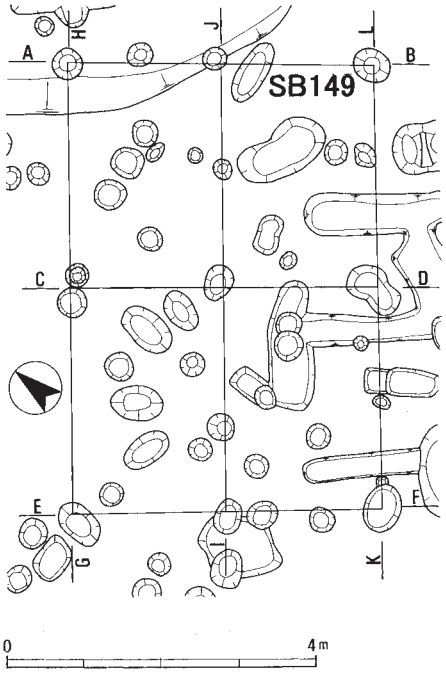


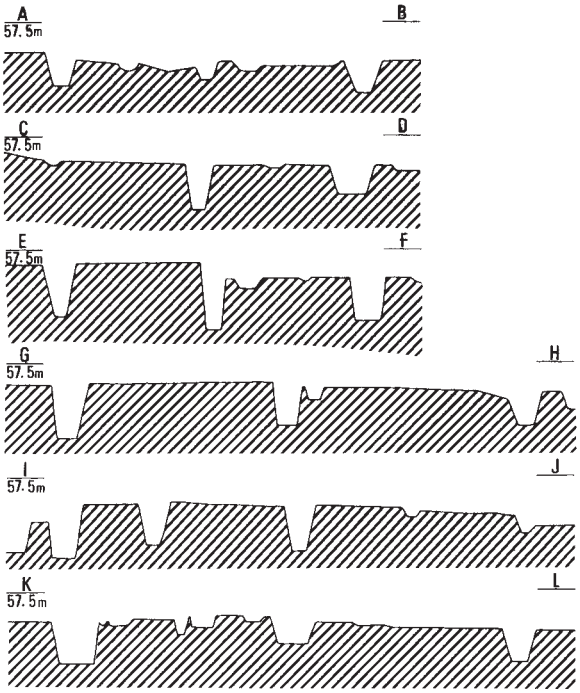
第50図　SB150・151　実測図（1：100）



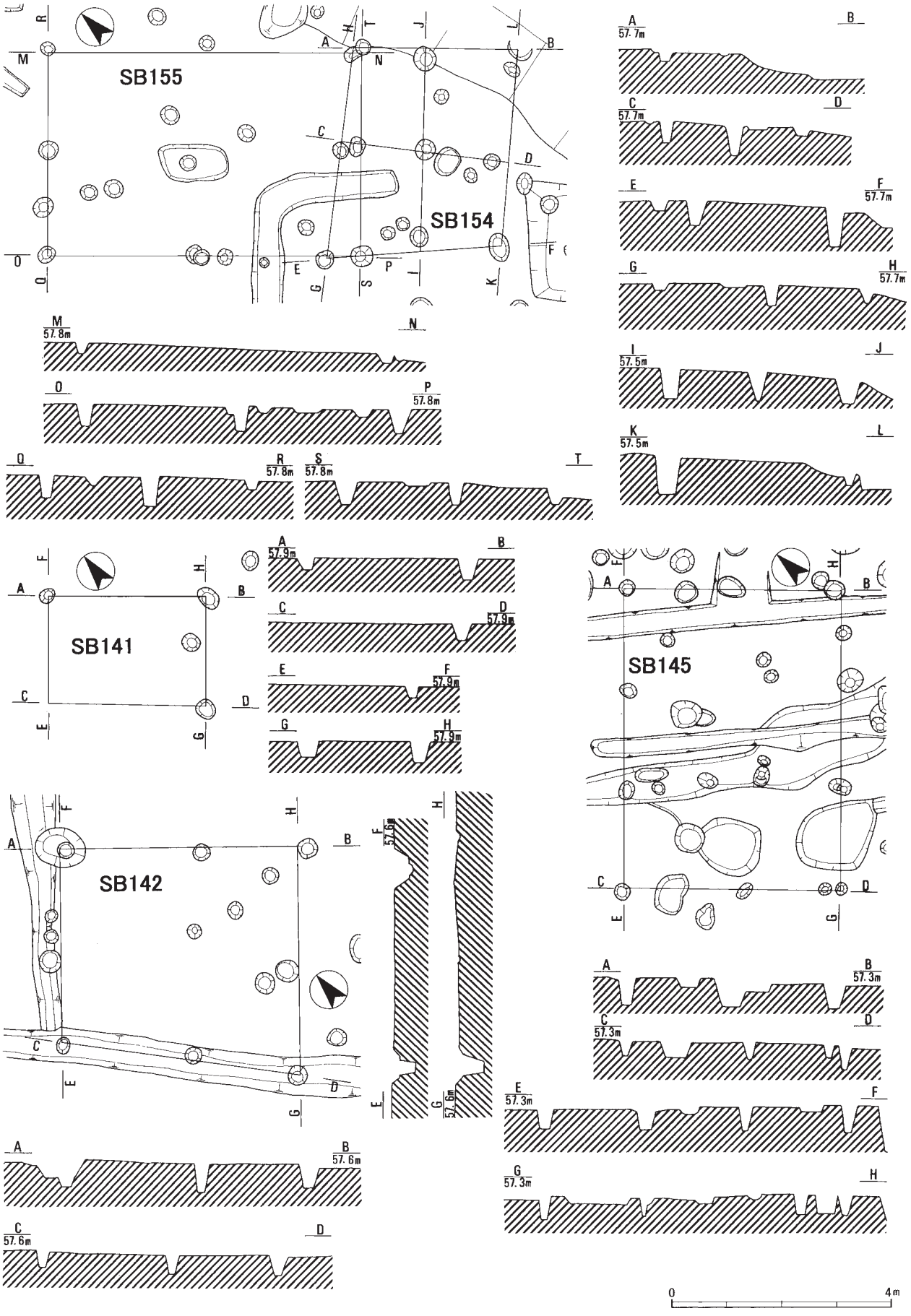


1 礫を含むにぶい黄褐色砂質土
2 礫を含む黄褐色砂質土
3 明黄褐色土を含む褐色砂質土
4 大礫を含む暗褐色砂質土
5 にぶい黄褐色砂質土
6 小礫を含む黄褐色砂質土
7 明黄褐色土を含むにぶい黄褐色砂質土
8 黄褐色土を含む褐色砂質土
9 褐色粘質土
10 にぶい黄褐色粘質土
11 小礫を含む褐色砂質土
12 褐色砂質土
13 黄褐色粘質土
14 礫を含む黄褐色砂質土
15 褐色砂質土

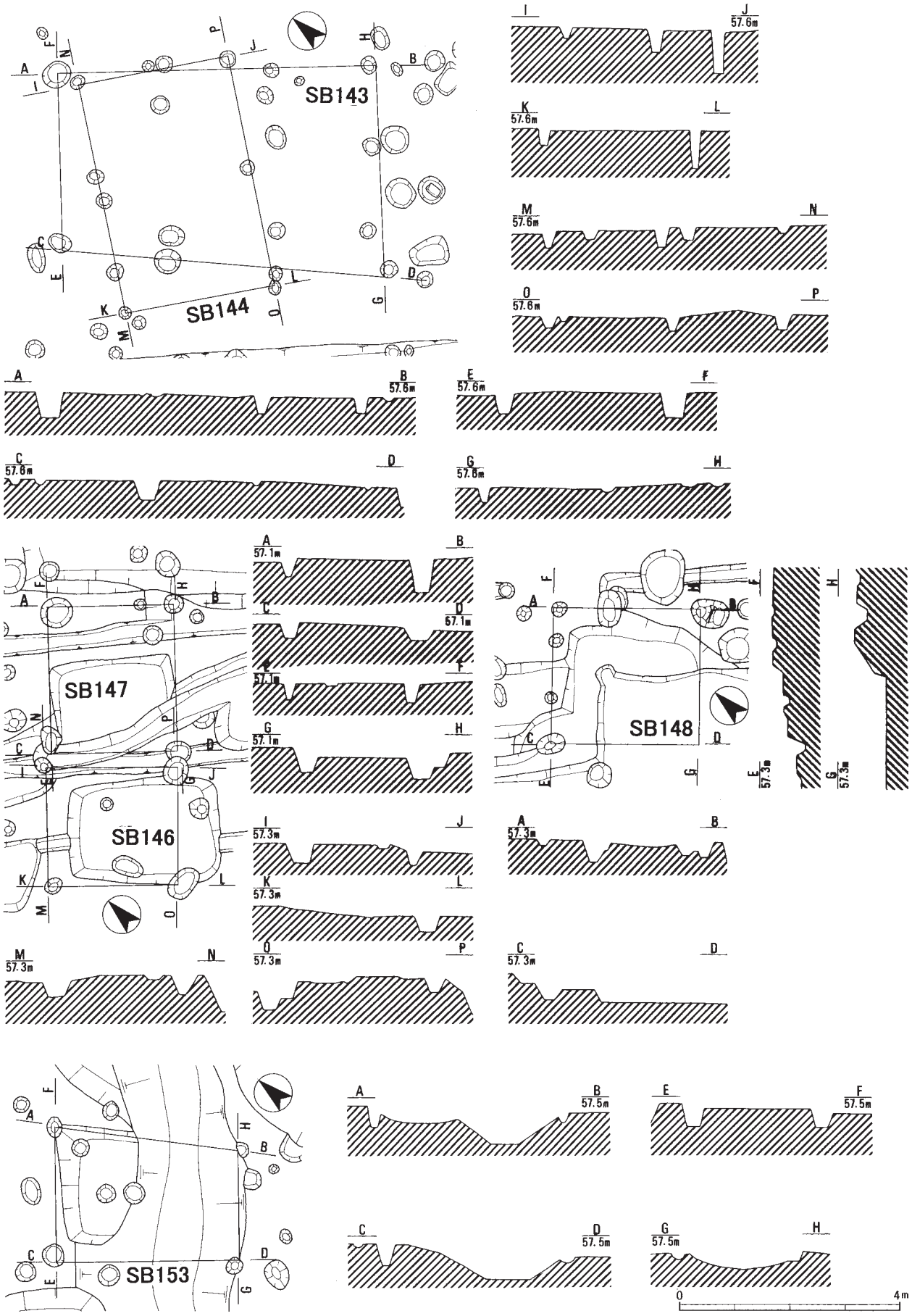




第51図　SK128（1：50）、SB149（1：100）実測図



第52図　SB141、142、145、154・155　実測図（1：100）



第53図　SB143・144、146・147、148、153　実測図（1：100）

ＳＫ136（第54図、写真図版18）　区画の北西、土塁ＳＡ156の裾で検出した。長辺約2.5m、短辺約2.2m、深さ約0.75mの方形の土坑である。埋土に20～30㎝の礫を多く含む。土塁ＳＡ156の内側側溝であるＳＤ138が連結している。埋土から土師器皿（252～255）・羽釜（256）、瀬戸美濃製品の天目茶椀（257～259）、擂鉢（260・261）、常滑製品の片口鉢（263）・甕（262）・壷（12型式）、鬼瓦（264）、五輪塔の地輪（265）が出土した。

ＳＫ137（第54図、写真図版18）　長辺約2.2m、短辺約1.6m、深さ約0.3mの方形の土坑である。北側に0.4m×0.4m程の張出し部があり、その部分の底には小礫が詰められていた。埋土にも多くの礫を含む。埋土から土師器皿・羽釜、瀬戸美濃製品の擂鉢（266）・花瓶（267）が出土した。

③井戸　１基を検出した。区画10～17では唯一の井戸である。

ＳＥ157（第55図、写真図版16）　北東斜面の際で検出した。直径約２mの素掘りの井戸である。検出面下約6.7mより上は埋没していない。深さ約12mまでは掘削したが、崩落の恐れがあったので、それ以下の掘削は断念した。埋土から近世の陶器が出土した。底までの掘削を行っていないので正確な時期は明らかでないが、規模などから屋敷地に伴うものである可能性が高い。中世の遺物としては瀬戸美濃製品の擂鉢（241・242）、花瓶（243）、祖母懐壷（古瀬戸後期）常滑製品の甕（245）が出土している。

④土塁

ＳＡ156（第56図）　区画12の北西端、区画13との間の長さ15m以上、基底部幅約２mの土塁である。現状では区画12との段差は約0.5mある。盛土が削平されているため、高さは不明であるが、土塁側溝であるＳＤ138の埋土の状況からみて、それほど高い盛土はなかったと思われる。

⑤通路

ＳＲ120（第34図、写真図版19）　区画12の北東斜面の途中にある長さ約45m、幅約0.6mのテラス状の通路である。区画11の北隅から、区画12の裾を取り巻くように伸びている。北端近くには1.5m程の張出し部がある。埋土から土師器皿（270～272）・中北勢系の内耳鍋（273）・羽釜（274～277）・茶釜（278・279）、瀬戸美濃製品の天目茶椀（古瀬戸後Ⅳ期新段階）・鉄釉丸皿（285）・擂鉢（古瀬戸後Ⅳ期新段階～大窯第１段階）・徳利（大窯期）、筒形容器（283）・口広有耳壷（284）、常滑製品の片口鉢（285）・甕（286）、青磁椀（282）、瓦、五輪塔の火輪、貝殻が出土した。

⑥石垣

ＳＡ134（第56図）は、ＳＲ120の張出し部南面に設けられた石垣である。地山を削り出した上に40×30㎝の割石や自然石を横位に並べ、掘形には拳大の栗石を入れている。下半部には石積はない。石垣の掘形から土師器皿（269）が出土している。

（２）遺物（第57～62図、写真図版35～39）

①ＳＢ107関連遺物（213・214）

213・214は建物内土坑ＳＫ70から出土した遺物である。213は花崗岩製の五輪塔の火輪である。全高が低く、軒先は急激に反りあがる。214は染付の小片である。

②ＳＢ110関連遺物（215）

215は柱穴から出土した常滑製品の甕である。器壁が厚く、口縁部内側が大きく引き出されている。12型式でも新しい段階のものと思われる。

③ＳＢ147関連遺物（216）

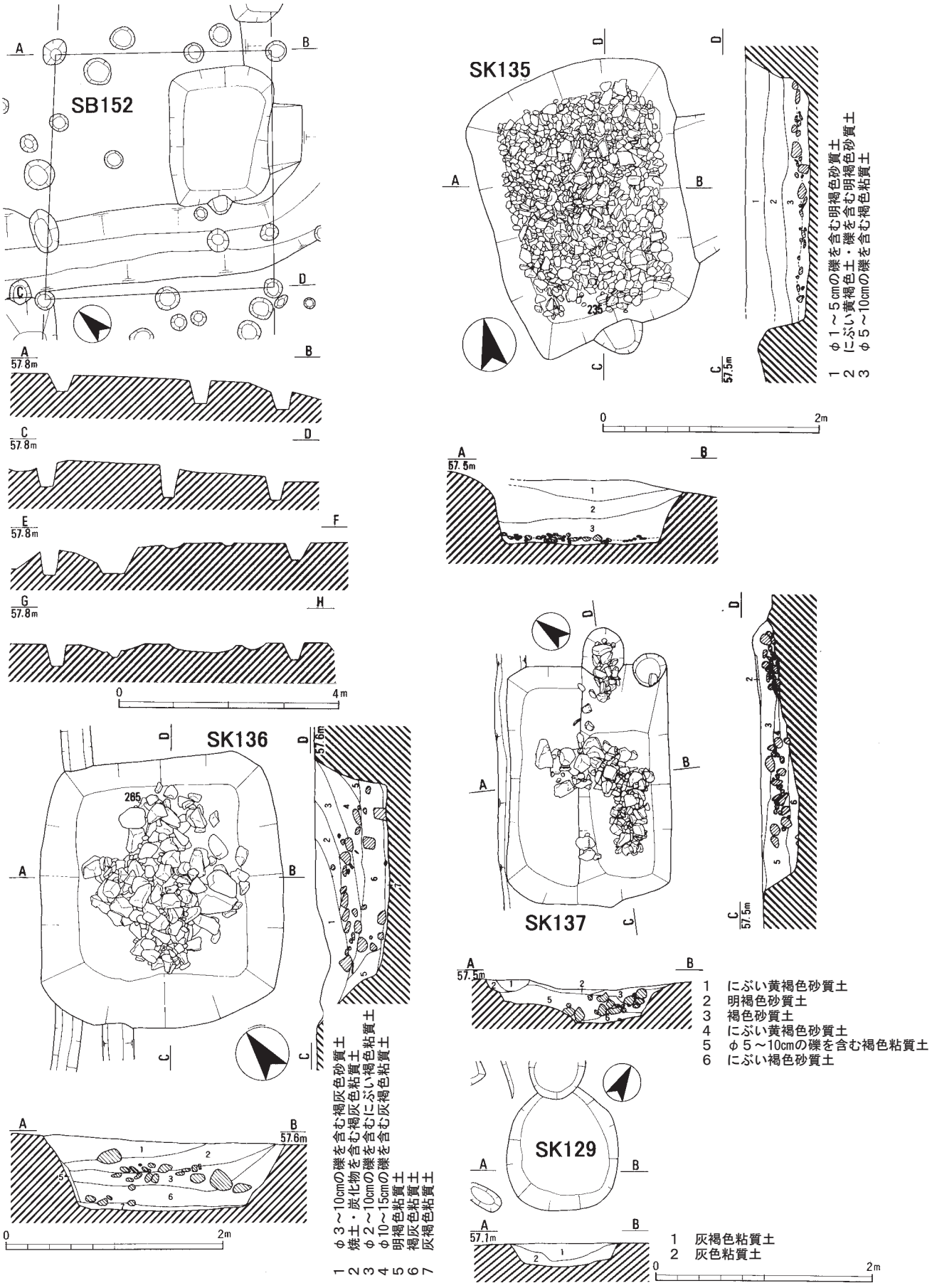
216は柱穴から出土した瀬戸美濃製品の天目茶椀である。小片であるが古瀬戸後Ⅳ期新段階のものかと思われる。

④ＳＢ148関連遺物（217）

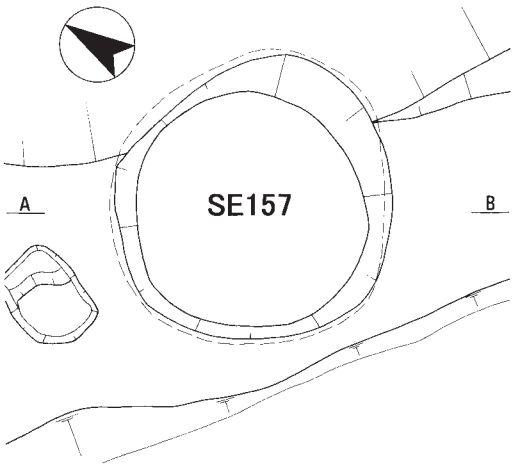
217は柱穴から出土した瀬戸美濃製品の天目茶椀である。二次的な焼成を受けている。大窯第１段階のものである。

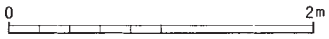
⑤ＳＢ150関連遺物（218～226）

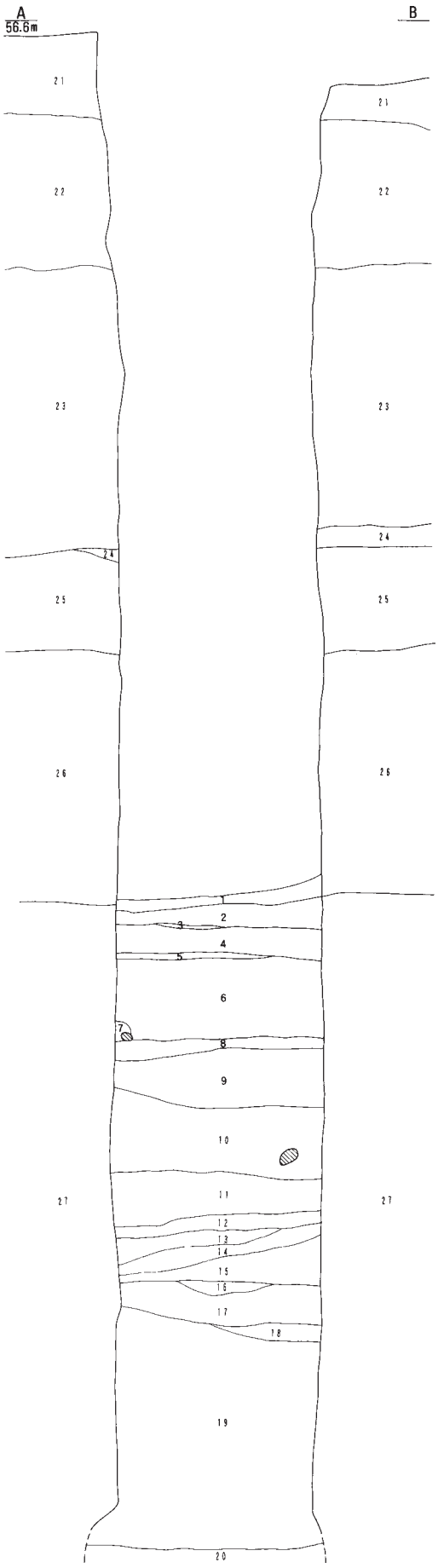
218～225は建物内土坑ＳＫ128、226は柱穴出土の遺物である。218・219は土師器の皿。218は器壁が薄く、直線的にたちあがり、口縁端部にヨコナデが施される。219は器壁が薄く、ゆるやかにたちあがり、口縁端部は尖るようにおわる。220～222は中北勢系の羽釜。220の口縁部は直立気味で、口縁端部は外側につまみ出され、上端に面を持つ。面はわずかに凹線状になっている。鍔部直上に焼成前穿孔がある。Ⅱ段階にあたると思われる。221・222の口縁部はやや内傾し、口縁端部は斜め上方につまみ上げられ内



第54図　SB152（1：100）、SK129、135、136、137（1：50）実測図







1	φ３～５cmの礫を含むにぶい黄褐色砂質土	（SE157埋土）
2	黒褐色粘質土	（〃）
3	にぶい褐色砂質土	（〃）
4	暗褐色粘質土	（〃）
5	黄褐色砂質土	（〃）
6	φ５cm～10cmの礫を含む暗褐色砂質土	（〃）
7	暗褐色土を含むにぶい黄色砂質土	（〃）
8	φ0.5～１cmの礫を含むにぶい黄色砂質土	（〃）
9	φ５～10cmの礫を含む褐色砂質土	（〃）
10	φ10～20cmの礫を含む黄褐色砂質土	（〃）
11	φ10～20cmの礫を含むオリーブ褐色砂質土	（〃）
12	オリーブ褐色粘質土	（〃）
13	暗灰褐色粘質土	（〃）
14	φ５～10cmの礫を含む暗灰黄色粘質土	（〃）
15	礫を含むにぶい黄褐色粘質土	（〃）
16	φ10～15cmの礫を含むにぶい黄褐色砂質土	（〃）
17	φ５～10cmの礫を含む灰黄褐色粘質土	（〃）
18	礫を含む明黄褐色砂質土	（〃）
19	φ５～10cmの礫を含むにぶい黄褐色砂質土	（〃）
20	礫を含むオリーブ褐色砂質土	（〃）
21	φ0.5～１cmの礫を含む明褐色砂質土	（地山）
22	φ５～10cmの礫を含む明黄褐色砂質土	（〃）
23	φ10cm大の礫を含む明黄褐色砂質土	（〃）
24	明褐色砂質土	（〃）
25	φ１～５cmの礫を含む明黄褐色砂質土	（〃）
26	φ１～５cmの礫を含むにぶい黄橙色砂質土	（〃）
27	にぶい黄色砂質土	（〃）

第55図　SE157　実測図　（1：50）

端にわずかに面をもっている。残存部には穿孔はない。Ⅱｂ段階のものと思われる。

223は瀬戸美濃製品の天目茶椀。大窯第２段階後半のものである。224・225は染付。いずれも小片であるが224は端反皿、225は小椀であると思われる。226は常滑製品の片口鉢。口縁部が内面に引き出されるとともに、口縁端部の面にくぼみがある。10型式のものと思われる。

⑥ＳＢ151関連遺物（227～229）

すべて柱穴から出土した遺物である。227は瀬戸美濃製品の擂鉢。古瀬戸後Ⅳ期新段階のものである。228は天目茶椀。大窯第２段階のものである。229は山茶椀。第12型式のものである。

⑦ＳＢ152関連遺物（230～240）

すべて建物内土坑ＳＫ135から出土した遺物である。230・231は土師器の皿。230は器壁が厚くゆるやかにたちあがり、口縁端部はとがるようにおわる。粗雑な胎土を用いて作られている。231はやや深めで器壁が薄く、直線的にたちあがる。口縁端部にはヨコナデが施される。232・233は瀬戸美濃製品の擂鉢。232は大窯第１段階、233は大窯第２段階前半のものである。235は鉢。大窯第１～３段階のものと思われる。234は第12型式の山茶椀である。236は常滑製品の片口鉢。約10m離れた斜面（Lx19・Ly19）包含層出土の破片と接合した。口縁部の内側が引き出されており、口縁端部の面がくぼむ。10型式のものと思われる。237～239は常滑製品の甕。237・238は口縁部の内側が角張っており11型式のもの、239は口縁部の内側が丸く、10型式のものと思われる。

240は石製の硯である。墨が付着している。

⑧ＳＥ157出土遺物

井戸は完掘しておらず、遺物はすべて埋土上層からのもので、近世以降のものも多く含まれている。瀬戸美濃製品（241～243）、常滑製品（245）などが出土している。241・242は擂鉢。241は古瀬戸後Ⅳ期新段階～大窯第１段階のもの、242は大窯第３段階後半のものである。243は花瓶。古瀬戸後Ⅳ期新段階のものである。244は美濃製品の徳利。18世紀後半のものと思われる。245は甕。口縁部の内側が角張っており、11型式のものと思われる。

⑨ＳＫ77出土遺物（246）

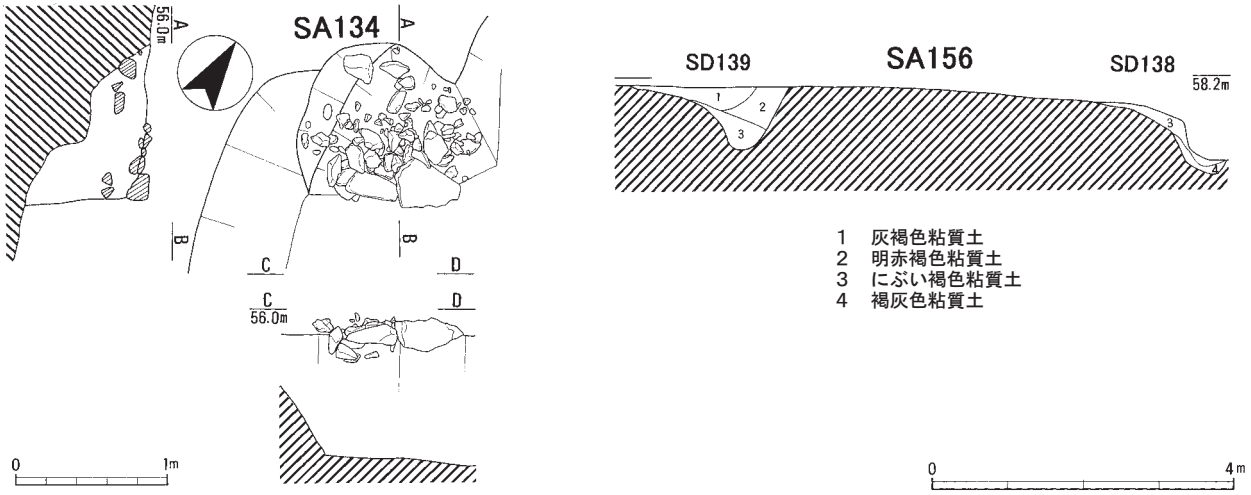
246は瀬戸美濃製品の天目茶椀。大窯第３段階のものである。

⑩ＳＫ86出土遺物（247～249）

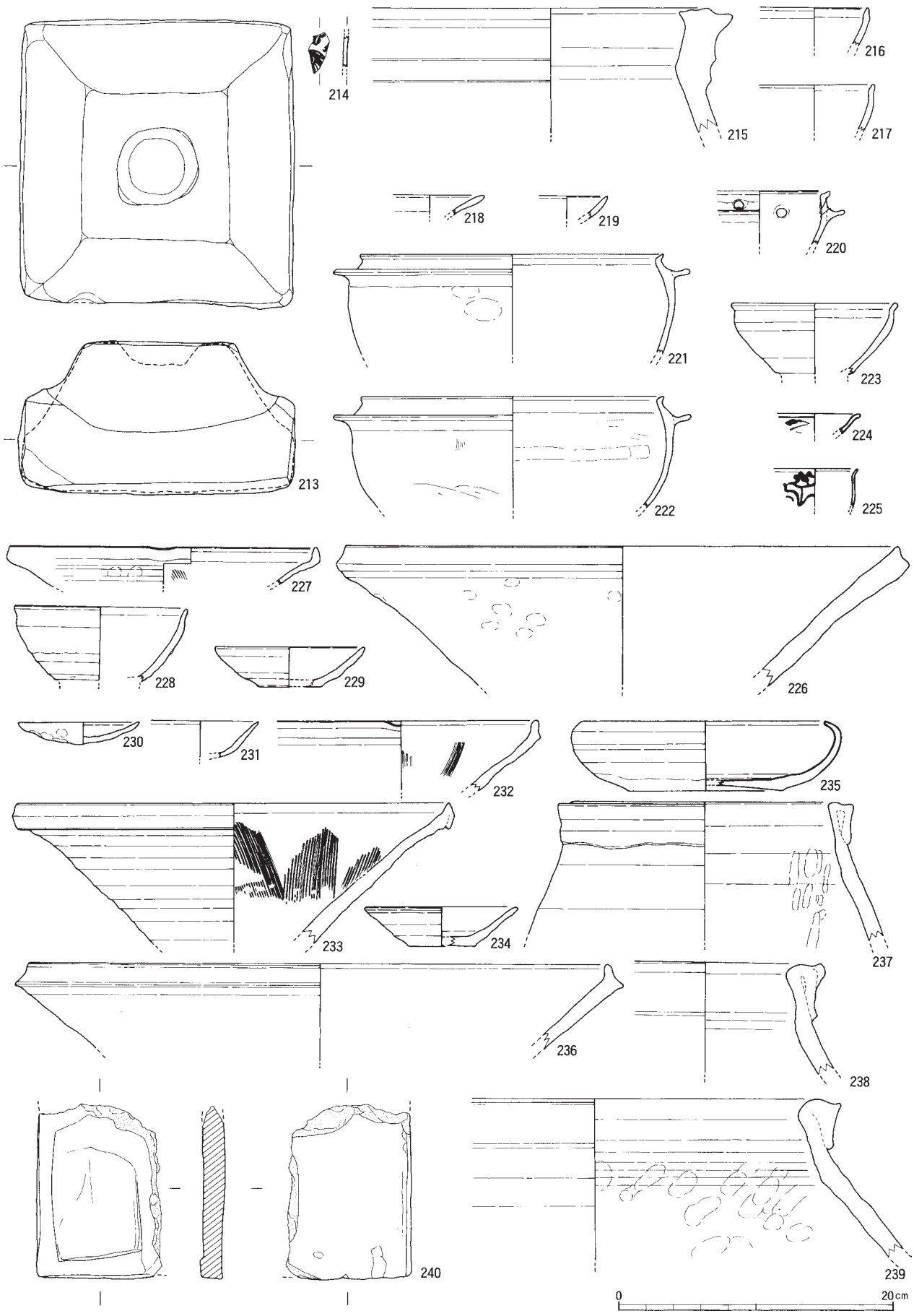
247は中北勢系の土師器羽釜。口縁部がやや内傾し、口縁端部が斜め上方につまみ上げられるが、端部には面を持たない。残存部には穿孔はない。Ⅱ段階にあたると思われる。248は瀬戸美濃製品の灰釉端反皿。底部内面に印花文が施される。大窯第１段階のものである。249は瀬戸美濃製品の擂鉢。大窯第２～３段階のものである。

⑪SK91出土遺物（250）

250は瀬戸美濃製品の天目茶椀。大窯第４段階前半のものである。



第56図　SA134（1:50）、SA156・SD138・139　実測図（1：100）



第57図　区画12　掘立柱建物関係遺物実測図（1：4）

⑫ＳＫ92出土遺物（251）

251は常滑製品の片口鉢である。内面に工具痕跡が残る。

⑬ＳＫ136出土遺物（252～264）

土師器皿（252～255）、中北勢系の羽釜（256）、瀬戸美濃製品（257～261）、常滑製品（262～263）、鬼瓦（264）、五輪塔（265）などがある。

土師器皿には器壁が厚く、丸くたちあがるもの（252・253）と、器壁が薄く、直線的にたちあがり、口縁端部にヨコナデを施すもの（254）、器壁が厚くゆるやかにたちあがり、粗雑な胎土が用いられたもの（255）がある。羽釜（256）の口縁部はやや内傾し、口縁端部が斜め上方につまみ上げられているが、端部には面をもたない。鍔部直上に焼成前穿孔がある。Ⅱ段階のものであると思われる。

瀬戸美濃製品のうち、天目茶椀（257～259）はいずれも大窯第２段階のものである。なかでも257・258は第２段階終末期のものである。258の高台部分は非常に磨耗している。擂鉢（260・261）は、いずれも大窯第２～３段階のものと思われる。

常滑製品のうち、262は甕の底部。263は片口鉢の底部である。

264は鬼瓦の目の部分の破片。265は五輪塔の地輪である。石材には花崗岩が用いられている。全面に細かな工具痕跡が残る。下面が平らになっておらず、下端から３㎝程まで地面に埋まっていた痕跡が残る。

⑭ＳＫ137出土遺物（266・267）

266は瀬戸美濃製品の擂鉢。約15mはなれた同区画斜面（Ly20）包含層出土の破片と接合した。大窯第１段階のものである。267は花瓶の頚部。大窯第１段階のものである。

⑮溝・石垣裏込め出土遺物（268・269）

268はＳＤ80から出土した茶釜の口縁部。269は石垣ＳＡ134の裏込めから出土した皿である。

⑯ＳＲ120出土遺物（270～286）

犬走りの斜面側から多くの遺物が出土した。ただし遺物の時期幅が広く、近世の遺物も含んでいる。土師器皿（270～272）、中北勢系の内耳鍋（273）・羽釜（274～277）・茶釜（278・279）、瀬戸美濃製品（280・281・283・284）、常滑製品（285・286）、青磁（282）などがある。

土師器のうち、皿（270～272）には、やや深手で器壁が薄く、直線的にたちあがり口縁端部にヨコナデが施されるもの（270）、器壁が厚くゆるやかにたちあがるもの（271・272）がある。内耳鍋（273）は体部から口縁部にかけて「逆ハ」字形に開く内耳鍋。口縁端部は斜め上方につまみ上げられ、端部内面に面を持つ。口縁部直下に２個の穿孔をもつ横位の内耳がつく。羽釜（274～277）には、口縁部がやや長く、口縁端部が丸くおわるもの（274）、口縁端部が外側につまみ出され、上端に面をもつもの（275）と、口縁端部が上方につまみ上げられ、内端に面をもつもの（276・277）がある。274・275・276の鍔部直上には焼成前穿孔がある。277の残存部には穿孔はない。茶釜（278・279）のうち、278の口縁端部は外側につまみ出され、上端に面をもつ。肩はあまり張らない。279は肩が張り、口縁端部は丸くおわる。鍔より下のほか、耳の下半部周辺に煤が付着する。

瀬戸美濃製品のうち、280は鉄釉丸皿で大窯第２段階前半のもの、283は鉄釉の筒形容器で口縁部直下に耳がつく、大窯第１段階のものである。284は鉄釉の口広有耳壷で、古瀬戸後Ⅳ期新段階のものである。底部内面に輪ドチの痕が残る。281は菊皿で、登窯３～４小期のものである。

常滑製品のうち、285は片口鉢。286は11型式の甕である。

⑰ＳＺ83出土遺物（287～293）

土師器（287）、瀬戸美濃製品（288～290）、常滑製品（291・292）、白磁（293）がある。

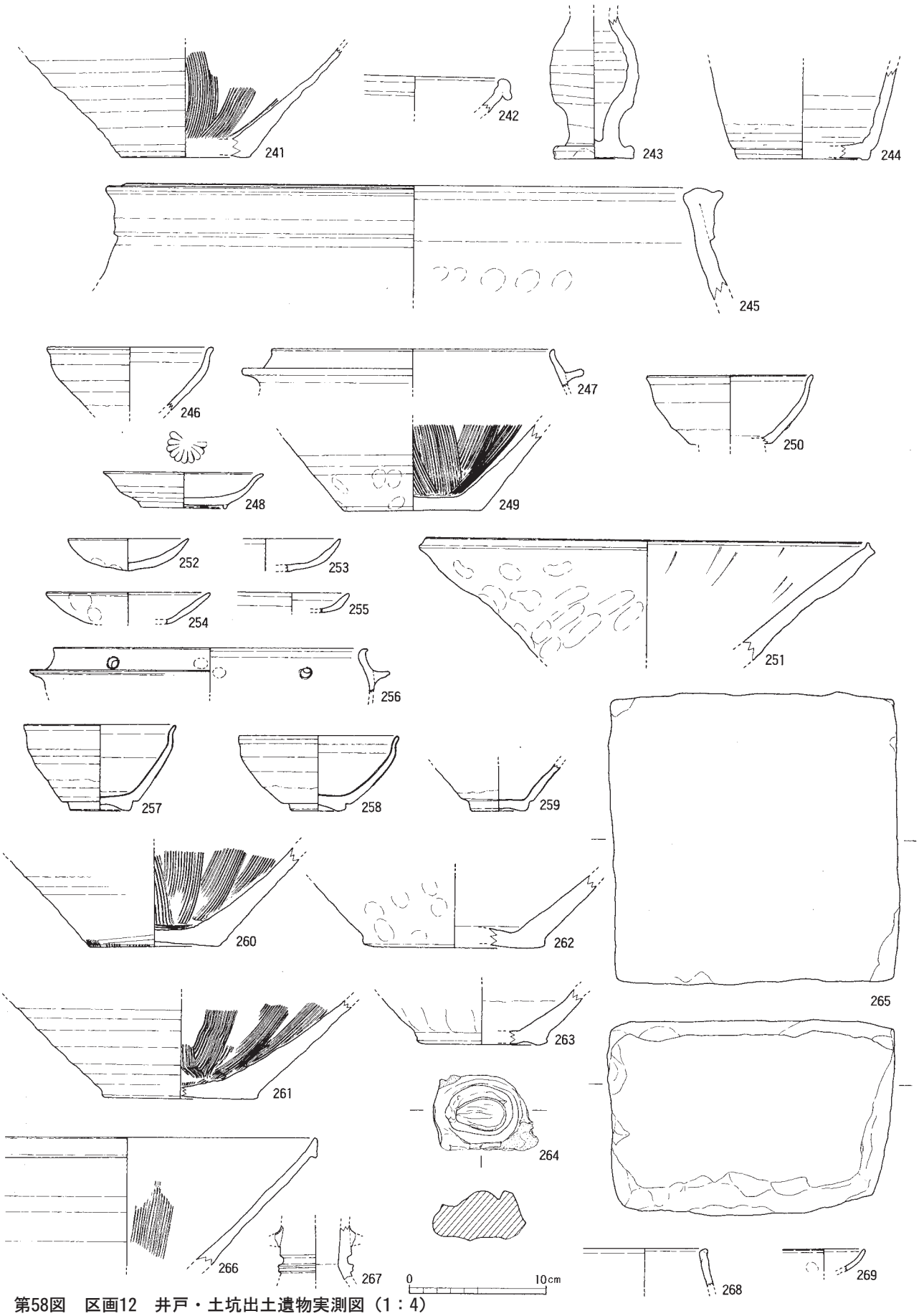
287は土師器の皿。器壁が厚く、直線的にたちあがる。粗雑な胎土が用いられ、焼成も悪い。

瀬戸美濃製品のうち、228は古瀬戸後Ⅳ期新段階の天目茶椀。289は大窯第１段階前半の擂鉢。290は口広有耳壷の底部。古瀬戸後Ⅳ期のものである。

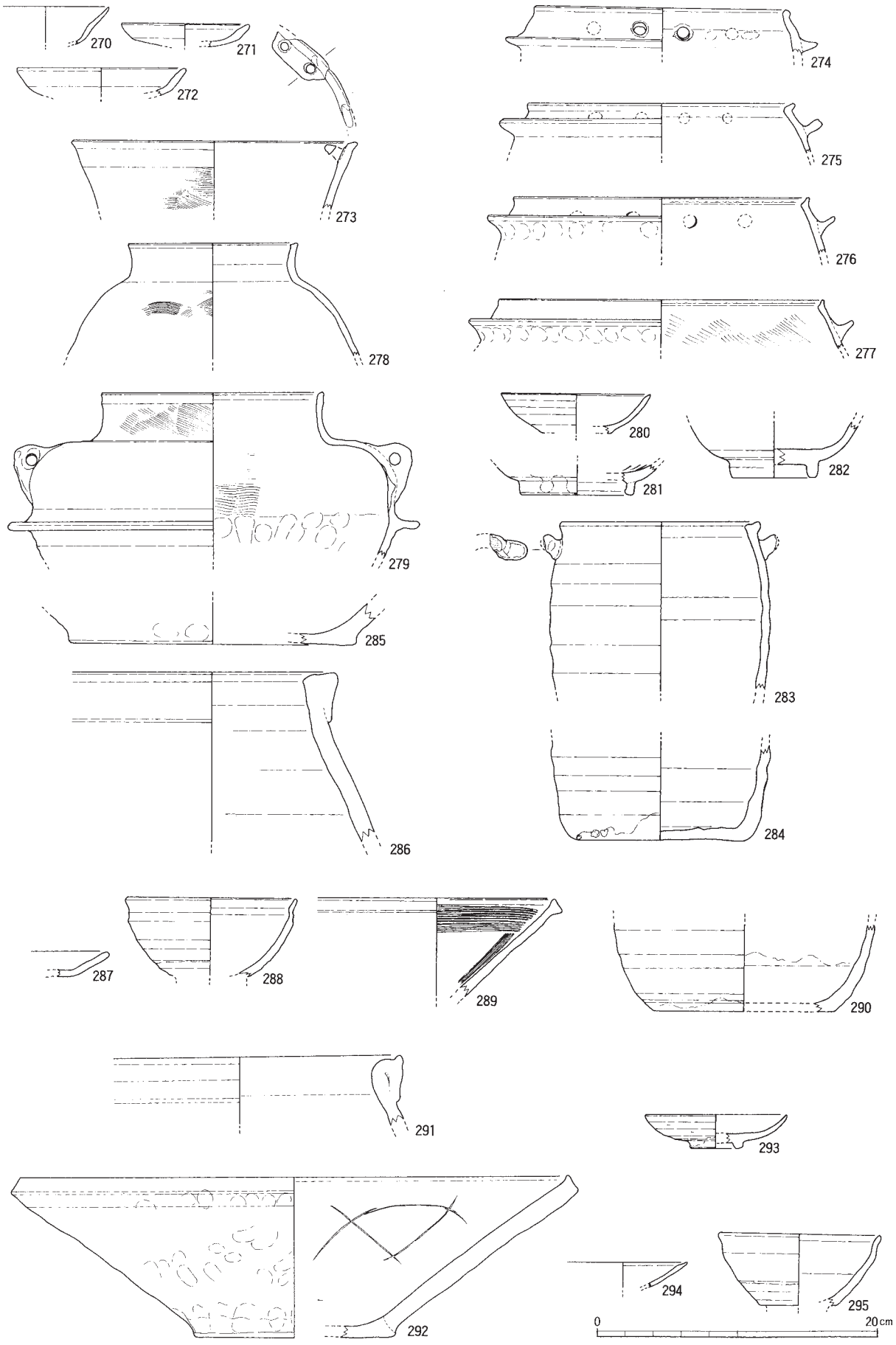
常滑製品のうち291は10型式の甕、292は片口鉢である。

⑱ＳＺ87出土遺物（294・295）

294は土師器皿。器壁が薄く、直線的にたちあがり、口縁端部にヨコナデを施す。295は瀬戸美濃製品の天目茶椀。大窯第３段階前半のものである。



第58図　区画12　井戸・土坑出土遺物実測図（1：4）



第59図　区画12　SR120、SZ83、87出土遺物実測図（1：4）

⑲ＳＺ79出土遺物（296～307）

ＳＺ79の西側の深くなっている部分からは多くの遺物が出土している。土師器皿（296～303）、山茶椀（304）、白磁（305）、石製品（306・307）などがあるが、土師器皿の割合が高いことが注目される。

土師器皿には、器壁が厚く丸くたちあがるもの（296～298）、同じくゆるやかにたちあがるもの（299）、やや深いもの（301）。白色系の色調で器壁が薄く、丸くたちあがるもの（300・302）、直線的にたちあがり、口縁端部に強いヨコナデが施されるもの（303）がある。304は12型式の山茶椀である。305は朝鮮製の端反皿ではないかと思われる。306は花崗岩製の石臼（下臼）、307は不明石製品である。
砥石かもしれない。

⑳ピット出土遺物

308は建物としてはまとまらなかったピットから出土した白磁の端反皿である。

㉑包含層出土遺物（309～368）

包含層出土遺物の大部分は、北東斜面から出土している。土師器皿（309～320）・内耳鍋（321・322）・羽釜（323～329）、瀬戸美濃製品（330～349）、常滑製品（350～362）、貿易陶磁（363・364）、瓦（365）、石製品（366・367）、金属製品（368）がある。

土師器　皿（309～320）には、器壁が厚く、丸くたちあがるもの（311・312）、ゆるやかにたちあがるもの（313～317）、やや深いもの（320）、やや外反してたちあがり、口縁端部にヨコナデが施されるもの（318・319）のほか、南伊勢系の可能性があるもの（309）がある。

煮炊具のうち、321は中北勢系の内耳鍋である。口縁端部が斜め上方につまみ上げられ、内端に面をもつ。外側には一面に煤が付着する。322は尾張系の内耳鍋。口縁端部にヨコナデが施され、内端が内側に突出している。鈴木編年のⅠ－１～２期のものと思われる。323～329は中北勢系の羽釜。323の口縁部は直立し、口縁端部が外側につまみ出され、上端に面をもっている。面は凹線状にくぼむ。324の口縁部は直立気味であるが、磨耗のため調整や端部の状況は不明である。325の口縁部は内傾し、端部が斜め上方につまみ上げられ、内端に面をもつ。323～325の残存部には穿孔はない。326の口縁部は短く、内端に面をもつ。327の口縁部は直立し、口縁部の上端に面をもつ。328の口縁部は内傾し、端部は丸くおわる。329の口縁部は内傾し、口縁端部が上方につまみあげられ、内端に面をもつ。326～329の鍔部直上には焼成前穿孔がある。

瀬戸美濃製品　天目茶椀（330～332）・鉄釉稜皿（333・334）・祖母懐壷（337）・耳付水注（338）、口広有耳壷（339）・筒形容器（340・341）・擂鉢（342～349）・山茶椀（335・336）がある。

天目茶椀のうち、330は大窯第１段階後半のものである。2次的な焼成を受けており釉薬が融けている。331は大窯第１段階後半、332は大窯第２段階のものである。鉄釉稜皿のうち、333は大窯第２段階のものである。334は大窯第３段階のものである可能性が高い。337は祖母懐壷、338は耳付水注。いずれも大窯第１～２段階のものである。339は口広有耳壷。古瀬戸後Ⅳ期のものかと思われる。340・341は筒形容器。いずれも大窯第１段階のものである。340の内面には横ピンの痕跡がある。

擂鉢のうち、342は大窯第１段階前半、344・345は大窯第１段階、346は大窯第１段階後半、343・347は大窯第２段階前半、348は大窯第２～３段階、349は大窯第３段階前半のものである。

山茶椀はいずれも第12型式のものである。

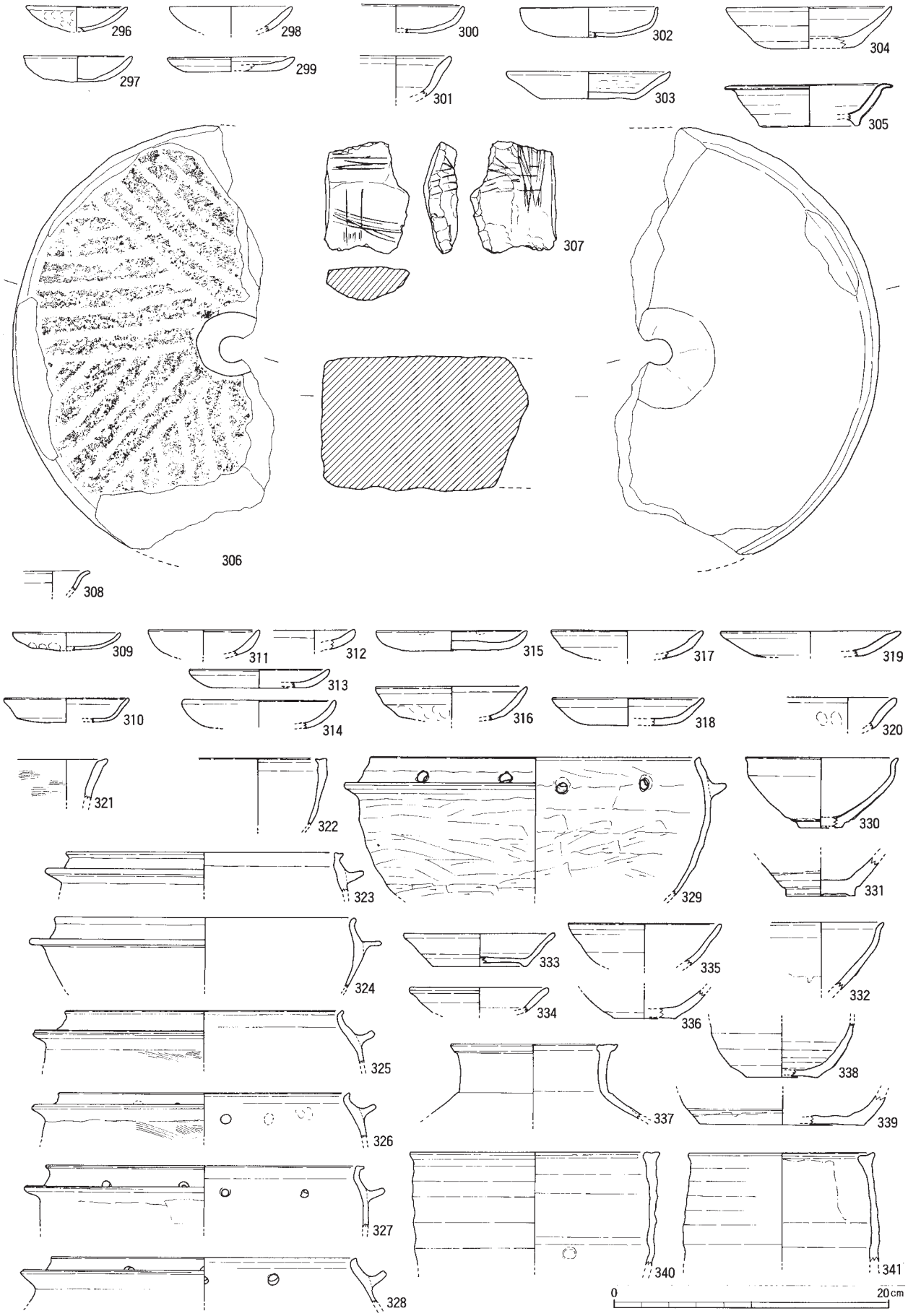
常滑製品　350は10～11型式の壷、351も壷かと思われる。352～360は甕である。352・353は10型式、354～357は11型式、358・359は11～12型式のものである。361・362は片口鉢。361の口縁部の特徴は９型式のものである。

貿易陶磁　363は朝鮮製の粗製の白磁皿、364は染付の端反皿である。

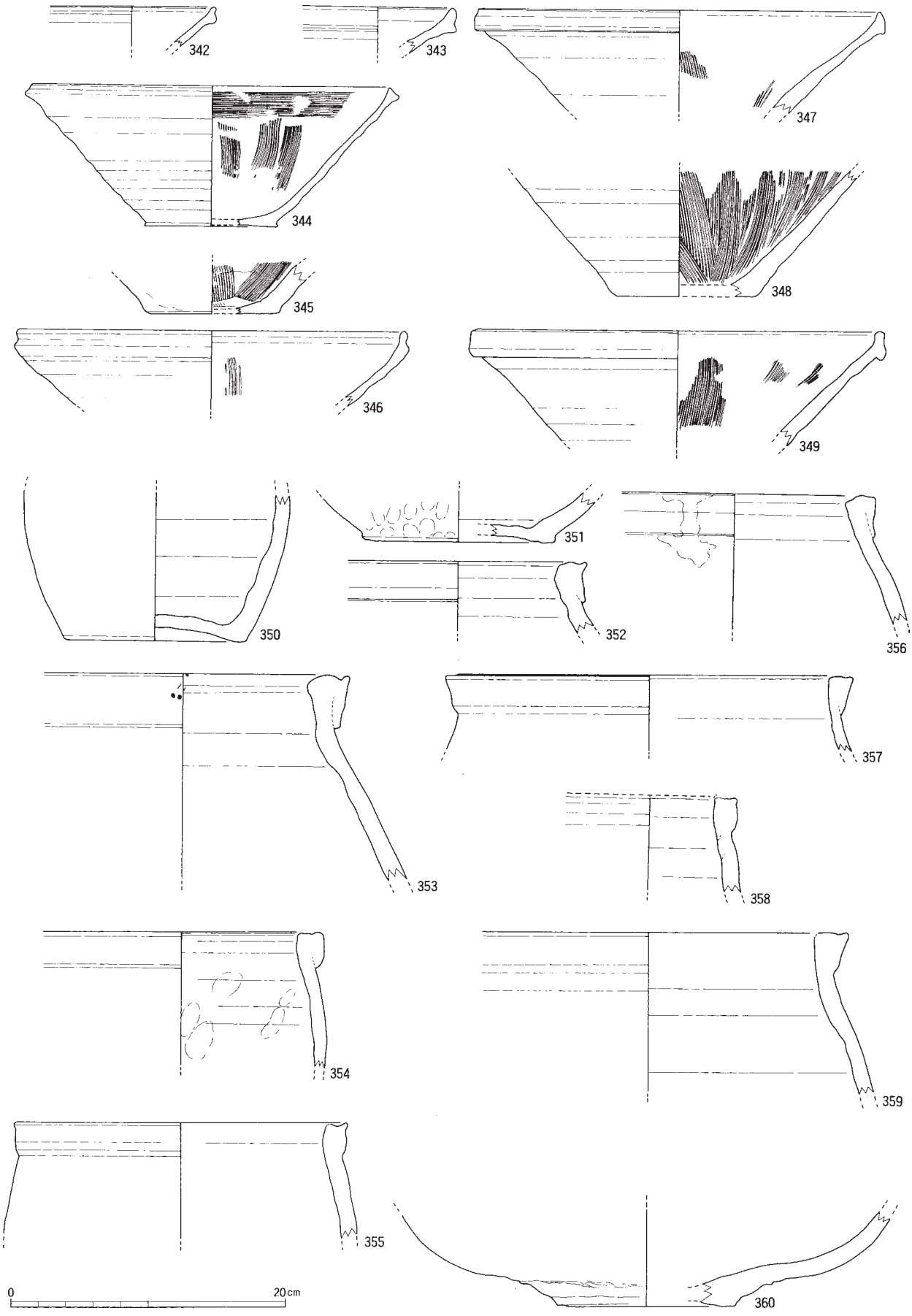
その他　軒丸瓦（365）・五輪塔の火輪（366）・石臼（367）がある。365は右巻きの巴文で、周囲を珠文で飾るものである。瓦頭部分にはハナレ砂が用いられている。366は花崗岩製で軒幅が厚く軒先はあまり反りあがらない。表面に火を受けている。367は花崗岩製の下臼である。368は小柄と思われる。

区画13（第63図、写真図版６）

（１）遺構



第60図　区画12　SZ79、Pit、包含層出土遺物実測図（1：4）



第61図　区画12　包含層出土遺物実測図（1：4）

区画12の西、標高約58mの尾根上に立地する。東の区画12とは約１mの段差がある。一応、調査区の北西端までを同一の区画として扱ったが、ＳＫ190あたりが北西端になるのかもしれない。北は調査区外に続く。区画内から、掘立柱建物４棟、土坑、溝などを検出した。

①掘立柱建物

ＳＢ140（第65図）　区画の北東隅、北東斜面の際で検出した。桁行３間×梁行１間の建物である。

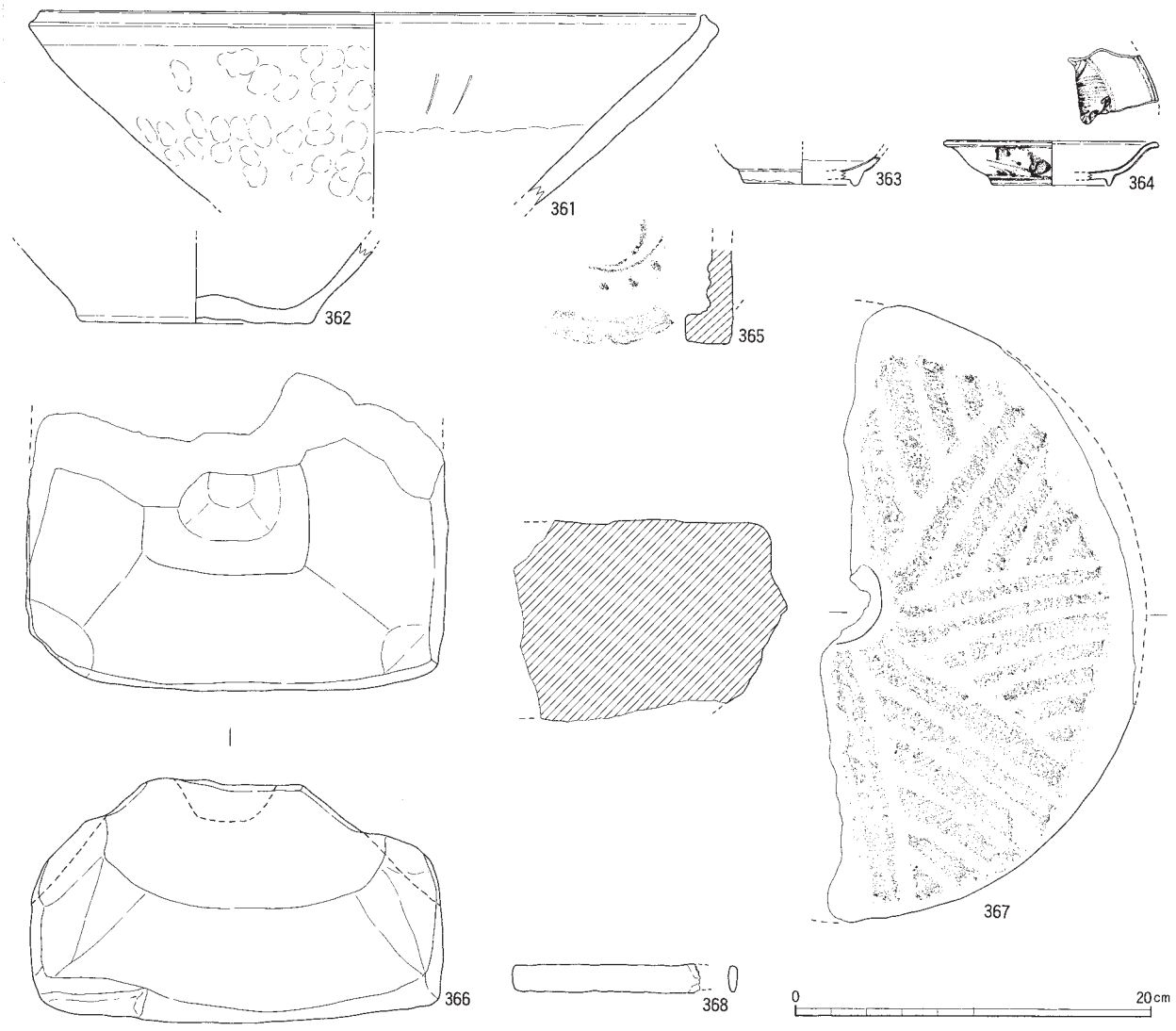
ＳＢ202（第64図）　南西側の柱筋しか検出していないが、ＳＫ194を建物内に持つ、桁行３間の建物であると考えた。柱穴から瀬戸美濃製品の擂鉢（大窯第２～３段階）が出土した。

建物内土坑ＳＫ194は、長辺約3.2mの土坑でＳＫ195と連結している。このような形状は他の区画で検出した主屋内の建物内土坑（区画６のＳＫ319と321、区画８のＳＫ304と307、区画10のＳＫ36と42、区画12のＳＫ128）に酷似する。埋土から常滑製品の甕が出土した。

柱筋が揃う建物群ＳＢ259、261、263と重複しているが、ＳＢ259の柱穴がＳＫ195の埋土除去後に検出されたことから、これらはＳＢ202よりも古いと考えられる。

ＳＢ203（第64図、写真図版20）　桁行３間以上×梁行２間の建物である。

ＳＢ259（第64図）　桁行２間×梁行１間の建物である。ＳＢ260、261と南西側の柱筋が揃う。これらの建物群は前述の通り、ＳＢ202よりも古いと考えら



第62図　区画12　包含層出土遺物実測図（1：4）

第63図　区画13・16・17平面図（1：500）

れる。

ＳＢ260（第64図）　内部に長辺約1.8m、短辺1.5m、深さ約８㎝の方形の土坑（ＳＫ263）を持つ桁行２間×梁行１間の建物である。ＳＫ263の埋土は褐色土で、建物の南西側によっている。

ＳＢ261（第64図）　内部に一辺約2.1m、深さ約0.13mの方形の土坑（ＳＫ262）を持つ１間×１間の建物である。ＳＫ262の埋土は褐色土である。

②土坑

ＳＫ190（第65図）　区画の南東端から約30m北西に向かった地点で検出した。一辺約３m、深さ約0.15mの隅丸方形の土坑である。平面形や溝につながることなどは、区画12の北西端にあるＳＫ136と類似する。前述したようにこの土坑が区画13の北西端かもしれない。埋土から土師器羽釜、常滑製品の甕が出土した。

ＳＫ191（第65図）　長辺約2.3m、短辺約1.7m、深さ約0.3mの隅丸長方形の土坑である。ＳＫ193と重複しているが、前後関係は不明である。

埋土から土師器皿（369）・羽釜、瀬戸美濃製品の天目茶椀（大窯第２段階）・擂鉢（371、第３段階前半）・山茶椀（12型式）、常滑製品の甕が出土した。

ＳＫ193（第65図）　一辺約５m、深さ約0.35mの方形の土坑。埋土から土師器羽釜（373）、瀬戸美濃製品の天目茶椀（大窯第１段階）・擂鉢（376、古瀬戸後Ⅳ期新段階～大窯第２段階）、四耳壺（古瀬戸後Ⅳ期）・口広有耳壺か筒形容器（375）、常滑製品の方口鉢（377）・甕、五輪塔の火輪（378）が出土した。

ＳＫ197（第65図）　区画の南東端から約40m北西に向かった地点で検出した。長辺３m以上、短辺約2.6m、深さ約0.4mの土坑である。土坑から南西方向に２本の溝がのびている。このあたりが、区画13の北西端になる可能性もある。埋土から土師器羽釜、瀬戸美濃製品の天目茶椀（大窯第１段階）・擂鉢（大窯第２段階）、常滑製品の片口鉢・甕、瓦が出土した。

（２）遺物（第66図、写真図版39）

①ＳＫ191出土遺物（369～371）

369は土師器皿。器壁が厚く、丸くたちあがる。全面に黒斑がみられる。370・371は瀬戸美濃製品の擂鉢。370は大窯第３段階前半、371は大窯第２段階後半のものである。372は第12型式の山茶椀である。

②ＳＫ193出土遺物（373～377）

373・374は中北勢系の土師器羽釜。373の口縁部は直立気味で、口縁端部は外側につまみ出され、上端に面をもっている。鍔部直上に焼成前穿孔がある。374の口縁部は内傾し、口縁端部は上方につまみ上げられ、内端に面を持つ。面はわずかに凹線状にくぼむ。鍔部直上に焼成前穿孔がある。

375・376は瀬戸美濃製品。375は古瀬戸後Ⅳ期新段階から大窯期にかけての口広有耳壺か筒形容器。376は大窯第１段階の擂鉢である。

377は常滑製品の片口鉢、378は五輪塔の火輪。全高が高く、ほぞ穴が深い。

③ＳＫ195出土遺物（379～381）

379・380は常滑製品の片口鉢。380は10～11型式のものであろうか。381は丸瓦の狭端部である。

④ＳＫ198出土遺物（382）

382は常滑製品の甕の底部である。

⑤溝出土遺物（383～389）

383はＳＤ139から出土した瀬戸美濃製品の菊皿で、登窯４～５小期のものである。384はＳＤ183から出土した常滑製品の片口鉢である。385～389はＳＤ188から出土した遺物である。385は中北勢系の羽釜。口縁部は内傾し、一度直立して端部に至る。口縁端部は上方につまみ上げられ、内端に面を持つ。面は凹線状にはなっている。残存部には穿孔はない。

386～389は瀬戸美濃製品。386は大窯第１～２段階の灰釉丸皿か端反皿、387は大窯第２段階前半、388は大窯第２段階後半の擂鉢である。389は大窯第１～２段階の筒形容器である。建水かもしれない。

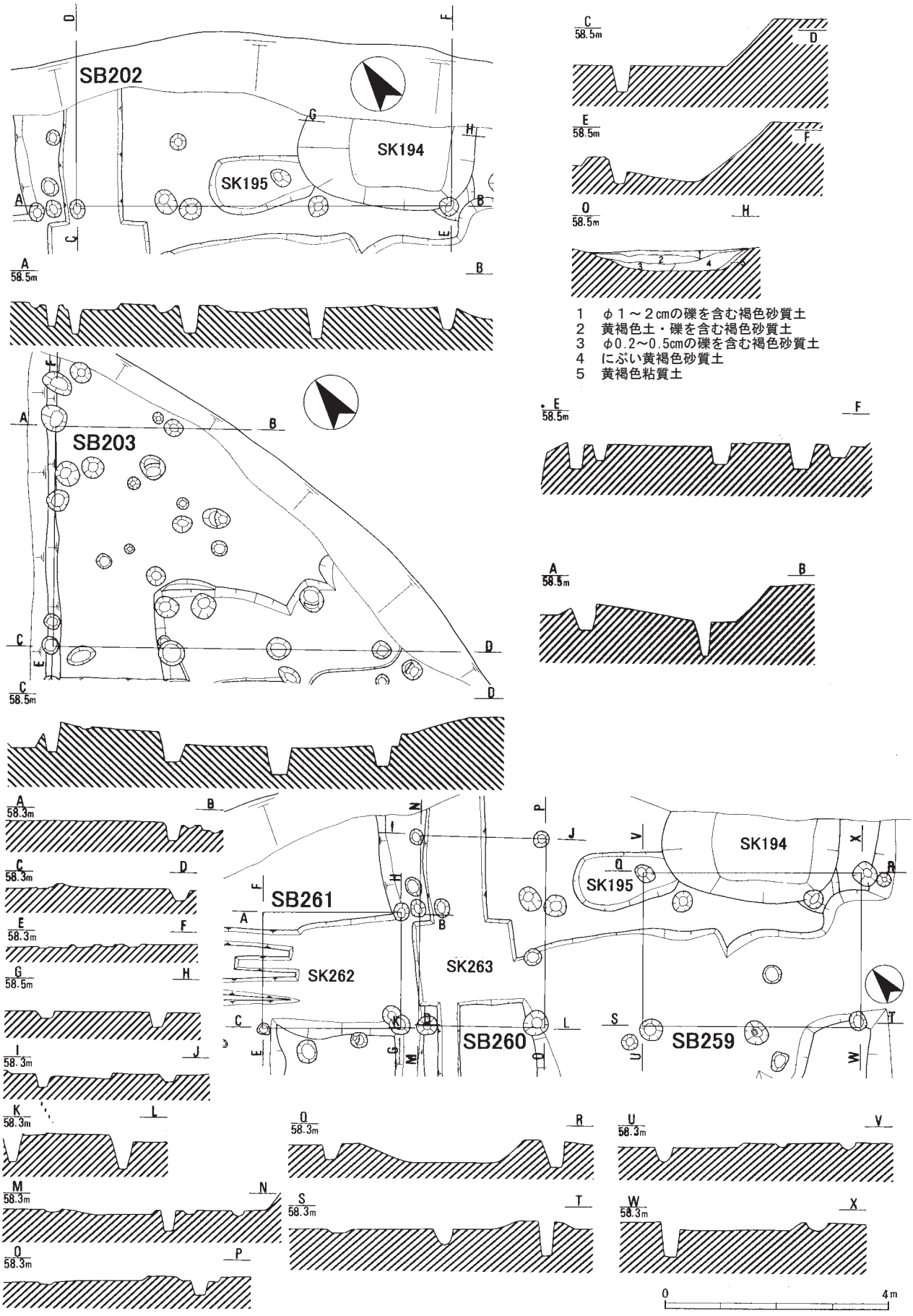
⑥包含層等出土遺物（390～395）

390～394は近世の遺構であるＳＫ184に混入していた遺物である。390は大窯第２段階後半の鉄釉稜皿である。391・392は磁器。393は砥石。394は刃物かと思われる鉄製品である。

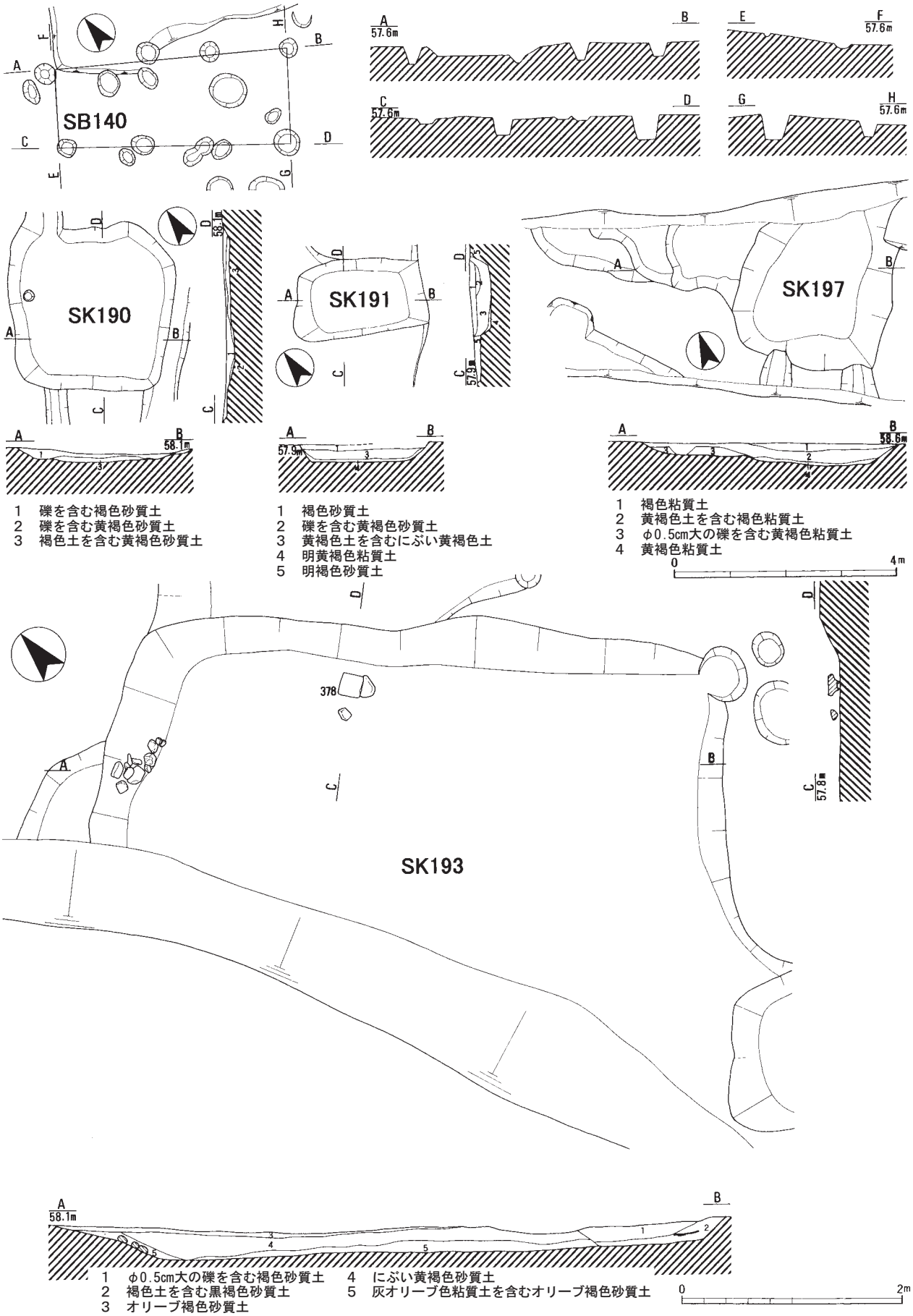
395は包含層から出土した土師器の羽釜。口縁部は直立気味で、口縁端部は斜め上方につまみ上げられ、内端に面を持つ。面は凹線状にくぼむ。残存部には穿孔はない。

区画14（第67図、写真図版４・７）

区画８の西、標高約56mの尾根上に立地する。調



第64図　SB202、203、259～261実測図（1：100）



第65図　SB140（1：100）SK190、191、193、197（1：50）実測図

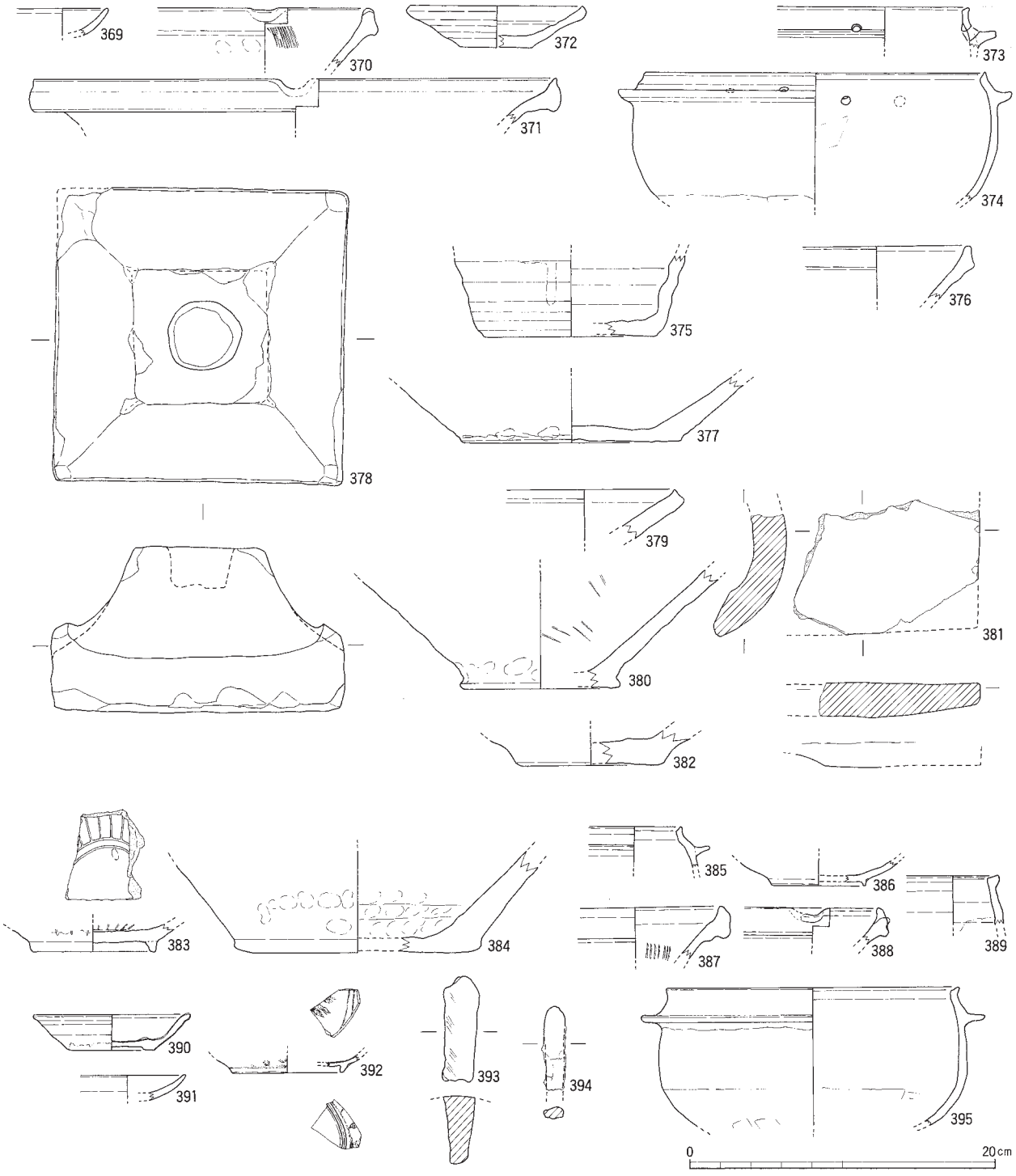
査区外を含めると、約30m×15mの区画が想定できる。北西の区画15との段差はない。区画内から、土塁側溝、土坑、柵などを検出した。

この区画と区画10との間には、道路遺構ＳＲ12がある。この道路は、区画８の北から斜面を登ってくる道路遺構ＳＲ301につながると考えられる。

（１）遺構

①溝

ＳＤ10（第67・68図）　区画の北西端で検出した。区画15との境となる土塁ＳＡ291の側溝である。長さ



第66図　区画13出土遺物実測図（1：4）

約15ｍ、幅約2.15ｍで、内側の肩近くには柵ＳＡ101、271がある。埋土から土師器羽釜が出土した。

②柵

ＳＡ101（第68図）　長さ約４ｍ、柱間４間の柵である。柱穴から土師器皿が出土した。

ＳＡ271（第68図）　長さ約4.2m、柱間３間の柵である。

ＳＡ245（第68図）　長さ約7.3m、柱間4間の柵である。南東にむけて広がる建物の可能性もある。

③土塁

ＳＡ291（第67図）　区画14と15の間の長さ約30m、基底部幅約3.3mの土塁である。現状では、区画15との間には段差はない。盛土が削平されているため、高さは不明であるが、それほど高い盛り土はなかったと思われる。両側に側溝（ＳＤ10・290）を持つ。

区画15（第67図、写真図版４・７・20・21）

区画14の北西、標高約56mの尾根上に立地する約30ｍ×35mの区画。隣接する区画14との段差はないが、区画16とは約１ｍの段差がある。南西斜面には数段のテラス状遺構がある。

区画内から、掘立柱建物15棟、土坑、溝、柵などを検出した。

ＳＲ12は、この区画と区画15の間を通っている。

（１）遺構

①掘立柱建物　掘立柱建物には、区画の主屋と考えられるもの（ＳＢ115）、総柱のもの、小規模な側柱の建物がある。他の区画に比べ１間×１間あるいは２間×１間で、内部に方形の土坑を持つものが多くみられる。

ＳＢ115（第70図、写真図版21）　区画のほぼ中央で検出した。桁行５間×梁行２間の建物で、建物内土坑（ＳＫ30・31・32・33？）を持つ。ＳＢ115の柱穴は直径約40ｃｍ、深さ約50ｃｍで、ほかの建物と比べると大形で柱間も広い。建物東西の各１間分の庇は、土間かもしれない。区画15内では最大の建物である。柱穴から土師器皿（396・397）、瀬戸美濃製品の灰釉端反皿（398）、祖母懐壷、砥石（399）が出土した。

ＳＡ113はこの建物と近接した位置にある長さ約6.7m、柱間５間の柱列である。建物の縁か、建物に付属する目隠し塀かと思われる。

建物内土坑ＳＫ30・31・32（第70図）は、現地調査では重なり合う３つの土坑と判断したが、他の類似遺構からみて一連のものと考えたい。ＳＫ30の埋土から土師器羽釜、瀬戸美濃製品の天目茶椀（大窯１段階）が出土した。ＳＫ33は、長辺1.9m、短辺1.7m、深さ約0.1mの方形の土坑である。ＳＢ115の南西の柱筋に接しているので、一応建物内土坑とした。

ＳＢ233（第71図）　区画の西端、南西斜面の際で検出した。桁行３間×梁行２間の総柱の建物である。斜面の際を約50㎝掘り下げて建物の敷地（ＳＺ５７）を造成している。柱穴の内最も深いものは約90㎝にもおよぶ。柱穴から土師器皿（400）・羽釜、瀬戸美濃製品の鉄釉稜皿（401）、擂鉢（402）が出土した。

ＳＢ111（第72図）　区画の北東よりで検出した。桁行２間×梁行１間の建物である。この建物とＳＢ112は、柱筋を合わせて造られており、規模や構造も酷似している。

ＳＢ112（第72図）　区画の北東よりで検出した。桁行２間×梁行１間の建物である。

ＳＢ114（第72図）　区画の南東端で検出した。桁行２間×梁行２間の建物である。ＳＫ15と重複しているが、ＳＫ15の埋土除去後にＳＢ114の南西隅の柱穴を検出したので、ＳＫ15より古い時期の遺構と考えられる。

ＳＢ244（第72図）　区画の南東隅で検出した。桁行３間×梁行１間の建物である。ＳＫ68、柵ＳＡ105と重複するが、三者の前後関係は不明である。

ＳＢ239（第73・74図、写真図版22）　ＳＢ115の近くで検出した。桁行２間×梁行１間の細長い建物で、建物内土坑を持つ（ＳＫ27・28）。柱穴から瀬戸美濃製品擂鉢（大窯第１～２段階）が出土した。

建物内土坑ＳＫ27（第74図、写真図版22）は、長辺約2.9m、短辺約2.6m、深さ約0.4mの方形の土坑で、埋土の底近くから拳大から人頭大の川原石が大量に出土した。土坑東側には拳大、西側には人頭大の礫が多いという傾向がある。これらの礫は土坑底に敷かれていた可能性が高い。ほかに埋土から土師器羽釜（408）、瀬戸美濃製品の天目茶椀（409）、灰

第67図　区画14・15平面図（1：500）

釉端反皿か丸皿（410）、擂鉢（大窯第１～２段階）、花瓶（大窯第１段階後半？）、常滑製品の甕（11型式）、石臼が出土した。ＳＫ28は、長辺約3.4m、短辺約３m、深さ約0.3mの方形の土坑である。ＳＫ27と対照的に礫はわずかしか出土しなかった。ほかに埋土から土師器羽釜、瀬戸美濃製品の擂鉢（大窯第２～３段階）が出土した。

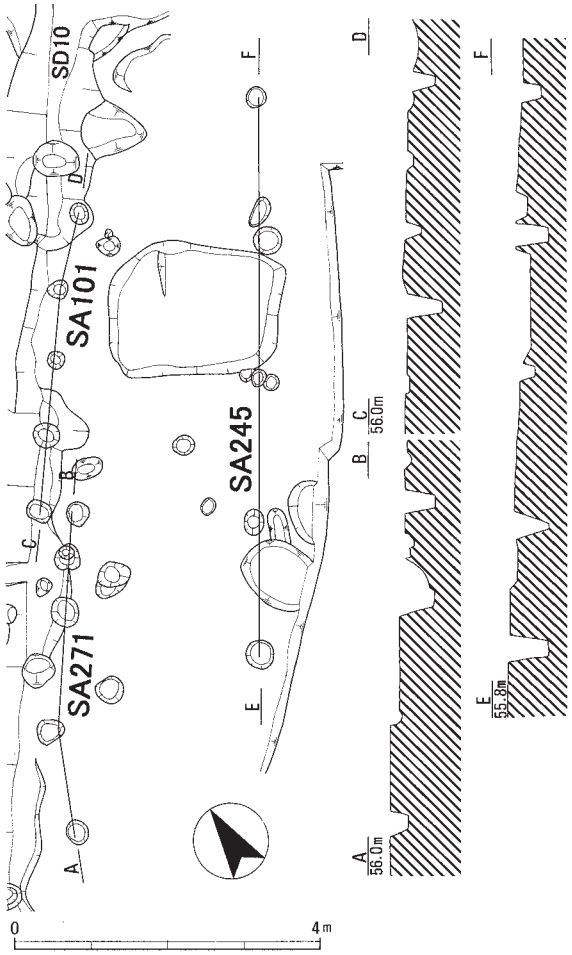
この建物とＳＢ238は重複しているが、ＳＢ238の建物内土坑（ＳＫ35）の埋没後にＳＢ239の柱穴が掘削されていることから、ＳＢ238→ＳＢ239という前後関係が想定できる。

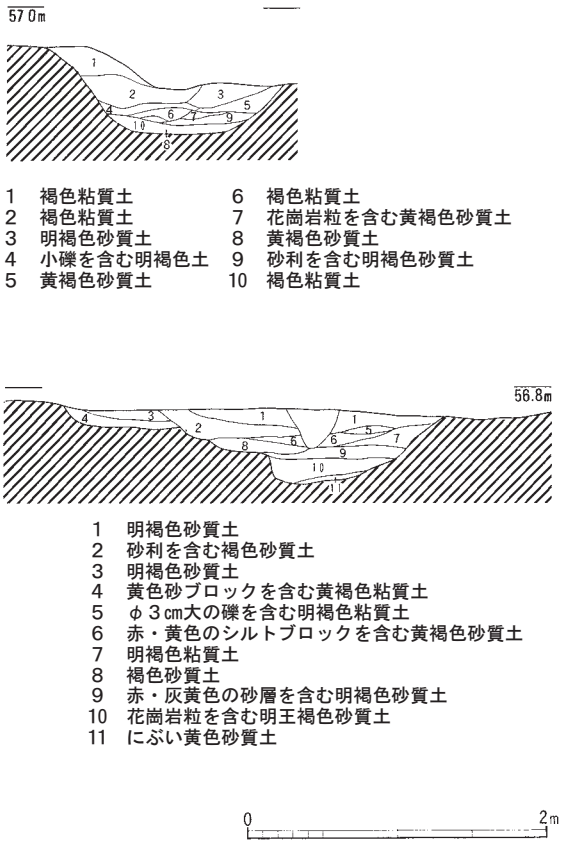
ＳＢ235・272（第75図）　ＳＢ115の近くで検出した。ＳＢ235は内部に長辺約2.7m、短辺約2.5m、深さ約0.3mの凸形の土坑（ＳＫ56）を持つ１間×１間の建物である。柱穴から瀬戸美濃製品の擂鉢（403）が出土した。ＳＫ56の埋土の底近くからは、10㎝程の礫が出土した。このほか埋土から瀬戸美濃製品の水差（406）が出土した。張出し部（ＳＫ65）があり、同時期の土坑である可能性がある。ＳＫ56の埋没後に、直径約1.4m、深さ約0.8mの円形の土坑（ＳＫ55）が掘削されている。

ＳＢ272は、内部に長辺約2.4m、短辺2.2m、深さ約0.2mの方形の土坑（ＳＫ58）を持つ１間×１間の建物である。ＳＫ58の埋土から土師器皿・羽釜、鉄釘が出土した。

ＳＢ235と272は北東側の柱筋がそろっており、前述のＳＢ239のような土坑２つを持つ細長い建物の可能性もあるが、南西側の柱筋が大きくずれるため、２棟の建物とした。

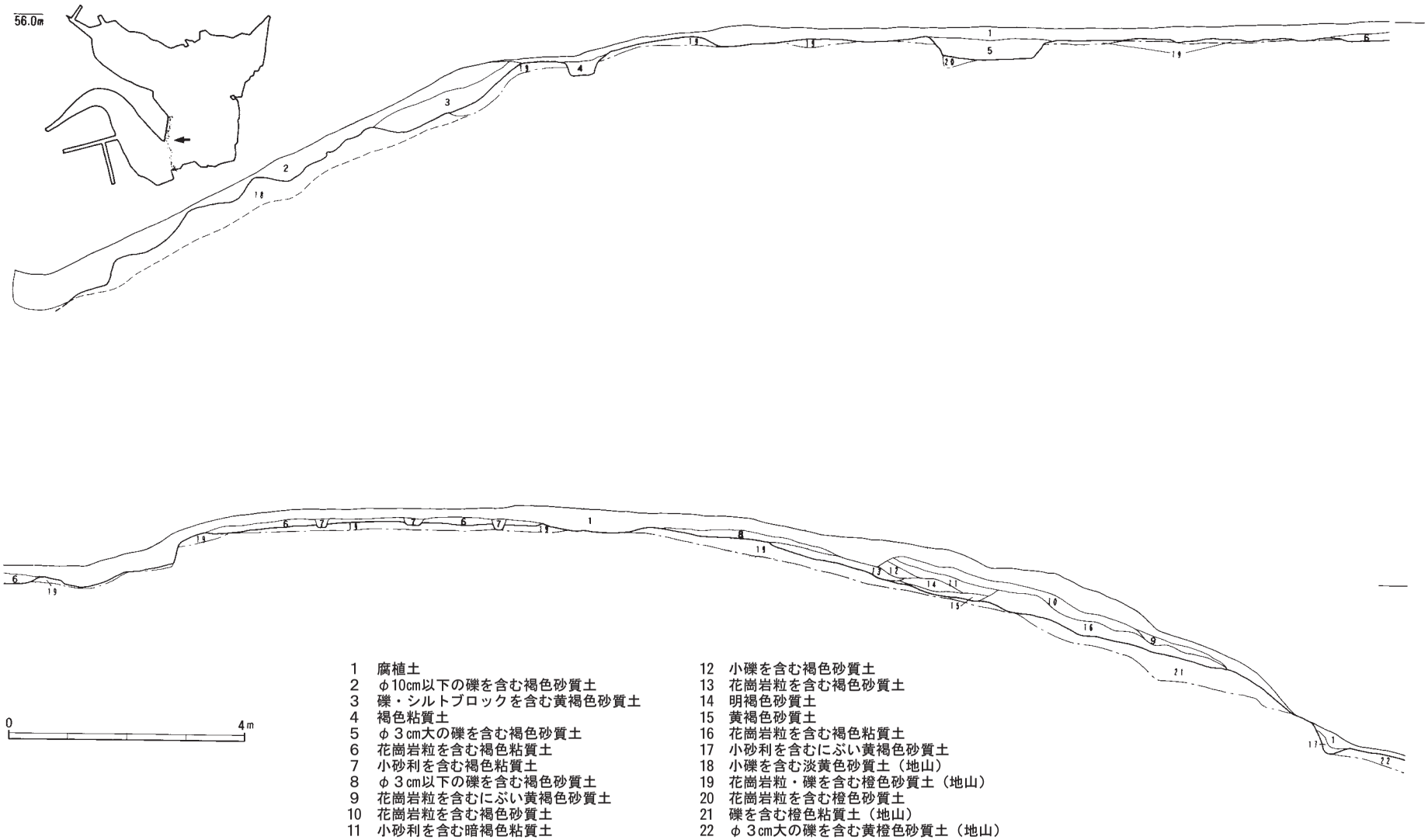
ＳＢ236・237（第75図）　ＳＢ236は内部に一辺約2.4m、深さ約0.3mの土坑（ＳＫ29）を持つ１間×１間の建物である。土坑から瀬戸美濃製品の擂鉢（大窯第３段階）が出土した。ＳＢ237も内部に土坑（ＳＫ294）を持つ１間×１間の建物である。





第68図　SA101・245・271実測図（1：100）、SD10　土層断面図（1：50）

第69図　区画15　土層断面図（1：100）



1　腐植土
2　φ10cm以下の礫を含む褐色砂質土
3　礫・シルトブロックを含む黄褐色砂質土
4　褐色粘質土
5　φ３cm大の礫を含む褐色砂質土
6　花崗岩粒を含む褐色粘質土
7　小砂利を含む褐色粘質土
8　φ３cm以下の礫を含む褐色砂質土
9　花崗岩粒を含むにぶい黄褐色砂質土
10　花崗岩粒を含む褐色砂質土
11　小砂利を含む暗褐色粘質土
12　小礫を含む褐色砂質土
13　花崗岩粒を含む褐色砂質土
14　明褐色砂質土
15　黄褐色砂質土
16　花崗岩粒を含む褐色粘質土
17　小砂利を含むにぶい黄褐色砂質土
18　小礫を含む淡黄色砂質土（地山）
19　花崗岩粒・礫を含む橙色砂質土（地山）
20　花崗岩粒を含む橙色砂質土
21　礫を含む橙色粘質土（地山）
22　φ３cm大の礫を含む黄橙色砂質土（地山）

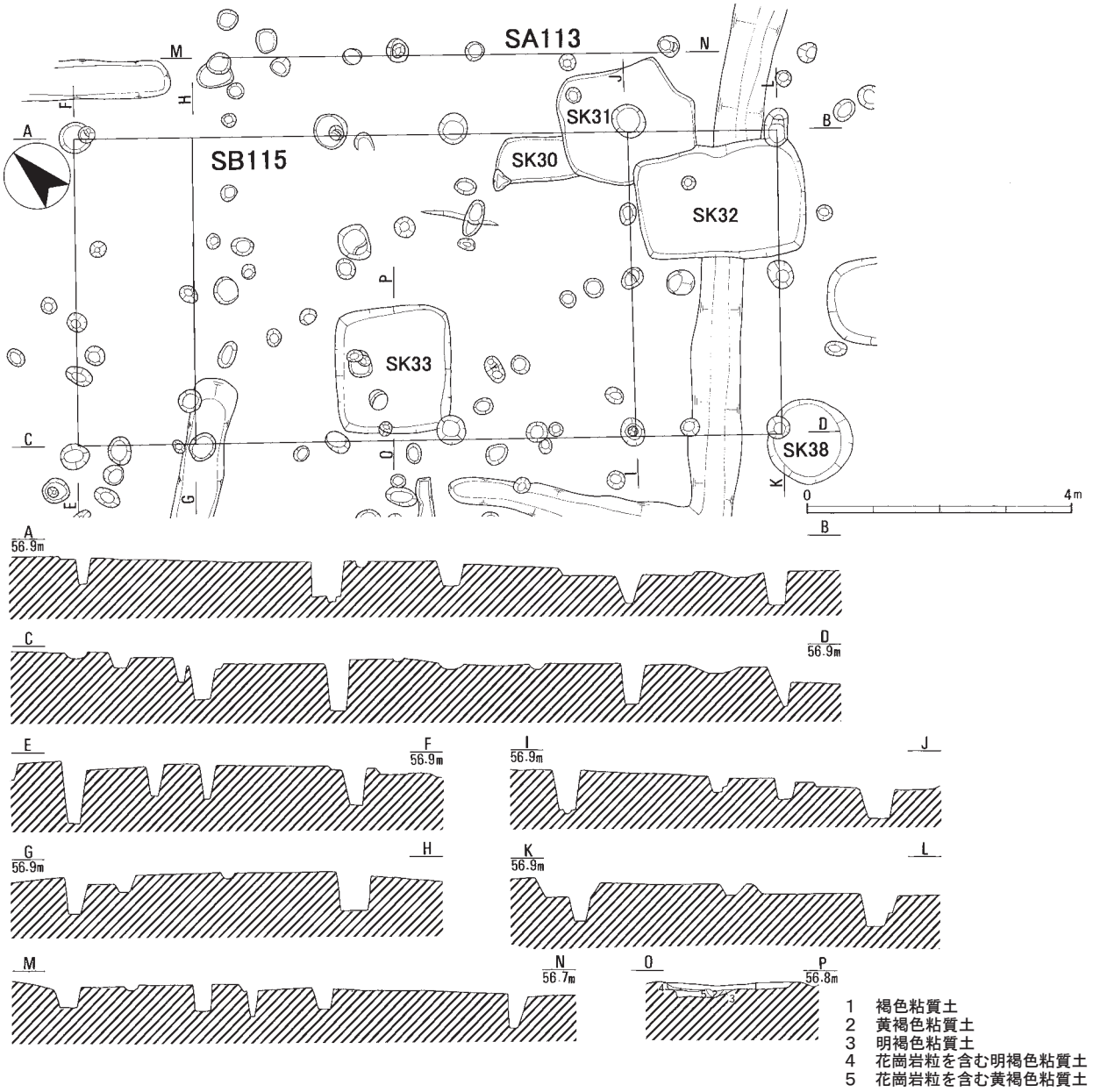
両者は重複しているが、ＳＫ29がＳＫ294の埋没後に掘削されているので、ＳＢ237→ＳＢ236という前後関係が想定される。

ＳＢ238（第76図）　内部に一辺約2.2m、深さ約0.15mの方形の土坑（ＳＫ35）を持つ建物。南西側の柱穴２か所が他遺構に壊されているため検出することができなかったが、他の建物と同じ１間×１間の構造であると思われる。ＳＢ239、ＳＫ44と重複している。埋土の観察からＳＫ44→ＳＢ238→ＳＢ239という前後関係が想定される。

ＳＢ241（第76図）　内部に長辺約２m、短辺約1.8m、深さ約0.4mの凸形の土坑（ＳＫ20）を持つ１間×１間の建物である。

ＳＫ20の埋土は暗褐色の粘土で、埋土から土師器皿・羽釜、常滑製品の甕が、張出し部（ＳＫ24）の埋土の埋土から焼成粘土塊が出土した。重複するＳＫ19の埋没後に掘削されている。

ＳＢ242・243（第76図）　内部に長辺約２m、短辺約1.8m、深さ約0.5mの凸形の土坑（ＳＫ13・14）をもつ重複した１間×１間の建物。土坑とそれぞれの建物の関係は判然としない。ＳＢ242の柱穴から土師器皿・羽釜が、ＳＢ243の柱穴から瀬戸美濃製品の



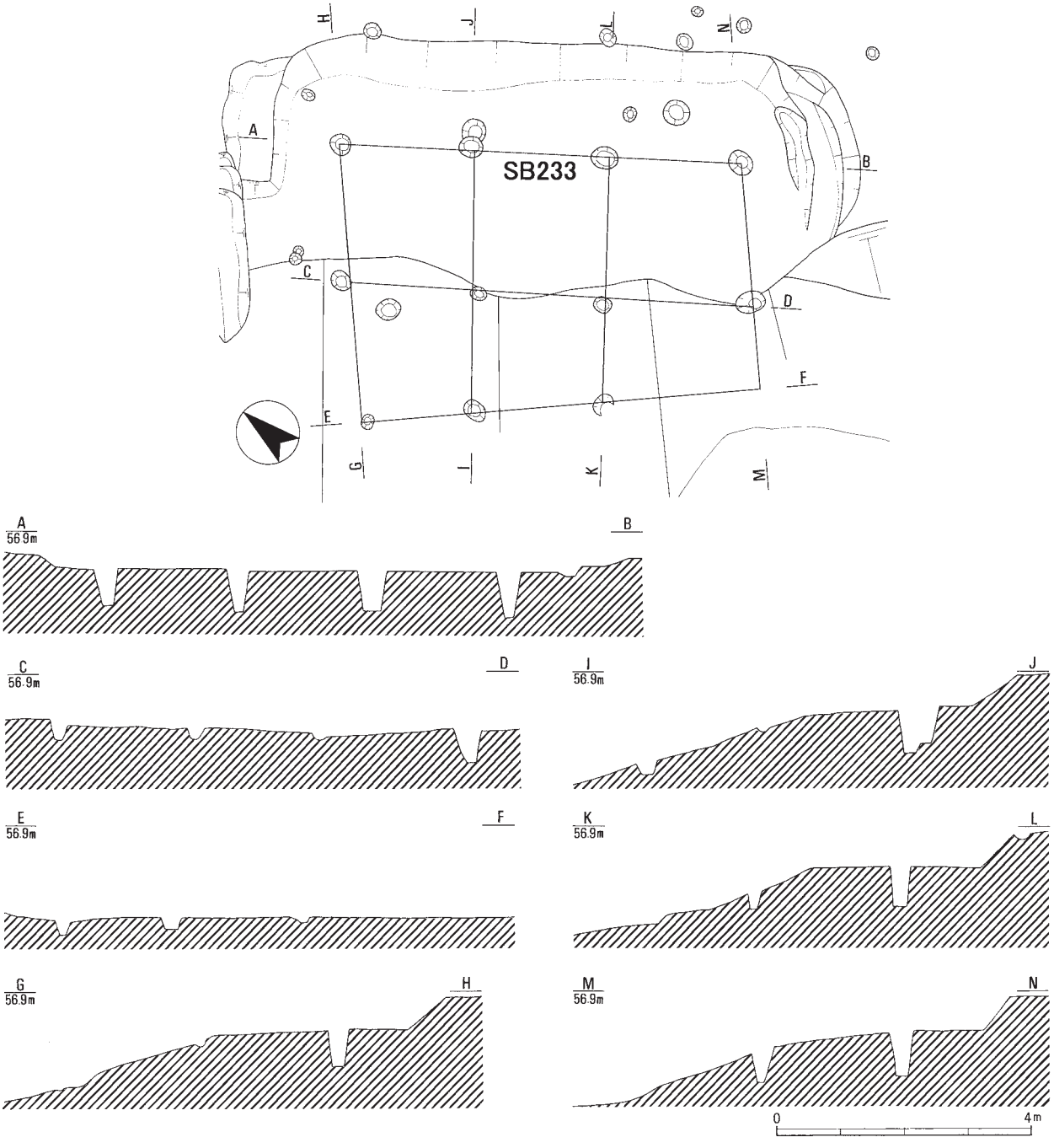
第70図　SB115　実測図（1：100）

天目茶椀（古瀬戸後Ⅳ期新段階）が、ＳＫ14の埋土から瀬戸美濃製品擂鉢（古瀬戸後Ⅳ期新段階～大窯第１段階）が出土した。

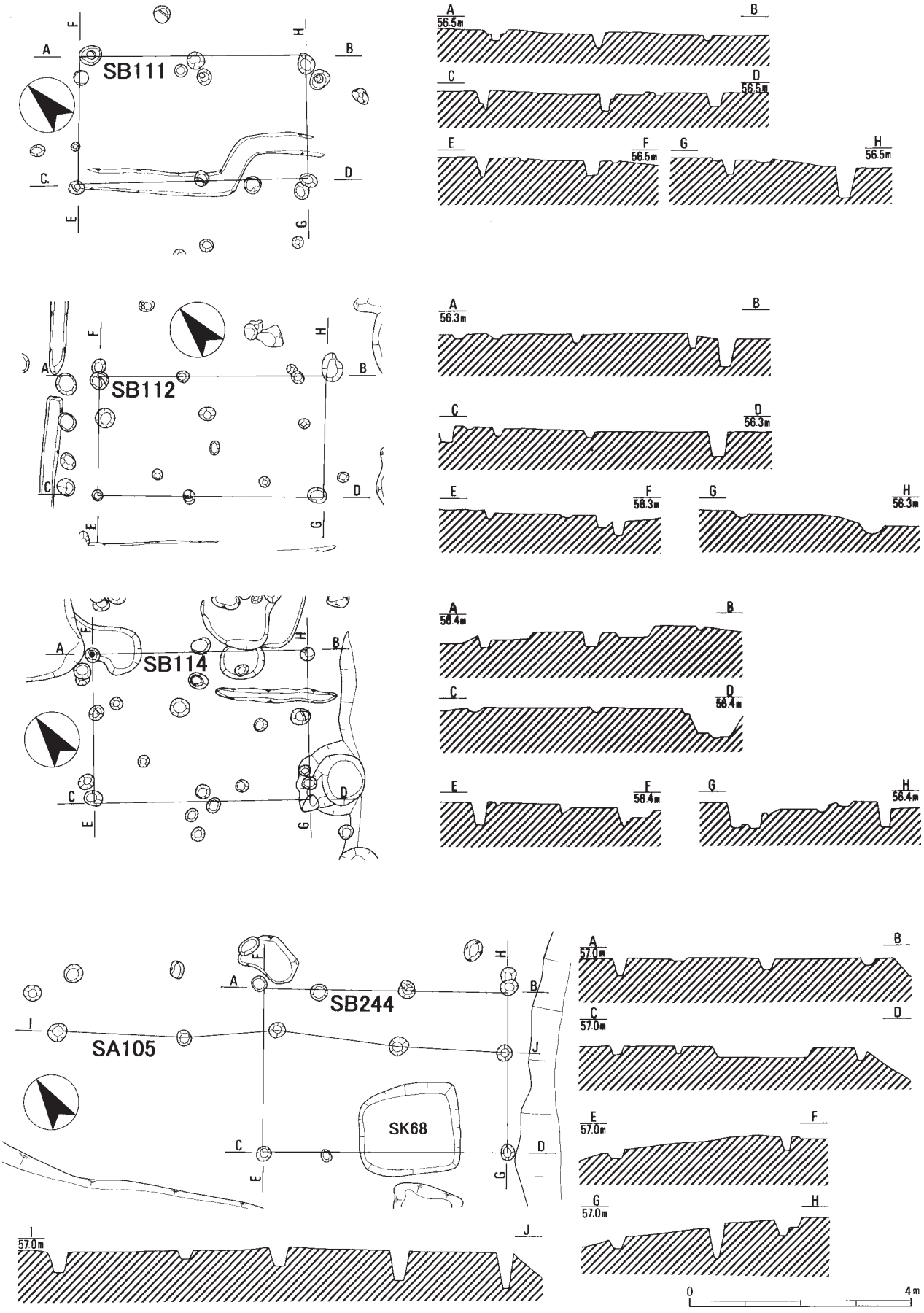
②土坑

ＳＫ15（第77図）　区画の南東端で検出した。直径約1.3m、深さ約0.5mの円形の土坑。埋土は褐色粘土である。埋土から約30㎝の礫が3個出土した。掘立柱建物ＳＢ114、ＳＤ16と重複しているが埋土の観察から、ＳＢ114→ＳＫ15→ＳＤ16の順に埋没したと考えられる。

ＳＫ25・26（第77図）　区画のほぼ中央で検出した。ＳＫ25は直径約0.8m、深さ約0.4mの円形の土坑である。ＳＫ26は直径1.2m、深さ約0.5mの円形の土坑で、埋土に大量の小礫を含む。礫の量が非常に多かったので、土層の分層ができなかったが、礫を多量に含む上層と、あまり含まない下層に分かれ



第71図　SB233　実測図（1：100）



第72図　SB111、112、114、244・SA105　実測図（1：100）

ると思われる。ＳＫ26の埋土から瀬戸美濃製品の擂鉢（古瀬戸後Ⅳ期新段階）・徳利（大窯第２段階）、常滑製品の甕、瓦が出土した。

ＳＫ44（第77図）　区画のほぼ中央で検出した。長径約２m、短径約1.4m、深さ約0.25mの楕円径の土坑である。埋土から大量の小礫が出土した。ＳＢ238の建物内土坑ＳＫ35と重複しているが、前述のようにＳＫ44の方が古い時期の遺構であると考えられる。

ＳＫ54（第77図）　区画の長辺約3.5m、短径約1.7m、深さ約0.25mの長方形の土坑である。埋土から土師器皿・羽釜、瀬戸美濃製品の鉄釉稜皿（大窯第２段階）、常滑製品の甕が出土した。

ＳＫ63・64（第77図）　ＳＫ63は直径約0.8m、深さ約0.35mの円形の土坑である。埋土に礫を多く含む。このほか埋土から常滑製品の甕・壷（12型式）が出土した。ＳＫ64は直径約0.7m、深さ約0.4mの円形の土坑。埋土の底近くから約30㎝の礫が出土している。

ＳＫ65（第77図）　長径約1.7m以上、短径約１m、深さ約0.2mの楕円径の土坑である。埋土から瀬戸美濃製品の茶壷（大窯第１段階）が出土した。ＳＢ235の建物内土坑であるＳＫ56が埋没した後に掘削されている。ＳＫ56と一連のもので、ＳＢ235の建物内土坑になる可能性もある。

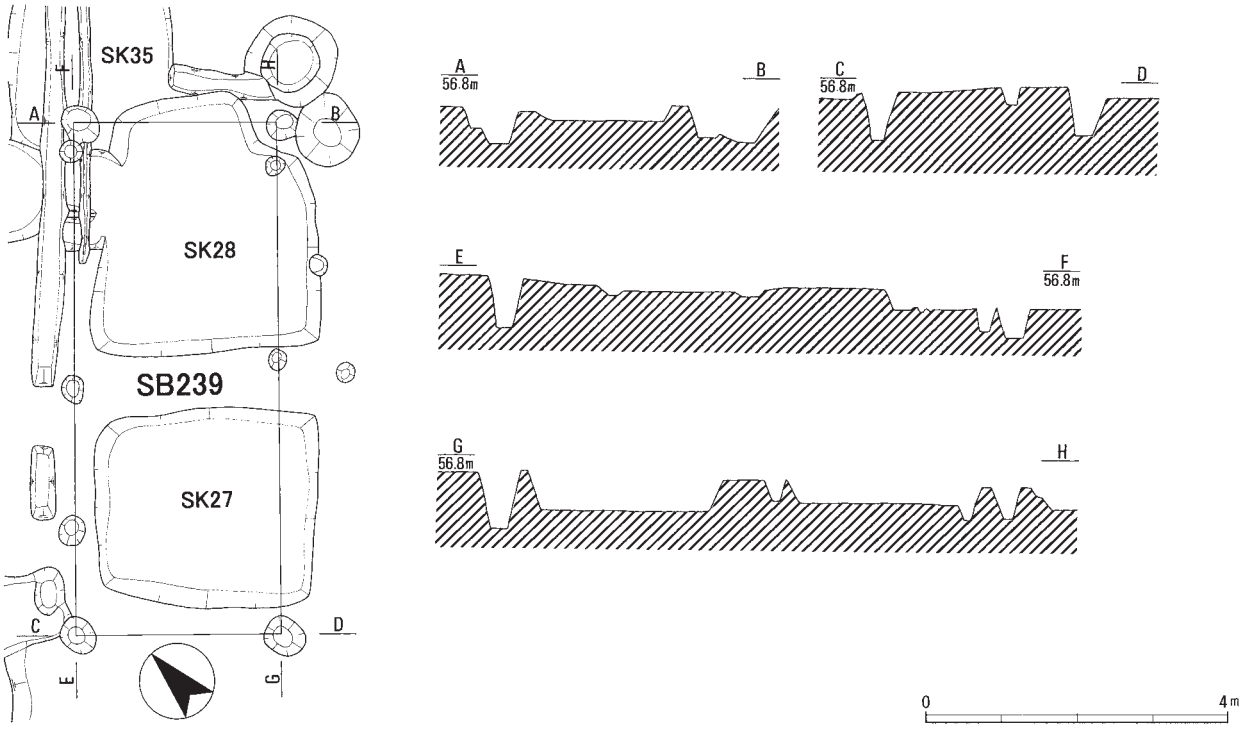
ＳＫ66（第77図）　長径約2.5m、短径約0.9m、深さ約0.2mの楕円径の土坑である。埋土から土師器の羽釜が出土した。

③溝

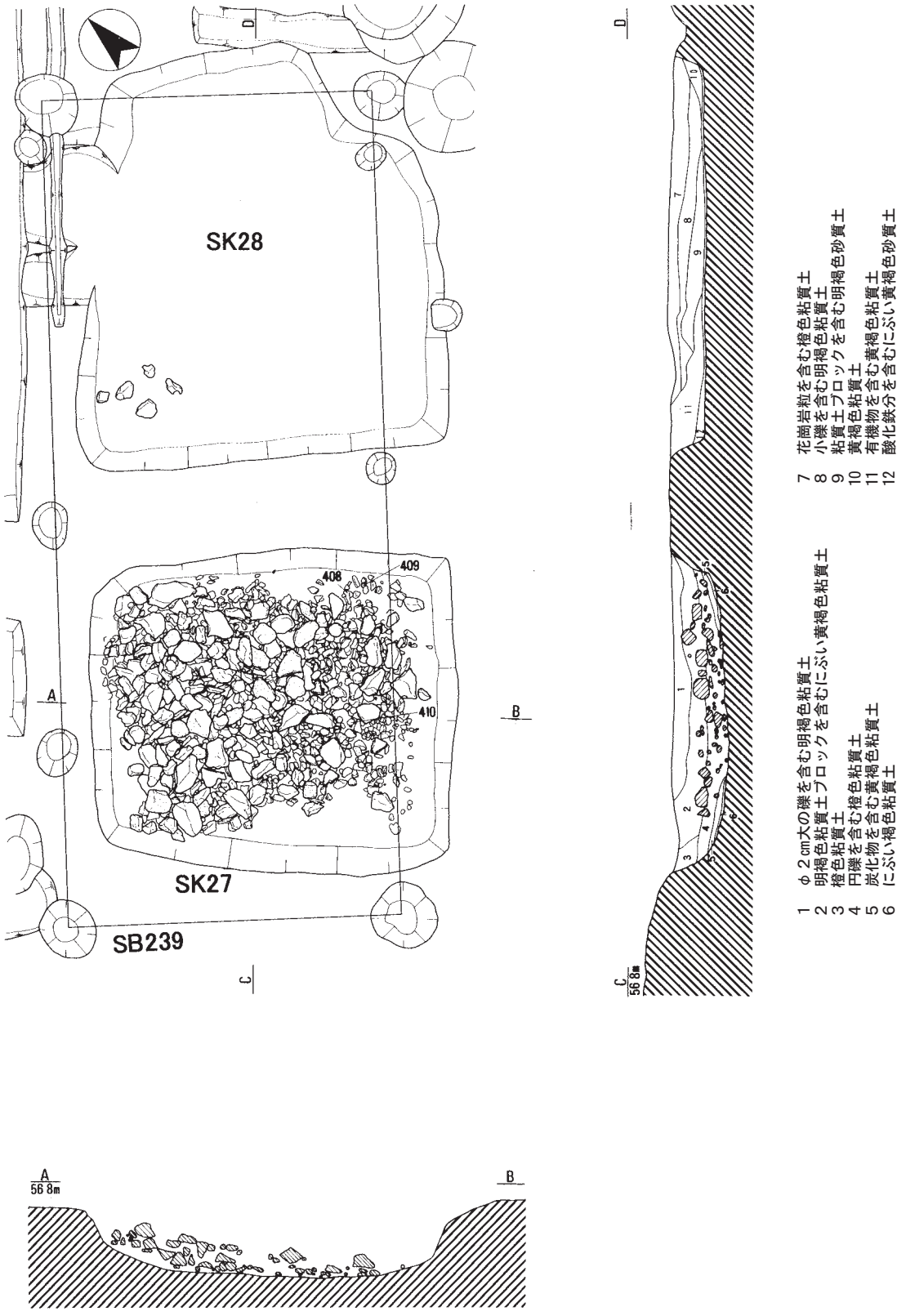
ＳＤ16・290（第67・78図）　いずれも区画の南東側で検出した。ＳＤ290は、区画14との境となる土塁ＳＡ291の側溝で、長さ約30m、幅約1.5mである。ＳＤ16は、長さ約７m、幅約1.5mの溝で、北西でＳＫ19とつながっている。南東では、ＳＤ290と合流するが、一部は枝分かれして暗渠（第78図）となって土塁の下を通り、区画14側の側溝ＳＤ10に合流している。

④土塁

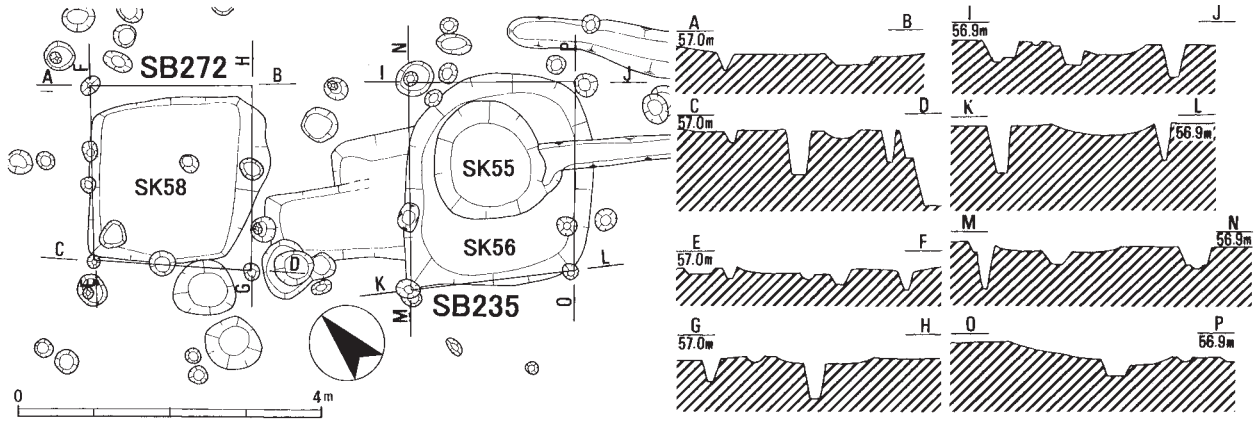
ＳＡ291（第67・78図）　区画14と15の間の長さ約30m、基底部幅約3.3mの土塁である。現状では、区画15との間には段差はない。盛土が削平されているため、高さは不明であるが、それほど高い盛り土はなかったと思われる。両側に側溝（ＳＤ10・290）を

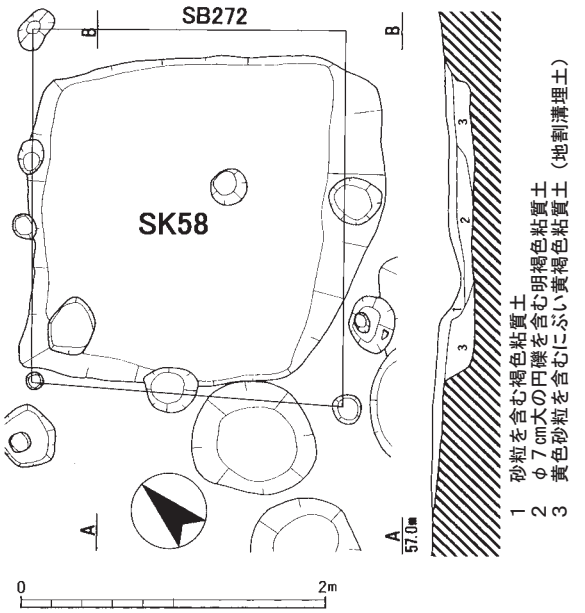


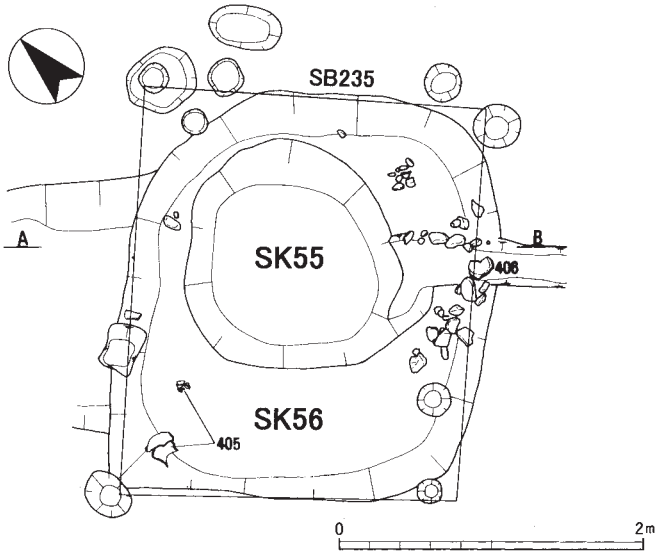
第73図　SB239　実測図　（1：100）

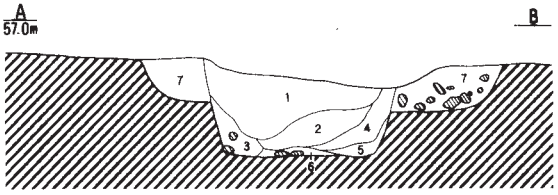


第74図　SK27・28　遺物出土状況図（1：50）

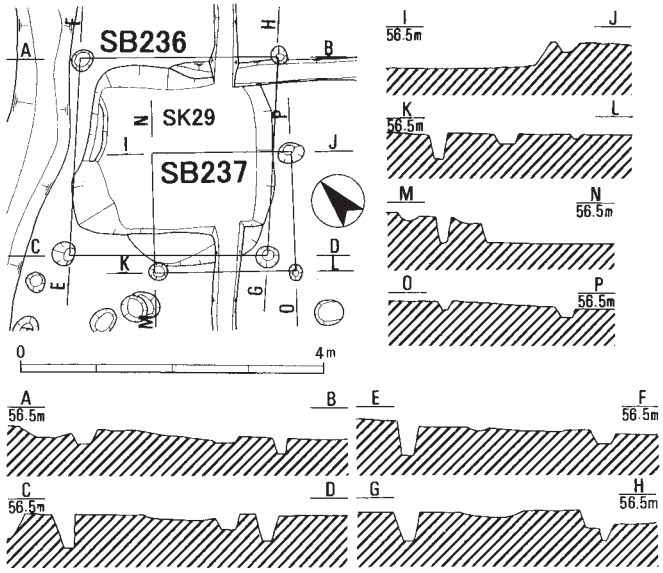




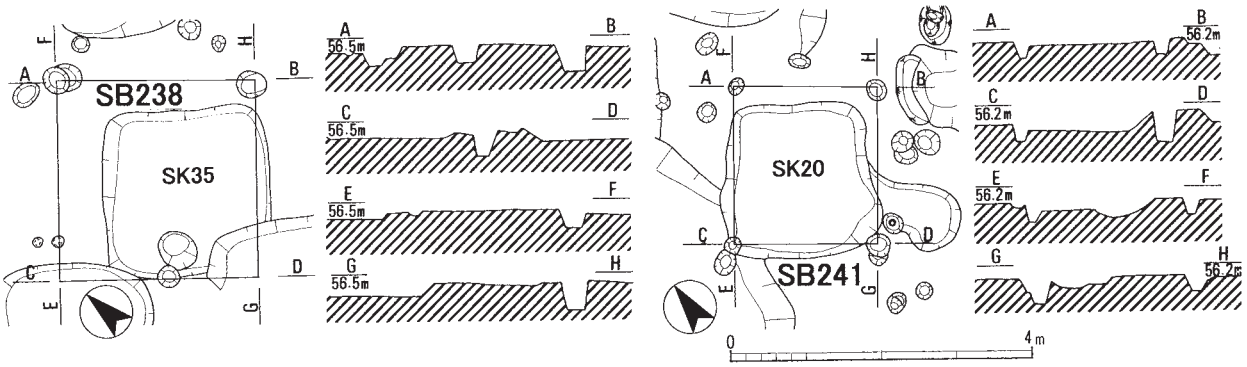


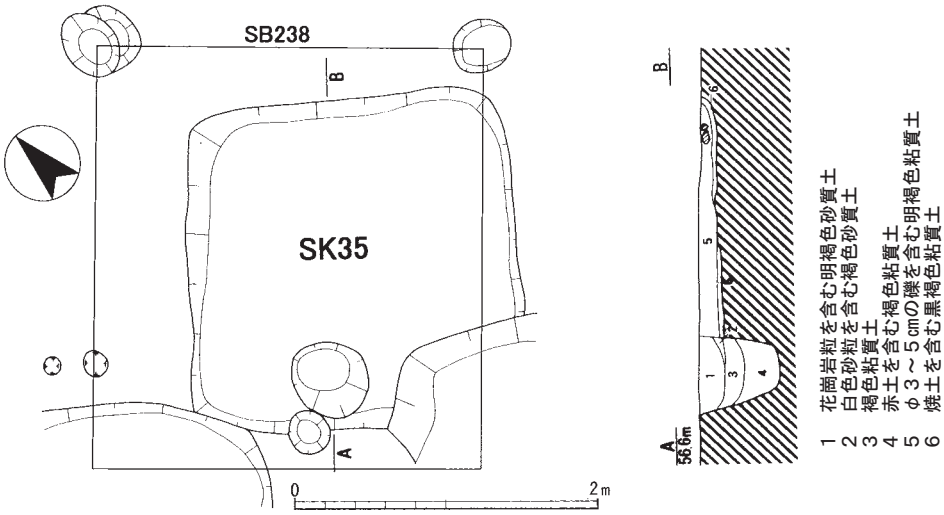


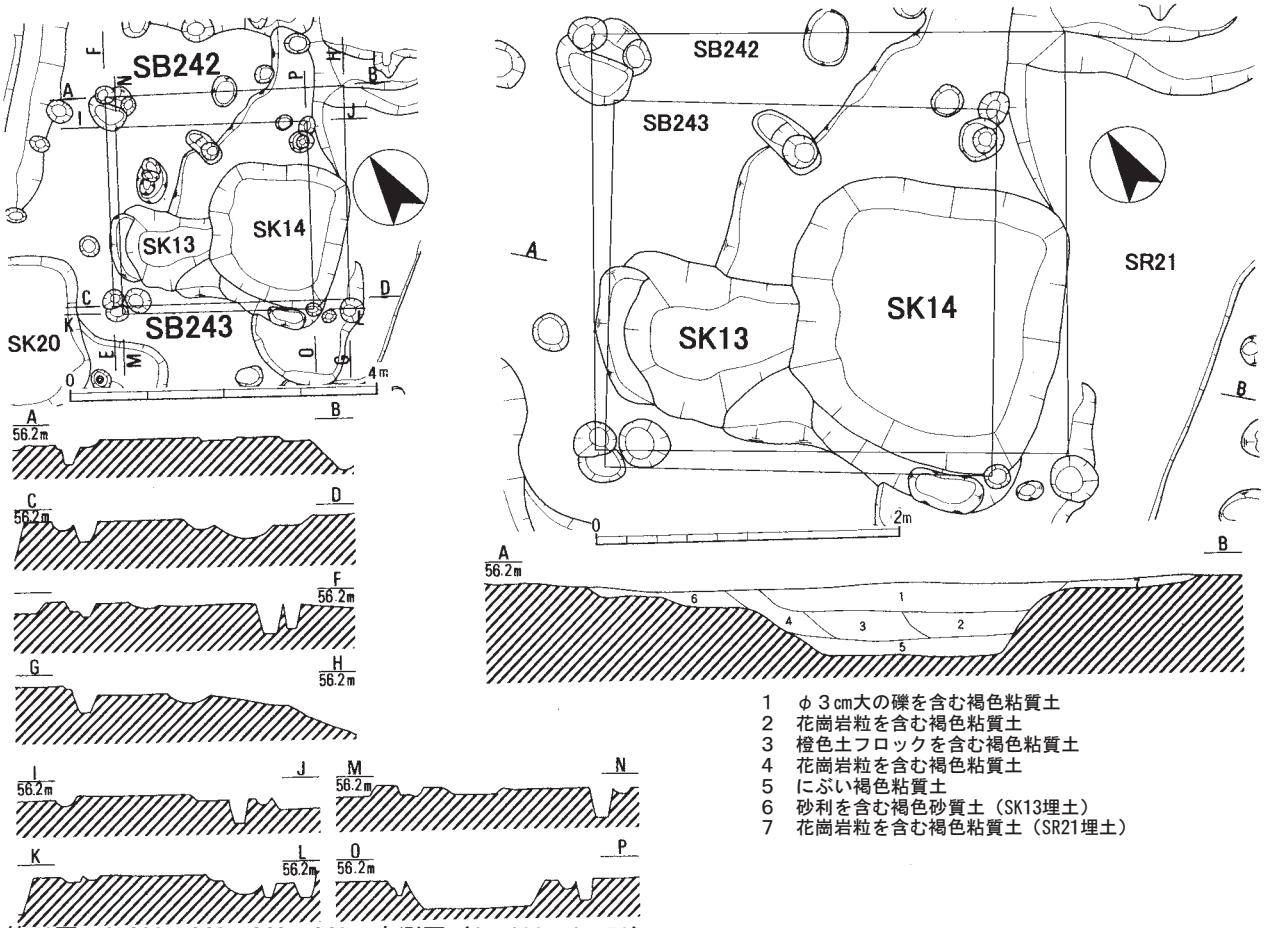
1 砂利を含む褐色砂質土（SK55埋土）
2 花崗岩粒を含む褐色砂質土（〃）
3 にぶい黄褐色砂質土（〃）
4 褐色砂質土（〃）
5 にぶい黄褐色粘質土（〃）
6 φ2cm大の礫を含むにぶい黄褐色粘質土（〃）
7 砂利を含む明褐色砂質土（SK56埋土）



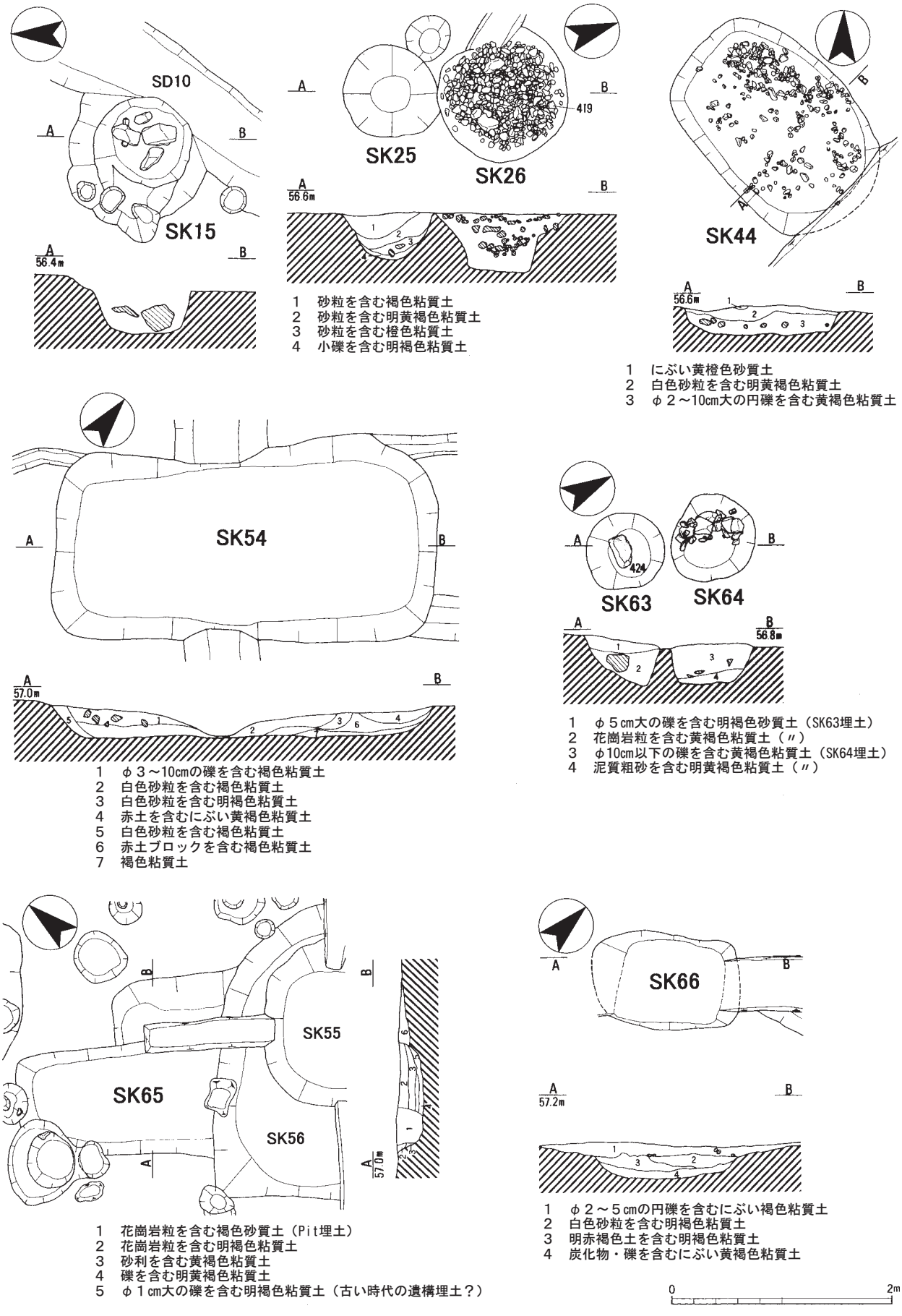
第75図　SB235・272、236、237実測図　（1：100、1：50）







第76図　SB238、241、242、243　実測図（1：100、1：50）



1　砂粒を含む褐色粘質土
2　砂粒を含む明黄褐色粘質土
3　砂粒を含む橙色粘質土
4　小礫を含む明褐色粘質土

1　にぶい黄橙色砂質土
2　白色砂粒を含む明黄褐色粘質土
3　φ２～10cm大の円礫を含む黄褐色粘質土

1　φ３～10cmの礫を含む褐色粘質土
2　白色砂粒を含む褐色粘質土
3　白色砂粒を含む明褐色粘質土
4　赤土を含むにぶい黄褐色粘質土
5　白色砂粒を含む褐色粘質土
6　赤土ブロックを含む褐色粘質土
7　褐色粘質土

1　φ５cm大の礫を含む明褐色砂質土（SK63埋土）
2　花崗岩粒を含む黄褐色粘質土（〃）
3　φ10cm以下の礫を含む黄褐色粘質土（SK64埋土）
4　泥質粗砂を含む明黄褐色粘質土（〃）

1　花崗岩粒を含む褐色砂質土（Pit埋土）
2　花崗岩粒を含む明褐色粘質土
3　砂利を含む黄褐色粘質土
4　礫を含む明黄褐色粘質土
5　φ１cm大の礫を含む明褐色粘質土（古い時代の遺構埋土？）

1　φ２～５cmの円礫を含むにぶい褐色粘質土
2　白色砂粒を含む明褐色粘質土
3　明赤褐色土を含む明褐色粘質土
4　炭化物・礫を含むにぶい黄褐色粘質土

第77図　SK15、25・26、44、54、63・64、65、66実測図(1：50)

持つ。

ＳＡ292（第67・78図）　区画15と16との間の長さ約28m、基底部幅４ｍの土塁である。現状では区画15との段差は約0.3ｍある。盛土が削平されているため、高さは不明であるが、土塁側溝であるＳＤ49の埋土の状況からみて、それほど高い盛土はなかったと思われる。

⑤柵

ＳＡ105（第72図）　長さ約8.1m、柱間４間の柵である。斜面の近くに造られている。ＳＢ244と重複しているが両者の前後関係は不明である。

ＳＡ106・234（第78図）　ＳＡ106は、長さ4.6m、柱間２間の柵である。他の柵と比較すると、柱穴が大きい。

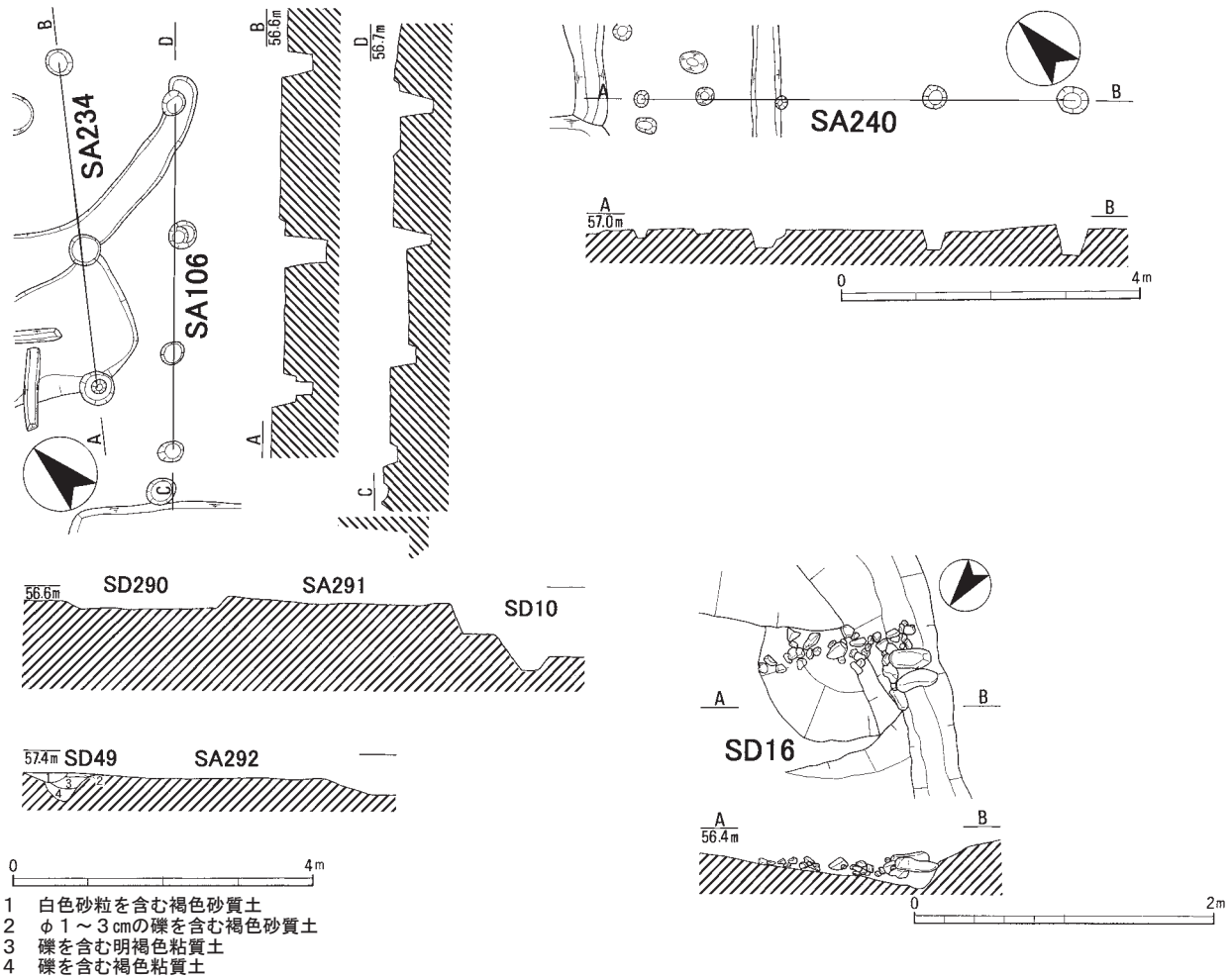
ＳＡ234は、長さ約4.4m、柱間３間の柵である。

ＳＡ240（第78図）　長さ約5.8m、柱間３間の柵である。斜面の近くに造られている。

⑥通路

ＳＲ21（第79図）　ＳＲ12から区画15に入る、長さ約11m、幅2.5mの通路である。ＳＲ12との分岐点目付近は農道により撹乱されており、両者がどのようにつながっていたのか不明である。斜面から平坦部に入るあたりでは、３段ほどの階段状の切りこみがみられた。埋土には人頭大の礫を多く含んでいた。このほか埋土から土師器羽釜・尾張系の鍋、焼成粘土塊が出土した。

ＳＲ22（第79図）　ＳＲ21と同様の、ＳＲ12から区画15に入る通路である。長さは約８ｍ、幅は約2.5mである。ＳＲ12との分岐点目付近は農道により撹乱されており、両者がどのようにつながっていたのか不明である。斜面から平坦部に入るあたりで、約20ｃｍの段と石列を検出した。階段として機能していたと思われる。埋土から土師器羽釜、瀬戸美濃製品の天目茶椀（大窯第３段階）が出土した。



第78図　SA106・234、240（1：100）、SD16（1：50）実測図

ＳＲ23（第80図）　ＳＲ22から北西に約４ｍ離れたところで、幅約２ｍの硬化面を検出した。硬化面はＳＲ21や22と直交する方向に作られているが、ＳＲ21や22とつながっていたかどうかは不明である。埋土から土師器皿が出土した。ＳＫ18と重複しているが、ＳＲ23は、ＳＫ18の埋没後に作られている。

⑦テラス状遺構　切岸（人工的に削り出した急斜面）と３段のテラス状遺構を検出した。テラス状遺構は区画15の範囲に収まりそうである。

ＳＲ117（第67図）　区画15の南西斜面の途中にある長さ約23m、幅約１ｍのテラス状の遺構である。区画15の平坦地との比高差は約1.4m、下のＳＲ118・119との比高差はそれぞれ1.4m、2.6mである。

ＳＲ118（第67図）　ＳＲ117の下にある長さ６ｍ以上、幅約１ｍのテラス状の遺構である。上のＳＲ117との比高差は約1.4m、下のＳＲ119との比高差は約2.6mである。

ＳＲ119（第67図）　ＳＲ117・118の下にある長さ21ｍ以上、幅約１ｍのテラス状の遺構である。上のＳＲ117・118との比高差はそれぞれ４、2.6mである。

（２）遺物（第81・82図、写真図版40・41）

①ＳＢ115関連遺物（396～399）

いずれも柱穴から出土した遺物である。396・397は土師器の皿。396は器壁が厚くゆるやかにたちあがり、397は器壁が薄く直線的にたちあがる。398は瀬戸美濃製品の灰釉端反皿。柱穴の掘形から出土した。大窯第１段階のものである。399は砥石である。

②ＳＢ233関連遺物（400～402）

いずれも柱穴から出土した遺物である。400は土師器の皿。器壁が薄くゆるやかにたちあがる。401は瀬戸美濃製品の鉄釉稜皿。大窯第２段階のものである。402は瀬戸美濃製品の擂鉢。大窯第３段階後半のものである。

③ＳＢ235関連遺物（403～406）

403は柱穴、404～406は建物内土坑ＳＫ56から出土した遺物である。403は瀬戸美濃産の擂鉢。大窯第３段階前半のものである。404は土師器の皿。器壁が薄く、直線的にたちあがり、口縁端部にヨコナデが施されるが、他のものと比べてヨコナデは弱い。405は中北勢系の土師器の茶釜。口縁端部が外側につまみ出され、上端に面をもつが、この部分のヨコナデは弱い。鍔の下のほかに、耳のあたりにまで煤が付着する。406は瀬戸美濃製品の水差。大窯第３段階のものである。口縁端部が磨耗し、釉が禿げ落ちている。

④ＳＢ236関連遺物（407）

407は建物内土坑ＳＫ29から出土した遺物である。瀬戸美濃製品の擂鉢で大窯第３段階のものである。

⑤ＳＢ239関連遺物（408～415）

建物内土坑ＳＫ27出土の遺物には、土師器羽釜（408）、瀬戸美濃製品（409～411）、白磁（412）、石臼（413・414）がある。408は中北勢系の土師器羽釜。口縁部が直立し、口縁端部は斜め上方につまみ上げられ、内端に面を持つ。面は凹線状になっている。残存部には穿孔はない。

瀬戸美濃製品のうち409は大窯第２段階の天目茶椀、410は大窯第１～２段階の灰釉丸皿か端反皿である。411は大窯第１段階の花瓶である。頸部に穿孔があり、掛花活けとして使われていた可能性がある。肩部の割れ口が丁寧に研磨されている。

413・414は花崗岩製の石臼である。石材が非常に似ており、セットになるかもしれない。

415は建物内土坑ＳＫ28から出土した瀬戸美濃製品の擂鉢である。古瀬戸後Ⅳ期新段階のものである。

⑥ＳＢ241関連遺物（416）

416は建物内土坑ＳＫ20から出土した土師器の皿。器壁が薄くゆるやかにたちあがる。全面に黒斑がみられる。

⑦土坑出土遺物（417～424）

417はＳＫ18から出土した瀬戸美濃製品の口広有耳壷。古瀬戸後Ⅳ期のものである。

418・419はＳＫ26から出土した遺物である。418は瀬戸美濃製品の徳利。大窯第２段階のものである。419は平瓦の狭端部。糸切り痕が明瞭に残る。

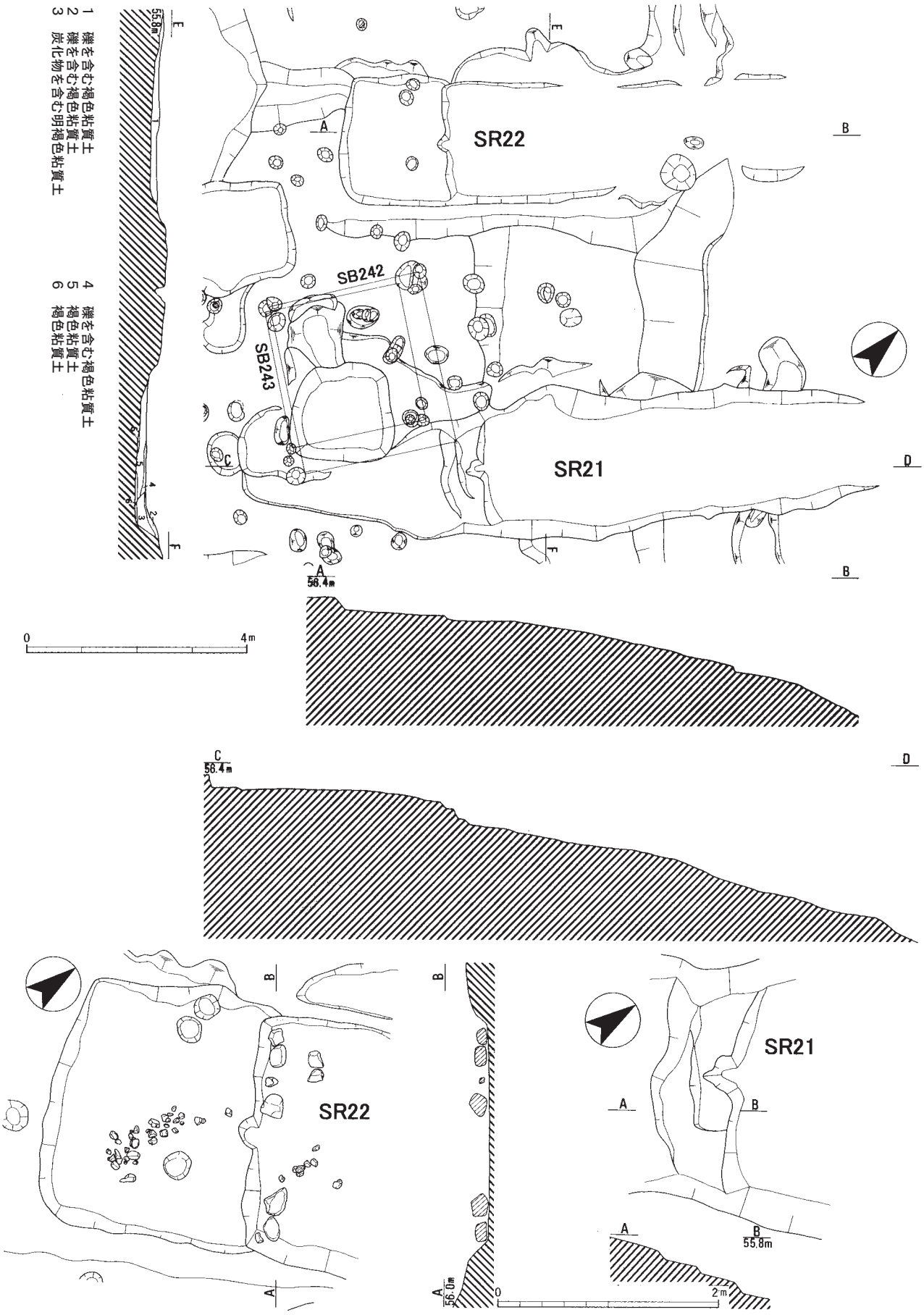
420はＳＫ54から出土した中北勢系の土師器羽釜である。口縁部が直立し、口縁端部が外反する。

421～423はＳＫ55から出土した遺物である。421は瀬戸美濃製品の天目茶椀。大窯第３段階のものである。422は白磁の端反皿。423は砥石である。

424はＳＫ63から出土した常滑製品の壷。12型式のものである。

⑧溝・通路出土遺物（425～428）

425はＳＤ46から出土した土師器羽釜である。口縁



第79図　SR21・22　実測図（1：100、1：50）

部は直立し、口縁端部のつまみ出しはみられない。残存部には穿孔はない

426は通路遺構ＳＲ21から出土した尾張系の鍋。器壁は薄手で、口縁部内端の突出は方形に近い。鈴木編年のⅠ－１～２期のものと思われる。427はＳＲ22から出土した瀬戸美濃製品の天目茶椀。大窯第３段階のものである。428はＳＲ23から出土した土師器の皿。器壁が薄く、ゆるやかにたちあがる。

⑨ピット出土遺物（429～437）

建物としてまとまらなかったピット出土の遺物である。429は土師器の皿。器壁が薄く、直線的にたちあがるが、磨耗が激しく調整などは不明である。430・431は中北勢系の羽釜。430の口縁部は内傾気味で、口縁端部は上方につまみ上げられ、内端に面を持つが、面は凹線状にはなっていない。鍔部直上に焼成前穿孔がある。431の口縁部は直立気味で、口縁端部の上端に面をもっているが、ヨコナデは弱い。残存部には穿孔はない。

瀬戸美濃製品のうち、432は大窯第３段階前半の天目茶椀、433は大窯第１段階の灰釉端反皿である。

常滑製品には甕（434）と片口鉢（435）がある。434は12型式のものである。

436は染付の椀、437は砥石である。

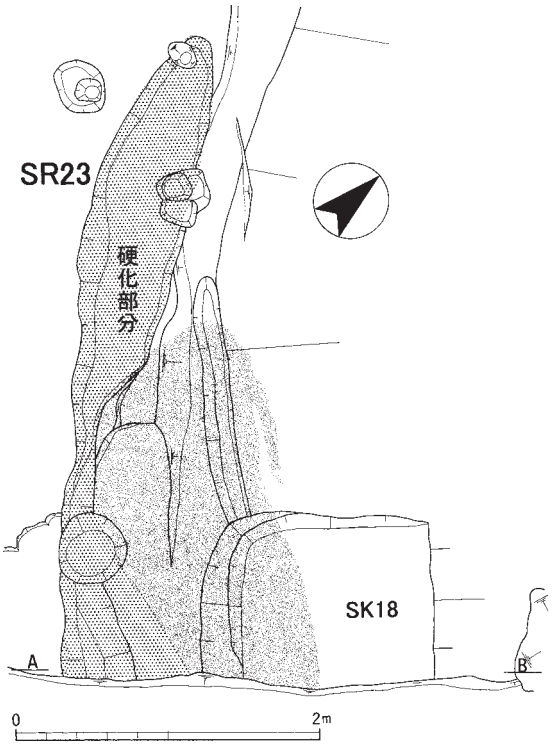
⑩包含層出土遺物（438～461）

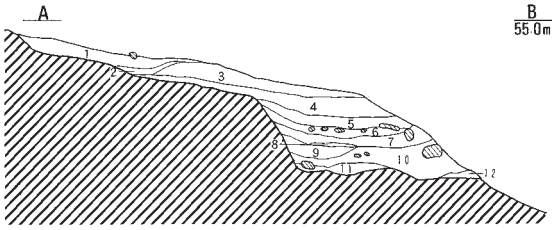
土師器（438～441）・瀬戸美濃製品（442～452）・常滑製品（454～461）などがある。

438・439は土師器の皿。器壁が薄くゆるやかにたちあがる。440は中北勢系の土師器羽釜。口縁部は内傾気味で、口縁端部は上方につまみ上げられ、内端に面を持つが、面は凹線状にはなっていない。鍔部直上に焼成前穿孔がある。441は茶釜の耳。耳の周囲にハケによる調整が施される。耳の下部には煤が付着する。

瀬戸美濃製品のうち、442～446は天目茶椀。442は大窯第１段階前半、443は大窯１段階、443～446は大窯第２段階のものである。447は大窯第３段階前半の鉄釉稜皿。448～450は擂鉢。448は大窯第１段階後半、449は大窯第２段階前半のものである。450は大窯第２～３段階のものであろう。451は大窯第１～２段階の徳利、452は瓶である。古瀬戸後Ⅳ期のものと思われる。

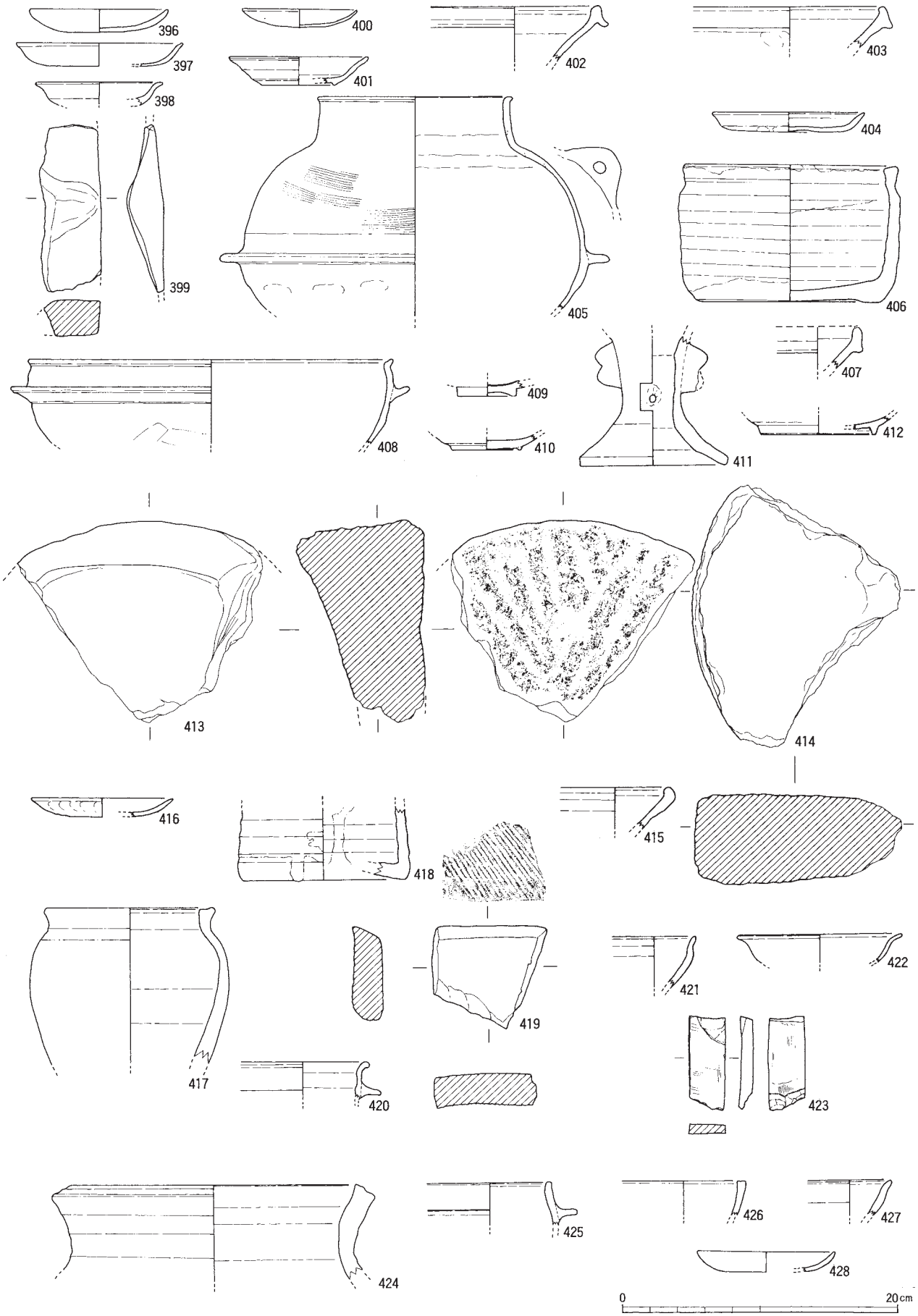
常滑製品のうち、454～456は片口鉢。455は小形



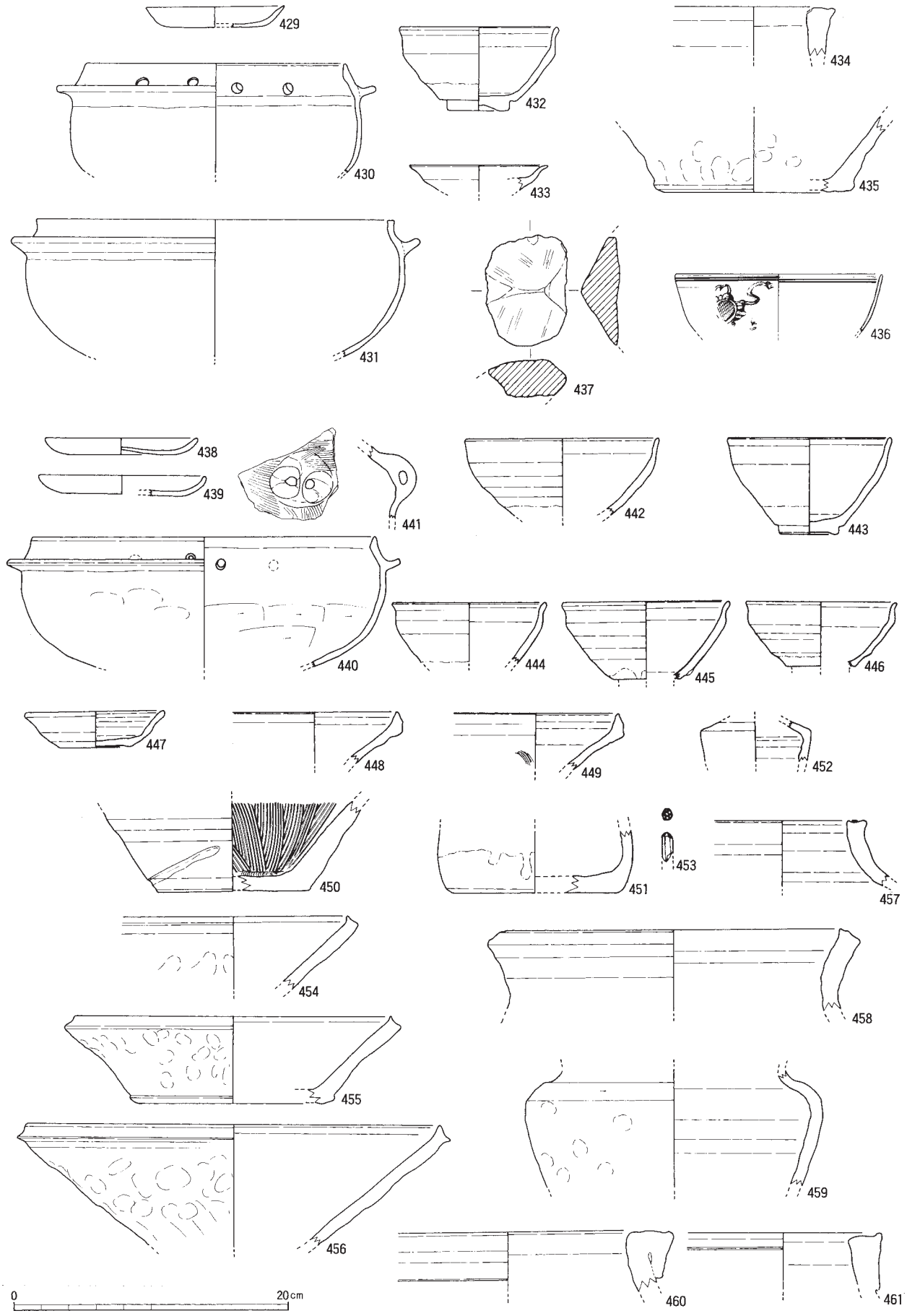


1　φ４～10㎝の円礫を含む明褐色粘質土
2　白色砂粒を含むにぶい黄橙色粘質土
3　白色砂粒を含む明褐色粘質土
4　小礫を含む黄褐色粘質土
5　白色砂粒を含む明褐色粘質土
6　φ２～７㎝のシルト塊を含む褐色粘質土
7　φ３㎝大の円礫を含む黄褐色粘質土
8　明褐色粘質土
9　φ２㎝大の円礫を含む黄褐色粘質土
10　φ４㎝大の円礫を含む明黄褐色粘質土
11　青色砂粒を含む黄褐色粘質土
12　φ10㎝大の円礫を含む明褐色粘質土

第80図　SR23　実測図（1：50）



第81図　区画15　掘立柱建物、土坑、溝、通路出土遺物実測図（1：4）



第82図　区画15　Pit、包含層出土遺物実測図（1：4）

のもので、12型式のもの、456は10型式のものである。457・458は壷。いずれも12型式のものである。459は、13世紀後半の片口椀である。460・461は甕。いずれも11型式のものである。

区画16（第63図、写真図版４・６・22・23）

区画15の北西、標高約57ｍの尾根上に立地する約37ｍ×32ｍの区画。隣接する区画15とは約１ｍ、区画17とは約１ｍの段差がある。南西斜面には数段のテラス状遺構がある。

区画内から、掘立柱建物16棟、土坑、溝、柵などを検出した。

（１）遺構

①掘立柱建物　掘立柱建物には、区画の主屋と考えられる大規模なもの（ＳＢ207、210・212）、中規模で総柱のもの（ＳＢ218）、中規模で側柱のもの（ＳＢ208、209）、小規模で側柱のもの（ＳＢ211、213、214、215）、１間×１間あるいは２間×１間で、内部に方形の土坑を持つもの（ＳＢ206、217）がある。

ＳＢ207（第86図）　道路遺構ＳＲ12のすぐ際で検出した。桁行５間×梁行３間の建物である。区画内ではＳＢ210・212と並ぶ最大級の建物である。建物内土坑は持たない。

ＳＲ12、ＳＢ208、209、210、211、212など多くの遺構と重複しているが、ほとんどの遺構との前後関係は明確ではない。ただしＳＲ12は時期が降るとともに区画16側に蛇行しており、この蛇行によりＳＢ207と重複するようになるので、建物はそれとともに廃絶したと思われる。

ＳＢ210・211・212（第84図、写真図版24・25）
区画のほぼ中央で検出した。区画内ではＳＢ207とならぶ最大級の建物である。

ＳＢ210は、桁行４間以上×梁行３間の建物である。ＳＢ209と柱筋がほぼ一致するので、両者は同時に存在していたと考えられる。

ＳＢ212は、桁行４間以上×梁行２間の建物である。建物北西側の１間分の庇は土間かもしれない。区画２内では最大級の建物である。柱穴から土師器皿（463）・瀬戸美濃製品の灰釉丸皿（464＝大窯第２段階）、磁器皿（465・466）が出土した。ＳＢ213と南西側の柱筋がほぼ一致するので、両者は同時に存在していたと考えられる。

建物内土坑は複雑に重複しているが、ＳＫ170・172・173は、概ねＳＢ210・212に伴うものと思われる（第85図、写真図版25・26）。ＳＫ172の底面に張り付くように、土師器羽釜（470）が出土した。このほかＳＫ170からは土師器茶釜、瀬戸美濃製品の天目茶椀（大窯第２段階）、擂鉢（大窯第２～３段階）が、ＳＫ172からは土師器皿・羽釜、瀬戸美濃製品の天目茶椀（大窯第１段階）・祖母懐壷（古瀬戸後期）・山茶椀（12型式）、常滑製品の片口鉢が出土している。

ＳＢ211は、桁行４間以上×梁行１間の桁行の長い建物である。柱穴から土師器皿が出土している。底に灰オリーブ粘質土が敷かれたＳＫ171はこの建物に伴う土坑であろうか。

この３棟はＳＢ208、215などと重複しているが、柱穴の切り合い関係からその前後関係は、ＳＢ211→ＳＢ212・213→ＳＢ210・209→ＳＢ208という順になると考えられる。

ＳＢ218（第87図）　桁行３間×梁行２間の総柱の建物である。区画内では中規模な建物である。柱穴は小さく浅い。建物の南東側に浅い土坑（ＳＫ164）があるが建物に伴うものかどうか不明である。

ＳＢ204（第87図、写真図版23）　区画の南西端近くで検出した。南西斜面の際に建てられている。桁行２間×梁行１間の建物で、平面形はほぼ正方形である。柱穴はほかの小規模な建物に比べると大きくかつ深い。

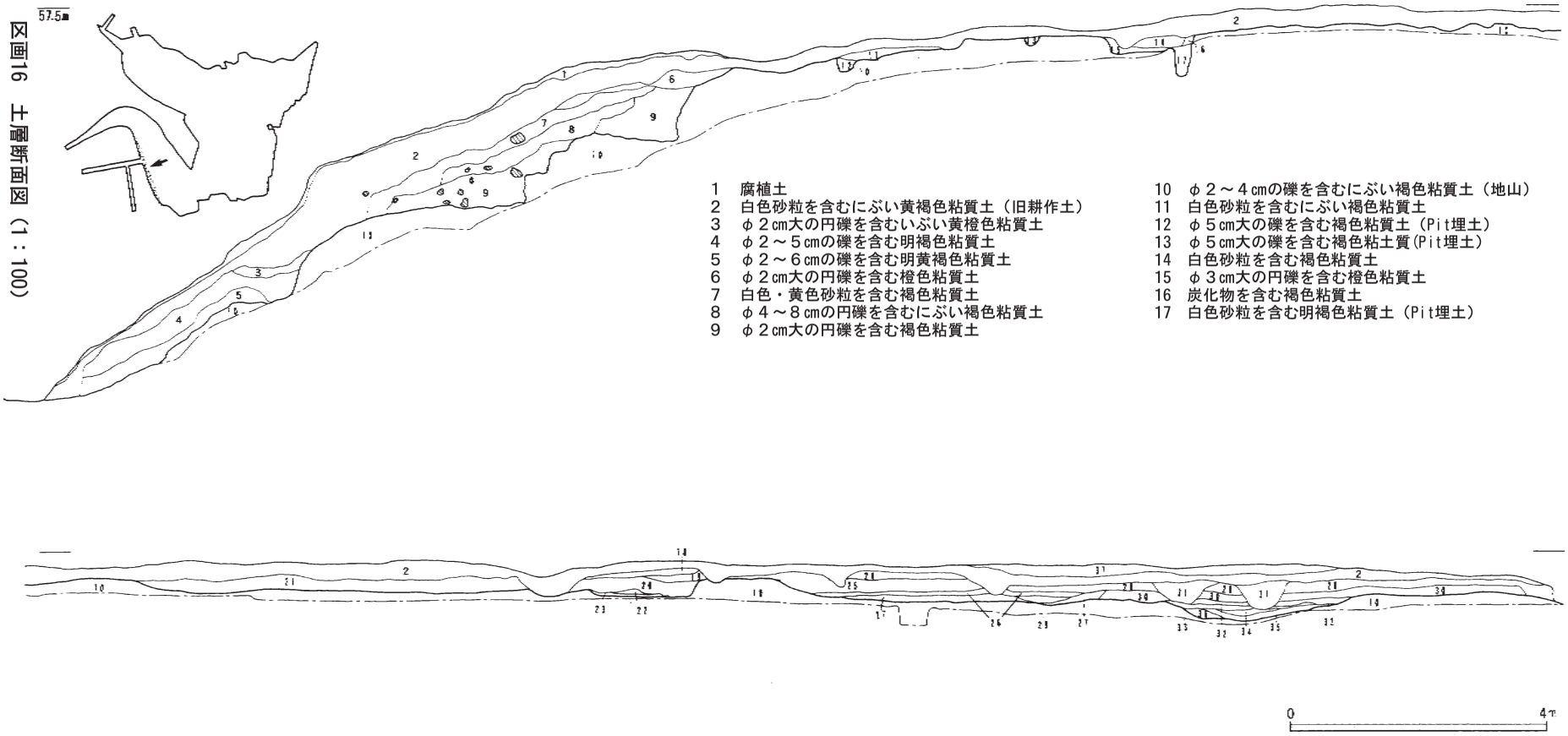
ＳＢ205（第87図、写真図版24）　ＳＢ204と同様、南西斜面の際に建てられている。桁行３間×梁行１間の細長い建物である。柱穴はほかの小規模な建物と比べると深い。

ＳＢ208（第88図）　桁行３間×梁行２間の建物である。建物の平面形は正方形に近く、規模もＳＢ209とよく似ている。柱穴から山茶椀（12型式）、焼成粘土塊が出土している。

ＳＢ207、209、210、213と重複している。ＳＢ209、210との前後関係は前述のとおりであり、ＳＢ213との前後関係はＳＢ213→ＳＢ208となる。

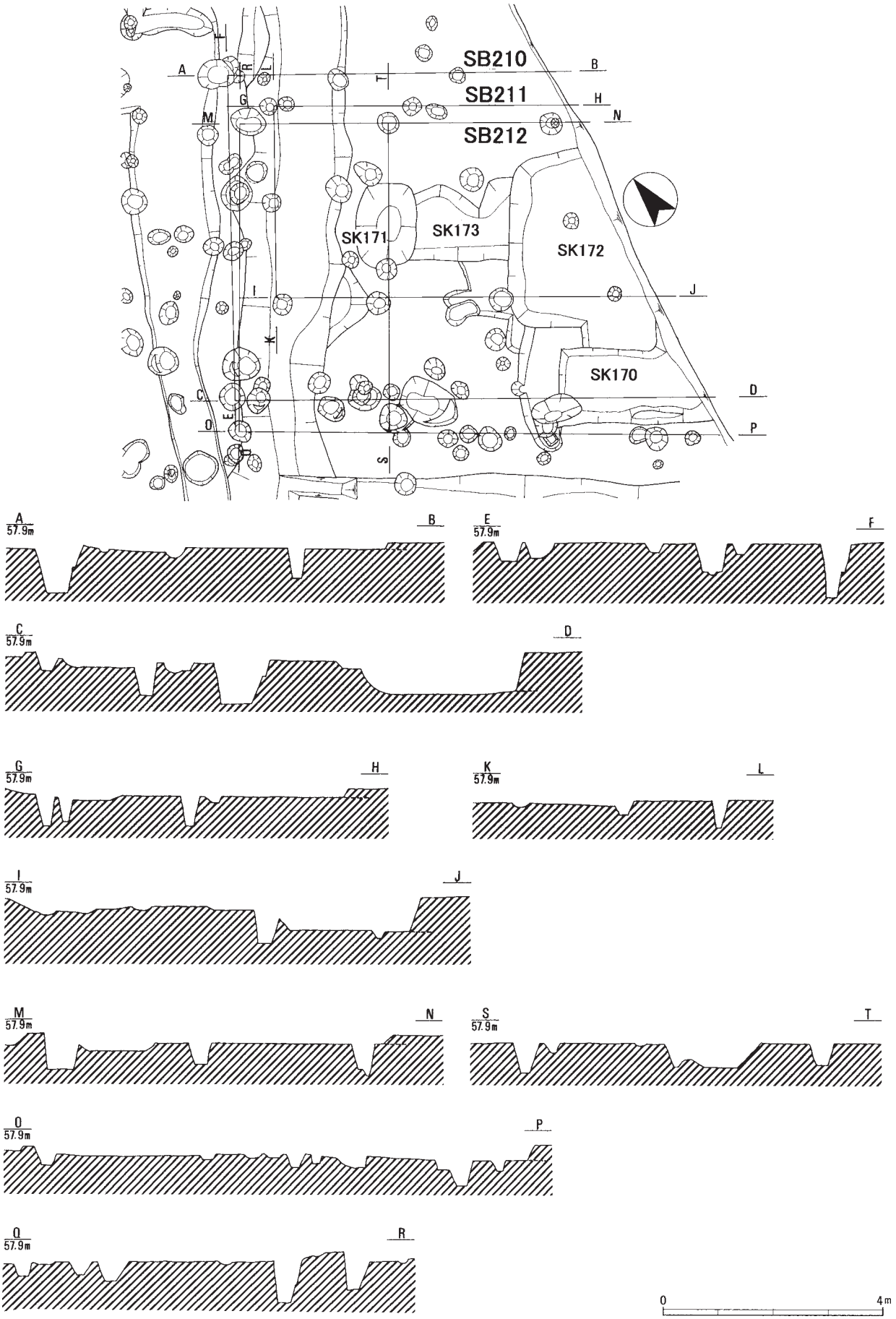
ＳＢ209（第88図）　３間×３間の建物である。建物の平面形は正方形に近い。ＳＢ207、208、213と重複

第83図　区画16　土層断面図（1：100）



1　腐植土
2　白色砂粒を含むにぶい黄褐色粘質土（旧耕作土）
3　φ２cm大の円礫を含むいぶい黄橙色粘質土
4　φ２～５cmの礫を含む明褐色粘質土
5　φ２～６cmの礫を含む明黄褐色粘質土
6　φ２cm大の円礫を含む橙色粘質土
7　白色・黄色砂粒を含む褐色粘質土
8　φ４～８cmの円礫を含むにぶい褐色粘質土
9　φ２cm大の円礫を含む褐色粘質土
10　φ２～４cmの礫を含むにぶい褐色粘質土（地山）
11　白色砂粒を含むにぶい褐色粘質土
12　φ５cm大の礫を含む褐色粘質土（Pit埋土）
13　φ５cm大の礫を含む褐色粘土質(Pit埋土)
14　白色砂粒を含む褐色粘質土
15　φ３cm大の円礫を含む橙色粘質土
16　炭化物を含む褐色粘質土
17　白色砂粒を含む明褐色粘質土（Pit埋土）

18　白色砂粒を含む橙色粘質土
19　白色・黄色砂粒を含む明褐色粘質土
20　φ２cm大の円礫を含む褐色粘質土
21　根を含む黄褐色粘質土
22　白色・黄色砂粒を含む黄褐色粘質土
23　白色砂粒を含むにぶい黄褐色粘質土
24　白色・黄色砂粒を含む明褐色・黄褐色混合粘土
25　白色・黄色砂粒を含む黄褐色粘質土
26　φ２～４cmの円礫を含む橙色粘質土
27　φ５cm大の円礫を含む明黄褐色粘質土
28　白色・黄色砂粒を含むにぶい黄褐色・橙色粘質土
29　白色・黄色砂粒を含む黄褐色粘質土
30　青色・白色砂粒を含む橙色粘質土
31　φ２cm大の礫を含む明褐色粘質土（溝埋土）
32　白色・黄色砂粒を含む橙色粘質土
33　白色砂粒を含む明褐色粘質土
34　白色砂粒を含む明黄褐色粘質土
35　白色砂粒を含むにぶい黄橙色粘質土
36　白色・黄色砂粒を含む明褐色粘質土
37　小石・根を含む造成土



第84図　SB210～212実測図（１：100）

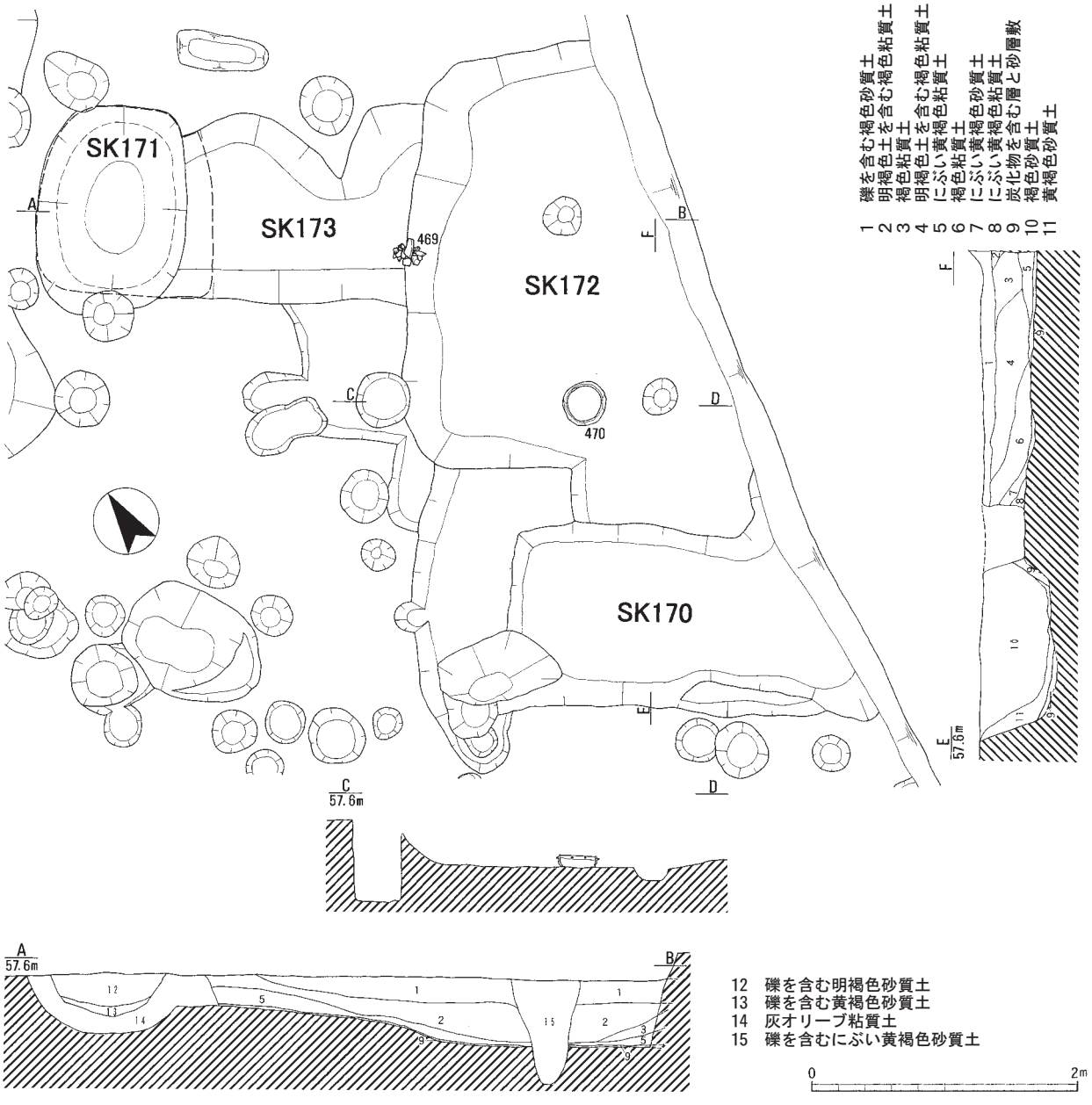
している。ＳＢ207、208との前後関係は前述のとおりであり、ＳＢ213との前後関係はＳＢ213→ＳＢ209になるのではと思われる。また、南西と北東の柱筋がＳＢ210の柱筋とほぼ一致するので、ＳＢ210と同時存在していた可能性が高い。

ＳＢ116（第89図）　区画の南隅近くで検出した。桁行３間×梁行１間の細長い建物である。柱穴から瀬戸美濃製品の壷と思われる小片が出土した。よく似た平面形のＳＢ206と重複しているが、ＳＢ116の柱穴埋没後にＳＢ206の建物内土坑ＳＫ166が掘削されているので、両者の前後関係はＳＢ116→ＳＢ206となる。

ＳＢ213（第88図）　１間×１間の建物である。建物の形状は正方形である。ＳＢ208、209と重複している。三者の前後関係は前述のとおりである。

またＳＢ212と南西側の柱筋がほぼ一致するので、両者は同時に存在していたと考えられる。

ＳＢ214（第89図）　桁行３間×梁行１間の細長い建物である。柱穴から土師器皿、瀬戸美濃製品の擂鉢（大窯期）、白磁小椀、石臼が出土している。ＳＢ



第85図　SK170～173　遺物出土状況図　（1：50）

215と重複しているが両者の前後関係は不明である。

またＳＢ210の北西の柱筋とＳＢ214の南東の柱筋がほぼ一致するので、両者が同時に存在していた可能性がある。

ＳＢ215（第89図）　桁行２間×梁行１間の建物である。

ＳＢ210、212と重複しているが、ＳＢ210の柱穴埋没後にＳＢ215の柱穴が掘削されていることなどから、三者の関係はＳＢ212→ＳＢ210→ＳＢ215となる。

ＳＢ216（第88図）　１間×１間の小規模な建物である。区画16内では最小の建物である。

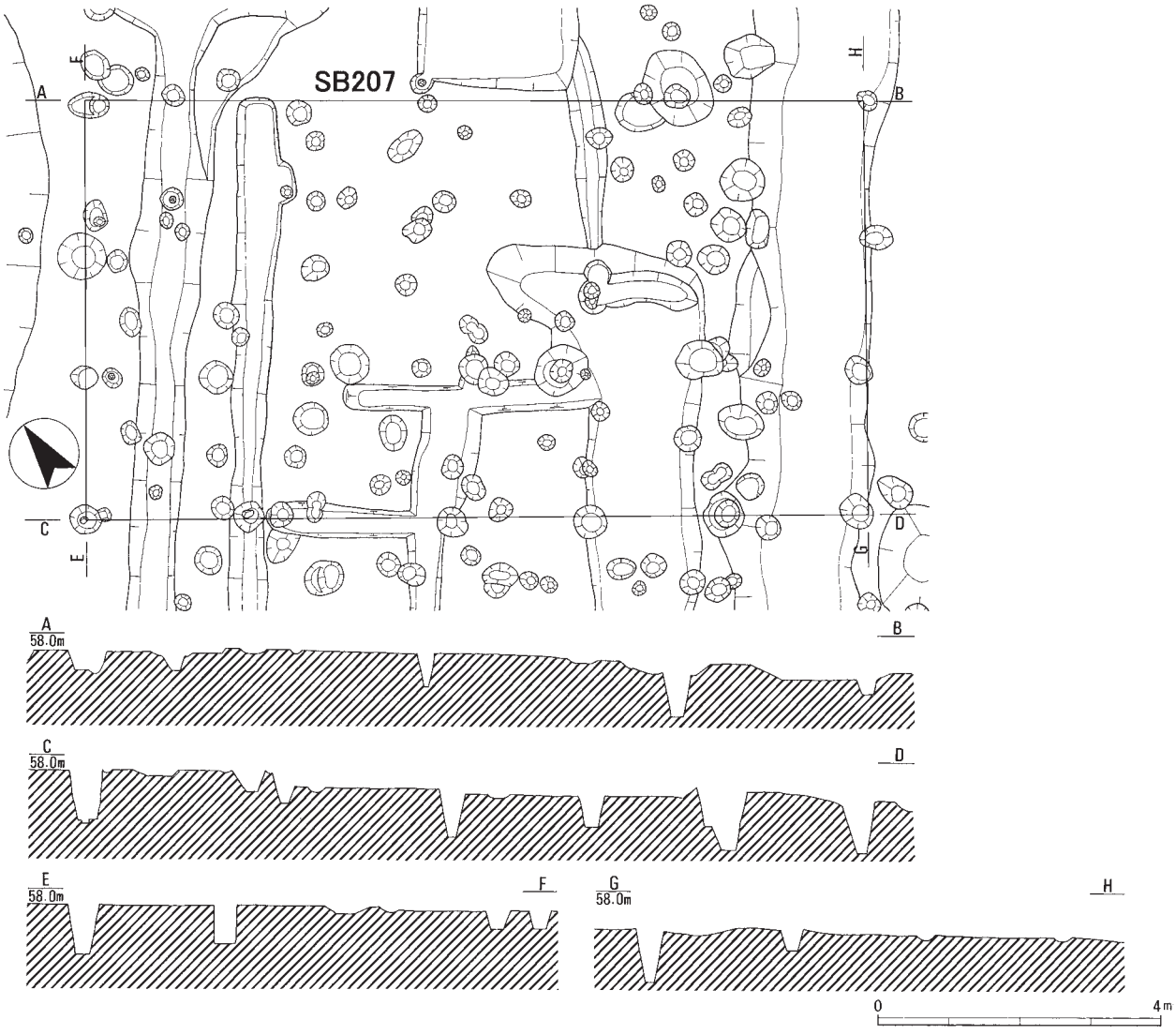
ＳＢ206（第89図）　区画の南隅近くで検出した。桁行３間×梁行１間の細長い建物で建物内土坑（ＳＫ166）を持つ。よく似た平面形のＳＢ116と重複しているが、ＳＢ116の柱穴埋没後にＳＢ206の建物内土坑ＳＫ166が掘削されているので、両者の前後関係はＳＢ116→ＳＢ206となる。

建物内土坑ＳＫ166は一辺約2.3m、深さ約0.2mの正方形の土坑で、ＳＤ53とつながっている。埋土から瀬戸美濃製品の擂鉢（大窯期）が出土した。

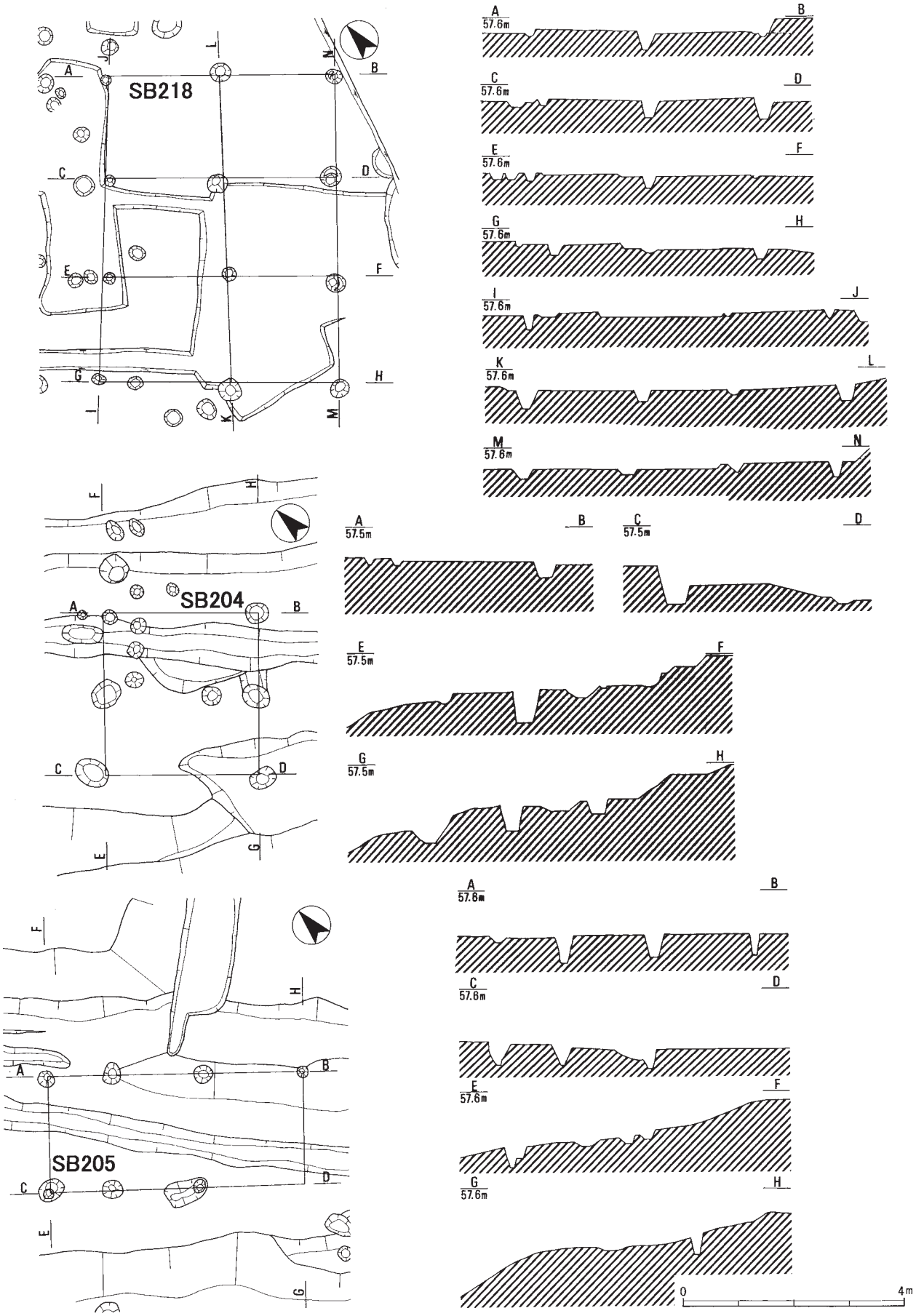
ＳＢ217（第90図）　内部に長辺約2.2m、短辺約1.9m、深さ約0.35mの方形の土坑（ＳＫ182）を持つ１間×１間の建物である。ＳＫ182の埋土から土師器皿、瀬戸美濃製品の香炉（大窯第３～４段階）、常滑製品の壷が出土した。

②土坑

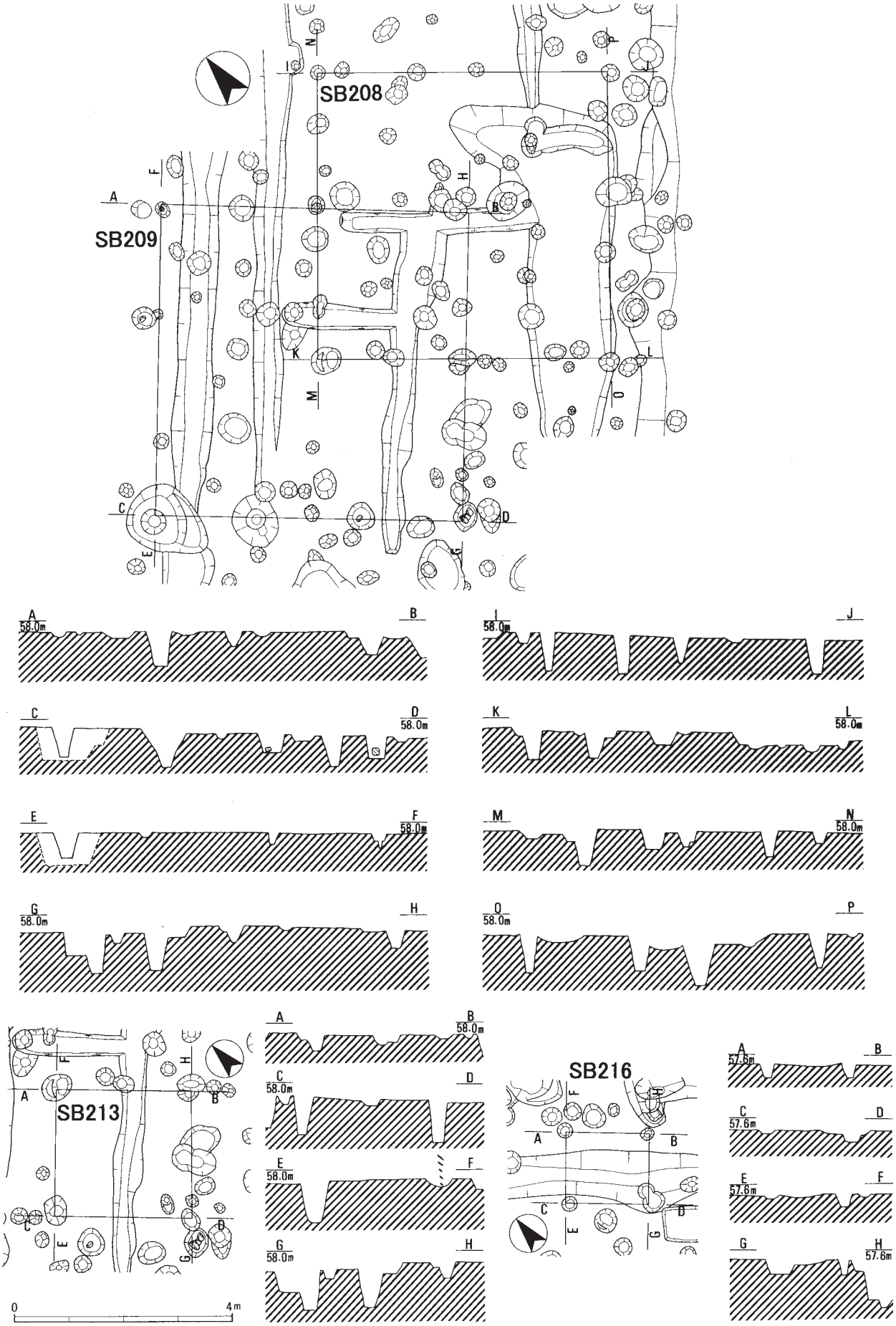
ＳＫ52（第91図）　区画の南東側で検出した。一辺約２m、深さ約0.4mの隅丸方形の土坑である。断面



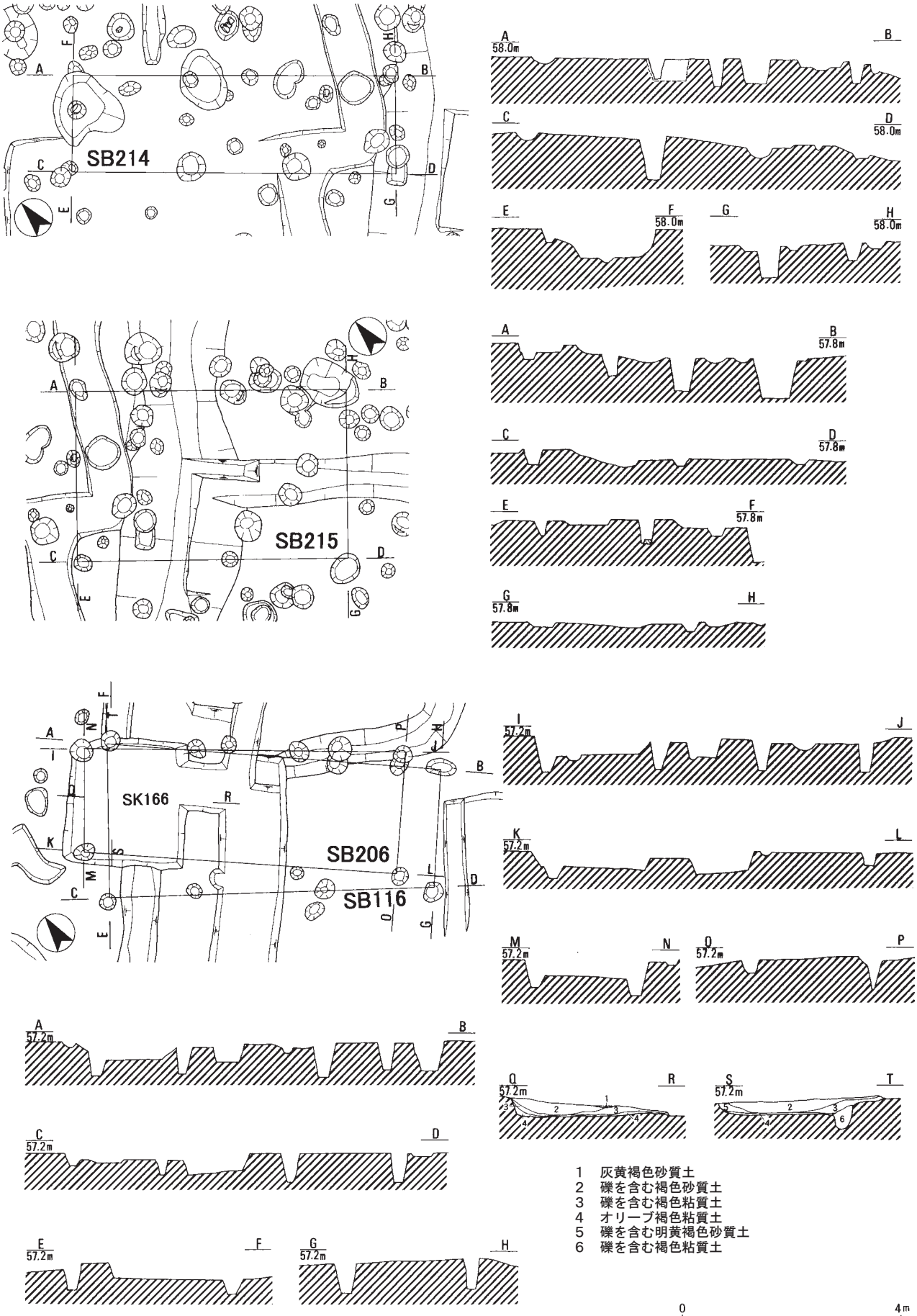
第86図　SB207　実測図（1：100）



第87図　SB204、205、218　実測図（1：100）



第88図　SB208・209、213、216実測図（1：100）



第89図　SB116・206、214、215実測図（1：100）

形は皿状を呈する。埋土から土師器羽釜、常滑製品の甕が出土した。

ＳＫ169（第91図）　区画の南西側、南西斜面の際で検出した。直径約１ｍ、深さ約0.3mの円形の土坑である。埋土上面には礫が多く含まれている。

ＳＫ181（第91図）　区画の北東側、ＳＲ12近くで検出した長径約4.5m、短径約1.8m、深さ約0.3mの長楕円形の土坑。ＳＤ179とつながっているので、溝を構成する遺構なのかもしれない。埋土から土師器皿、瀬戸美濃製品の擂鉢（大窯期）・山茶椀（12型式）、茶臼が出土した。道路遺構ＳＲ12と重複しており、土坑はそれ以前に廃絶したと思われる。

ＳＫ201（第92図、写真図版26）　区画の北隅で検出した。長径約４ｍ、短径約1.5m、深さ約0.5mの長楕円形の土坑である。ＳＤ175とつながっているので、溝を構成する遺構なのかもしれない。埋土中に20～30㎝程の石が多数含まれる。このほか埋土からは土師器皿・羽釜、瀬戸美濃製品の灰釉端反皿（大窯第１段階後半）・擂鉢（大窯期）・花瓶（古瀬戸後Ⅳ期新段階）、常滑製品の片口鉢・甕が出土している。ＳＲ12は時期が下るとともに区画16側に蛇行しており、これによりＳＫ201と重複するようになるので、土坑はそれとともに廃絶したと思われる。

③溝

ＳＤ49（第63・78図）　区画15との境となる土塁ＳＡ192の側溝である。長さ約30m、幅約１ｍである。土層観察によると、２度の掘削がみられる。埋土から土師器皿・羽釜、瀬戸美濃製品の天目茶椀（大窯第１～２段階）・擂鉢（大窯第１段階・第２～３段階）・徳利（大窯期）・山茶椀（12型式）、常滑製品の甕・壷（12型式）、瓦、茶臼が出土した。近世のものと思われる陶磁器も出土しているが、これは再掘削以降の遺物であると思われる。

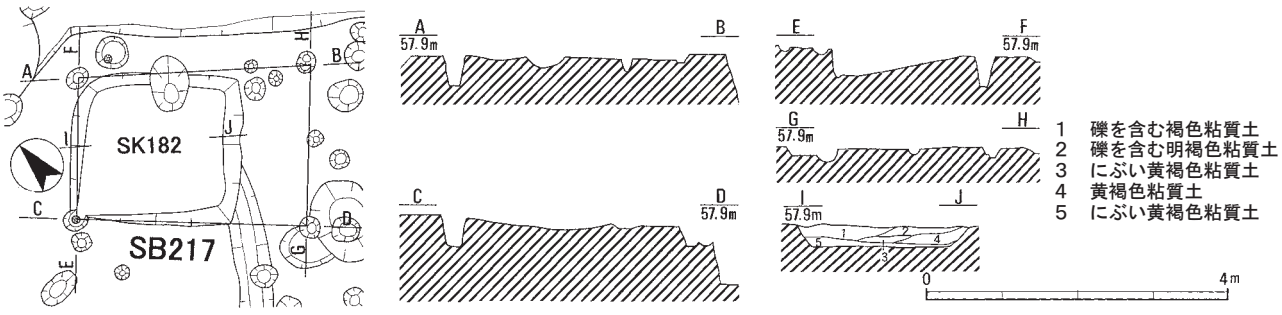
ＳＤ59（第92図）　区画の南隅近くの斜面際で検出した長さ約７ｍ、幅約1.5mの溝である。途中で直角に向きを変えている。埋土から茶臼が出土した。

ＳＤ162　区画の中央で検出した長さ約30ｍ、幅約1.5mの溝である。埋土自体は新しいもので、近世の遺物も含むが、区画16をほぼ二分する場所に掘削されている点、ＳＲ12をはさんだ向かいの、区画12と13の境界と一致することから、区画16をさらに小区画する溝の可能性がある。

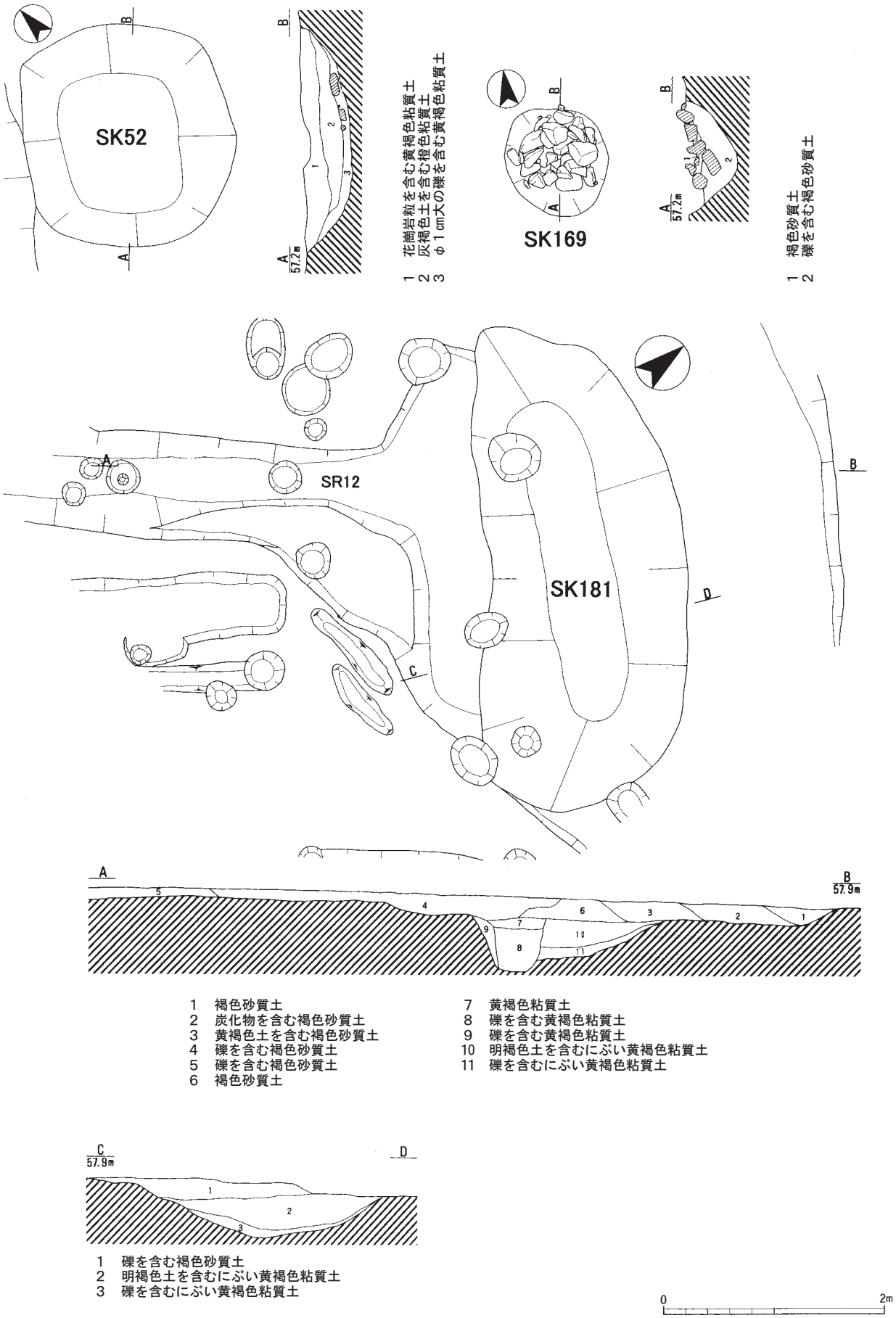
ＳＤ174（第63図）　ＳＤ162と同じ向きに掘削された、長さ約10m、幅約1.5mの溝である。埋土から土師器皿、山茶椀（12型式）が出土した。

ＳＤ175・177・179（第63図）　いずれも区画の北西側で検出した。ＳＤ175は区画17との境となる土塁ＳＡ295の側溝である。長さ約30m、幅約1.5mで、北東端がＳＫ201とつながっている。埋土から土師器皿・尾張系の鍋、羽釜（中北勢系）、瀬戸美濃製品の天目茶椀（大窯第１段階・第２段階）、鉄釉稜皿（大窯第３段階前半）・鉄釉大皿（大窯第１～３段階）・擂鉢（古瀬戸後Ⅳ期新段階、大窯第１段階）・桶（古瀬戸後Ⅳ期）・山茶椀（12型式）、常滑製品の方口鉢・甕、鉄製品が出土した。

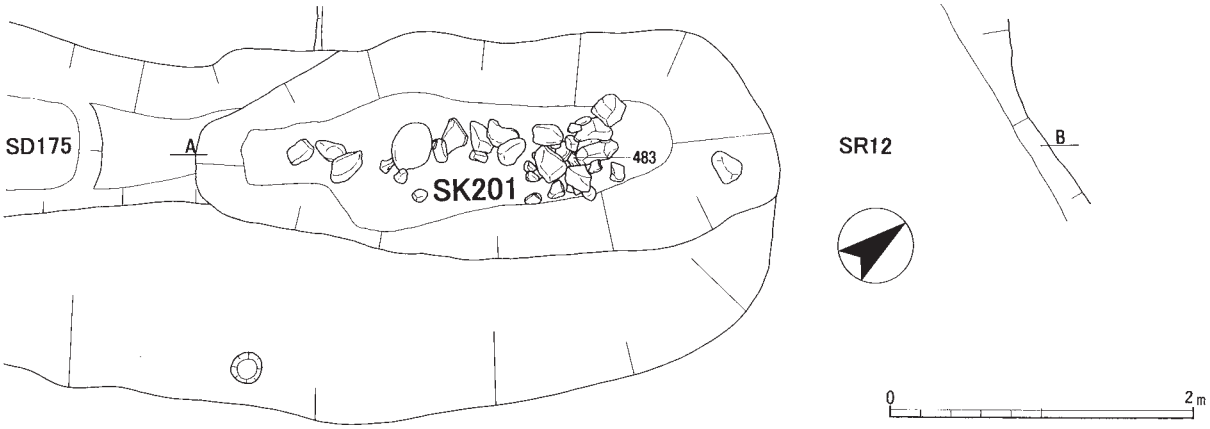
ＳＤ177はＳＤ175と重複する溝である。ＳＤ175の掘削により壊されている。埋土から土師器皿・羽釜、瀬戸美濃製品の天目茶椀（大窯第２段階）・鉄釉大皿（大窯第１～３段階）・擂鉢（大窯第１段階後半、第２～３段階）・山茶椀（12型式）、常滑製品の甕が出土した。ＳＤ179は長さ約15m、幅約１ｍの溝で、北東端がＳＫ181とつながっている。埋土から瀬

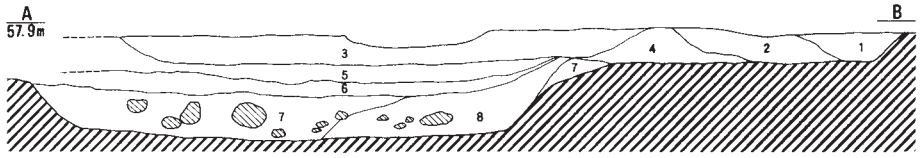


第90図　SB217　実測図（１：100）

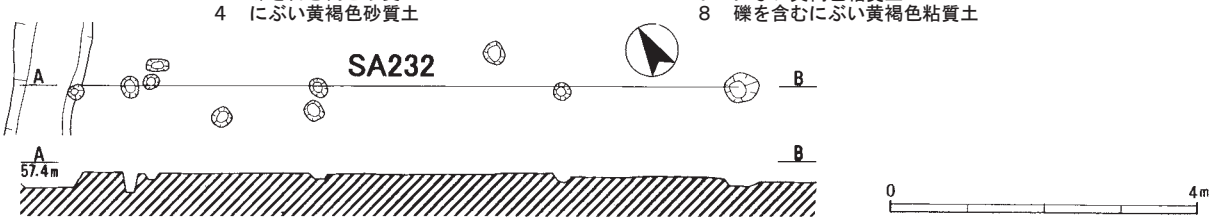


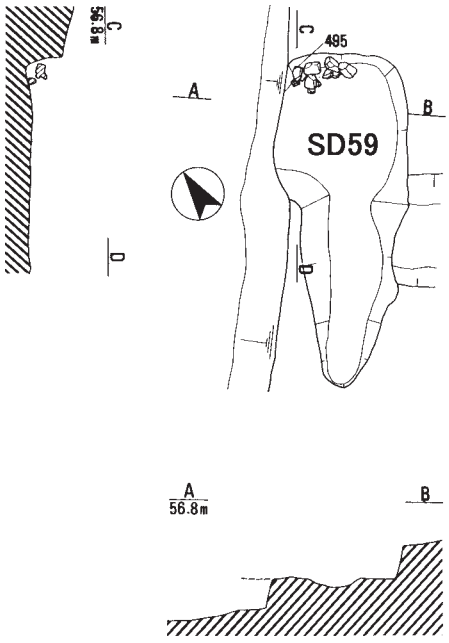
第91図　SK52、169、181実測図（1：50）

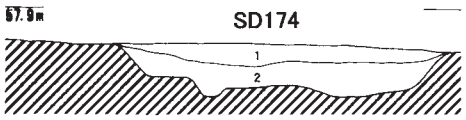




1　にぶい黄褐色砂質土
2　礫を含むにぶい黄褐色砂質土
3　礫を含む褐色砂質土
4　にぶい黄褐色砂質土
5　礫を含む褐色砂質土
6　褐色砂質土
7　にぶい黄褐色粘質土
8　礫を含むにぶい黄褐色粘質土



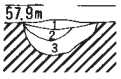




1　炭化物を含む褐色砂質土
2　礫を含む褐色砂質土

1　褐色砂質土
2　明褐色粘質土
3　褐色砂質土

SD180



1　炭化物を含む褐色砂質土
2　褐色砂質土
3　にぶい黄褐色土を含む褐色砂質土

0　2m

第92図　SK201、SD59　遺物出土状況図、SD174、175・177・179、180　土層断面図（1：50）
SA232　実測図（1：100）

戸美濃製品の天目茶椀（大窯第１段階）、常滑製品の甕が出土した。土層観察から三者の前後関係は、ＳＤ177・179が同時に存在し、その埋没後ＳＤ175が掘削されたと考えられる。

④土塁

ＳＡ295（第63図）　区画16と17間の基底部幅約４ｍの土塁である。ほとんどが発掘調査区外であるので、長さなどは不明である。現状では区画16との間には段差はない。盛土が削平されているため、高さは不明であるが、それほど高い盛り土はなかったと思われる。両側に側溝（ＳＤ175・296）を持つ。

⑤柵

ＳＡ232（第92図）　長さ８ｍ、柱間３間の柵である。区画15のＳＡ105やＳＡ240と同様に、斜面の近くに造られている。

⑥テラス状遺構　切岸（人工的に削り出した急斜面）と数段のテラス状遺構を検出した。テラス状遺構は区画16の範囲に収まりそうである。

ＳＲ264（第63図）　区画16の南西斜面の途中にある長さ約33m、幅約２ｍのテラス状の遺構である。区画16の平坦地との比高差は約1.4m、下のＳＲ268との比高差は３ｍである。

ＳＲ265（第63図）　区画16の平坦地とＳＲ264との間にある、長さ約19m、幅約１ｍのテラス状の遺構である。区画16の平坦地との比高差は約１ｍ、下のＳＲ264との比高差は約0.4mである。

ＳＲ267（第63図）　ＳＲ264の下にある長さ約26ｍ、幅約１ｍのテラス状の遺構である。下のＳＲ268との比高差は約１ｍである。

ＳＲ268（第63図）　ＳＲ267の下にある長さ約16ｍ、幅約１ｍのテラス状の遺構である。下のＳＲ269との比高差は1.2mである。

ＳＲ269（第63図）　ＳＲ268の下にある長さ約８ｍ、幅約１ｍのテラス状遺構である。この下にも数段の小規模なテラス状遺構がある。

（２）遺物（第93～95図、写真図版41・42）

①ＳＢ206関連遺物（462）

462は、建物内土坑ＳＫ166から出土した大窯期の瀬戸美濃製品の擂鉢である。

②ＳＢ210・212関連遺物（463～470）

463～466は、ＳＢ212の柱穴から。467はＳＢ210か212の建物内土坑ＳＫ170から、468～470は同じくＳＫ172から出土した遺物である。

463は土師器の皿。器壁が薄く、やや深手で直線的にたちあがる。464は瀬戸美濃製品の灰釉丸皿。大窯第２段階のものである。465・466はいずれも碁笥底の染付皿である。465の高台内面には釉がかかっている。466は、釉薬の発色が悪く、高台内面には釉がかかっていない。467は瀬戸美濃製品の天目茶椀。大窯第２段階のものである。468は土師器の皿。器壁が厚く直線的にたちあがり、口縁端部にはヨコナデを施す。469・470は中北勢系の羽釜。470は、ＳＫ172の床面直上から、正立した状態で出土した。いずれも口縁部は内傾し、口縁端部は斜め上方につまみ上げられ、内端に面を持つが、面は凹線状にはなっていない。鍔部直上に焼成前穿孔がある。

③ＳＢ214関連遺物（471）

471は柱穴から出土した白磁の小椀である。

④ＳＢ217関連遺物（472）

472は建物内土坑ＳＫ182から出土した土師器の皿である。器壁が薄くゆるやかにたちあがる。

⑤ＳＫ48、164、181、201出土遺物（473～）

473・474はＳＫ48から出土した遺物である。473は土師器の皿。器壁が厚くゆるやかにたちあがる。474は瀬戸美濃製品の擂鉢。大窯第４段階前半のものである。

475はＳＫ164から出土した常滑製品の壷である。11～12型式のものと思われる。

476～479はＳＫ181から出土した遺物である。476～478は土師器の皿。いずれも器壁が薄いが、478は口縁端部が外反する。479は茶臼の下臼。上面は丁寧に研磨されているが、下面の調整は粗い。

480～483はＳＫ201から出土した遺物である。480は瀬戸美濃製品の灰釉端反皿。大窯第１段階後半のものである。481・482は常滑製品の片口鉢。483は常滑製品の甕である。11型式のものである。　484は染付の皿である。

⑥ＳＤ39出土遺物（485～488）

485は土師器の皿。内外面にタールが付着する。486は尾張系の内耳鍋。器壁が薄く、口縁端部が若干内側に突出する。橙色系の色調を呈する。鈴木編年のⅠ－１～２期のものと思われる。487は瀬戸美濃製

品の天目茶椀。大窯第２段階のものである。

⑦ＳＤ49出土遺物（489～494）

489は土師器の皿。器壁が薄く、直線的にたちあがる。490は瀬戸美濃製品の擂鉢。大窯第１段階のものである。491は白磁の端反皿、492は染付の端反皿かと思われる。493は常滑製品の片口鉢、494は茶臼の下臼である。

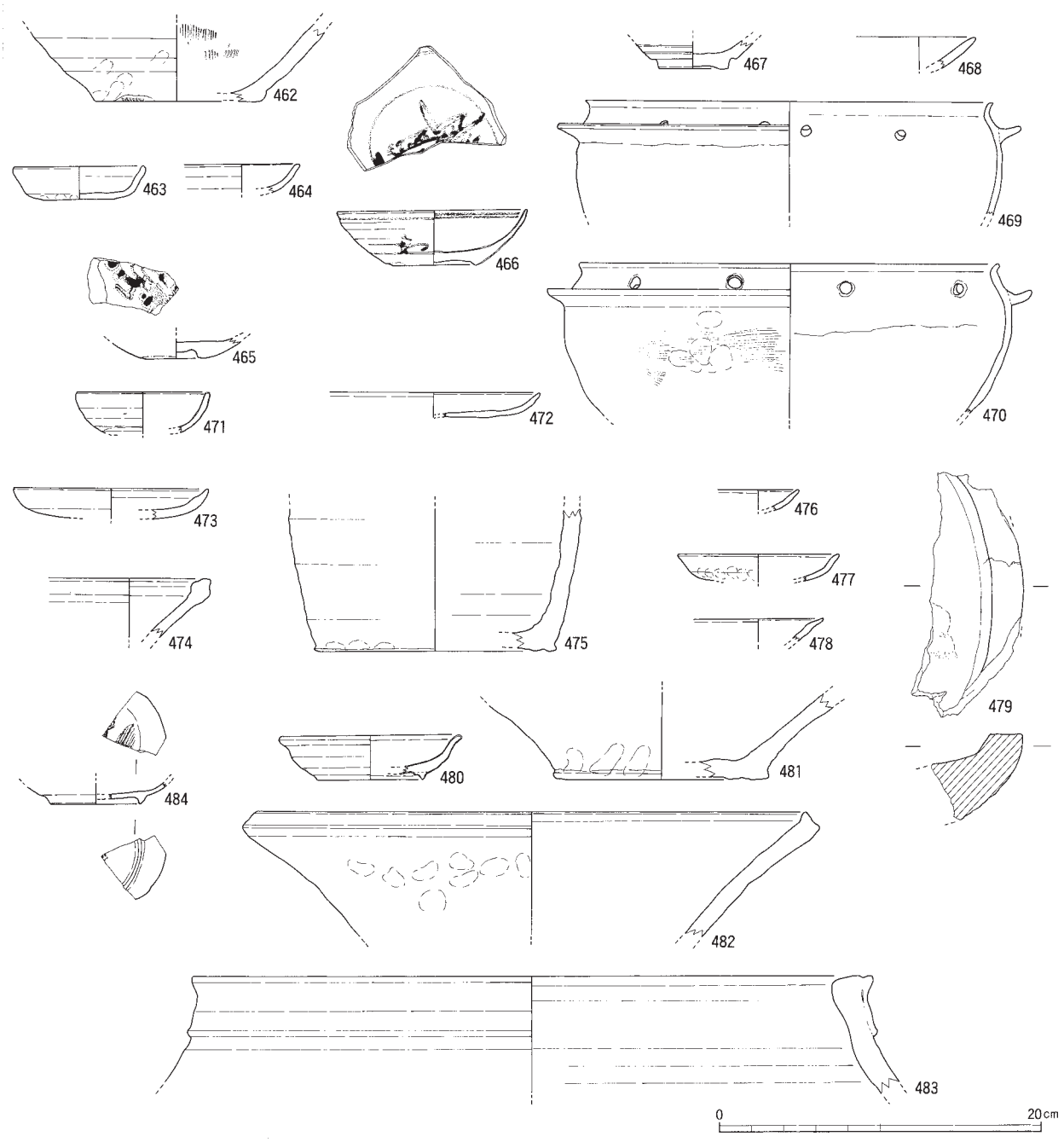
⑧ＳＤ59・165・168・174出土遺物（495～498）

495はＳＤ59から出土した茶臼の下臼。496はＳＤ165から出土した白磁。497はＳＤ168から出土した常滑産の小形の片口鉢である。498はＳＤ174から出土した土師器の皿。器壁が薄くゆるやかにたちあがり、口縁端部がやや外反する。

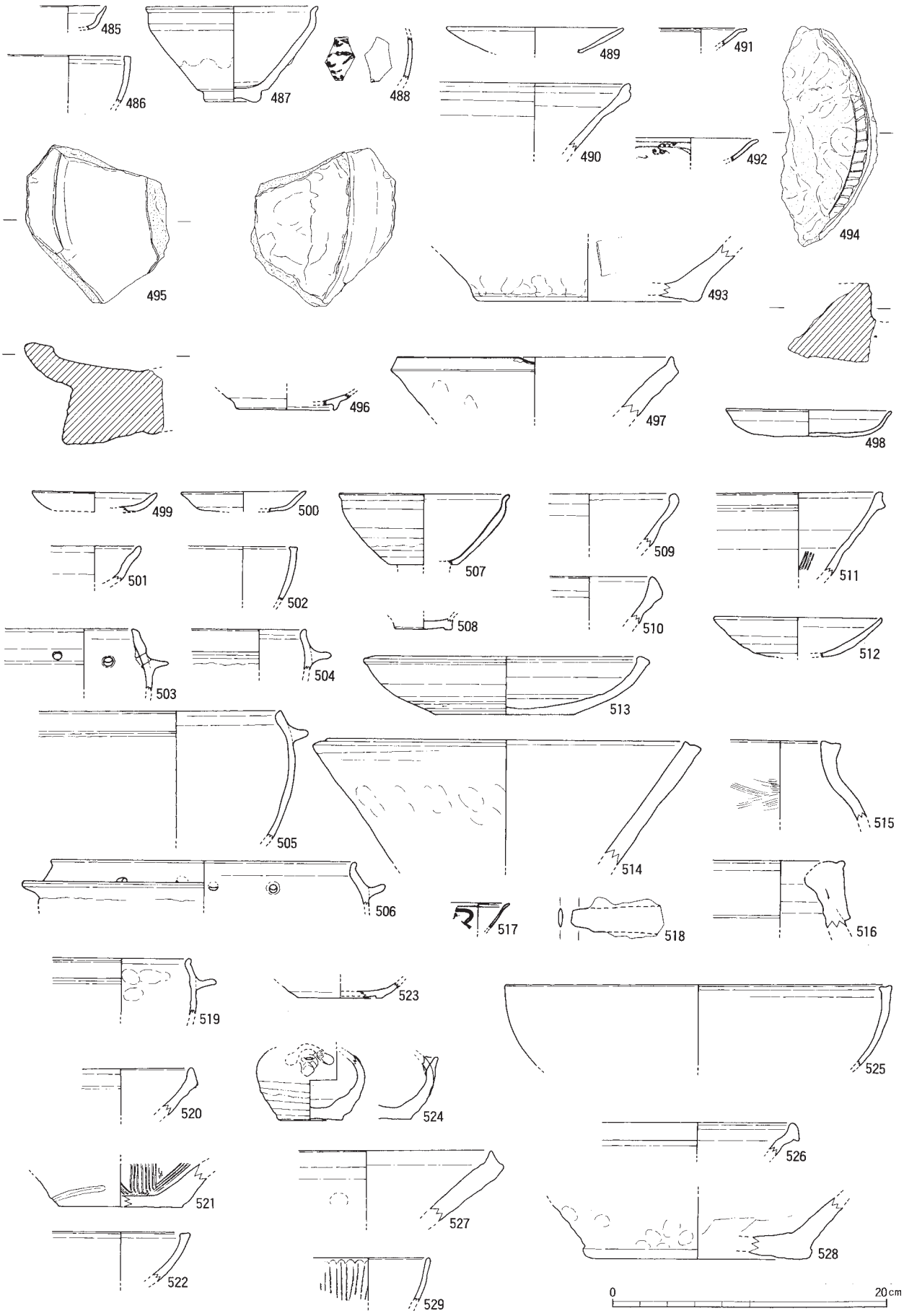
⑨ＳＤ175出土遺物（499～518）

多くの遺物が出土した。土師器（499～506）、瀬戸美濃製品（507～513）、常滑製品（514～516）染付（517）、鉄製品（518）などがある。

土師器のうち、499～501は皿。499は器壁が厚くゆ



第93図　区画16　掘立柱建物・土坑出土遺物実測図（1：4）



第94図　区画16　溝・包含層出土遺物実測図（1：4）

るやかにたちあがる。口縁部の内外面にタールが付着する。500は器壁が薄くゆるやかにたちあがり口縁端部がやや外反する。501は器壁が厚く、深手で粗雑な胎土を用いている。502は尾張系の内耳鍋。器壁が薄く、口縁端部が内側に突出する。鈴木編年のⅠ－１～２期のものであると思われる。503～506は中北勢系の羽釜。503の口縁部は長く、やや内傾し、端部外端に面をもつ。このような口縁部の形態を示すものはこの１点のみである。鍔部直上には焼成前穿孔がある。504～506の口縁部はやや内傾し、口縁端部は斜め上方につまみ上げられているが、端部の面は明瞭ではない。504・505の残存部には穿孔はない。506の鍔部直上には焼成前穿孔がある。

瀬戸美濃製品のうち、507・508は天目茶椀。507は大窯第２段階、508は大窯第１段階のものである。509～511は擂鉢。509は古瀬戸後Ⅳ期新段階、510・511は大窯第１段階のものである。513は鉄釉大皿。大窯第１～３段階のものである。512は第12型式の山茶椀である。

常滑製品のうち、514は9～10型式の片口鉢、515は11～12型式の壷、516は10型式の甕である。

517は染付の小片。器壁が非常に薄い。518は刃物と思われる鉄製品である。

⑩ＳＤ177出土遺物（519～522）

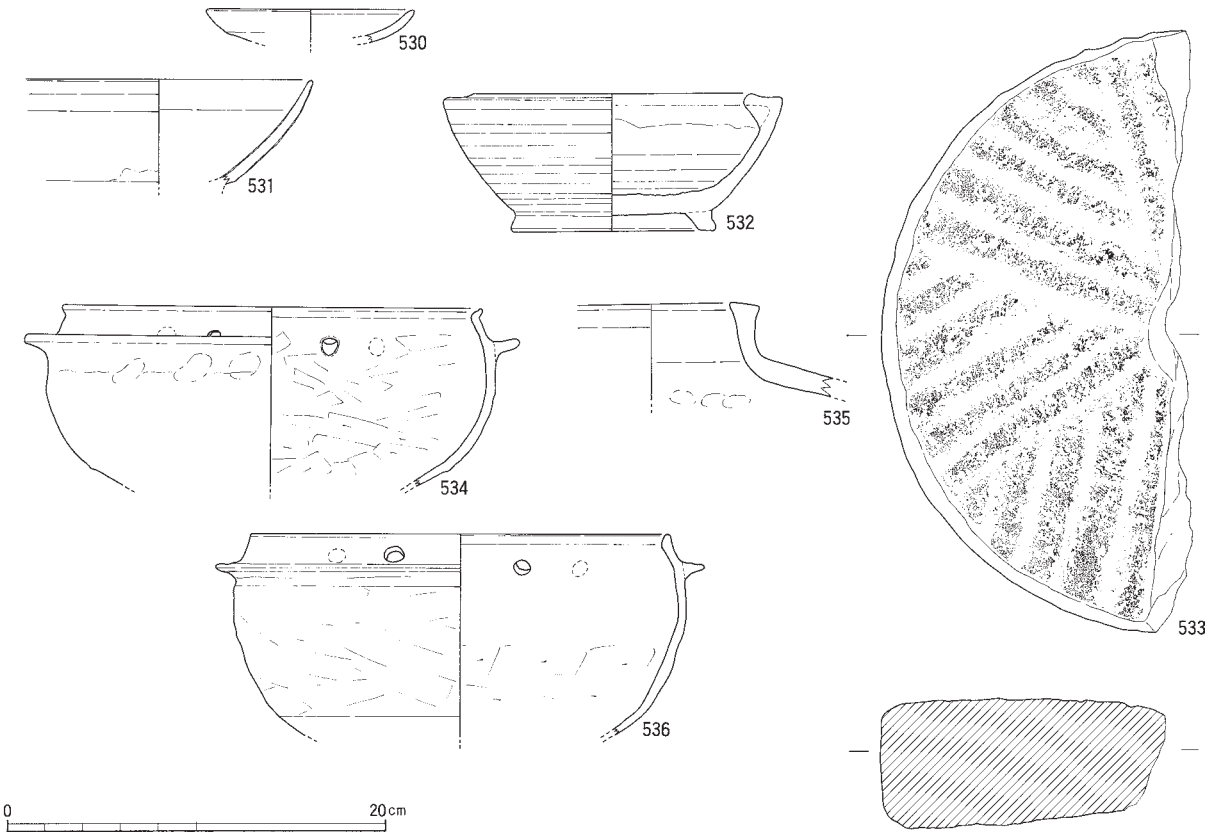
519は中北勢系の土師器羽釜。口縁部は直立気味で、口縁端部は斜め上方につまみ上げられているが、端部の面は明瞭ではない。残存部には穿孔はない。520・521は瀬戸美濃製品の擂鉢。520は大窯第１段階のもの、521は大窯第２～３段階のものである。522は瀬戸美濃製品の鉄釉大皿。大窯第１～３段階のものである。

⑪ＳＤ180出土遺物（523・524）

523は瀬戸美濃製品の鉄釉丸皿。大窯第２～３段階のものである。524は耳付水注。大窯第１～３段階のものである。

⑫包含層等出土遺物（525～529）

525は尾張系の内耳鍋。口縁部の器壁が厚く、口縁の内端が突出する。器高が低い。鈴木分類のＢ６類



第95図　区画16・17出土遺物実測図（1：4）

（17世紀末～18世紀前葉）のものである。526は瀬戸美濃製品の擂鉢。大窯第２段階後半のものである。527は常滑製品の10型式の片口鉢、528は甕である。529は　近世の遺構であるＳＫ176に混入していた青磁椀である。

⑬ピット出土遺物（530～533）

530は土師器の皿。器壁が厚く、丸くたちあがる。口縁部にタールが付着する。531は瀬戸美濃製品の鉄釉平椀。大窯第１段階のものである。断面の割れ口を漆で補修した痕跡がある。532は瀬戸美濃製品の花瓶。大窯第１段階後半のものである。肩部の割れ口が丁寧に研磨されている。鉢として再利用されたのではないかと思われる。533は花崗岩製の下臼である。

区画17（第63図）

区画16の西、標高約58ｍの尾根上に立地する区画。隣接する区画16間には約１ｍの段差がある。この部分は当初、第二名神自動車道によって振り替えられる農道の建設地であったので、遺構の有無を確認するために、北西－南東方向に37ｍ、北東－南西方向に28ｍのトレンチを設定し範囲確認、調査を行った。

区画内から、柱穴・土坑・溝などを検出した。区画の規模などは不明であるが、検出した遺構の状況から区画15や16と同様の状況であると思われる。

（１）遺構

ＳＤ296（第63図）　区画16との境となる土塁ＳＡ295の側溝である。トレンチ調査のため長さは不明であるが、区画16のＳＤ175と同様の規模をもつと考えられる。幅は約１ｍである。

（２）遺物（534～536）

トレンチ調査のため、遺物量は少ない。534はＳＫ224から出土した中北勢系の土師器羽釜。口縁部は内傾し、口縁端部は斜め上方につまみ上げられ、内端に面を持つ。鍔部直上に焼成前穿孔がある。535はＳＫ227から出土した常滑製品の壷。12型式のものである。536はＳＫ229から出土した中北勢系の土師器羽釜。口縁部は内傾し、口縁端部は上方につまみ上げられ、内端に面を持つ。鍔部直上に焼成前穿孔がある。

その他の遺物（第96図、写真図版43）

537～562は、遺物包含層出土遺物で、区画が特定できないものである。537～543は東区（東名阪自動車道より東側）、544～562は西区（西側）から出土した。

①東区出土遺物（537～543）

土師器のうち、537は土師質の鍋。口縁部上に耳がつく。近世のものである可能性が高い。538は尾張系の内耳の焙烙。18世紀代のものかと思われる。

瀬戸美濃製品のうち、539は擂鉢。大窯第３段階前半のものである。540は灰釉端反皿。大窯第１段階のものである。541は灰釉丸皿。大窯第３段階のものである。542・543は鉄釉稜皿。542は大窯第２段階後半、543は大窯第３段階前半のものである。

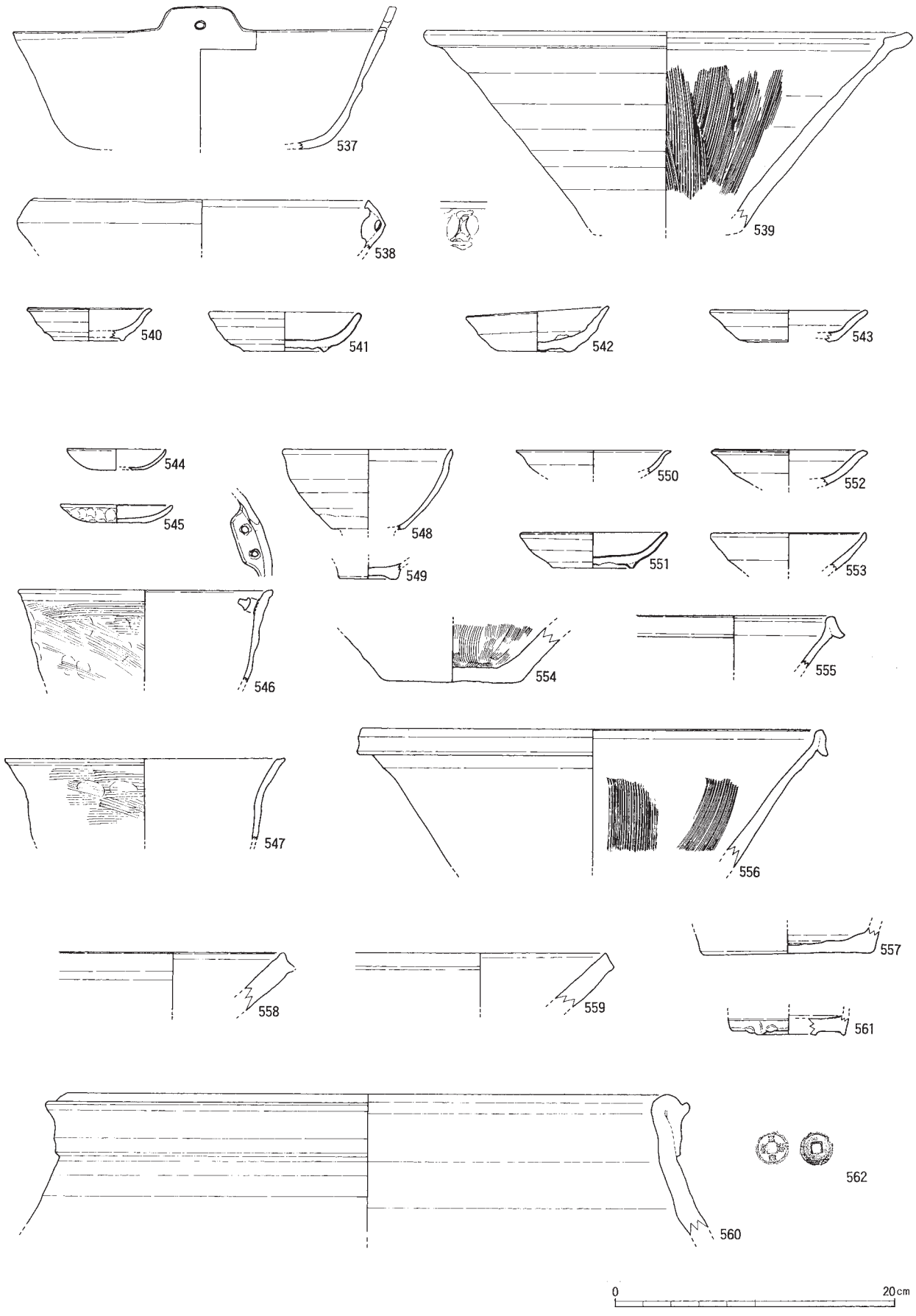
②西区出土遺物（544～562）

土師器のうち544・545は皿。いずれも器壁が薄く、南伊勢系の皿に似る。546・547は中北勢系の内耳鍋。体部から口縁部にかけて「逆ハ」字形に開く。口縁端部は外側につまみ出され、上端に面を持つ。546は口縁部直下に２個の穿孔をもつ横位の内耳がある。

瀬戸美濃製品のうち、548・549は天目茶椀。548は大窯第２段階、549は大窯第２～３段階のものである。550は灰釉端反皿。大窯第１段階のものである。551は灰釉丸皿。大窯第２段階でも終末期のものである。554～556は擂鉢。554は大窯第２～３段階、555は大窯第３段階後半、556は大窯第３段階前半のものである。557は徳利。大窯第２～３段階のものである。552・553は第12型式の山茶椀である。

常滑製品のうち、558・559は片口鉢。９型式のものと思われる。560は甕。10型式のものである。

561は青磁の小形の香炉。562は皇宋通寶である。



第96図　包含層出土遺物実測図（1：4）

3　弥生～平安時代の遺構と遺物

（１）遺構

中世後期の遺構のほかに、竪穴住居２棟・掘立柱建物３棟を検出した。

①竪穴住居

ＳＨ41（第97図）　区画15で検出した。約6.3m四方の竪穴住居である。削平のため、壁周溝のみしか残っていない。主柱穴・貯蔵穴は確認できなかった。遺物も出土しておらず、建物の時期は不明である。

ＳＨ312（第97図・写真図版27）　区画８で検出した。一辺約6.8m以上の竪穴住居である。削平のため、壁周溝のみしか残っていない。主柱穴・貯蔵穴は確認できなかった。埋土から磨製石鏃が出土していることから弥生時代の住居であると思われる。

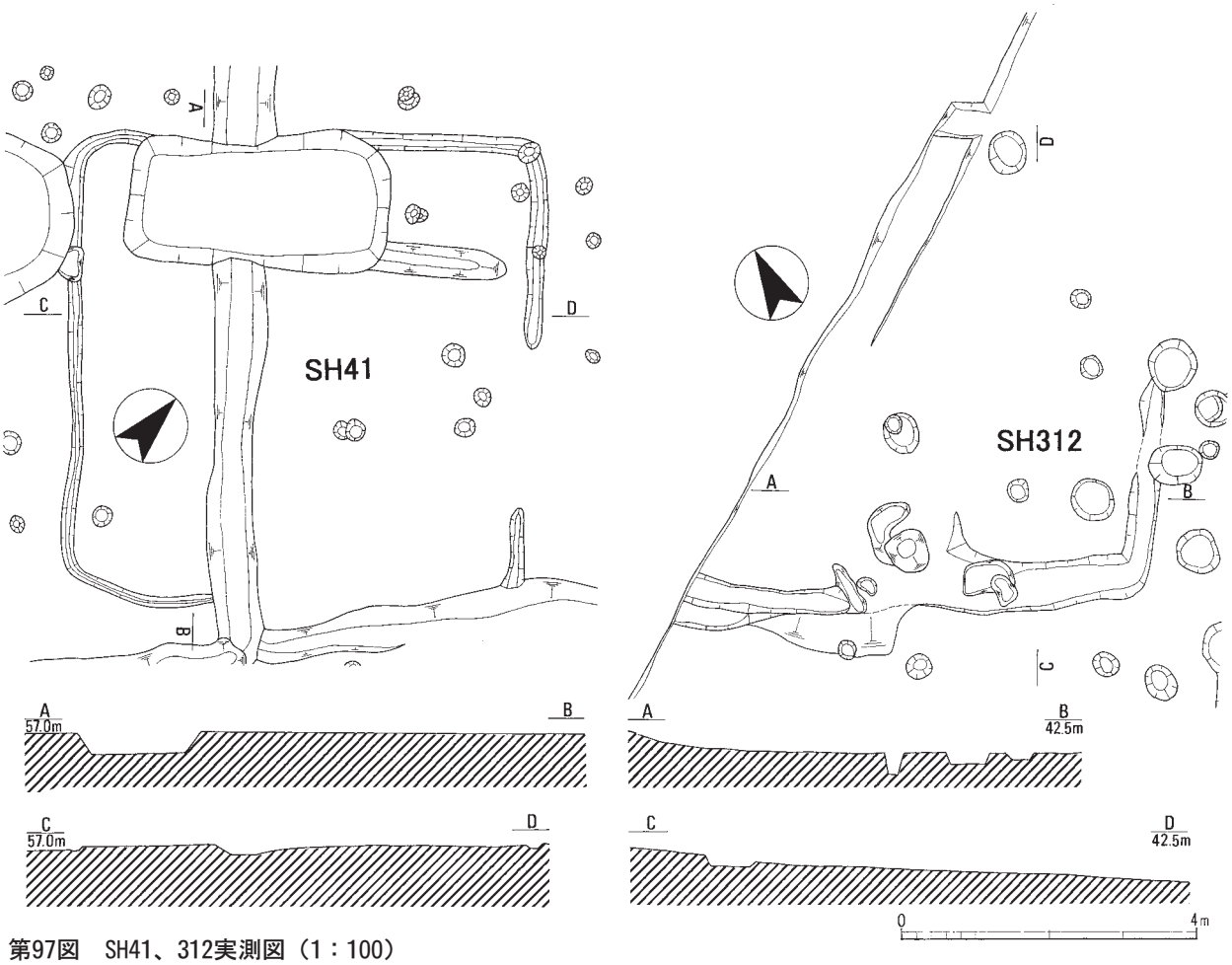
②掘立柱建物

ＳＢ311（第98図・写真図版27）　区画８で検出した。桁行２間（4.2m）×梁行４間（3.6m）の総柱の掘立柱建物である。掘形の形状や大きさ、柱穴の埋土から出土している遺物（土師器・須恵器）などから奈良～平安時代の建物と考えられる。

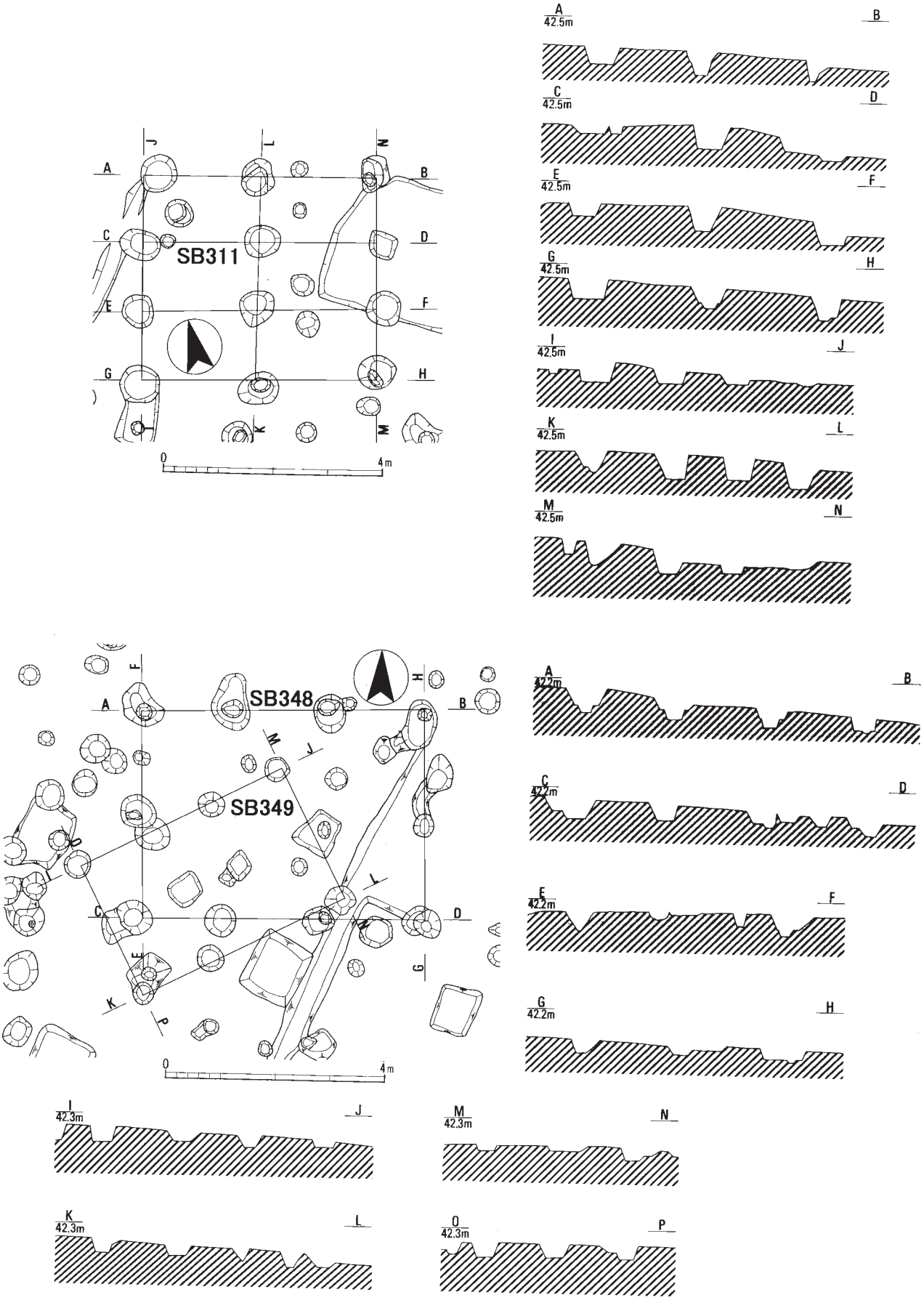
ＳＢ348（第98図）　区画８で検出した。桁行３間（5.1m）×梁行２間（3.8m）の掘立柱建物である。掘形の形状や大きさ、柱穴の埋土から出土している遺物（土師器・須恵器）などから奈良～平安時代の建物と考えられる。ＳＢ349と重複するが両者の前後関係は不明である。

ＳＢ349（第98図）　区画８で検出した。桁行２間（4.05m）×梁行４間（2.7m）の掘立柱建物である。掘形の形状や大きさ、柱穴の埋土から出土している遺物（土師器・須恵器）などから奈良～平安時代の建物と考えられる。

（２）遺物（第99図）



第97図　SH41、312実測図（1：100）



第98図　SB311、SB348・349実測図（1：100）

第99図　弥生～平安時代　遺物実測図（1：4）

①ＳＨ312出土遺物（563）

ＳＨ312の埋土から出土した磨製石鏃。表裏両面から円孔をあけているが、片面の孔の位置がずれて、あけ直している。丁寧に研磨されている。

②ＳＫ322出土遺物（564～566）

いずれも壷の破片である。摩滅が激しく調整などは観察できない。564は口縁端部に刺突文がある。いずれも中期のものかと思われる。

③ＳＤ43下層出土遺物（567～575）

ＳＤ43の下層からは、弥生時代中期から古代までの遺物が出土している。

弥生時代の遺物　567・568は壷。567は受口状の細頸壷。口縁部には凹線がみられる。弥生時代中期のものである。569～571は甕。572は台付甕である。

奈良時代の遺物　573は須恵器の杯身。低い高台が口縁部と底部の境につけられる。574は須恵器の甕。波状文や区画の沈線は弱く雑である。575は土師器の皿。底部外面はヘラケズリが施されるが、器壁は厚い。底部内面にはハケメが残る。

④包含層等出土遺物

城の屋敷地として機能していた頃の遺構に混入したり包含層から出土した遺物には、弥生土器（576・577）、埴輪（578・579）、須恵器（580～584）、灰釉陶器（585～586）がある。

576は甕。口縁端部に面をもつ。577は壷の底部。579は家形埴輪の裾部。くりこみが一ヵ所みられる。580は口縁端部に段をなし、口縁部と天井部の境に稜がある。天井部は比較的平らである。581は一応蓋としたが、身の可能性もある。582の口縁端部の折り返しは小さく断面形状は三角形である。583の口縁端部は玉縁状で、突帯と沈線の間に２段の刺突文を施す。584は脚台かと思われる。585・586は灰釉陶器の椀。折戸53号窯式のものと思われる。

４　江戸時代の遺構と遺物

（１）遺構

①掘立柱建物

ＳＢ251（第100図）　区画８で検出した。桁行３間（8.1ｍ）×梁行２間（4.6ｍ）の掘立柱建物である。建物内に4.5×3.5ｍ・深さ10㎝程の土坑ＳＫ309を伴う。柱穴の埋土から土師器小片が、ＳＫ309の埋土から17世紀の瀬戸製品の陶器が出土していることから、17世紀の建物と考えられる。

②竈状遺構

ＳＦ315（第100図）　区画８で検出した。長軸約２ｍ・短軸約１ｍ・深さ30㎝の楕円系の掘形内に10～20㎝程の石を石室状に積み上げた竈と考えられる。焚き口手前には作業空間と考えられる土坑が接続する。埋土には炭化物が多く含まれていた。このほか埋土から石臼（587）が出土した。

（２）遺物（第101図）

①ＳＦ315出土遺物（587）

近世のものと思われる竈の埋土から出土した花崗岩製の下臼である。中世のものを転用していたものかもしれない。

②包含層出土遺物（588～592）

588は瀬戸製品の甕。江戸時代後期のものと思われる。589は瀬戸美濃製品の菊皿。登窯３～４小期のものである。590・591は磁器を利用した加工円盤か。591は幕末の端反椀を再利用している。592は常滑製品の壷。底部外面には砂の痕跡が明瞭に残る。18～19世紀のものか。　（竹田憲治）

［註］

①中北勢系の羽釜については、伊藤裕偉「中世後期の中北勢系土師器群に関する覚書」（『研究紀要』第８号、三重県埋蔵文化財センター　1999年）における分類を用いた。

②瀬戸美濃製品については、全点にわたり（財）瀬戸市埋蔵文化財センター藤澤良祐氏の上、ご教示を得た。

③常滑製品については、全点にわたり常滑市民俗資料館中野晴久氏に実見の上、ご教示を得た。

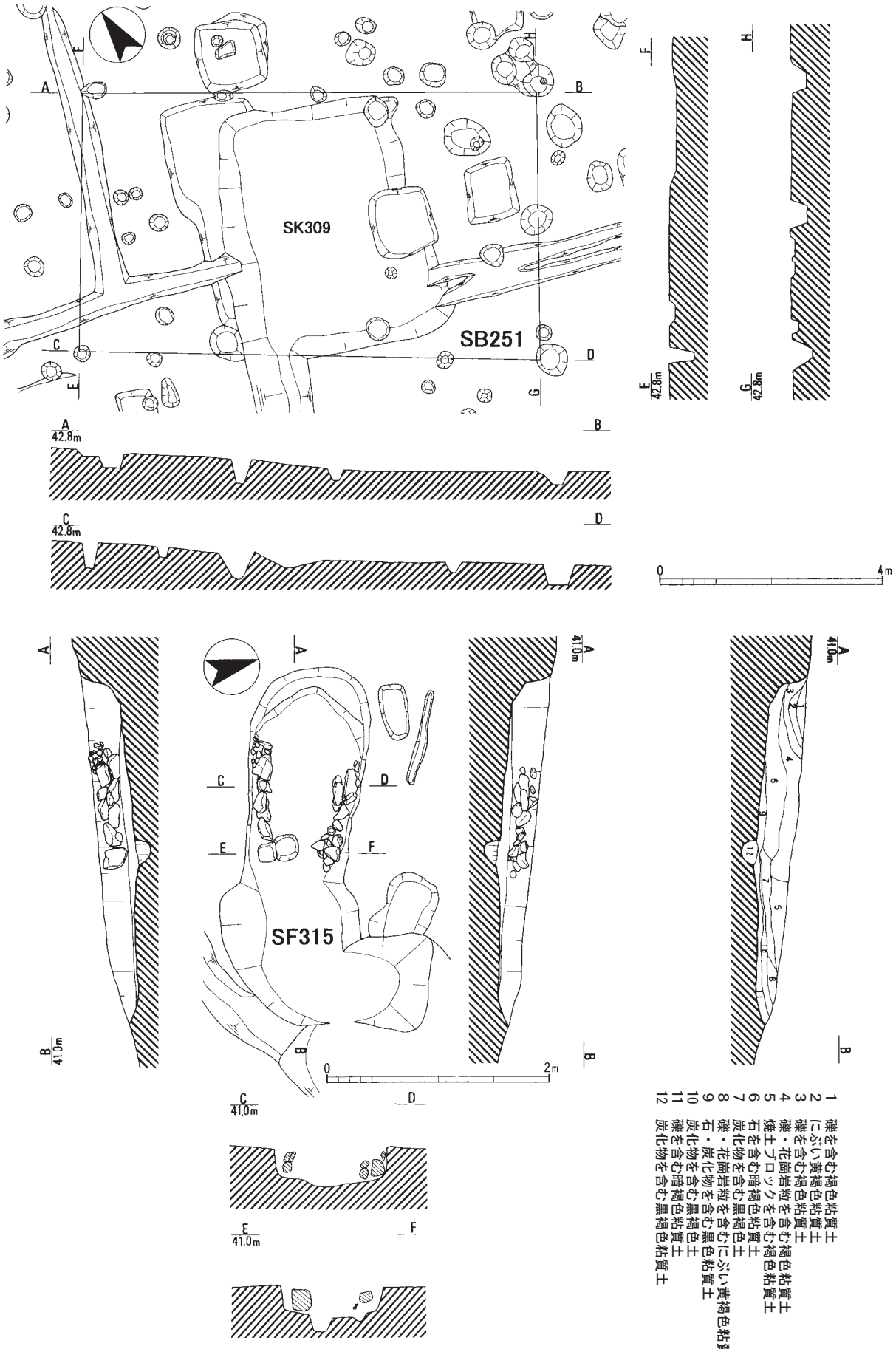
④服部芳人「伊坂遺跡」（『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県埋蔵文化財センター、2001年）

⑤木野本和之ほか「伊坂城跡」（『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県埋蔵文化財センター、2001年）

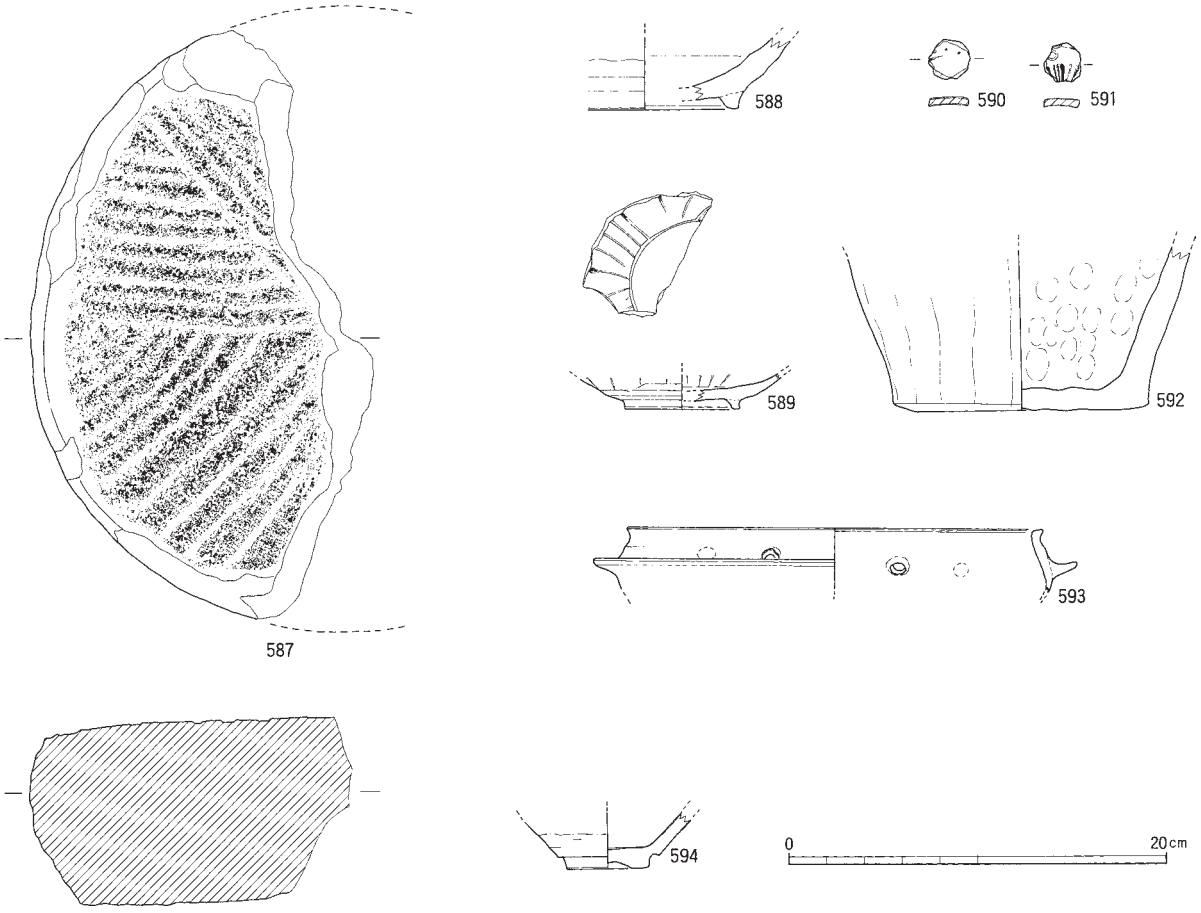
⑥奈良文化財研究所の松井章氏のご教示を得た。

⑦尾張系の内耳鍋については、鈴木正貴「東海地方の土師器内耳鍋の生産について」（『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム、1996年）による。

⑧前掲注⑤と同じ



第100図　SB251（1：100）、SF315　実測図（1：50）



第101図　江戸時代、丸内遺跡出土遺物実測図（1：4）

遺構	番号	大地区	小地区	区画	間　桁×梁	桁行(m)	梁行(m)	建物面積(㎡)	棟方向	建物内土坑	特　記　事　項
SB	1	T	i9	1	2×2(総柱)	5.70	4.20	23.94	15		区画1主屋
SB	3	T	k2	2	2×1	3.60	3.00	10.80	8		
SB	4	T	k2	2	2×2(総柱)	4.60	4.05	18.63	5		
SB	5	Q	j～l·23～24	2	3×2(総柱)	6.00	4.20	25.20	1	?	区画2主屋
SB	257	S	v～w·3	4	2×1	4.05	2.70	10.94	14	SK327·328	区画3主屋
SB	253	P	s～u·21～23	6	4×2	5.70	4.65	26.51	24	SK286·287·288?	区画6主屋?
SB	254	P	r～t·23～24	6	3×2?	6.90	4.20	28.98	33	SK319·320·321	区画6主屋?
SB	255	P	s23	6	2×1	2.85	2.10	5.99	25		
SB	256	P	r～s·24	6	1×1	3.60	2.55	9.18	25		
SB	250	P	j～l·20～22	8	3以上×2	-	5.40	-	28	SK307·308	区画8主屋
SB	251	P	l～n·21～22	8	4×2	8.10	4.80	38.88	39	SK309	近世
SB	252	P	m～n·24～25	8	1×1	1.65	1.65	2.72	33		井戸SE303の覆屋
SB	278	P	j～l·20～21	8	1×1	4.05	2.75	11.14	26		区画8主屋
SB	311	P	m～n·20～21	8	3×2(総柱)	3.75	4.30	16.13	16		古代
SB	348	P	n～p·21～22	8	3×2	5.10	3.75	19.13	1		古代
SB	349	P	n～o·21～22	8	3×2	4.05	2.55	10.33	27		古代
SB	246	Q	i～l·6～8	10	5以上×2	-	5.10	-	30	SK36·42	区画10主屋
SB	247	P	i～l·6～8	10	4以上×2	-	4.80	-	33	SK36·42	区画10主屋
SB	274	P	f～l·6～8	10	4以上×1	-	2.25	-	31		区画10主屋
SB	102	P	d～f·2～4	11	4×2(総柱)	7.10	4.80	34.08	44	SK88	区画11主屋
SB	103	P	d～e·4～5	11	3×2(総柱)	6.00	4.35	26.10	38	?	
SB	107	LO	w～y·25～1	12	3×2(総柱)	7.20	4.80	34.56	33	SK69·70·71?	区画12南東部主屋
SB	108	OP	y～a·1～3	12	2×1	4.20	2.20	9.24	35		
SB	109	M	b～c·25	12	2×1	5.10	2.25	11.48	34		
SB	110	L	y·24～25	12	2×2	4.20	3.30	13.86	45		
SB	141	L	t～u·16～17	12	1×1	2.85	1.95	5.56	37		
SB	142	L	r～s·19～20	12	2×2	4.35	3.60	15.66	37		
SB	143	L	s～u·20～21	12	3×2	5.70	3.00	17.10	47		
SB	144	L	s～t·20～21	12	2×1	4.30	2.70	11.61	38		
SB	145	L	t～u·22～23	12	3×2	5.40	3.75	20.25	45		
SB	146	L	t～u·23～24	12	1×1	2.45	2.25	5.51	47	SK219	
SB	147	L	u～v·20	12	1×1	2.70	2.20	5.94	47	SK220	
SB	148	L	v～w·22～23	12	1×1	2.60	2.55	6.63	48	SK222	
SB	149	L	u～w·20～22	12	2×2(総柱)	6.15	3.90	23.99	50		
SB	150	L	t～w·20～23	12	5×2	11.30	6.90	77.97	45	SK128	区画12北西部主屋
SB	151	L	u～w·20～23	12	4×2	9.60	6.40	61.44	44	SK128	区画12北西部主屋
SB	152	L	u～w·19～20	12	3×3	4.20	4.50	18.90	51	SK135	
SB	153	L	w·19～20	12	1×1	3.20	2.25	7.20	47	SK221	
SB	154	L	w·18～19	12	2×2(総柱)	3.20	3.00	9.60	47		
SB	155	L	v～w·17～19	12	2×2	5.10	3.75	19.13	47		
SB	258	L	w21	12	1×1	1.20	1.20	1.44	45	SK85	
SB	140	L	r～s·14～15	13	3×1	4.05	1.80	7.29	34		
SB	202	L	k～m·15～16	13	3×1以上	6.90	-	-	36	SK194·195	区画13主屋?
SB	203	L	m～n·17～19	13	3以上×2以上	-	4.00	-	38		
SB	259	L	l～m·15～16	13	2×1	4.00	2.80	11.20	37		
SB	260	L	k·15～16	13	2×1	3.45	2.30	7.94	38	SK263	
SB	261	L	j～k·15～16	13	1×1	2.55	2.10	5.36	37	SK262	
SB	111	O	s～t·5～6	15	2×1	4.20	2.25	9.45	45		
SB	112	O	u～v·7	15	2×1	4.10	2.20	9.02	45		
SB	114	O	v～w·9～10	15	2×2	3.90	2.70	10.53	38		
SB	115	O	q～s·5～7	15	6×2	10.60	4.60	48.76	45	SK30·31·32·33?	区画15主屋
SB	233	O	m～o·7～9	15	3×2(総柱)	6.30	4.20	26.46	54		
SB	235	O	p～q·6～8	15	1×1	2.70	2.25	6.08	50	SK56	
SB	236	O	t7	15	1×1	2.60	2.60	6.76	47	SK29	
SB	237	O	t7	15	1×1	1.80	1.60	2.88	43	SK29	
SB	238	O	s～t·7～8	15	1×1	2.60	2.60	6.76	43	SK35	
SB	239	O	r～t·8～10	15	3×1	6.25	2.70	16.88	43	SK27·28	
SB	241	O	v·8～9	15	1×1	2.10	1.90	3.99	47	SK20	
SB	242	O	v～w·8～9	15	1×1	3.15	2.60	8.19	33	SK13·14	
SB	243	O	v～w·8～9	15	1×1	2.60	2.50	6.50	33	SK13·14	
SB	244	O	s～t·12～13	15	3×1	4.40	3.00	13.20	35		
SB	272	O	p～q·6～7	15	1×1	2.40	2.10	5.04	49		
SB	116	O	j～l·4～6	16	3×1	6.00	2.85	17.10	37		
SB	204	L	h～j·3～4	16	2×1	2.85	2.85	8.12	45		
SB	205	L	h～j·3～4	16	3×1	4.65	2.10	9.77	46		
SB	206	L	k～m·5～6	16	3×1	5.85	1.95	11.41	37	SK166	
SB	207	L	j～m·22～25	16	5×3	11.00	5.85	64.35	38		区画16主屋
SB	208	L	j～l·23～24	16	3×2	5.40	5.20	28.08	38		
SB	209	L	j～k·23～25	16	3×3	5.70	5.60	31.92	40		
SB	210	LO	k～m·24～1	16	4以上×3	-	6.00	-	38	SK170·172·173	区画16主屋
SB	211	LO	k～m·24～1	16	4以上×2	-	3.60	-	39		区画16主屋
SB	212	LO	k～m·24～1	16	4以上×2	-	5.55	-	39	SK170·172·173	区画16主屋
SB	213	L	j～k·24	16	1×1	2.40	2.40	5.76	38		
SB	214	L	l～k·24～25	16	3×1	5.80	1.80	10.44	39		
SB	215	LO	j～l·25～1	16	2×1	4.80	3.00	14.40	40		
SB	216	O	k～l·1	16	1×1	1.50	1.20	1.80	40		
SB	217	L	l～m·22～23	16	1×1	3.10	1.80	5.58	40	SK182	
SB	218	L	k～m·2～4	16	3×2	5.70	4.05	23.09	37		

※建物の方位は、棟もしくは梁の方向が北で何度東に振れるかの数値

第1表　掘立柱建物一覧表

遺物番号	実測番号	器種など		産地・系統等	大地区	小地区	遺構	区画	口径	器高	底径	成形・調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
1	114-2	土師器	羽釜	中北勢系	T	i9	SB1	1	25			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ・ナデ 内面ヨコナデ・ナデ・オサエ	橙 2.5YR6/6	やや粗	良	口縁部 3/12	
2	115-4	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	T	h10	〃	〃			4.6	外面ロクロケズリ・サビ釉	釉 黒褐 5YR2/1 生地 にぶい黄橙 10YR6/3	密	良	底部 完存	
3	99-4	〃	片口鉢	常滑	T	i9	〃	〃		3.9		内外面ロクロナデ	外面 明赤褐 5YR5/6 内面 浅黄橙 10YR8/4	やや粗	良	口縁部小片	
4	85-4	〃	耳付水注	瀬戸美濃	T	j10	包含層	〃			4.8	外面ロクロナデ・鉄釉 内面ロクロナデ・釉 底部糸切り痕	釉 オリーブ褐 2.5YR4/4 生地 にぶい橙 7.5YR7/3	密	良	底部 7/12	
5	114-5	〃	口広有耳壺	〃	T	h13	〃	〃			11	外面ロクロナデ・鉄釉 内面ロクロナデ	釉 暗褐 10YR4/6 生地 灰黄褐 10YR6/2	密	良	底部 2/12	
6	81-3	〃	筒形容器	〃	T	j10	〃	〃	15.4	19.5	12.6	外面ロクロナデ・鉄釉 内面ロクロナデ・横ピン痕 底部糸切り痕	釉 赤黒 2.5YR2/1 生地 灰白 2.5Y8/2	やや粗	良	口縁部 10/12 底部 4/12	
7	49-8	鉄製品	釘		T	i2	SB3柱穴	2								残存長 7.5cm	
8	115-5	土師器	皿		T	j1	包含層	〃	8			外面ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面ナデ	浅黄 2.5Y7/4	密	良	口縁部 3/12	
9	49-2	〃	〃		Q	n22	〃	〃				磨耗のため調整不明	にぶい橙 7.5YR7/3	やや密	良	口縁部 1/12	
10	117-3	〃	〃		T	j3	〃	〃	8			内外面ヨコナデ・ナデ	浅黄 7.5YR8/3	やや密	良	口縁部 2/12	
11	115-6	〃	〃		T	k5	〃	〃	11			内外面ヨコナデ・ナデ	明灰褐 5Y7/1	密	良	口縁部 2/12	
12	117-2	〃	〃		T	j3	〃	〃	10			外面ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面ヨコナデ・工具ナデ	黒褐 10YR3/1	やや密	良	口縁部 2/12	
13	118-4	〃	〃		T	j4	〃	〃	11.6			内外面ヨコナデ・ナデ	灰白 2.5Y7/1	密	良	口縁部 2/12	
14	117-1	〃	〃		T	j3	〃	〃				内外面ヨコナデ・ナデ 外面スス付着	にぶい橙 7.5YR7/4	密	良	口縁部 1/12	
15	49-3	土師器	羽釜	中北勢系	Q	k23	Pit2	〃	23			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ・スス付着 内面ナデ	外面 橙 5YR6/6 内面 にぶい褐 7.5YR5/3	粗	良	口縁部 2/12	
16	114-3	〃	〃	〃	T	j1	包含層	〃				外面ヨコナデ・ハリツケナデ・スス付着 内面ヨコナデ・工具ナデ	にぶい橙 5YR7/4	密	良	口縁部 3/12	
17	115-2	〃	〃	〃	T	k5	〃	〃	23			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・板ナデ・ハケメ・スス付着 内面ヨコナデ・板ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	密	良	口縁部 2/12	
18	85-3	〃	〃	〃	T	k1	〃	〃	13.3			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ	橙 5YR6/6	やや粗	良	口縁部 2/12	
19	117-6	〃	〃	〃	T	j3	〃	〃	15			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	やや粗	良	口縁部 1/12	焼成前穿孔
20	49-1	〃	〃	〃	Q	j25	〃	〃	19			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 7.5YR7/3	やや粗	良	口縁部 2/12	焼成前穿孔
21	81-2	〃	茶釜形	〃	Q	j25	〃	〃	13.4			外面ヨコナデ・ナデ・ハリツケナデ・ハケメ 内面ヨコナデ・工具ナデ	橙 5YR6/6	粗	やや不良	口縁部 4/12	
22	83-2	〃	〃	〃	T	i4	〃	〃	13.6			外面ヨコナデ・工具ナデ・ハリツケナデ・ハケメ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ・ケズリ	外面 橙 5YR7/6 内面 橙 5YR7/4	粗	良	口縁部 5/12	
23	117-4	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	T	j3	〃	〃	12			外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉・擦痕	鉄釉 赤褐 5YR4/8 サビ釉 暗赤灰 2.5YR3/1 生地 浅黄橙 7.5YR8/4	密	良	口縁部 2/12	
24	117-5	〃	〃	〃	T	j3	〃	〃	12			外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	鉄釉 にぶい橙 7.5YR7/4 サビ釉 にぶい褐 7.5YR6/3 生地 淡黄 2.5Y8/3	やや密	良	口縁部 2/12	
25	84-4	〃	〃	〃	T	k5	〃	〃			4.2	外面ロクロケズリ 内面ロクロナデ・鉄釉	黒褐 7.5TR2/2	密	良	底部 完存	
26	85-5	〃	〃	〃	Q	j25	〃	〃			4.9	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	釉 黒 2.5Y2/1 生地 にぶい黄 2.5Y6/3	密	良	底部 完存	
27	85-2	〃	〃	〃	T	k1	〃	〃	13			外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉 内面ロクロナデ	釉 オリーブ黒 7.5Y2/2 生地 浅黄 7.5Y2/3	密	良	口縁部 2/12	
28	84-3	〃	灰釉丸皿	〃	T	k1	〃	〃	5			内外面ロクロナデ	オリーブ黄 5Y6/3	密	良	口縁部 3/12	
29	118-2	〃	鉄釉丸皿	〃	T	j3	〃	〃	10.7	2.5		外面鉄釉 内面鉄釉・トチン痕 底部輪ドチ痕	釉 暗赤褐 5YR3/2 生地 灰白 7.5YR8/2	密	良	口縁部 7/12 底部 8/12	
30	115-1	〃	擂鉢	〃	T	h7	〃	〃	24			内外面ロクロナデ・櫛目	暗紫灰 5P4/1	密	良	口縁部 2/12	
31	83-1	〃	〃	〃	T	i23	〃	〃	26			内外面ロクロナデ・櫛目	釉 暗赤灰 10R4/1 生地 灰白 7.5YR8/1	やや密	良	口縁部 2/12	
32	117-7	〃	〃	〃	T	j4	〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	釉 青灰 5PB5/1 生地 灰白 7.5Y7/1	やや密	良	口縁部 1/12	
33	118-5	〃	筒形容器	〃	T	j4	〃	〃				外面鉄釉・ロクロナデ 内面鉄釉・ロクロナデ	外面 褐灰 10YR6/1 内面 灰白 N8/	密	良	口縁部 1/12	
34	118-3	〃	山茶椀	尾張型	T	j5	〃	〃	13.4	5.4	6	内外面ロクロナデ 底部糸切り痕	灰白 2.5Y8/1	粗	良	口縁部 1/12 底部3/12	
35	118-1	〃	片口鉢	常滑	T	j4	〃	〃	38			内外面ロクロナデ	外面 にぶい赤 7.5R4/4 内面 にぶい黄橙 10YR7/2	粗	良	口縁部 2/12	
36	116-2	〃	甕	〃	T	j3	〃	〃	23			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・オサエ	外面 にぶい黄 2.5Y6/3 内面 暗赤褐 5YR3/3	粗	やや不良	口縁部 4/12	
37	114-1	〃	〃	〃	T	j7	〃	〃	45			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・オサエ・ナデ	淡黄 2.5Y8/3	やや粗	良	口縁部 2/12	
38	128-7	白磁	皿		T	k1	〃	〃	12			内外面ロクロナデ・施釉	灰白 7.5Y8/1	密	良	口縁部 1/12	
39	128-5	〃	端反皿		T	k1	〃	〃	12	3.05	6	内外面ロクロナデ・施釉	灰白 10Y8/1	密	良	口縁部 1/12 底部2/12	
40	128-6	〃	〃		T	k1	〃	〃	12.6	2.95	7	内外面ロクロナデ・施釉	灰白 7.5Y8/1	密	良	口縁部 3/12 底部 3/12	
41	130-1		瓦		T	i8	〃	〃		高さ6.8			灰 10Y6/1	やや粗	良		
42	103-1		〃		Q	j24	〃	〃		高さ7.4			外面 灰 N4/ 灰白 5Y8/1 内面 灰白 5Y7/1	やや粗	良		
43	121-1	石製品	五輪塔		Q	l24	〃	〃		高さ9	幅20.2					完存	

第２表　遺物観察表①

遺物番号	実測番号	器種など		産地・系統等	大地区	小地区	遺構	区画	口径	器高	底径	成形・調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
44	118-6	土製品	加工円盤		T	j6	〃	〃				鉄釉	釉 褐 7.5YR4/4 生地 淡黄 2.5Y8/3	密	良	完存	
45	49-7	鉄製品	釘		T	j3	〃	〃								残存長 4.8cm	
46	48-1		鋳型		T	j3	〃	〃					にぶい橙 7.5YR7/4	粗		酸化部分有り	
47	48-2		〃		T	j3	〃	〃					にぶい黄橙 10YR7/3	粗		酸化部分有り	
48	85-1	土師器	羽釜	中北勢系				1・2	20			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ・オサエ・ス ス付着 内面ヨコナデ・ナデ	橙 2.5YR6/6	密	良	口縁部 3/12	焼成前穿孔
49	82-1	陶器	片口鉢	常滑				〃	28	10.7	13	内外面ロクロナデ	橙 5YR7/6	粗	やや不良	口縁部 4/12 底部 5/12	
50	84-5	〃	甕	〃				〃				内外面ロクロナデ	灰オリーブ 5Y4/2	密	良	口縁部 1/12	
51	84-2	〃	〃	〃				〃	45			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・オサエ・ナデ	浅黄橙 10YR8/4	密	並	口縁部 2/12	
52	146-1	石製品	五輪塔					〃		高さ 11.5	幅19.3						
53	120-1	〃	石臼					〃	32							2/12	
54	48-3		鋳型					〃					にぶい橙 7.5YR7/3	粗			酸化部分有り
55	113-1	石製品	石仏				SD43上層	3	長さ34.7	厚さ7.5	幅17.1						砂岩
56	86-4	土師器	羽釜	中北勢系			〃	〃	20			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ 内面ヨコナデ・オサエ・工具ナデ・ケズリ	明赤灰 2.5YR7/2	密	良	口縁部 3/12	
57	85-8	陶器	志野丸皿	瀬戸美濃			〃	〃	11.7	2.6	6	内外面ロクロナデ・施釉	灰白 7.5YR8/1	密	良	口縁部 3/12 底部 3/12	
58	85-9	〃	片口	〃			〃	〃			8.5	内外面ロクロナデ・施釉	釉 暗赤褐 2.5YR3/6 生地 灰赤 2.5YR4/2	密	良	底部 3/12	
59	85-7	〃	天目茶椀	〃	T	d7	Pit1	〃	11.4	5.7	4.4	外面ロクロナデ・鉄釉 内面ロクロナデ・鉄釉	釉 オリーブ褐～黒褐 2.5Y4/3～3/1 生地 灰黄 2.5Y7/2	密	良	口縁部 3/12 底部 完存	
60	91-6	土師器	羽釜	中北勢系	S	v3	SK328	4				外面ヨコナデ・ハリツケナデ 内面ヨコナデ・ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	やや密	良	口縁部 1/12	SB257内 焼成前穿孔
61	91-5	〃	皿		P	x25	SK336	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	灰白 2.5Y8/2	密	不良	口縁部 1/12	
62	139-1	〃	羽釜	中北勢系			落ち込み	〃	19			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ・ス ス付着 内面ヨコナデ・工具ナデ・ケズリ	橙 5YR6/6	密	良	口縁部 4/12	SZ350
63	138-1	〃	〃	〃			〃	〃	21			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ・ケズリ 内面ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	橙 5YR6/6	やや粗	良	口縁部 11/12	〃 焼成前穿孔
64	137-1	〃	茶釜形	〃			〃	〃	つば径26			外面磨耗により調整不明・ハリツケナデ・ス ス付着 内面ナデ・オサエ・ケズリ	灰白 10YR8/2	やや粗	不良	つば 3/12	〃
65	150-1	〃	羽釜	〃	P	w25	包含層	〃	22.1			外面ヨコナデ・ナデ・ハリツケナデ・ハケメ・ス ス付着 内面ヨコナデ・工具ナデ	灰 5Y6/1	やや密	良	口縁部 2/12	焼成前穿孔
66	95-3	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃			落ち込み	〃			4.1	外面ロクロケズリ・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	外面 暗赤灰 5R4/1 内面 黒 7.5YR7/1 生地 灰白 2.5Y8/2	密	良	底部 完存	SZ350
67	153-1	〃	〃	〃	P	v25	包含層	〃	11.1			外面ロクロナデ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	鉄釉 赤灰 2.5YR4/1 サビ釉 暗褐～にぶい褐 7.5YR3/3～7.5YR5/4 ラップ部 褐灰 7.5YR6/1	密	良	口縁部 3/12	
68	152-1	〃	〃	〃	P	v25	〃	〃	11.2		3.9	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	鉄釉 にぶい褐 7.5YR5/4 サビ釉 灰褐 5YR5/2 ラップ部 にぶい褐 7.5YR5/3	密	良	底部 完存	
69	95-6	〃	灰釉端反皿	〃			落ち込み	〃				内外面施釉	釉 浅黄 7.5Y7/3 生地 灰白 7.5Y8/1	密	良	口縁部 1/12	SZ350
70	98-6	〃	灰釉片口小瓶	〃	P	w23	包含層	〃	4.2			内外面ロクロナデ・施釉	釉 にぶい黄 2.5Y6/4 生地 灰白 2.5Y8/1	密	良	口縁部 3/12	
71	95-7	〃	黄瀬戸鉢	〃			落ち込み	〃				内外面ロクロナデ・施釉	淡黄 5Y8/3	密	良	口縁部 1/12	SZ350
72	95-4	〃	山茶椀	尾張型			〃	〃	11			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	灰白 7.5Y8/1	やや密	不良	口縁部 2/12	〃
73	95-5	〃	〃	〃			〃	〃			4.6	内外面ロクロナデ 底部糸切り痕	灰白 7.5Y8/1	やや密	不良	底部 5/12	〃
74	97-2	〃	擂鉢	瀬戸美濃	P	w23	包含層	〃	34.4	13	12.9	外面ロクロナデ・ロクロケズリ 内面ロクロナデ・櫛目・糸切り痕	灰赤 2.5YR4/2 にぶい赤褐 5YR5/4	やや粗	良	口縁部 2/12 底部 1/12	
75	97-1	〃	〃	〃			落ち込み	〃	32.2			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	暗赤灰 10R4/1	やや密	良	口縁部 3/12	SZ350
76	94-2	〃	甕	常滑			〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・ナデ	外面 赤灰 2.5YR4/1 内面 にぶい橙 2.5YR6/4	粗	やや不良	口縁部 1/12	〃
77	95-8	〃	〃	〃			〃	〃	46			内外面ロクロナデ	外面 赤灰 2.5YR4/1 内面 にぶい赤褐 2.5YR5/4	やや密	やや不良	口縁部 1/12	〃
78	151-1	〃	〃	〃	P	v25	包含層	〃	26.5			内外面ロクロナデ	外面 にぶい赤褐 5YR4/3 内面 明赤褐 2.5YR5/8	密	良	口縁部 8/12	粘土接合痕
79	93-1	〃	甕	〃			落ち込み	〃	22			内外面ロクロナデ	外面 暗褐 7.5YR3/4 内面 灰黄褐 10YR4/2	粗	良	口縁部 3/12	SZ350
80	94-3	〃	壺	〃			〃	〃				内外面ロクロナデ・ケズリ	外面 灰褐 5YR5/2 内面 灰褐 5YR4/2	やや粗	やや不良	底部 1/12	〃
81	128-1	磁器	端反皿		P	y25	包含層	〃				内外面ロクロナデ・施釉	灰白 2.5Y8/2	密	良	口縁部 1/12	
82	93-2	陶器	甕	常滑			落ち込み	〃	34			内外面ロクロナデ	外面 浅黄 5Y7/3 内面 灰褐 7.5YR5/2	やや粗	やや不良	口縁部 2/12	SZ350
83	126-8	青磁	皿		S	w4	SK331	5				内外面施釉	明緑灰 7.5GY7/1	密	良	口縁部 1/12	
84	95-1	土師器	羽釜	中北勢系	S	v6	SK334	〃	16			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ 内面ヨコナデ・オサエ・ナデ	橙 5YR6/6	粗	良	口縁部 1/12	
85	92-4	〃	〃	〃	S	v6	〃	〃	24.6			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ 内面ヨコナデ・ナデ	外面 橙 5YR6/6 内面 にぶい橙 7.5YR6/4	やや粗	良	口縁部 2/12	焼成前穿孔
86	162-1	〃	茶釜形	〃	S	v6	〃	〃	24.6			外面ヨコナデ・ハケメ・ハリツケナデ 内面ナデ・ハケメ・ユビオサエ	外面 にぶい褐 7.5YR5/4 内面 にぶい褐 7.5YR5/3	やや粗	良	口縁部 4/12	

第３表　遺物観察表②

遺物番号	遺構番号	器種など		産地・系統等	大地区	小地区	遺構	区画	口径	器高	底径	成形・調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
87	91-1	陶器	片口鉢	常滑	S	v6	〃	〃			14.8	外面ロクロナデ・オサエ 内面ナデ	外面 橙 2.5YR7/6 内面 浅黄橙 10YR8/3	粗	良	底部 3/12	
88	161-1	〃	〃	〃	S	v6	〃	〃			14.1	外面ロクロナデ・オサエ・ケズリ 内面 擦痕	外面 橙 5YR6/6 内面 明赤褐 2.5YR5/6 にぶい黄橙 10YR7/4	密	良	底部 4/12	
89	94-1	〃	甕	〃	S	v6	〃	〃	34			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・オサエ	外面 灰黄 2.5Y7/2 内面 赤橙 10YR6/6	やや粗	良	口縁部 2/12	
90	158-1	〃	灰釉端反皿	瀬戸美濃	S	w6	Pit1	〃	8.9	2.17	4.9	内外面ロクロナデ・施釉 ・輪ドチ・トチン	オリーブ黄 5Y6/4	密	良	口縁部 1/12 底部 10/12	
91	148-1	〃	播鉢	〃	S	w5	包含層	〃			12.8	外面ロクロナデ 内面ハケメ 底部ロクロ糸切り痕	外面 暗褐 7.5YR3/4 内面 淡黄 2.5Y8/3	密	良	底部 4/12	
92	149-1	〃	祖母懐壺	〃	S	v6	〃	〃	14.3			内外面ロクロナデ・鉄釉	褐 7.5YR4/4	密	良	口縁部 4/12	
93	88-6	〃	鉄釉丸皿	〃	P	s24	SK319	6			5	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉 内面ロクロナデ・鉄釉・トチン・輪ドチ	外面 にぶい赤褐 5YR5/4 内面 にぶい赤褐 2.5YR5/4	密	良	底部 完存	SB254内
94	105-3	石製品	砥石		P	s24	〃	〃	長さ10.4	厚さ4.4	幅5.1						〃
95	91-3	陶器	甕	常滑	P	s24	SK321	〃			13.4	内外面ロクロナデ	外面 橙 5YR6/6 内面 にぶい橙 7.5YR6/4	粗	良	底部 1/12	〃
96	91-2	〃	〃	〃	P	s24	〃	〃			16.1	内外面ロクロナデ	にぶい褐 7.5YR6/3	粗	良	底部 1/12	〃
97	91-7	土師器	皿		P	r25	SK323	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	淡黄 2.5Y8/3	やや密	不良	口縁部 1/12	
98	88-1	陶器	壺	常滑	P	r24	SK317	〃				内外面ロクロナデ	外面 灰褐 7.5YR5/2 内面 褐灰 5YR4/1	密	良	口縁部 1/12	
99	166-1	〃	口広有耳壺	瀬戸美濃	P	s23	SK318	〃			11.8	外面ロクロナデ・鉄釉・糸切り痕 内面ロクロナデ	釉 オリーブ褐 2.5Y4/6 生地 淡黄 2.5Y8/3	密	良	底部 4/12	
100	98-1	〃	播鉢	〃	P	u22	包含層	〃	28.8			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	赤灰 2.5YR4/1	やや密	良	口縁部 5/12	
101	155-1	石製品	硯		P	v24	〃	〃	長さ4.95	厚さ1.2	幅3.5						
102	129-7	磁器	椀		P	q24	〃	〃			4	内外面施釉 底部貼付高台・施釉	外面 明青灰 5BG7/1 内面 明緑灰 7.5GY8/1	密	良	底部 2/12	
103	164-1	土師器	羽釜	中北勢系	S	r3	SK324	7	20.6			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・オサエ・ナデ・ススト付着 内面ヨコナデ・工具ナデ・ナデ	外面 浅黄 10YR8/3 内面 黄橙 7.5YR7/8	やや粗	不良	口縁部 3/12	焼成前穿孔
104	92-2	陶器	口広有耳壺	瀬戸美濃	S	r24	〃	〃	13			内外面ロクロナデ・鉄釉	灰赤 10YR5/2	やや粗	良	口縁部 2/12	
105	91-4	〃	片口鉢	常滑	S	q2	SR337	〃	32.6			内外面ロクロナデ	にぶい橙 5YR6/4	粗	良	口縁部 2/12	
106	86-3	土師器	羽釜	中北勢系			SR301		21			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ 内面ヨコナデ・ナデ	橙 7.5YR6/6	密	良	口縁部 2/12	
107	171-1	瓦質土器	風炉				〃		最大径30			内外面ナデ	外面 暗灰黄 2.5Y5/2 内面 褐灰 10YR4/1	やや密	良	胴部 1/5	
108	88-7	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃			〃				4.6	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	褐 7.5YR4/6	密	良	底部 完存	
109	87-4	〃	灰釉丸皿	美濃			〃				6	外面施釉・ロクロケズリ 内面施釉	釉 オリーブ黄 7.5Y6/3 生地 灰白 7.5Y7/2	密	良	底部 6/12	
110	86-2	〃	播鉢	瀬戸美濃	P	r20	〃		29			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	暗青灰 10BG4/1	密	良	口縁部 2/12	
111	89-1	〃	片口鉢	常滑	P	r20	〃		34.3			内外面ロクロナデ	橙 5YR7/6	やや密	良	口縁部 2/12	
112	104-3	鉄製品	釘		P	r22	〃			厚さ0.6	幅0.8						重さ8.16g
113	86-1	陶器	甕	常滑	P	r21	〃		39			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・ユビオサエナデ	橙 5YR6/6	密	良	口縁部 2/12	
114	99-6	土師器	皿		P	k22	Pit1	8	8			内外面ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 10YR8/3	密	良	口縁部 2/12	SB250内
115	87-2	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	P	j21	SK304	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	暗紫灰 5RP4/1	密	良	口縁部 1/12	〃
116	88-3	〃	鉄釉丸皿	〃	P	k22	SK307	〃				内外面ロクロナデ・鉄釉	にぶい赤褐 5YR5/4	密	良	口縁部 1/12	〃
117	136-1	土師器	羽釜	中北勢系	P	k21	〃	〃	21.4			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ・ケズリ 内面ヨコナデ・ナデ・オサエ・工具ナデ	橙 7.5YR7/6	粗	良	口縁部 9/12	〃 焼成前穿孔
118	88-2	陶器	甕	常滑	P	k21	〃	〃				外面ロクロナデ・ナデ 内面ロクロナデ・ナデ・オサエ	灰褐 5YR5/2	密	良	口縁部 1/12	〃
119	169-1	〃	〃	〃	P	k21	〃	〃	20.9			内外面ロクロナデ	褐灰 7.5YR4/2	密	良	口縁部 2/12	〃
120	88-4	土師器	皿		P	ki20・21	SK308	〃				内外面ナデ・オサエ	外面 浅黄橙 10YR8/4 内面 浅黄橙 10YR8/3	密	良	口縁部 1/12	〃
121	91-8	〃	〃		P	ki20・21	〃	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	灰白 2.5Y8/2	やや密	良	口縁部 1/12	〃
122	88-5	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	P	ki20・21	〃	〃				内外面ロクロナデ・鉄釉	にぶい赤褐 5YR4/3	密	良	口縁部 1/12	〃
123	87-7	土師器	皿		P	mn24・25	SE303	〃	8.8	1.4	4.4	外面ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面ナデ	にぶい橙 5YR7/3	密	良	口縁部 3/12	
124	87-6	〃	〃		P	mn24・25	〃	〃	8.8	1.7	3	外面ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	密	良	口縁部 3/12	
125	139-2	〃	羽釜	中北勢系	P	mn24・25	〃	〃	15	8.3		外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ・ケズリ・ススト付着 内面ヨコナデ・オサエ・ナデ・ケズリ	橙 5YR6/8	密	良	口縁部 10/12	Sv6包含層と接合
126	140-2	〃	〃	〃	P	mn24・25	〃	〃	15.8			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ・ケズリ 内面ヨコナデ・工具ナデ・ケズリ	外面 橙 5YR7/6 内面 橙 5YR6/6 灰褐 5YR4/2	密	良	口縁部 9/12	Pp22包含層と接合
127	87-1	〃	〃	〃	P	mn24・25	〃	〃	21			外面ヨコナデ・ハリツケナデ 内面ヨコナデ・ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	密	良	口縁部 3/12	
128	142-1	〃	〃	〃	P	mn24・25	〃	〃	22.8	12.1		外面ヨコナデ・ハリツケナデ・工具ナデ・ケズリ・ススト付着 内面ヨコナデ・オサエ・工具ナデ	橙 5YR6/6	粗	良	口縁部 5/12	
129	142-2	〃	〃	〃	P	mn24・25	〃	〃	20.7			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・工具ナデ・ケズリ・ススト付着 内面ヨコナデ・ナデ・工具ナデ・ケズリ	浅黄橙 10YR8/3	やや粗	良	口縁部 7/12	

第４表　遺物観察表③

遺物番号	実測番号	器種など		産地・系統等	大地区	小地区	遺構	区画	口径	器高	底径	成形・調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
130	140-1	〃	〃	〃	P	mn24・25	〃	〃	31			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ・ススト付着 内面ヨコナデ・工具ナデ・ケズリ	橙 7.5YR7/6	密	良	口縁部 3/12	
131	138-2	〃	〃	〃	P	mn24・25	〃	〃	23.2			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ・ケズリ 内面ヨコナデ・工具ナデ・ケズリ	にぶい橙 7.5YR6/4	やや粗	良	口縁部 9/12	
132	136-2	〃	〃	〃	P	mn24・25	〃	〃	25.3			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・工具ナデ・ケズリ 内面ヨコナデ・工具ナデ・オサエ・ケズリ	橙 7.5YR7/6	やや粗	良	口縁部 9/12	Pp22包含層と接合
133	87-5	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	P	m24	〃	〃	12			外面ロクロナデ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	釉 黒褐 7.5YR3/2 生地 灰褐 7.5YR4/2	密	良	口縁部 2/12	
134	87-3	〃	〃	〃	P	m24	〃	〃	12			内外面ロクロナデ・鉄釉	釉 オリーブ褐 2.5Y4/3 生地 浅黄 2.5YR7/3	密	良	口縁部 2/12	
135	167-1	〃	灰釉端反皿	〃	P	mn24・25	〃	〃	11.8	2.45	6	内外面ロクロナデ・トチン	オリーブ黄 5Y6/3	密	良	口縁部 1/12 底部 6/12	
136	168-1	〃	山茶椀	尾張型	P	mn24・25	〃	〃	11.8	3.05	5.3	内外面ロクロナデ 底部糸切り痕	灰白 5Y8/1	やや密	良	口縁部 2/12 底部1/12	
137	170-1	〃	擂鉢	瀬戸美濃	P	m24	〃	〃	28.6			外面ロクロナデ・サビ釉 内面ヨコナデ・櫛目	外面 灰黄褐 10YR6/2 内面 灰黄褐 10YR5/2	密	良	口縁部 2/12	
138	90-2	〃	桶	〃	P	m25	SE303(5層)	〃	26			内外面ロクロナデ・鉄釉	灰褐 7.5YR4/2	密	良	口縁部 2/12	
139	90-1	〃	片口鉢	常滑	P	m25	SE303(4層)	〃	18			外面ロクロナデ・オサエ 内面擦痕	浅黄橙 10YR8/4	やや粗	やや不良	底部 6/12	
140	89-2	〃	甕	〃	P	mn24・25	SE303	〃	36			外面ロクロナデ・タタキ？ 内面ロクロナデ・オサエ・ナデ	外面 橙 2.5YR6/6 内面 橙 2.5YR6/8	密	良		
141	172-1	漆器	椀		P	mn24・25	〃	〃	7			外面黒漆付着 内面黒漆後朱漆付着				1/3	横木取り板目
142	145-1	石製品	石臼		P	mn24・25	〃	〃	33.4	高さ8.9							重さ3.9kg
143	143-1	〃	茶臼		P	mn24・25	〃	〃	上20・下34	高さ10							重さ4kg
144	92-1	陶器	甕	常滑	P	q20	SR313	〃	52.6			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・オサエ	灰赤 7.5YR4/2	粗	良	口縁部 1/12	
145	92-3	〃	〃	〃	P	q20	〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ後ユビオサエ	灰 7.5Y5/1 浅黄 2.5Y7/3	粗	良	口縁部 1/12	
146	99-1	土師器	皿		P	l21	Pit1	〃				外面ヨコナデ 内面ヨコナデ・ナデ	灰白 10YR8/2	密	良	口縁部 1/12	
147	99-2	〃	〃		P	l20	Pit1	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	外面 灰白 10YR8/1 内面 灰白 10YR8/2	密	良	口縁部 1/12	
148	99-3	〃	〃		P	l21	Pit1	〃				外面ヨコナデ・不定方向ナデ 内面ヨコナデ・ナデ	外面 褐灰 10YR6/1 内面 褐灰 10YR5/1	密	良	口縁部 1/12	
149	99-5	〃	〃		P	k21	Pit1	〃				外面ヨコナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 7.5YR8/3	密	良	口縁部 2/12	
150	159-1	〃	〃		P	j21	Pit1	〃	9.4	2.4		磨耗により調整不明	にぶい黄橙 10YR7/4	やや粗	不良	口縁部 4/12	
151	99-8	陶器	甕	常滑	P	k21	Pit1	〃			15	外面ロクロナデ・オサエ 内面ナデ	外面 にぶい橙 7.5YR6/4 橙 2.5YR6/6 内面 灰褐 7.5YR5/2	密	良	底部 3/12	
152	127-4	磁器	香炉		P	k21	Pit3	〃	12.6	8.5		外面ロクロナデ・施釉 内面ロクロナデ・自然釉・重ね焼き痕 底部貼付・削り出し高台	釉 明緑灰 7.5GY7/1 外面 灰白 5Y7/1 内面 灰 7.5Y6/1	やや密	良	底部 完存	
153	154-1	土師器	羽釜	中北勢系	P	l23	包含層	〃	24.2			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・工具ナデ 内面ヨコナデ・工具ナデ	橙 5YR6/6	やや密	良	口縁部 4/12	焼成前穿孔
154	165-1	〃	茶釜形	〃	P	m22	SK309	〃	15.8			外面ヨコナデ・ナデ・ハケメ・ハリツケナデ 内面ヨコナデ・板ナデ・ナデ	外面 にぶい黄橙 10YR6/4 内面 黒 2.5Y2/1	やや密	良	口縁部 3/12	近世遺構への混入
155	49-6	鉄製品	釘		P	m22	〃	〃								残存長4.5cm	
156	98-5	陶器	鉄釉稜皿か丸皿	瀬戸美濃	P	o24	包含層	〃			5.6	外面ロクロナデ・鉄釉 内面ロクロナデ・輪ドチ痕	鉄釉 褐 7.5YR4/3 黒褐 7.5YR3/1	密	良	底部 8/12	
157	157-1	石製品	硯		P	j23	〃	〃	長さ14.2	厚さ1	幅8.25						重さ115g
158	98-9	土製品	加工円盤		P	n25	〃	〃	5.1	厚さ2.2			外面 にぶい赤褐 5YR5/3 断面 橙 5YR6/6	やや粗	良		
159	95-2	〃	〃		P	n24	〃	〃	3.4	厚さ0.7			浅黄 10Y7/3	密	良		
160	78-1	土師器	羽釜	中北勢系	東③	b2	SK130	9	20			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ススト付着 内面ヨコナデ・工具ナデ	浅黄橙 10YR8/3	やや密	良	口縁部 2/12	
161	77-4	〃	鍋	尾張系	東③	b2	〃	〃				外面ヨコナデ・ナデ・ススト付着 内面ヨコナデ・ナデ	外面 にぶい褐 7.5YR5/4 内面 灰褐 7.5YR4/2	やや密	良	口縁部 1/12	
162	77-7	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	東③	b2	〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	釉 暗赤灰 7.5YR4/1 生地 浅黄橙 10YR8/4	やや粗	良	口縁部 1/12	
163	77-6	〃	香炉	〃	東③	b2	〃	〃				内外面ロクロナデ・鉄釉	釉 褐 7.5YR4/3 生地 灰白 10YR8/2	やや密	良	口縁部 1/12	
164	79-1	〃	〃	〃	東③	c2	SD131	〃	22.8			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ススト付着 内面ヨコナデ・工具ナデ	浅黄橙 7.5YR8/3	やや粗	良		
165	78-2	〃	甕	常滑	東③	c2	〃	〃				外面ロクロナデ・ロクロケズリ 内面ロクロナデ・工具ナデ	浅黄橙 10YR8/3	粗	良	口縁部 1/12	
166	77-2	土師器	羽釜	中北勢系	東③	f8	包含層	〃				外面ヨコナデ・ハリツケナデ・板ナデ・ススト付着 内面ヨコナデ・板ナデ	褐 7.5YR4/3	やや密	良	口縁部 1/12	
167	76-3	〃	鍋	〃	東③	f&10	〃	〃	24			外面ヨコナデ・ハケメ・ススト付着 内面ヨコナデ・ナデ	外面 黒褐 7.5YR3/1 内面 橙 5YR6/6	やや密	良	口縁部 1/12	
168	77-3	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	東③	g2	〃	〃			4.3	外面ロクロケズリ・鉄釉 内面鉄釉	鉄釉 にぶい褐 7.5YR5/4 生地 にぶい橙 5YR6/4	密	良	底部 完存	
169	77-1	〃	香炉	〃	東③	f6	〃	〃			10	施釉	外面 黒褐 7.5YR3/1 灰白 5Y8/2 内面 黒褐 7.5YR3/1	密	良	底部 3/12	
170	76-1	〃	甕	常滑	東③	f7	〃	〃				内外面ロクロナデ	外面 暗赤褐 10YR3/3 内面 赤褐 10YR5/4	やや密	やや不良	口縁部 1/12	
171	100-1	土師器	皿		L	k21	SR12		7			磨耗により調整不明	灰白 7.5YR8/2	密	良	口縁部 4/12	
172	100-3	〃	〃		L	k21	〃					内外面ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 10YR8/3	やや密	良	口縁部 1/12	

第５表　遺物観察表④

遺物番号	実測番号	器種など		産地・系統等	大地区	小地区	遺構	区画	口径	器高	底径	成形・調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
173	100-2	〃	〃		L	k21	〃		10			磨耗により調整不明	浅黄橙 7.5YR8/3	やや密	良	口縁部 2/12	
174	34-2	陶器	擂鉢	瀬戸美濃			〃				10	外面ロクロナデ・糸切り痕 内面ロクロナデ・櫛目	暗赤灰 7.5YR4/1	やや粗	良	底部 4/12	
175	77-5	〃		〃			〃				14	外面ロクロケズリ・鉄釉 内面鉄釉	外面 浅黄橙 10YR8/4 内面 褐 7.5YR4/4	密	良	底部 2/12	
176	38-5	〃	片口鉢	常滑			〃					外面ロクロナデ・オサエ 内面板ロクロナデ	外面 橙 5YR6/6 内面 にぶい赤褐 5YR5/4	粗	良	口縁部 1/12	
177	129-3	磁器	皿？		P	c5	〃					外面施釉・露胎 内面施釉	外面 灰白 5Y8/2 内面 灰白 5Y8/1	密	良	底部 1/12	
178	10-3	陶器	黄瀬戸鉢	瀬戸美濃	O	r1	〃				17	外面ロクロケズリ 内面ロクロナデ・ロクロケズリ	釉 浅黄 2.5Y7/3 生地 淡黄 2.5Y8/3	やや密	良	底部 4/12	
179	35-4	〃	擂鉢	瀬戸美濃	P	l7	SK36	l0	36			内外面ロクロナデ	赤灰 2.5YR4/1	やや密	良	口縁部 1/12	
180	32-3	〃	祖母懐壷	〃	P		〃	〃	11.6			外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉 内面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉	外面 にぶい赤褐 5YR5/3 内面 にぶい赤褐 2.5YR4/3	密	良	口縁部 4/12	焼成前穿孔
181	35-3	〃	〃	〃	P	l7	〃	〃			10.8	外面ロクロケズリ 内面ロクロケズリ・ナデ	外面 褐灰 5YR5/2 内面 灰褐 10YR5/1	密	良	底部 1/12	
182	42-2	〃	片口鉢	常滑	P		〃	〃	24			外面ロクロナデ・オサエ 内面ロクロナデ	灰赤 2.5YR5/2 断面 灰 7.5Y5/1	粗	良	口縁部 3/12	
183	43-1	〃	〃	〃	P		〃	〃	27			外面ロクロナデ・オサエ 内面ロクロナデ	赤褐 10YR4/3	粗	良	口縁部 2/12	
184	126-10	白磁	端反皿		P	l8	〃	〃	12.2	2.6	6.7	内外面施釉により調整不明 底部削り出し高台	灰白 7.5Y7/1	密	良	口縁部 2/12 底部 2/12	
185	29-4	土製品	加工円盤		P	l7	〃	〃	直径4.6	厚さ0.9		外面打ち欠け	サビ釉 にぶい赤褐 5YR5/3 生地 にぶい橙 5YR7/4 内面 にぶい黄橙 10YR7/2	密	良	完存	
186	133-2		瓦		P		〃	〃		高さ5.9			灰 N6/	やや粗	良		
187	133-1		〃		P	k8	〃	〃		高さ6.3			灰 N5/	やや粗	良		
188	131-1		〃		P		〃	〃		高さ5.7			灰 10Y6/1	やや粗	良		
189	131-2		〃		P	l8	〃	〃		高さ5.6			灰 10Y6/1	やや粗	良		
190	26-5	土師器	皿		P	k8	SK42	〃	10			外面ヨコナデ・ユビオサエ・ナデ 内面ヨコナデ・ナデ	外面 灰白 10YR8/2 内面 浅黄橙 10YR8/3	やや密	不良	口縁部 3/12	
191	28-5	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	P		〃	〃			4.1	外面ロクロケズリ・サビ釉 内面鉄釉	外面 にぶい赤褐 2.5YR5/4 内面 にぶい褐 7.5YR5/3	密	良	底部 完存	
192	111-1		埴		P	k7	Pit1	〃	長さ18	厚さ7	幅14.1						
193	111-2		〃		P	l9	包含層	〃	長さ19.3	厚さ7.6	幅18.3						
194	27-3	土師器	皿				〃	〃	7	1.25		外面オサエ・ナデ 内面ナデ	浅黄橙 10YR8/4	密	不良	口縁部 3/12	
195	27-1	〃	〃				〃	〃	10			外面ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 10YR8/4	密	並	口縁部 2/12	
196	47-6	陶器	山茶椀	尾張型			〃	〃	9.2			内外面ロクロナデ	灰白 7.5Y8/1	やや密	不良	口縁部 1/12	
197	47-5	〃	〃	〃	P	lm7	〃	〃	10.4			内外面ロクロナデ 底部糸切り痕	淡黄 5Y8/3	やや密	やや軟	口縁部 3/12 底部 1/12	
198	47-1	〃	〃	〃	P	lm7	〃	〃	10.8	2.8	4.8	内外面ロクロナデ 底部糸切り痕	淡黄 2.5Y8/3	やや粗	やや不良	口縁部 11/12 底部 完存	
199	38-1	〃	片口鉢	常滑	P	l7	〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	灰赤 10YR4/2	粗	良	口縁部 1/12	
200	44-5	〃	甕	〃	P	g10	〃	〃				外面ロクロナデ・ナデ 内面ロクロナデ	外面 赤褐 10R5/4 内面 橙 5YR7/8	密	良	口縁部 1/12	
201	46-3	〃	〃	〃	P	i9	〃	〃	38			外面ロクロナデ・ナデ 内面ロクロナデ・ロクロナデ・オサエ	外面 にぶい赤褐 5YR5/4 内面 橙 5YR7/6	密	良	口縁部 1/12	
202	30-5	〃	灰釉丸皿	瀬戸美濃	P	f4	SK88	l1	10.4	2.4	5.8	内外面ロクロナデ	外面 灰白 7.5Y7/2 内面 浅黄 7.5Y7/3 生地 灰白 7.5YR8/1	密	良	口縁部 4/12 底部 6/12	
203	2-8	土師器	皿		P	e6	包含層	〃	8.9	1.2		内外面ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4 断面 暗灰 N3/	やや密	並	口縁部 3/12	
204	1-6	〃	鍋	中北勢系	P	b4	〃	〃				外面ヨコナデ・ハケメ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ	橙 5YR6/6	やや粗	並	口縁部 1/12	
205	1-2	〃	羽釜	〃	P	e5	〃	〃	22			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ 内面ヨコナデ・ナデ	橙 5YR6/6	やや粗	並	口縁部 2/12	
206	3-1	〃	〃	〃	P	e6	〃	〃	23.2			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ・オサエ	橙 5YR7/6	やや粗	並	口縁部 10/12	
207	32-2	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	P	b4	〃	〃	14.2			外面ロクロナデ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	やや粗	良	口縁部 2/12	
208	32-1	〃	〃	〃	P	b4	〃	〃				内面ロクロナデ 外面ロクロケズリ	外面 橙 7.5YR6/6 内面 にぶい赤褐 5YR5/3	やや粗	良	底部 完存	
209	33-3	〃	口広有耳壷	〃	P	e4	〃	〃	14			内外面ロクロナデ	にぶい褐 7.5YR5/4	やや密	良	口縁部 2/12	
210	80-3	〃	筒形容器	〃	P	e4	〃	〃	15.4		13	外面ロクロナデ・ナデ・サビ釉 内面ロクロナデ・サビ釉・横ピン 底部糸切り痕	サビ釉 にぶい赤褐 5YR4/3 生地 淡黄 2.5Y8/3	粗	良	口縁部 4/12 底部 10/12	
211	47-2	〃	山茶椀	尾張型	P	c4	〃	〃			7	内外面ロクロナデ・墨痕	灰白 2.5Y8/2	粗	やや不良	底部 完存	
212	119-1	石製品	五輪塔		P	f5	〃	〃		高さ16	幅27.5						
213	173-1	〃	〃		O	k1	SK70	12		高さ11.2	幅19.9～20.2						
214	128-2	磁器			O	k1	〃	〃				内外面施釉・染付有り	外面 明緑灰 7.5GY8/1 内面 灰白 10Y8/1	密	良	小片	
215	45-1	陶器	甕	常滑	M	a24	SB110柱穴	〃				内外面ロクロナデ・ナデ	外面 にぶい赤褐 7.5R5/3 内面 にぶい赤褐 7.5R4/3	密	良	口縁部 1/12	

第６表　遺物観察表⑤

遺物番号	実測番号	器種など		産地・系統等	大地区	小地区	遺構	区画	口径	器高	底径	成形・調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
216	59-5	〃	天目茶椀	瀬戸美濃	L	u23	SB147柱穴	〃				内外面ロクロナデ	外面 黒褐 7.5YR3/2 内面 にぶい褐 7.5YR5/4	やや密	良	口縁部 1/12	
217	59-4	〃	〃	〃	L	w22	SB148柱穴	〃				内外面ロクロナデ	灰 N4/	やや粗	良	口縁部 1/12	
218	101-5	土師器	皿		L	u24	SK128	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	灰白 2.5Y8/2	密	良	口縁部 1/12	SB150内
219	101-4	〃	〃		L	v22	〃	〃				外面ヨコナデ・ナデ 内面ヨコナデ・オサエ・ナデ	浅黄橙 10YR8/4	密	良	口縁部 1/12	〃
220	101-6	〃	羽釜	中北勢系	L	w23	〃	〃				外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ	橙 7.5YR6/6	やや粗	良	口縁部 1/12	〃 焼成前穿孔
221	102-1	〃	〃	〃	L	v24	〃	〃	22			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・調整不明 内面ヨコナデ・剥離著しく調整不明	浅黄橙 10YR8/3	粗	並	口縁部 2/12	〃
222	102-2	〃	〃	〃	L	v23	〃	〃	22			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ・ケズリ 内面ヨコナデ・工具ナデ	橙 5YR6/6	粗	並	口縁部 2/12	〃
223	101-7	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	L	v23	〃	〃	12			外面ロクロケズリ・鉄釉 内面鉄釉	外面 極暗褐 7.5YR2/3 明褐 7.5YR5/6 内面 極暗褐 7.5YR2/3 生地 淡黄 2.5Y8/4	やや密	並	口縁部 6/12	〃
224	126-2	磁器	端反皿		L	u24	〃	〃				内外面施釉・外面染付有り	明緑灰 7.5GY8/1	密	良	口縁部 1/12	〃
225	129-5	〃	椀		L	u24	〃	〃				内外面ロクロナデ・施釉・外面染付有り	灰白 7.5Y8/1	密	良	口縁部 1/12	〃
226	61-3	陶器	片口鉢	常滑	L	w23	SB150柱穴	〃	40			外面ロクロナデ・オサエ 内面ロクロナデ	橙 7.5YR7/6 口縁 にぶい黄橙 10YR6/3	粗	良	口縁部 3/12	
227	59-9	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L	v21	SB151柱穴	〃	22			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	暗紫灰 5RP3/1	やや密	良	口縁部 1/12	
228	59-6	〃	天目茶椀	〃	L	v20	〃	〃	12.3			外面ロクロナデ・ロクロケズリ・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	鉄釉 黒 N2/ サビ釉 灰赤 2.5YR4/2 生地 灰白 5Y7/1	密	良	口縁部 1/12	
229	59-3	〃	山茶椀	尾張型	L	v21	〃	〃	10.8		4.6	内外面ロクロナデ 底部糸切り痕	淡黄 2.5Y8/3	やや密	やや不良	口縁部 2/12 底部 1/12	
230	50-9	土師器	皿		L	v21	SK135	〃	8.7			外面ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密	やや不良	口縁部 1/12	SB152内
231	50-7	〃	〃		L	v21	〃	〃				外面磨耗により調整不明 内面ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密	不良	口縁部 1/12	〃
232	51-2	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L	v20	〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	赤灰 2.5YR4/1 灰 5Y4/1	やや密	良	口縁部 1/12	〃
233	17-1	〃	〃	〃	L	v20	SK135襖下	〃	31.4			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	鉄釉 暗赤灰 7.5R4/1 生地 浅黄橙 7.5YR8/4	密	良	口縁部 3/12	〃
234	50-10	〃	山茶椀	尾張型	L	v20	SK135	〃	10.7	2.9	4.8	内外面ロクロナデ 底部糸切り痕	灰白 2.5Y8/2	やや粗	不良	口縁部 1/12 底部 5/12	〃
235	14-1	〃	鉢	瀬戸美濃	L	v20	〃	〃	17.5	5.1	11.2	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	釉外面 赤褐 5YR4/6 黄 5Y7/6 サビ釉 灰赤 7.5R4/2 釉内面 淡黄 2.5Y8/4 浅黄 5Y7/4 にぶい赤褐	やや密	良	口縁部 2/12 底部 3/12	〃
236	16-1	〃	片口鉢	常滑	L	v20	SK135襖下	〃	42			内外面ロクロナデ	黄橙 10YR8/6	密	良	口縁部 2/12	〃
237	21-1	〃	甕	〃	L	v20	〃	〃	21.8			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	釉 にぶい赤褐 7.5YR4/3 暗褐 7.5YR3/3 生地 灰白 5Y7/1	やや粗	並	口縁部 2/12	〃
238	15-1	〃	〃	〃	L	v20	SK135	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	釉外面 オリーブ黄 5Y4/3 黄褐 2.5Y5/4 淡黄 2.5Y8/4 釉内面 にぶい赤褐 2.5YR4/3 生地 橙 7.5YR6/6	密	並	口縁部 1/12	〃
239	22-1	〃	〃	〃	L	v20	〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	外面 褐灰 5YR4/1 内面 明褐 7.5YR5/6	密	良	口縁部 1/12	〃
240	52-2	石製品	硯		L	v20	〃	〃	長さ12.5	厚さ1.6	幅8.6	内面墨付着	橙 7.5YR6/6	やや密	良		〃
241	61-1	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L	x21	SE157	〃			9.5	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	外面 赤黒 2.5YR2/1 内面 暗灰 N3/	並		底部 8/12	
242	59-8	〃	〃	〃	L	x21	〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	にぶい赤褐 5YR5/3	やや粗	やや不良	口縁部 1/12	
243	61-2	〃	花瓶	〃	L	x21	〃	〃			5.8	外面ロクロナデ・鉄釉 内面ロクロナデ 底部糸切り痕	灰褐 7.5YR4/2	やや粗	良	底部 11/12	
244	59-2	〃	徳利	美濃	L	x21	〃	〃			9.6	外面施釉により調整不明・ロクロケズリ 内面ロクロナデ	釉 オリーブ黄 7.5Y6/3 生地 灰白 7.5Y7/1	やや粗	良	底部 5/12	
245	60-4	〃	甕	常滑	L	x21	〃	〃	44			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・オサエ	灰赤 2.5YR4/2 口縁 淡黄 5Y8/3	粗	良	口縁部 1/12	
246	29-5	〃	天目茶椀	瀬戸美濃	L	w25	SK77	〃	12			内外面ロクロナデ・鉄釉	鉄釉 黒褐 5YR3/1 生地 浅黄橙 10YR8/4	密	良	口縁部 4/12	
247	2-1	土師器	羽釜	中北勢系	O	y2	SK86	〃	20.8			外面ヨコナデ・ナデ・ハリツケナデ 内面ヨコナデ・ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	並	並	口縁部 2/12	
248	30-7	〃	灰釉端反皿	瀬戸美濃	O	y2	〃	〃	11.7	2.6	6.2	外面ロクロナデ・灰釉 内面ロクロナデ・灰釉・印花文	外面 灰白 7.5Y7/2 内面 浅黄 5Y7/3	密	良	口縁部 3/12 底部 完存	
249	37-2	陶器	擂鉢	〃	O	y2	〃	〃	33			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	赤灰 2.5YR4/1	やや密	良	口縁部 3/12	
250	28-7	〃	天目茶椀	〃	P	b6	SK91	〃	12			内外面ロクロナデ・鉄釉	釉 黒 10YR2/1 にぶい橙 5YR4/4 生地 浅黄橙 10YR8/4	やや密	良	口縁部 2/12	
251	40-1	〃	片口鉢	常滑	O	x2	SK92	〃	32.4			外面ロクロナデ・オサエ 内面ロクロナデ	外面 橙 2.5YR6/6 内面 橙 5YR7/6 浅黄橙 10YR8/4	粗	良	口縁部 6/12	
252	50-5	土師器	皿		L	r18	SK136	〃	8.7			外面ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	外面 にぶい黄橙 10YR7/4 内面 灰白 10YR8/2	やや密	不良	口縁部 2/12	
253	50-4	〃	〃		L	r18	〃	〃				外面ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	淡黄 2.5Y8/3	密	不良	口縁部 1/12	
254	50-2	〃	〃		L	r18	〃	〃	12			外面ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	灰白 2.5Y8/2	密	不良	口縁部 2/12	
255	50-6	〃	〃		L	q18	〃	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	やや粗	やや不良	口縁部 1/12	
256	52-1	〃	羽釜	中北勢系	L	q18	〃	〃	22.7			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ 内面ヨコナデ・ナデ・オサエ	浅黄橙 10YR8/4	やや密	やや不良	口縁部 2/12	焼成前穿孔
257	7-1	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	L	r18	〃	〃	11.2	6.3	4.4	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ	釉 にぶい黄橙 10YR6/4 サビ釉 灰赤 7.5YR4/2 生地 灰白 2.5Y8/1	密	良	口縁部 3/12 底部 完存	
258	11-1	〃	〃	〃	L	q18	〃	〃	11.6	5.5	4.1	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ	釉 にぶい黄橙 10YR6/4 サビ釉 赤褐 10R5/3 生地 浅黄橙 10YR8/3	密	良	口縁部 6/12 底部 完存	

第7表　遺物観察表⑥

遺物番号	実測番号	器種など		産地・系統等	大地区	小地区	遺構	区画	口径	器高	底径	成形・調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
259	50-11	〃	〃	〃	L	r18	〃	〃			3.8	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	釉 黄褐 10YR5/6 サビ釉 にぶい赤褐 2.5YR5/4 生地 灰褐 5YR5/2	やや密	良	底部 完存	
260	51-4	〃	擂鉢	〃	L	r18	〃	〃			9.3	外面ロクロナデ 内面櫛目 底部ナデ跡・糸切り痕	外面 灰褐 5YR4/2 内面 淡黄 2.5Y8/3	粗	良	底部 4/12	
261	18-1	〃	〃	〃	L	r18	〃	〃			11.8	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目 底部糸切り痕	釉 暗青灰 5PB4/1 生地 浅黄橙 7.5YR8/6	やや密	良	底部 6/12	
262	50-12	〃	甕	常滑	L	q18	〃	〃			13.2	外面ロクロナデ・オサエ 内面ロクロナデ	外面 にぶい褐 7.5YR5/3 内面 灰黄褐 10Y5/2	粗	良	底部 2/12	
263	51-1	〃	片口鉢	〃	L	r18	〃	〃			9.6	内外面ロクロナデ	にぶい橙 5YR6/4	やや粗	やや不良	底部 4/12	
264	51-6		瓦		L	r18	〃	〃	長さ6.8	厚さ3.4	幅5.5		灰 10Y6/1	やや粗	良		
265	107-1	石製品	五輪塔		L	r18	〃	〃	長さ21.4	厚さ14.4	幅20.9		明青灰 5BG7/1 灰 N6/ 灰白 10YR8/1				
266	51-5	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L	u20	SK137	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	赤灰 2.5YR4/1 断面 にぶい黄橙 10YR7/4	やや粗	良	口縁部 1/12	
267	175-2	〃	花瓶	〃	L	u20	〃	〃				内外面ロクロナデ・施釉	灰褐 5YR5/2	密	良		
268	23-4	土師器	茶釜形	中北勢系	L	w23	SD80	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	橙 5YR7/6	やや密	良	口縁部 1/12	
269	50-8	〃	皿		L	x18	SA134掘方	〃				外面ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密	やや不良	口縁部 1/12	
270	26-10	〃	〃		M	b22	SR120	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	密	良	口縁部 1/12	
271	26-8	〃	〃		M	b22	〃	〃	9			内外面ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/2	密	良	口縁部 2/12	
272	26-3	〃	〃		M	b22	〃	〃	12			外面ヨコナデ・オサエ後ナデ 内面ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 7.5YR8/4	密	並	口縁部 4/12	
273	25-1	〃	鍋	中北勢系	M	b22	〃	〃	20			外面ヨコナデ・ハケメ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ	橙 2.5YR6/6	やや密	並	口縁部 2/12	
274	24-1	〃	羽釜	〃	M	b22	〃	〃	18			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・スス付着 内面ヨコナデ・オサエ・工具ナデ	外面 黒 7.5YR2/1 内面 灰褐 7.5YR6/2	やや密	並	口縁部 3/12	
275	24-3	〃	〃	〃	M	b22	〃	〃	19			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ	外面 橙 5YR6/6 内面 灰褐 5YR5/2	やや密	並	口縁部 3/12	
276	24-2	〃	〃	〃	M	b22	〃	〃	21			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・オサエ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ	灰白 10YR8/1	やや密	並	口縁部 4/12	
277	25-2	〃	〃	〃	M	b22	〃	〃	23			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・オサエ・スス付着 内面ヨコナデ・ハケメ	外面 黄橙 10YR8/6 内面 にぶい黄橙 10YR7/2	やや密	並	口縁部 2/12	
278	25-3	〃	茶釜形	〃	M	b23	〃	〃	12			外面ヨコナデ・ハケメ 内面ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 10YR8/4	やや密	並	口縁部 2/12	
279	81-1	〃	〃	〃	M	b22	〃	〃	15.7			外面ヨコナデ・ハケメ・ハリツケナデ・ナデ・スス付着 内面ヨコナデ・工具ナデ・オサエ	浅黄橙 10YR8/3	粗	良	口縁部 2/12	
280	31-1	陶器	鉄釉丸皿	瀬戸美濃	M	b22	〃	〃	10.6			内外面ロクロナデ	灰褐 7.5YR4/2 黒褐 7.5YR3/1	密	良	口縁部 3/12 底部 1/12	
281	31-6	〃	灰釉菊皿	〃	M	b22	〃	〃			8	外面ロクロナデ・施釉 内面ロクロナデ・施釉 底部貼付高台	外面 淡黄 2.5Y8/3 内面 淡黄 5Y8/3	やや粗	良	底部 2/12	
282	126-12	〃	椀	〃	M	b22	〃	〃			5.9	外面ロクロナデ・施釉 内面ロクロナデ・施釉・輪ドチ	釉 オリーブ灰 10Y6/2 生地 淡黄 2.5Y8/3	やや粗	良	底部 5/12	
283	34-3	〃	筒形容器	〃	M	b22	〃	〃	14			外面ロクロナデ・サビ釉 内面ロクロナデ	外面 にぶい赤褐 5YR4/4 内面 浅黄橙 10YR8/4	やや密	良	口縁部 6/12	
284	34-4	〃	口広有耳壺	〃	M	b22	〃	〃			12	外面ロクロナデ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉・土器片付着 底部糸切り痕	外面 黒褐 5YR2/2 灰 5Y6/1 内面 灰 5Y6/1	やや粗	良	底部 4/12	
285	41-5	〃	片口鉢	常滑	M	b22	〃	〃			20.4	外面ロクロナデ・オサエ 内面ロクロナデ	外面 橙 5YR7/6 内面 にぶい橙 10YR7/4	粗	並	底部 1/12	
286	44-1	〃	甕	〃	M	b22	〃	〃				内外面ロクロナデ	外面 灰褐 5YR5/2 内面 橙 5YR7/6	密	良	口縁部 1/12	
287	2-9	土師器	皿		O	u1	SZ83	〃		1.8		内外面ナデ	褐灰 10YR4/1	やや粗	並	口縁部 1/12	
288	29-6	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	O	u1	〃	〃	12			外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	鉄釉 黒 7.5YR2/1 サビ釉 明褐灰 7.5YR7/2 生地 灰白 7.5YR8/2	密	良	口縁部 4/12	
289	35-6	〃	擂鉢	〃	O	v1	〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	暗赤灰 10YR4/1	やや粗	良	口縁部 1/12	
290	35-5	〃	口広有耳壺	〃	O	v1	〃	〃			13	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロケズリ・鉄釉	外面 赤黒 10YR2/1 褐灰 7.5Y6/1 内面 暗赤褐 5YR3/2 褐灰 7.5YR6/1	やや粗	良	底部 1/12	
291	44-2	〃	甕	常滑	O	u1	〃	〃				外面ロクロナデ・ナデ 内面ロクロナデ・ナデ	外面 暗赤褐 10YR3/2 内面 灰赤 2.5YR4/2	粗	良	口縁部 1/12	
292	39-2	〃	片口鉢	〃	O	v1	〃	〃	39		14.2	外面ロクロナデ・ユビオサエ・ナデ 内面ロクロナデ	外面 にぶい赤褐 5YR5/4 内面 にぶい赤褐 5YR5/4 浅黄橙 10YR8/4	粗	良	口縁部 2/12	
293	126-11	白磁	皿		O	v1	〃	〃	10	2.4	3	外面ロクロケズリ・施釉 内面施釉により調整不明	釉 明緑灰 7.5Y8/1 生地 灰白 7.5Y8/1	やや粗	良	口縁部 1/12 底部 2/12	
294	96-3	土師器	皿		P	b2	SZ87	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	外面 灰白 10YR8/2 内面 灰白 7.5YR8/2	密	並	口縁部 1/12	
295	96-2	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	P	b2	〃	〃	10.4			外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	外面 黒褐 10YR2/2 赤褐 5Y4/6 内面 黒褐 7.5YR2/2	密	良	口縁部 3/12	
296	100-7	土師器	皿		L	s24	SZ79	〃	7.4			内外面ヨコナデ・ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	やや粗	並	口縁部 5/12	
297	100-6	〃	〃		L	s21	〃	〃	7.9			外面ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面ヨコナデ・ナデ・オサエ	にぶい黄橙 10YR7/4	粗	並	口縁部 9/12	
298	101-3	〃	〃		L	s24	〃	〃	9			内外面ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	やや粗	並	口縁部 4/12	
299	26-4	〃	〃		L	u25	〃	〃	9.2	2	6.8	外面ヨコナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 10YR8/4	密	並	口縁部 2/12	
300	100-9	〃	〃		L	s24	〃	〃		2		内外面ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 7.5YR8/3	やや密	並	口縁部 1/12	
301	100-10	〃	〃		L	s24	〃	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	橙 7.5YR7/6	やや粗	並	口縁部 1/12	

第８表　遺物観察表⑦

通し番号	実測番号	器種など		産地・系統等	大地区	小地区	遺構	区画	口径	器高	底径	成形・調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
302	101-2	〃	〃		L	s24	〃	〃	10			内外面ヨコナデ・ナデ	灰白 10YR8/1	密	並	口縁部 4/12	
303	100-5	〃	〃		L	s24	〃	〃	12			外面ヨコナデ・ナデ 内面ヨコナデ・工具ナデ	灰白 2.5Y8/1	やや密	不良	口縁部 4/12	
304	100-8	陶器	山茶椀	尾張型	L	s24	〃	〃	12			内外面ロクロナデ	灰白 7.5Y8/1	やや密	不良	口縁部 4/12	
305	127-3	磁器	端反皿		L	s24	〃	〃	12	3.1	7.4	内外面施釉	釉 灰白 5Y8/1 生地 淡黄 2.5Y8/3	やや密	良	口縁部 1/12 底部 2/12	
306	13-1	石製品	石臼		L	s24	〃	〃	半径16.2	厚さ9.8	軸穴径 4.7						
307	101-1	〃	砥石？		L	s24	〃	〃	長さ8.2	厚さ2.5	幅6.1						
308	31-4	白磁	端反皿		M	a23	Pit1	〃	10.9			内外面ロクロナデ・施釉	灰白 7.5Y8/2	密	良	口縁部 1/12	
309	70-1	土師器	皿		L	y20	包含層	〃	7.8	1.3		外面ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面ヨコナデ・オサエ	外面 明黄褐 10YR7/6 内面 橙 7.5YR7/6	密	並	口縁部 6/12	東斜面
310	70-4	〃	〃		L	y20	〃	〃	9			外面ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	外面 淡黄 2.5Y8/3 内面 淡黄 2.5Y8/4	密	並	口縁部 2/12	〃
311	70-11	〃	〃		L	y21	〃	〃	8			外面ヨコナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	橙 7.5YR7/6	密	並	口縁部 2/12	〃
312	70-6	〃	〃		L	y20	〃	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	密	並	口縁部 1/12	〃
313	70-8	〃	〃		L	y20	〃	〃	10	1.3		外面ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	外面 浅黄橙 7.5YR8/4 内面 橙 7.5YR7/6	密	並	口縁部 2/12	〃
314	70-10	〃	〃		L	y20	〃	〃	11			外面ヨコナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 7.5YR8/4	密	並	口縁部 2/12	〃
315	67-3	〃	〃		L	y23	〃	〃	11			磨耗により調整不明	にぶい橙 7.5YR7/4	並		口縁部 2/12	
316	70-3	〃	〃		L	y21	〃	〃	11			外面ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面ヨコナデ・ナデ	外面 浅黄橙 7.5YR8/4 内面 浅黄橙 10YR8/4	密	並	口縁部 2/12	東斜面
317	70-7	〃	〃		L	y21	〃	〃	11			外面ヨコナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	密	並	口縁部 2/12	〃
318	70-2	〃	〃		L	y21	〃	〃	11	2		外面ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面ヨコナデ・オサエ・ナデ	浅黄橙 10YR8/4	密	並	口縁部 2/12	〃
319	70-9	〃	〃		L	y20	〃	〃	13			外面ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ・オサエ	橙 7.5YR7/6	密	並	口縁部 2/12	〃
320	70-5	〃	〃		L	y21	〃	〃				外面ヨコナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	橙 7.5YR7/6	密	並	口縁部 1/12	〃
321	1-5	〃	鍋	中北勢系	P	d2	〃	〃				外面ヨコナデ・ハケメ 内面ヨコナデ・ナデ	橙 2.5YR6/8	やや粗	並	口縁部 1/12	
322	74-1	〃	〃	尾張系			〃	〃				外面ヨコナデ・ナデ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	やや密	良	口縁部 1/12	東斜面
323	2-2	〃	羽釜	中北勢系	O	w2	〃	〃	20.2			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ 内面ヨコナデ・ナデ	橙 5YR6/6 黒褐 7.5YR3/2	やや粗	並	口縁部 1/12	
324	1-3	〃	〃	〃	L	w24	〃	〃	21.9			磨耗により調整不明	橙 2.5YR6/6 灰褐 7.5YR4/2	粗	並	口縁部 1/12	
325	69-2	〃	〃	〃	L	y20	〃	〃	20			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ 内面ヨコナデ・ナデ	外面 にぶい橙 7.5YR7/4 内面 灰褐 7.5YR6/2	密	並	口縁部 4/12	東斜面
326	69-3	〃	〃	〃	L	y21	〃	〃	21			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ 内面ヨコナデ・ナデ	橙 5YR7/6	密	並	口縁部 2/12	〃
327	139-3	〃	〃	〃			〃	〃	23			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・工具ナデ 内面ヨコナデ・工具ナデ	橙 5YR7/6	密	良	口縁部 3/12	
328	69-1	〃	〃	〃	L	y21	〃	〃	22			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ハケメ 内面ヨコナデ・ナデ	橙 7.5YR7/6	密	並	口縁部 2/12	東斜面
329	141-1	〃	〃	〃			〃	〃	23.7			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・工具ナデ・ケズリ・スス付着 内面ヨコナデ・工具ナデ・ケズリ	橙 5YR6/6	やや粗	やや不良	口縁部 7/12	焼成前穿孔
330	73-3	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	L	y21	〃	〃	11		3.1	内外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉	黒 10YR2/1	密	良	口縁部 3/12 底部 1/12	東斜面
331	74-3	〃	〃	〃	L	y20	〃	〃			5	外面ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ	外面 暗赤 10YR3/6 灰黄2.5Y6/2 内面 浅黄 2.5Y7/4	密	良	底部 7/12	〃
332	73-4	〃	〃	〃	L	y20	〃	〃				内外面ロクロナデ・鉄釉	黒褐 2.5Y3/1	密	良	口縁部 1/12	〃
333	31-10	〃	鉄釉陶皿	〃	M	d24	〃	〃	11	2.4	6.8	外面ロクロナデ・ロクロケズリ 内面ロクロナデ	橙 7.5YR6/6	密	良	口縁部 2/12	
334	31-8	〃	〃	〃	M	a25	〃	〃	10			内外面ロクロナデ・鉄釉	外面 褐 7.5YR4/4 内面 褐 7.5YR4/3	密	良	口縁部 3/12	
335	71-1	〃	山茶椀	尾張型	L	y21	〃	〃	11			内外面ロクロナデ	淡黄 2.5Y8/4	密	並	口縁部 2/12	東斜面
336	47-7	〃	〃	〃	M	d24	〃	〃			4.4	内外面ロクロナデ 底部糸切り痕	灰白 2.5Y8/2	やや粗	不良	底部 4/12	
337	73-2	〃	祖母懐壺	瀬戸美濃	L	y20	〃	〃	9.2			内外面ロクロナデ	外面 灰 N5/ 内面 灰 7.5Y6/1	密	良	口縁部 5/12	東斜面
338	69-4	〃	耳付水注	〃	L	y21	〃	〃			5	外面ロクロナデ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	外面 にぶい赤褐 5YR5/3 内面 にぶい赤褐 5YR4/3	密	良	底部 6/12	〃
339	69-5	〃	口広有耳壺	〃	L	y20	〃	〃			12	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉 内面ロクロナデ	外面 褐 7.5YR4/4 内面 暗褐 7.5YR3/4	やや密	良	底部 2/12	〃
340	68-2	〃	筒形容器	〃	L	u23	〃	〃	18			外面ロクロナデ・サビ釉 内面ロクロナデ・横ピン痕あり	外面 赤灰 2.5YR8/2 内面 灰白 2.5Y8/2	やや密	良	口縁部 2/12	
341	98-3	〃	〃	〃			〃	〃	13.4			内外面ロクロナデ・サビ釉	サビ釉 にぶい赤褐 5YR4/3 生地 淡黄 2.5Y8/4	やや粗	良	口縁部 1/12	
342	36-2	〃	擂鉢	〃	M	d24	〃	〃				内外面ロクロナデ	暗青灰 5PB4/1	やや密	良	口縁部 1/12	
343	36-1	〃	〃	〃	M	d24	〃	〃				内外面ロクロナデ	赤灰 2.5YR4/1	やや粗	良	口縁部 1/12	
344	19-1	〃	〃	〃	L	y21	〃	〃	26.2	10.2	9.6	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・鉄釉・カキメ・櫛目	鉄釉 灰赤 7.5YR5/2 生地 浅黄橙 7.5YR8/3	密	良	口縁部 6/12 底部 5/12	東斜面

第９表　遺物観察表⑧

遺物番号	実測番号	器種など		産地・系統等	大地区	小地区	遺構	区画	口径	器高	底径	成形・調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
345	73-1	〃	〃	〃	L	y20	〃	〃			9	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目 底部糸切り痕	赤黒 2.5YR2/1	やや粗	良	底部 4/12	東斜面
346	68-3	〃	〃	〃	L	y23	〃	〃	28			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	釉 赤灰 2.5YR4/1 生地 にぶい橙 7.5YR7/4	やや密	良	口縁部 2/12	
347	71-2	〃	〃	〃	L	y21	〃	〃	29			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	灰 N4/	密	良	口縁部 2/12	東斜面
348	36-3	〃	〃	〃	O	y5	〃	〃			11	外面ロクロナデ 内面櫛目	灰褐 7.5YR4/2	やや粗	良	底部 2/12	
349	72-2	〃	〃	〃	L	y20	〃	〃	15			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	黒褐 5YR3/1	やや粗	良	口縁部 3/12	東斜面
350	72-1	〃	壺	常滑	L	y20	〃	〃			13	内外面ロクロナデ	外面 暗赤 7.5YR3/4 内面 暗赤 7.5YR3/3	密	良	底部 5/12	
351	41-3	〃	壺？	〃	L	w24	〃	〃			14	内外面ロクロナデ・オサエ 底部ナデ	外面 灰 N4/ 内面 にぶい赤褐 5YR4/3 底部 浅黄 2.5Y7/3	粗	良	底部 3/12	
352	51-3	〃	甕	〃	L	r20	〃	〃				内外面ロクロナデ	灰赤 2.5YR4/2	粗	良	口縁部 1/12	
353	67-1	〃	〃	〃	L	x18	〃	〃				内外面ロクロナデ	灰 N4/	やや粗	良	口縁部 2/12	
354	45-2	〃	〃	〃	O	t2	〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・オサエ	外面 黒褐 10YR3/2 内面 褐灰 10YR5/1	密	良	口縁部 1/12	
355	46-2	〃	〃	〃	O	v1	〃	〃	24			内外面ロクロナデ	外面 赤褐 10R4/3 内面 にぶい褐 7.5YR5/3	密	良	口縁部 1/12	口縁部ワレ有り
356	67-2	〃	〃	〃	L	y20	〃	〃				内外面ロクロナデ	外面 にぶい赤褐 7.5YR4/3 内面 暗赤灰 7.5YR4/1	やや粗	良	口縁部 1/12	東斜面
357	46-1	〃	〃	〃	P	e1	〃	〃	29.6			内外面ロクロナデ・ナデ	外面 灰赤 7.5YR4/2 内面 にぶい赤褐 5YR5/3	密	良	口縁部 1/12	
358	44-3	〃	〃	〃	L	wx25	〃	〃				外面ロクロナデ・ナデ 内面ロクロナデ・板ナデ	外面 にぶい赤褐 2.5YR4/3 内面 にぶい褐 7.5YR5/3	密	良	口縁部 1/12	
359	75-1	〃	〃	〃	L	y20	〃	〃				内外面ロクロナデ	外面 暗赤褐 10R3/2 内面 黒褐 2.5Y3/1	やや粗	良	口縁部 2/12	東斜面
360	73-5	〃	〃	〃	L	y20	〃	〃			13	内外面ロクロナデ	外面 暗赤褐 10YR3/2 内面 黒褐 2.5Y3/1	やや密	良	底部 2/12	〃
361	66-1	〃	片口鉢	〃	L	y20	〃	〃	37			外面ロクロナデ・オサエ 内面ロクロナデ	外面 橙 2.5YR6/6 内面 にぶい赤褐 5YR5/4	粗	良	口縁部 6/12	〃
362	66-2	〃	〃	〃	L	y20	〃	〃			13	内外面ロクロナデ	外面 灰褐 2.5YR5/2 内面 橙 5YR6/6	粗	良	底部 7/12	〃 底部へこみ有り
363	127-1	磁器	皿				〃	〃			6.5	内外面施釉	釉 灰白 2.5GY8/1 生地 灰白 2.5Y8/2	やや密	並	底部 3/12	〃
364	127-2	磁器	端反皿		L	y21	〃	〃	12	2.5	6.5	内外面施釉により調整不明・染付有り	明緑灰 7.5GY8/1	やや密	良	口縁部 1/12 底部 2/12	〃
365	132-2		瓦		L	y21	〃	〃		厚さ2.6	幅5.3		灰白 5Y7/1	やや粗	良		〃
366	20-1	石製品	五輪塔		L	y21	〃	〃		高さ13.8	幅23.4					火輪部 1/2	〃
367	108-1	〃	石臼		O	x1	〃	〃	17.5	厚さ11.1						6/12	
368	104-1	鉄製品	小柄				〃	〃		厚さ0.5	横幅1.5						東斜面 重さ33.28g
369	56-5	土師器	皿		L	k18	SK191	13				内外面ヨコナデ・ナデ	黒褐 10YR3/1	やや密	並	口縁部 1/12	
370	56-6	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L	k18	〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	釉 褐灰 5YR4/1 生地 淡黄 2.5Y 8/4	やや密	良	口縁部 1/12	
371	56-7	〃	〃	〃	L	k18	〃	〃	34			内外面ロクロナデ	釉 赤灰 2.5YR4/1 生地 浅黄橙 7.5YR8/3	やや密	良	口縁部 2/12	
372	12-1	〃	山茶椀	尾張型	L	k18	〃	〃	11.2	2.7	4.6	内外面ロクロナデ	灰白 2.5Y8/1	密	良	口縁部 3/12 底部 6/12	
373	63-1	土師器	羽釜	中北勢系	L	k18	SK193	〃			14	外面ヨコナデ・ハリツケナデ 内面ヨコナデ・オサエ	外面 にぶい黄橙 10YR7/2 内面 灰褐 7.5YR5/2	密	並	口縁部 1/12	
374	65-2	〃	〃	〃	L	k17	〃	〃	22			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ・オサエ・ケズリ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ	外面 浅黄橙 7.5YR8/4 内面 橙 7.5 YR7/6	密	並	口縁部 2/12	
375	63-7	陶器	口広有耳壺か筒形容器	瀬戸美濃	L	k17	〃	〃			11	外面ロクロナデ・ロクロケズリ 内面ロクロナデ 底部糸切り痕	灰白 2.5Y8/1	密	良	底部 4/12	
376	63-2	〃	擂鉢	〃	L	k16	〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・ナデ	暗赤灰 7.5YR4/1	密	良	口縁部 1/12	
377	64-2	〃	片口鉢	常滑	L	k16	〃	〃			14	外面ロクロナデ・ユビオサエ 内面ロクロナデ	外面 浅黄橙 7.5YR8/4 内面 浅黄橙 10YR8/3	密	やや不良	底部 6/12	
378	8-1	石製品	五輪塔		L	k16	〃	〃		高さ10.9	幅18.7					火輪部 完存	
379	63-4	陶器	片口鉢	常滑	L	l15	SK195	〃				内外面ロクロナデ	灰黄 2.5Y8/3	密	良	口縁部 1/12	
380	63-8	〃	〃	〃	L	l15	〃	〃			10	外面ロクロナデ・オサエ・ナデ 内面ロクロナデ・工具痕	外面 灰褐 7.5YR5/2 内面 灰黄 2.5 Y6/2	密	良	底部 2/12	
381	104-4		瓦		L	l15	〃	〃		厚さ5.4			外面 灰 N5/ 内面 灰 N6/	やや粗	良		
382	63-6	陶器	片口鉢	常滑	L	d13	SK198	〃			9	外面ロクロナデ・オサエ 内面ナデ・オサエ	外面 にぶい赤褐 5YR5/4 内面 灰赤 2.5YR4/2	密	並	底部 2/12	
383	50-1	〃	灰釉菊皿	瀬戸美濃	L	e16	SD139	〃			8	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・沈線・トチン痕	灰白 5Y8/1	密	良	底部 2/12	
384	58-2	〃	片口鉢	常滑	L	l19	SD183	〃			16	外面オサエ・ロクロナデ 内面ロクロナデ・オサエ	外面 黄橙 10YR8/3 内面 浅黄橙 10YR8/3	粗	やや不良	底部 2/12	
385	58-3	土師器	羽釜	中北勢系	L	l17	SD188	〃				外面ヨコナデ・ハリツケナデ 内面ヨコナデ	浅黄橙 10YR8/3	やや粗	やや不良	口縁部 1/12	
386	58-6	陶器	灰釉端反皿か丸皿	瀬戸美濃	L	l18	〃	〃			6	内外面ロクロナデ・施釉	釉 浅黄 7.5Y7/3 生地 淡黄 2.5Y 8/3	やや密	良	底部 2/12	
387	58-7	〃	擂鉢	〃	L	m16	〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	釉 暗赤灰 7.5R4/1 生地 淡黄 2.5Y 8/3	やや密	良	口縁部 1/12	

第10表　遺物観察表⑨

遺物番号	実測番号	器種など		産地・系統等	大地区	小地区	遺構	区画	口径	器高	底径	成形・調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
388	58-5	〃	〃	〃	L	l18	〃	〃				内外面ロクロナデ	釉 暗赤灰 10YR4/1 生地 淡黄 2.5Y8/3	やや密	良	口縁部 1/12	
389	58-4	〃	建水？	〃	L	m16	〃	〃				内外面ロクロナデ・鉄釉	釉 暗褐 7.5YR3/4 生地 灰白 5Y 8/1	密	良	口縁部 1/12	
390	7-4	〃	鉄釉稜皿	〃	L	m19	SK184	〃	10.1	2.3	5.4	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉 内面ロクロナデ・鉄釉	釉 赤褐 5YR4/6 黒褐 5YR2/2 生地 浅黄橙 10YR8/4	密	良	口縁部 4/12 底部 6/12	近世遺構への混入
391	126-5	磁器	皿		L	m19	〃	〃				内外面施釉	灰白 10Y8/1	密	良	口縁部 1/12	〃
392	126-8	〃	皿		L	m19	〃	〃			7.1	内外面施釉により調整不明・染付	釉 明緑灰 7.5GY8/1 生地 灰白 5Y 8/2	密	良	口縁部 1/12 底部 2/12	〃
393	48-4	石製品	砥石		L	m19	〃	〃	長さ6.9	厚さ5	幅2.4						〃
394	104-2	鉄製品			L	m20	〃	〃		厚さ 0.75	横幅1.3						〃 重さ8.38g
395	68-1	土師器	羽釜	中北勢系	L	l16	包含層	〃	19			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ・ケズリ 内面ヨコナデ・ナデ・ケズリ	灰白 7.5Y8/2	やや密	不良	口縁部 2/12	
396	2-4	土師器	皿		O	q7	SB115柱穴	15	10	1.7		内外面ナデ	にぶい橙 5YR7/3	粗	並	口縁部 8/12	
397	1-7	〃	〃		O	q7	〃	〃	12	1.7		外面ヨコナデ・磨耗により調整不明 内面ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 7.5YR8/4	やや粗	並	口縁部 3/12	
398	31-3	陶器	灰釉端反皿	瀬戸美濃	O	q7	SB115柱穴掘方	〃	9.2			内外面ロクロナデ・施釉	灰白 7.5Y7/2	密	良	口縁部 1/12	
399	105-2	石製品	砥石		O	r6	SB115柱穴	〃	長さ12	厚さ2.7	幅4.3						
400	26-7	土師器	皿		O	n7	SB233柱穴	〃	10.2			外面磨耗により調整不明 内面ナデ	外面 浅黄橙 10YR8/3 内面 明黄褐 10YR6/8	やや粗	不良	口縁部 2/12	歪み有り
401	31-7	陶器	鉄釉稜皿	瀬戸美濃	O	n8	〃	〃	10	2.1	5.2	外面施釉により調整不明・ロクロケズリ 内面施釉により調整不明	外面 暗赤褐 2.5Y3/2 内面 灰赤 2.5Y4/2	密	良	口縁部 2/12 底部 2/12	
402	37-3	〃	擂鉢	〃	O	o9	〃	〃				内外面ロクロナデ	外面 灰赤 7.5YR4/2 内面 褐灰 5YR4/1 生地 灰白 N7/	やや密	良	口縁部 1/12	
403	37-4	〃	〃	〃	O	q7	SB235柱穴	〃				内外面ロクロナデ	暗褐 7.5YR3/3	やや粗	良	口縁部 1/12	
404	26-1	土師器	皿		O	q7	SK56	〃	10.9	1.45		外面ヨコナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	外面 浅黄橙 7.5YR8/4～8/6 内面 浅黄橙 7.5YR8/6	密	やや不良	口縁部 3/12	SB235内
405	1-1	〃	茶釜形	中北勢系	O	q7	〃	〃	14.1			外面ヨコナデ・ハケメ・ハリツケナデ・ナデ 内面ヨコナデ・ナデ	橙 2.5YR6/8	やや粗	並	口縁部 4/12	〃
406	80-1	陶器	水指	瀬戸美濃	O	q7	〃	〃	15.2		13.3	内外面ロクロナデ 底部ロクロケズリ	淡黄 2.5Y8/4 褐灰 5YR4/1	粗	良	口縁部 3/12 底部 9/12	〃
407	35-2	〃	擂鉢	〃	O	t7	SK29	〃				内外面ロクロナデ	褐灰 5YR4/1	やや密	良	口縁部 1/12	SB236内
408	3-2	土師器	羽釜	中北勢系	O	s9	SK27	〃	26.4			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・工具ナデ 内面ヨコナデ・ナデ	橙 5YR6/6	やや粗	並	口縁部 4/12	SB239内
409	29-3	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	O	s9	〃	〃			4.2	内面鉄釉 底部ロクロケズリ・サビ釉	釉 にぶい褐 7.5YR5/4 黒褐 7.5YR2/2 生地 にぶい橙 5YR7/4	密	良	底部 完存	〃
410	30-6	〃	灰釉端反皿	〃	O	s9	〃	〃			5	内外面ロクロナデ・施釉 底部貼付高台・ナデ・ロクロケズリ	釉 淡黄 2.5Y8/4 生地 灰白 7.5YR8/1	やや粗	不良	底部 3/12	〃
411	82-2	〃	花瓶	〃	O	s9	〃	〃	下部径10.8			内外面ロクロナデ・サビ釉	外面 灰赤 10YR4/2 内面 褐灰 7.5YR5/1 生地 浅黄橙 10YR8/4	密	良	頸部 6/12	〃
412	129-1	磁器	皿		O	s9	〃	〃			8	内外面施釉 底部貼付高台・露胎	灰白 7.5Y8/1	密	良	底部 1/12	〃
413	112-1	石製品	石臼		O	s9	〃	〃	長さ17.3	厚さ 9.35	幅14.5					3/12	〃
414	110-1	〃	〃		O	s9	〃	〃	長さ18.8	厚さ6.5	幅15					3/12	〃
415	35-1	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	O	t8	SK28	〃				外面ロクロナデ・サビ釉 内面ロクロナデ	外面 にぶい赤褐 2.5YR4/3 内面 灰 7.5Y5/1	やや粗	良	口縁部 1/12	〃
416	26-6	土師器	鍋		O	v9	SK20	〃	10.2			外面ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	外面 褐灰 2.5Y5/1 内面 褐灰 10YR4/1	密	不良	口縁部 2/12	SB241内
417	33-4	陶器	口広有耳壺	瀬戸美濃	O	v5	SK18	〃	12			内外面ロクロナデ・鉄釉	極暗赤褐 2.5YR2/2			口縁部 2/12	
418	80-2	〃	徳利	〃	O	t8	SK26	〃				外面ロクロナデ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ 底部糸切り痕	鉄釉 黒 5YR1.7/1 サビ釉 にぶい赤褐 5YR5/3 生地 浅黄橙 10YR8/3	やや粗	良	底部 3/12	
419	134-2		瓦		O	t8	〃	〃		厚さ2.2	幅7.5		灰 N5/	やや粗	良		
420	23-5	土師器	羽釜	中北勢系	O	p9	SK54	〃				外面ヨコナデ・ハリツケナデ 内面ヨコナデ・ナデ	橙 5YR6/6	粗	良	口縁部 1/12	
421	28-6	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	O	q7	SK55	〃				内外面ロクロナデ・鉄釉	明褐 7.5YR5/6	密	良	口縁部 1/12	
422	128-8	磁器	端反皿		O	q7	〃	〃	12			内外面ロクロナデ・施釉	灰白 7.5Y8/1	密	良	口縁部 1/12	
423	48-5	石製品	砥石		O	q7	〃	〃	長さ6.8	厚さ0.8	幅2.7						
424	42-1	陶器	壺	常滑	O	p7	SK63	〃	20.6			内外面ロクロナデ	にぶい赤 7.5YR4/4 口縁部 にぶい黄 2.5Y6/3 断面 灰 5Y6/1	粗	良	口縁部 4/12	
425	23-3	土師器	羽釜	中北勢系	O	q4	SD46	〃				外面ヨコナデ・ハリツケナデ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 10YR8/3	やや密	良	口縁部 1/12	
426	23-1	〃	鍋	尾張系	O	x8	SR21	〃				内外面ヨコナデ・ナデ 外面スス付着	にぶい橙 7.5YR6/4	やや密	やや不良	口縁部 1/12	
427	29-1	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	O	w7	SR22	〃				内外面ロクロナデ・鉄釉	褐 7.5YR4/4	密	良	口縁部 1/12	
428	2-7	土師器	皿		O	v5	SR23	〃	10	1.45		磨耗により調整不明	にぶい黄橙 7.5YR7/4	やや粗	並	口縁部 2/12	
429	2-6	〃	〃		O	q7	Pit2	〃	10	1.5		内外面ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	やや粗	並	口縁部 3/12	
430	1-1	〃	羽釜	中北勢系	O	r7	Pit2	〃	19			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ 内面ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 7.5YR8/4 褐灰 10YR4/1 暗灰 N3/	やや粗	並	口縁部 2/12	焼成前穿孔

第11表　遺物観察表⑩

遺物番号	実測番号	器種など		産地・系統等	大地区	小地区	遺構	区画	口径	器高	底径	成形・調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
431	5-1	〃	〃	〃	O	w8	Pit1	〃	26			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ 内面ヨコナデ・ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	やや粗	良	口縁部 2/12	
432	28-4	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	O	q6	Pit1	〃	11.4	6.1	4.5	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	釉 暗褐 7.5YR3/3 生地 にぶい橙 5YR7/4	やや密	良	口縁部 5/12 底部 完存	
433	31-5	〃	灰釉端反皿	〃	O	r6	Pit2	〃	10.1			内外面ロクロナデ・施釉	外面 浅黄 7.5Y7/3 灰オリーブ 7.5Y5/3 内面 淡黄 5Y8/3 オリーブ黄 7.5Y6/3	やや粗	並	口縁部 1/12	
434	44-6	〃	甕	常滑	O	q7	Pit3	〃				内外面ロクロナデ	外面 灰赤 2.5YR4/2 内面 にぶい赤褐 2.5YR5/3	密	良	口縁部 1/12	
435	41-4	〃	鉢	〃	O	q7	〃	〃			14.6	内外面ロクロナデ・オサエ	橙 5YR7/6	粗	並	底部 2/12	
436	129-6	磁器	椀		O	t6	Pit1	〃	14			内外面ロクロナデ・施釉	明青灰 5BG7/1	密	良	口縁部 1/12	
437	48 6	石製品	砥石		O	t6	〃	〃	長さ8.1	厚さ2.8	幅6						
438	1-9	土師器	皿		O	v5	包含層	〃	11.1	1.2		内外面ヨコナデ・ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	やや粗	並	口縁部 1/12	
439	1-8	〃	〃		O	v5	〃	〃	12.2	1.3		内外面ナデ	浅黄橙 10YR8/4	やや粗	並	口縁部 2/12	
440	3-3	〃	羽釜	中北勢系	O	o12	〃	〃	25			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ・ケズリ	にぶい黄橙 10YR7/2 褐灰 10YR6/1	やや粗	並	口縁部 4/12	
441	1-4	〃	茶釜形	〃	O	q7	〃	〃				一部スス付着	外面 浅黄橙 10YR8/3 内面 にぶい黄橙 10YR7/4	やや粗	並		
442	30-1	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	O	m7	〃	〃	14			外面ロクロナデ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	内外面 黒 10YR2/1 褐 7.5YR4/3 サビ釉 赤黒 7.5R2/1 生地 明褐灰 5YR7/1	密	良	口縁部 2/12	
443	28-1	〃	〃	〃	O	m10	〃	〃	11.6	7.05	4.3	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	外面 暗褐 7.5YR3/3 サビ釉 暗赤灰 2.5YR3/1 内面 暗褐 7.5YR3/3	密	良	口縁部 2/12 底部 完存	
444	28-2	〃	〃	〃	O	m10	〃	〃	11			外面ロクロナデ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	黒褐 7.5YR2/2 サビ釉 にぶい橙 5YR6/4	密	良	口縁部 2/12	
445	28-3	〃	〃	〃	O	v5	〃	〃	12			外面ロクロナデ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	鉄釉 黒 7.5YR2/1 生地 暗赤灰 5YR3/2	密	良	口縁部 3/12	
446	96-1	〃	〃	〃			〃	〃	10.8			外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	外面 黒 10YR2/1 赤褐 5YR4/6 内面 黒 10YR2/1 赤褐 5YR4/6	密	良	口縁部 4/12	
447	31-9	〃	鉄釉稜皿	〃	O	m10	〃	〃	10	2.6	5.2	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉 内面ロクロナデ・鉄釉	外面 にぶい赤褐 5YR5/3 内面 にぶい赤褐 5YR4/3	密	良	口縁部 2/12 底部 6/12	
448	36-6	〃	擂鉢	〃	O	o7	〃	〃				内外面ロクロナデ	暗赤灰 10R3/1	密	良	口縁部 1/12	
449	37-6	〃	擂鉢	〃	O	r9	〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	外面 暗赤褐 5YR3/3 内面 黒褐 5YR3/1 生地 にぶい黄橙 10YR7/4	やや粗	良	口縁部 1/12	
450	36-5	〃	〃	〃	O	q6	〃	〃			11	外面ロクロナデ 内面櫛目・ロクロナデ 底部糸切り痕	サビ釉 灰赤 2.5YR4/2 生地 浅黄橙 10YR8/4	やや密	良	底部 3/12	
451	33-2	〃	擂鉢	〃	O	s7	〃	〃			12	外面ロクロナデ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ	外面 褐 7.5YR4/6 サビ釉 灰赤 7.5YR4/2 内面 にぶい橙 7.5YR7/4	密	良	底部 3/12	
452	33-1	〃	鉄釉瓶	〃	O	p12	〃	〃	最大径8			内外面鉄釉	暗赤褐 5YR3/4 黒褐 5YR2/1	やや密	良	肩部 小片	
453	49 4	石製品	水晶？		O	s13	〃	〃	長さ2.2	厚さ0.8	幅0.8						重さ1.69g
454	38-2	陶器	片口鉢	常滑	O	m10	〃	〃				外面ロクロナデ・板ナデ・オサエ 内面ロクロナデ	外面 橙 5YR7/6 内面 にぶい赤褐 5YR5/4	粗	良	口縁部 1/12	
455	40-2	〃	〃	〃	O	x10	〃	〃	23		13.6	外面ロクロナデ・オサエ 内面ロクロナデ	外面 にぶい赤褐 5YR4/4 内面 にぶい赤褐 2.5YR4/3	密	良	口縁部 4/12	
456	39 1	〃	〃	〃	O	v6	〃	〃	30			外面ロクロナデ・オサエ 内面ロクロナデ	外面 にぶい橙 5YR6/4 内面 にぶい赤褐 5YR5/4 橙 5YR7/6	粗	良	口縁部 2/12	
457	176-1	〃	竈	〃	O	q2	〃	〃				内外面ロクロナデ	外面 黄褐 2.5Y5/4 内面 褐 7.5YR4/3	やや密	良	口縁部 1/12	
458	42-3	〃	〃	〃	O	s4	〃	〃	24.1		10.2	外面ロクロナデ・オサエ 内面ロクロナデ	外面 浅黄橙 10YR8/4 内面 褐灰 7.5YR4/1	やや粗	良	底部 2/12	SB206内
459	42-4	〃	片口椀	〃	O	v6	〃	〃	最大径21.6			外面ロクロナデ・ロクロケズリ・オサエ 内面ロクロナデ	外面 にぶい黄 2.5Y6/3 内面 灰褐 5YR5/2	粗	良	肩部 2/12	
460	41-2	〃	甕	〃	O	v6	〃	〃				内外面ロクロナデ	外面 にぶい赤褐 5YR4/3 内面 にぶい褐 7.5YR5/3	密	良	口縁部 1/12	南斜面
461	44 4	〃	〃	〃			〃	〃				外面ロクロナデ・ナデ 内面ロクロナデ	外面 にぶい橙 7.5YR6/4 内面 浅黄橙 7.5YR8/6	やや粗	並	口縁部 1/12	
462	59-7	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	O	l4	SK166	16			10.2	外面ロクロナデ・オサエ 内面ロクロナデ・櫛目	外面 灰黄 2.5Y6/2 内面 にぶい赤褐 2.5YR4/3	粗	良	口縁部 2/12	
463	99-7	土師器	皿		O	l1	SB212柱穴	〃	8	2		外面ヨコナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	灰白 10YR8/2	密	並	口縁部 3/12	
464	63-3	陶器	灰釉丸皿	瀬戸美濃	O	l1	〃	〃				内外面ロクロナデ・施釉	淡黄 2.5Y8/3	粗	良	口縁部 2/12	
465	126-14	磁器	皿		L	m25	〃	〃			3.4	外面ロクロナデ・施釉 内面施釉	釉 明緑灰 10GB8/1 生地 灰白 7.5Y8/1	やや密	良	底部 5/12	
466	126-13	〃	皿		O	l1	〃	〃	11.8	3.4	5.2	施釉により調整不明	釉 灰白 2.5GY8/1 生地 橙 5YR7/6	やや密	良	口縁部 1/12 底部 7/12	
467	59 1	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	O	m1	SK170	〃			4.2	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・鉄釉	外面 灰褐 7.5YR5/2 内面 灰褐 7.5YR6/2 断面 淡黄 2.5Y8/3	密	良	底部 完存	SB210・212内
468	53-6	土師器	皿		O	m1	SK172	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	明褐灰 7.5YR7/1	密	やや不良	口縁部 1/12	〃
469	55 2	〃	羽釜	中北勢系	O	m1	〃	〃	25.4			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・スス及び風化により調整不明 内面ヨコナデ・ナデ・オサエ	外面 黄橙 7.5YR7/8 内面 橙 5YR7/6	やや粗	並	口縁部 5/12	〃
470	62 1	〃	〃	〃	O	m1	〃	〃	26			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・オサエ・ハケメ 内面ヨコナデ・ナデ	橙 7.5YR7/6	やや粗	並	口縁部 完存	〃
471	175-3	白磁	小椀		L	j25	SB214柱穴	〃	8.2			外面ロクロナデ・ロクロケズリ・施釉 内面ロクロナデ・施釉	釉 灰白 7.5Y8/2 生地 灰白 7.5Y8/1	密	良	口縁部 3/12	〃
472	56 4	土師器	皿		L	j22	SK182	〃		1.5		磨耗により調整不明	浅黄橙 10YR8/3	粗	並	口縁部 1/12	SB217内
473	26 2	〃	〃		O	p3	SK48	〃	12			外面ヨコナデ・オサエ後ナデ 内面ヨコナデ・ナデ	外面 灰黄褐 10YR4/2 内面 黒褐 10YR3/1	密	不良	口縁部 3/12	

第12表　遺物観察表⑪

通し番号	実測番号	器種など		産地・系統等	大地区	小地区	遺構	区画	口径	器高	底径	成形・調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
474	33-5	陶器	擂鉢	瀬戸・美濃	O	p3	〃	〃				内外面ロクロナデ	暗赤灰 10R4/1	やや粗	良	口縁部 1/12	
475	60-1	〃	壷	常滑	O	l3	SK164	〃			14.9	内外面ロクロナデ 底部施釉により調整不明・トチン痕	黒褐 10YR3/1 にぶい黄橙 10YR6/4 底部 灰オリーブ 5Y6/1	粗	良	底部 2/12	
476	56-1	土師器	皿		L	k21	SK181	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 10YR8/3	やや密	並	口縁部 1/12	
477	56-3	〃	〃		L	l21	〃	〃	10			外面ヨコナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	淡黄 2.5Y8/3	やや密	並	口縁部 3/12	
478	56-2	〃	〃		L	k22	〃	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	外面 淡黄 2.5Y8/3 内面 灰白 2.5Y7/1	やや密	並	口縁部 1/12	
479	58-1	石製品	茶臼		L	l22	〃	〃	長さ15.1	厚さ5.3	幅6.9					つば 1/12	
480	7-3	陶器	灰釉端反皿	瀬戸・美濃	L	j21	SK201	〃	11	2.7	6.5	外面ロクロナデ・ロクロケズリ 内面ロクロナデ 底部貼付高台	釉 浅黄 7.5Y7/3 生地 灰白 2.5Y8/2	密	並	口縁部 3/12 底部 4/12	
481	64-3	〃	片口鉢	常滑	L	j21	〃	〃			12.8	外面ロクロナデ・オサエ 内面ロクロナデ	外面 橙 2.5YR6/6 にぶい赤褐 5YR5/3 内面 淡黄 2.5Y8/3	密	良	底部 4/12	
482	64-1	〃	〃	〃	L	j21	〃	〃	33.8			内外面ロクロナデ	外面 にぶい赤褐 2.5YR5/4 内面 明赤褐 2.5YR5/6 橙 5YR7/6	密	良	口縁部 2/12	
483	65-1	〃	甕	〃	L	j22	〃	〃	42			内外面ロクロナデ	外面 橙 7.5YR7/6 内面 橙 5YR7/6	密	良	口縁部 1/12	
484	126-9	磁器	皿		L	j21	〃	〃			5.4	内外面施釉により調整不明・染付	灰白 N8/	密	良	底部 2/12	
485	26-9	土師器	皿		O	l8	SD39	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	黒 5Y2/1	密	良	口縁部 1/12	
486	23-2	〃	鍋	尾張系	O	l8	〃	〃				内外面ヨコナデ・ナデ 外面スス付着	橙 7.5YR7/6	やや密	良	口縁部 1/12	
487	29-2	陶器	天目茶椀	瀬戸・美濃	O	l8	〃	〃	13	6.9	4.2	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	鉄釉 極暗赤褐 2.5YR2/2 サビ釉 にぶい褐 7.5YR5/4 生地 にぶい橙 5YR7/4	密	良	口縁部 3/12 底部 完存	
488	128-3	磁器			O	l7	〃	〃				内外面施釉・染付有り	外面 明青灰 5BG7/1 内面 明緑灰 10GY8/1	密	良	小片	
489	2-5	土師器	皿		O	o5	SD49	〃	10	1.5		内外面ヨコナデ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	やや粗	並	口縁部 3/12	
490	34-1	陶器	擂鉢	瀬戸・美濃	O	r2	〃	〃				内外面ロクロナデ	暗赤灰 7.5YR3/1	やや粗	良	口縁部 1/12	
491	126-7	磁器	端反皿		O	n5	〃	〃				内外面施釉により調整不明	灰白 7.5Y8/1	密	良	口縁部 1/12	
492	129-4	磁器	〃		O	o5	〃	〃				内外面ロクロナデ・施釉・染付有り	明緑灰 7.5GY8/1	密	良	口縁部 1/12	
493	45-3	陶器	片口鉢	常滑	O	o5	〃	〃			16	外面ロクロナデ・オサエ 内面ロクロナデ・オサエ・ナデ・工具痕	外面 にぶい赤褐 2.5YR4/3 内面 灰赤 2.5YR4/2	密	良	底部 2/12	
494	109-1	石製品	茶臼		O	o5	〃	〃	長さ16.3	厚さ8.8	幅6.5					3/12	
495	109-2	〃	〃		O	k6	SD59	〃	長さ10	厚さ6	幅10.2					1/12	
496	126-4	磁器	皿		O	l1	SD165	〃			7.2	内外面施釉により調整不明 底部削り出し高台	灰白 10Y8/1	密	良	底部 2/12	
497	60-2	陶器	片口鉢	常滑	L	j25	SD168	〃	20			外面ロクロナデ・ナデ・オサエ 内面ロクロナデ・ナデ	灰黄褐 10YR5/2	やや粗	良	口縁部 2/12	
498	54-5	土師器	皿		L	l23	SD174	〃	12	1.9		外面ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面ヨコナデ・オサエ	外面 灰白 2.5Y8/2 にぶい橙 10YR7/4 内面 灰白 2.5Y8/2	密	不良	口縁部 3/12	
499	54-2	〃	〃		L	h24	SD175	〃	9	1.4		外面ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ	浅黄橙 7.5YR8/4	密	並	口縁部 2/12	
500	54-1	〃	〃		L	j22	〃	〃	9			内外面ヨコナデ・ナデ	外面 黄橙 7.5YR7/8 内面 にぶい黄褐 10YR5/4	密	並	口縁部 2/12	
501	53-7	〃	〃		L	j22	〃	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	橙 7.5YR7/6	密	並	口縁部 1/12	
502	53-5	〃	鍋	尾張系	L	i24	〃	〃				内外面ヨコナデ・ナデ	外面 灰褐 7.5YR4/2 内面 灰褐 7.5YR5/2	密	並	口縁部 2/12	
503	53-9	〃	羽釜	中北勢系	L	j22	〃	〃				外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ	外面 浅黄橙 10YR8/4 内面 淡黄 2.5Y8/4	密	並	口縁部 1/12	
504	53-8	〃	〃	〃	L	h24	〃	〃				外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ 内面ヨコナデ・ナデ	外面 橙 7.5YR7/6 内面 浅黄橙 7.5YR8/6	密	並	口縁部 1/12	
505	55-3	〃	〃	〃	L	h24	〃	〃				外面ヨコナデ・オサエ・ハリツケナデ・ナデ ナデオサエ 内面ヨコナデ・ナデオサエ	浅黄橙 10YR8/4	やや粗	並	口縁部 1/12	
506	55-1	〃	〃	〃	L	h24	〃	〃	22			外面ヨコナデ・ナデオサエ・ハリツケナデ 内面ヨコナデ・ナデオサエ	浅黄橙 10YR8/4	密	並	口縁部 1/12	
507	11-2	陶器	天目茶椀	瀬戸・美濃	L	i23	〃	〃	12.4			外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	釉 黄褐 10YR5/8 サビ釉 にぶい橙 5YR6/3 生地 浅黄橙 10YR8/4	密	良	口縁部 4/12	SD177と接合
508	54-4	〃	〃	〃	L	j22	〃	〃			4.1	外面ロクロケズリ 内面ロクロナデ・鉄釉	外面 褐灰 10YR4/1 内面 にぶい赤褐 5YR4/3	密	良	底部 完存	
509	53-2	〃	擂鉢	〃	L	j22	〃	〃				内外面ロクロナデ	外面 赤褐 10YR4/3 内面 灰黄褐 10YR5/2	密	良	口縁部 1/12	
510	53-1	〃	〃	〃	L	j22	〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・ナデ	外面 灰褐 5YR4/2 内面 黒褐 7.5YR3/1	密	良	口縁部 1/12	
511	53-4	〃	〃	〃	L	j22	〃	〃				外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	暗赤灰 7.5R4/1	密	良	口縁部 1/12	
512	54-3	〃	山茶椀	尾張型	L	i23	〃	〃	12			内外面ロクロナデ 底部糸切り痕	外面 淡黄 5Y8/3 内面 灰白 7.5Y8/1	密	並	口縁部 1/12	
513	10-1	〃	鉄釉大皿	瀬戸・美濃	L	j22	〃	〃	19.3	4.2	10.2	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・施釉 内面ロクロナデ・施釉	釉 暗褐 7.5YR3/3 生地 浅黄橙 10YR8/4	やや密	良	口縁部 3/12 底部 3/12	
514	57-1	〃	片口鉢	常滑	L	i23	〃	〃	26			内外面ロクロナデ	外面 暗褐 7.5YR3/4 内面 褐 7.5YR4/3	やや粗	良	口縁部 2/12	
515	54-6	〃	壷	〃	L	j23	〃	〃				外面ロクロナデ・板ナデ・ハケメ 内面ロクロナデ・ナデ	外面 浅黄 2.5Y7/3 内面 黒褐 10YR3/1	密	良	口縁部 1/12	
516	53-3	〃	甕	〃	L	i23	〃	〃				内外面ロクロナデ	外面 赤褐 10YR5/3 内面 にぶい赤褐 5YR5/3	密	良	口縁部 1/12	

第13表　遺物観察表⑫

遺物番号	実測番号	器種など		産地・系統等	大地区	小地区	遺構	図面	口径	器高	底径	成形・調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
517	126-1	磁器	皿		L	j22	〃	〃				内外面施釉・染付	灰白 N8/	密	良	口縁部 1/12	
518	49-5	鉄製品			L	j22	〃	〃								残存長4.5cm	
519	57-3	土師器	羽釜	中北勢系	L	i23	SD177	〃				外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ナデ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ・オサエ	淡黄 2.5Y8/4	やや粗	並	口縁部 1/12	
520	57-5	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	L	i23	〃	〃				内外面ロクロナデ	サビ釉 暗赤灰 2.5YR3/1 生地 浅黄橙 10YR8/4	やや粗	良	口縁部 1/12	
521	57-2	〃	〃	〃	L	i23	〃	〃			9	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	外面 灰褐 7.5YR4/2 内面 褐 7.5YR4/3	やや密	良	底部 3/12	
522	57-4	〃	鉄釉大皿	〃	L	j22	〃	〃				内外面ロクロナデ・サビ釉	サビ釉 暗赤褐 5YR3/2 生地 浅黄橙 10YR8/3	やや粗	良	口縁部 1/12	
523	57-7	〃	鉄釉丸皿	〃	L	k23	SD180	〃			6	内外面ロクロナデ・鉄釉	鉄釉 褐 7.5YR4/4 生地 灰白 7.5YR8/2	密	良	底部 3/12	
524	96-5	〃	水注	〃			〃	〃			4.7	外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉 内面ロクロナデ 底部糸切り痕	外面 暗褐 7.5YR3/4 内面 暗褐 10YR3/4	密	良	底部 完存	
525	99-9	土師器	鍋	尾張系	L	i25	包含層	〃	28			内外面ヨコナデ・ナデ 外面スス付着	外面 黒 5YR1.7/1 内面 橙 7.5YR7/6	密	良	口縁部 1/12	
526	37-7	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	O	q2	〃	〃				内外面ロクロナデ	サビ釉 暗赤褐 5YR3/4 生地 灰白 10YR8/2	やや粗	良	口縁部 1/12	
527	41-1	〃	片口鉢	常滑	O	l6	〃	〃				外面ロクロナデ・オサエ 内面ロクロナデ	灰黄 2.5Y6/2 灰黄褐 10YR5/2 断面橙 7.5YR7/6	やや粗	良	口縁部 1/12	
528	41-6	〃	〃	〃	O	l7	〃	〃			16.7	内外面ロクロナデ・オサエ	淡黄 2.5Y8/3	粗	やや不良	底部 4/12	
529	126-3	青磁	椀		L	h25	SK176	〃				施釉により調整不明	オリーブ灰 10Y6/2	密	良	口縁部 1/12	近世遺構への混入
530	63-5	土師器	皿		L	l24	Pit1	〃	10.7			外面ヨコナデ・ナデ・オサエ 内面ヨコナデ・ナデ 口縁部スス付着	浅黄橙 10YR8/3	密	良	口縁部 2/12	
531	175-1	陶器	鉄釉平椀	瀬戸美濃	O	k1	Pit4	〃				内外面ロクロナデ・鉄釉・断面に漆付着	釉 褐 10YR4/6 黒 10YR1.7/1 生地 浅黄橙 10YR8/4	密	良	口縁部 1/12	
532	12-3	〃	花瓶	〃	O	l2	Pit5	〃		7.2	10.6	内外面ロクロケズリ・サビ釉 底部貼付高台	サビ釉 赤褐 5YR4/6 赤灰 10R4/2 生地 浅黄橙 10YR8/3	密	良	底部 7/12	口縁部折り返し埋めこみ再製
533	9-1	石製品	石臼		L	j25	Pit2	〃	直径31.8	厚さ6.6							
534	96-4	土師器	羽釜	中北勢系			SK224	17	22			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・ユビオサエ 内面ヨコナデ・工具ナデ・ケズリ	外面 橙 5YR7/6 内面 橙 5YR7/6 にぶい赤褐 5YR5/3	密	良	口縁部 2/12	焼成前穿孔
535	98-8	陶器	壷	常滑			SK227	〃				外面ロクロナデ・ナデ 内面ロクロナデ・ナデ・オサエ	褐灰 10YR4/1 淡黄 2.5Y8/3	粗	良	口縁部 1/12	
536	141-2	土師器	羽釜	中北勢系			SK229	〃	22			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・工具ナデ・ケズリ 内面ヨコナデ・工具ナデ・ケズリ	にぶい黄橙 10YR7/3	粗	不良	口縁部 2/12	焼成前穿孔
537	115-3	〃	鍋		東区		包含層		26.6			風化・スス付着により調整不明	ススにより不明	密	良	口縁部 3/12	
538	76-2	〃	焙烙		東区		〃		24			外面ヨコナデ・ナデ・スス付着 内面ヨコナデ・ハリツケナデ	外面 にぶい橙 5YR6/3 内面 橙 5YR6/6	密	並	口縁部 2/12	
539	174-1	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	東区		〃		24.3			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	褐灰 5YR4/1	密	良	口縁部 8/12	
540	82-3	〃	灰釉端反皿	〃	東区		〃		9	2.3	5	内外面ロクロナデ・施釉	釉 明黄褐 2.5Y7/6 生地 黒 2.5Y2/1 灰 10Y5/1	密	やや不良	口縁部 3/12 底部 3/12	
541	7-2	〃	鉄釉丸皿	〃	東区		〃		10.2	2.8	5.8	外面ロクロナデ・ロクロケズリ 内面ロクロナデ 底部貼付高台・トチン痕	釉 灰オリーブ 7.5Y5/3 灰白 7.5Y7/2 生地 灰白 2.5Y8/2	密	良	口縁部 4/12 底部 4/12	
542	114-4	〃	鉄釉稜皿	〃	東区		〃		10	2.9	5.1	外面ロクロナデ・施釉 内面ロクロナデ・施釉・トチン痕 底部輪ドチ痕	暗褐 7.5YR3/4	密	良	口縁部 10/12 底部 完存	
543	98-7	〃	〃	〃	東区		〃		11	2.3		外面ロクロナデ・ロクロケズリ 内面ロクロナデ 底部削り出し高台	褐 10YR4/6 黒褐 10YR2/3	密	良	口縁部 2/12	
544	27-2	土師器	皿		西区		〃		7			外面オサエ・ナデ 内面ナデ	浅黄橙 7.5YR8/3	密	並	口縁部 4/12	
545	78-4	〃	〃		西区		〃		8			外面ヨコナデ・ユビオサエ 内面ヨコナデ・ナデ	外面 にぶい橙 7.5YR7/4 内面 にぶい黄橙 10YR7/4	やや密	並	口縁部 10/12	
546	78-5	〃	鍋	中北勢系	西区		〃		18			外面ヨコナデ・ハケメ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ	外面 にぶい黄橙 10YR7/4 内面 浅黄橙 10YR8/4	やや密	並	口縁部 5/12	
547	2-3	〃	〃	〃	西区		〃		20			外面ヨコナデ・ハケメ 内面ヨコナデ・ナデ	橙 5YR6/6	やや粗	並	口縁部 3/12	
548	98-4	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃	西区		〃		12			外面ロクロナデ・ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	鉄釉 にぶい褐 7.5YR5/4 サビ釉 にぶい橙 5YR7/4	密	良	口縁部 3/12	
549	30-3	〃	〃	〃	西区		〃				4	外面ロクロケズリ・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	外面 にぶい橙 7.5YR6/4 灰白 7.5YR8/1 内面 黒褐 7.5YR3/2	密	良	底部 完存	
550	31-3	〃	灰釉端反皿	〃	西区		〃		10.9			内外面ロクロナデ・施釉	灰白 7.5Y8/2	密	良	口縁部 1/12	
551	12-2	〃	灰釉丸皿	〃	西区		〃		10.2	2.5	5.7	内外面ロクロナデ・施釉 底部貼付高台・輪ドチ痕	釉 淡黄 5Y8/3 灰オリーブ 7.5Y5/3 生地 灰白 7.5Y8/1	やや密	良	口縁部 9/12 底部 完存	
552	47-3	〃	山茶椀	尾張型	西区		〃		10.5			内外面ロクロナデ	灰白 5Y8/1	やや密	やや不良	口縁部 2/12	
553	47-4	〃	〃	〃	西区		〃		10.9			内外面ロクロナデ	灰白 7.5Y8/1	密	やや不良	口縁部 2/12	
554	36-4	〃	擂鉢	瀬戸美濃	西区		〃				10	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	外面 灰褐 7.5YR4/2 浅黄橙 10YR8/3 内面 浅黄橙 10YR8/3 灰褐 7.5YR4/2	やや密	良	底部 5/12	
555	37-5	〃	〃	〃	西区		〃					内外面ロクロナデ	釉 暗赤灰 10R4/1 生地 灰白 N8/	やや密	良	口縁部 1/12	
556	37-1	〃	〃	〃	西区		〃		33			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・櫛目	赤灰 2.5YR4/1	やや密	良	口縁部 3/12	
557	68-4	〃	碗利	瀬戸美濃	西区		〃		12			内面ロクロナデ・サビ釉	外面 暗赤褐 5YR3/2 内面 にぶい赤褐 5YR4/4 生地 灰白 2.5Y8/1	やや密	良	底部 3/12	
558	38-3	〃	片口鉢	常滑	西区		〃					内外面ロクロナデ	外面 灰褐 5YR5/2 内面 にぶい赤褐 5YR5/3	粗	良	口縁部 1/12	
559	38-1	〃	〃	〃	西区		〃					外面ロクロナデ・板ナデ 内面ロクロナデ	外面 灰黄 2.5Y6/2 内面 にぶい赤褐 5YR5/3	粗	良	口縁部 1/12	

第14表　遺物観察表⑬

遺物番号	実測番号	器種など		産地・系統等	大地区	小地区	遺構	区画	口径	器高	底径	成形・調整	色調	胎土	焼成	残存度	備考
560	79-2	〃	甕	〃	西区		〃		46			内外面ロクロナデ	灰赤 10R4/2	やや粗	やや不良	口縁部 2/12	
561	78-3	青磁	香炉		西区		〃					内外面施釉	釉 明緑灰 5G7/1 生地 灰白 10Y8/1	密	良	底部 5/12	
562	105-1	銅銭	皇宋通寶		西区		〃		直径3.4								重さ2.23g
563	147-1	石製品	磨製石鏃		P	i19	SH312		長さ3.4	厚さ0.3	幅2.4						重さ2.7g
564	122-4	弥生土器	壺		P	n20	SK322		27			外面刺突列・ナデ 内面ナデ	外面 浅黄橙 10YR8/4 内面 橙 7.5YR7/6	やや密	やや不良	口縁部 2/12	
565	122-1	〃	〃		P	n20	〃				7	外面ハケメ・ヘラケズリ 内面工具ナデ 底部工具ナデ	外面 黒褐 10YR3/1 内面 淡黄 2.5Y8/3	やや粗	やや不良	底部 4/12	
566	122-3	〃	〃		P	n20	〃				6	外面剥離により調整不明 内面ユビナデ	外面 灰白 2.5Y8/2 内面 灰白 N8/	やや密	不良	底部 3/12	
567	125-4	〃	〃		T	f3	SD43下層		12			外面凹線・ナデ 内面ヨコナデ・ナデ	にぶい黄褐 10YR5/3	やや粗	並	口縁部 1/12	
568	125-2	〃	〃		T	f3	〃				5.2	外面工具ナデ 内面ハケメ	外面 褐灰 7.5YR6/1 内面 褐灰 10YR4/1	粗	並	底部 完存	
569	124-1	〃	甕		T	e6	〃		26			外面ヨコナデ・ハケメ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ・工具ナデ・ケズリ?	外面 褐灰 7.5YR5/1 内面 灰白 10YR7/1	粗	並	口縁部 2/12	
570	124-2	〃	〃		Q	e23	〃		18			外面ヨコナデ・ハケメ・スス付着 内面ヨコナデ・ナデ	灰白 2.5Y7/1	粗	並	口縁部 2/12	
571	125-1	〃	〃		T	d6	〃		28			外面ヨコナデ・ハケメ・スス付着 内面ヨコナデ・ケズリ	外面 灰白 10YR8/1 内面 褐灰 10YR5/1	粗	並	口縁部 2/12	
572	125-3	〃	〃		T	f3	〃				6	外面ハケメ? 内面ナデ 底部オサエ・ナデ	外面 灰黄褐 10YR6/2 内面 黒褐 2.5Y3/1	粗	並	脚台部 完存	
573	83-6	須恵器	杯				SD43				11.4	内外面ロクロナデ	赤灰 2.5YR5/1	やや粗	良	底部 7/12	
574	123-2	〃	壺		T	f2	〃		26			外面ロクロナデ・羽状文・沈線後工具ナデ 内面ロクロナデ・工具ナデ	灰 N6/	やや粗	やや不良	口縁部 3/12	
575	123-1	土師器	皿				〃		22	2.5		外面ヨコナデ・ナデ・ケズリ 内面ヨコナデ・ハケメ	灰白 2.5Y8/1	粗	並	口縁部 3/12	
576	47-11	弥生土器	甕		O	q2	SD49		16			外面ヨコナデ・ナデ 内面ヨコナデ・ナデ・オサエ	灰黄 2.5Y6/2	粗	不良	口縁部 2/12	中世遺構への混入
577	68-5	〃	壺		L	v15	包含層				5.6	内外面ナデ?	外面 黄灰 2.5Y5/1 浅黄橙 10YR8/4 内面 灰黄 2.5Y6/2	粗	並	底部 完存	
578	122-2		埴輪?				SR301					外面ナデ 内面磨耗により調整不明	外面 淡黄 2.5Y8/3 内面 灰白 2.5Y8/2	密	不良	口縁部 小片	中世遺構への混入
579	6-1		家形埴輪		東③		包含層					内外面オサエ・ナデ	橙 7.5YR7/6	やや密	良	裾部の一部	
580	100-4	須恵器	杯身				SR12			4		外面ロクロケズリ・ロクロナデ 内面ロクロナデ	外面 明紫灰 5RP7/1 内面 明青灰 5PB7/1	密	良	口縁部 1/12	中世遺構への混入
581	57-6	〃	杯蓋		L	j22	SD178		10			外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	外面 にぶい黄橙 10YR7/4 内面 灰黄 2.5Y7/2	やや密	良	口縁部 2/12	中世遺構への混入
582	156-1	〃	〃		P	t25	包含層		16.4	2		外面ヘラケズリ・ロクロナデ 内面ロクロナデ・ヨコナデ	外面 灰黄褐 10YR6/2 灰褐 5YR4/2 内面 灰黄褐 10YR6/2 灰白 N7/	密	良	口縁部 3/12	
583	47-10	〃	甕		O	l8	〃					外面ロクロナデ・刺突・沈線・施釉 内面ロクロナデ・施釉	釉 灰オリーブ 5Y5/3 生地 灰白 2.5Y8/2	やや密	良	口縁部 小片	
584	74-2	〃	脚		L	y20	〃				17	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ	灰黄 2.5Y6/2	密	良	底部 2/12	
585	47-9	灰釉陶器	椀		O	r14	〃				8	外面ロクロナデ 内面ロクロナデ・トチン痕 底部ロクロケズリ・貼付高台	灰白 2.5Y8/2	密	やや良	底部 4/12	
586	47-8	〃	〃		O	u1	〃				6.7	内外面ロクロナデ 底部貼付高台	灰白 2.5Y8/2	やや密	良	底部 4/12	
587	144-1	石製品	石臼		S	p1	SF315		直径31.3	厚さ9.7						1/3	重さ7.3kg
588	84-6	陶器	甕	瀬戸	T	e3	包含層					外面ロクロナデ・施釉 内面ロクロナデ・施釉	釉 暗褐 7.5YR3/3 生地 浅黄橙 7.5YR8/3	やや粗	良	底部 1/12	
589	30-2	〃	灰釉菊皿	瀬戸美濃			〃				6	外面ロクロケズリ 内面ロクロナデ・灰釉 底部貼付高台・ロクロナデ	外面 浅黄 5Y7/4 内面 淡黄 2.5Y8/3	密	良	底部 4/12	
590	91-9	土製品	加工円盤		P	j22	SK310			厚さ0.4		外面施釉・染付有り	灰白 N8/	密	良	体部 小片	
591	98-2	〃	〃		P	r22	包含層			厚さ0.4		内外面染付有り	灰白 10Y8/1	密	良	体部 小片	
592	84-1	陶器	壺	常滑			〃				13.6	外面板ナデ 内面ユビオサエ・ナデ 底部未調整	暗赤 10R3/4	密	良	底部 完存	
593	135-2	土師器	羽釜	中北勢系			〃		21.9			外面ヨコナデ・ハリツケナデ・スス付着 内面ヨコナデ	外面 にぶい橙 7.5YR7/3 内面 にぶい黄橙 10YR7/2	やや密	良	口縁部 2/12	丸内遺跡
594	135-1	陶器	天目茶椀	瀬戸美濃			〃				4.3	外面ロクロケズリ・鉄釉・サビ釉 内面ロクロナデ・鉄釉	鉄釉 灰褐 7.5YR6/2 サビ釉 灰褐 5YR6/2	やや粗	良	底部 完存	〃
595	方眼から	石製品	火打石		L	j21	SK201										
596	方眼から	〃	〃		L	e16	包含層										

第15表　遺物観察表⑭

Ⅴ　範囲確認調査

第二名神自動車道の工事に関連して、伊坂城跡に隣接する丸内遺跡（四日市市遺跡番号509）と筋狭間池の範囲確認調査を行った。

（１）丸内遺跡（付図）

伊坂城跡の区画１から８の南側にある丸内遺跡（四日市市遺跡番号509）で、範囲確認調査を行った。遺構は確認されず、施工可としたが、少量の遺物が（第101図）出土した。

593は中北勢系の土師器羽釜。口縁部は内傾し、口縁端部は外側につまみ出され、上端に面を持つ。鍔部直上に焼成前穿孔がある。

594は瀬戸美濃製品の天目茶椀。大窯第３段階のものである。いずれも伊坂城跡から転落した遺物と考えられる。

（２）筋狭間池（付図）

伊坂城跡の区画14から17の南西で、伊坂城関連の遺構の有無を確認する調査を行った。遺構・遺物とも確認されず、施工可とした。　　（竹田憲治）

Ⅵ　自然科学分析

１　伊坂城跡における花粉分析

（１）はじめに

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は分解されにくく堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があり、虫媒花植物に対し風媒花植物は非常に多くの花粉を生産する。花粉は地表に落下後、一部土壌中に留まり、多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から、地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

（２）試料

試料は、伊坂城跡より検出された土坑内の堆積物20点である。土坑には、建物に伴うとおもわれるもの（ＳＫ135、ＳＫ170、ＳＫ172、ＳＫ182）、建物には伴わないもの（ＳＫ136、ＳＫ137、ＳＫ181）がある。比較試料として、ＳＫ135壁面の地山、ＳＫ136壁面の地山、ＳＫ137壁面の地山、ＳＫ136付近の現表土、ＳＫ172付近の現表土も採取された。

（３）方法

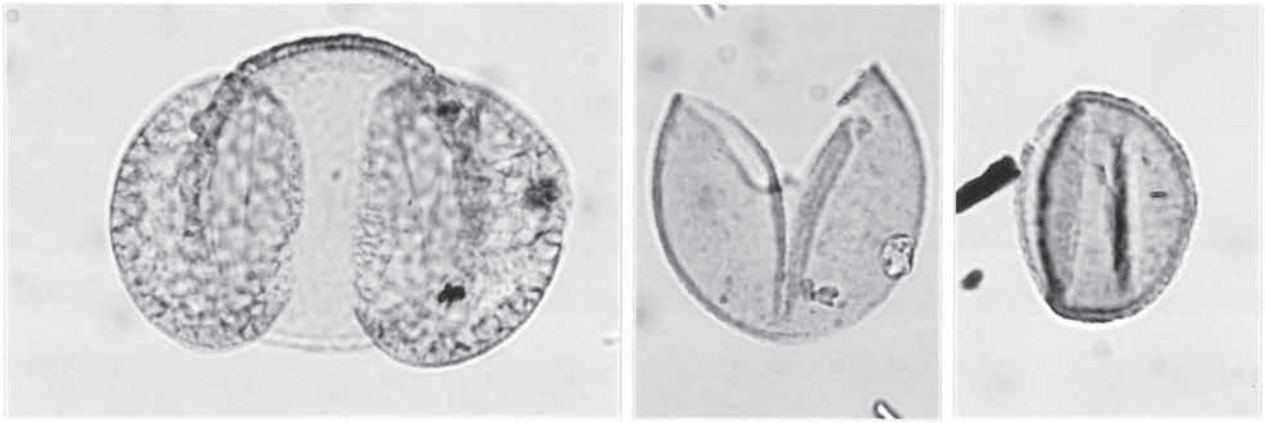
花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

１）5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
２）水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
３）25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
４）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
５）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

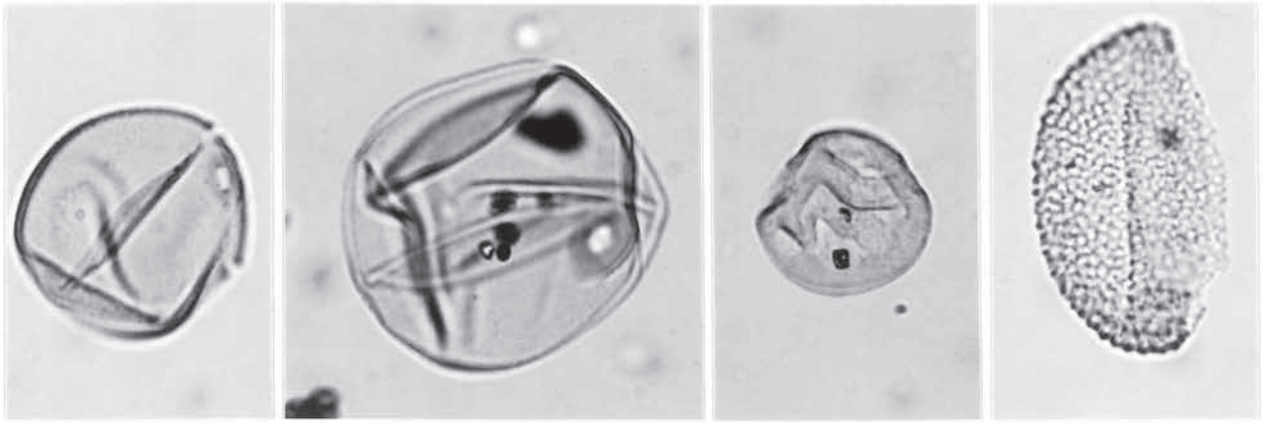
以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、２分間）の後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン

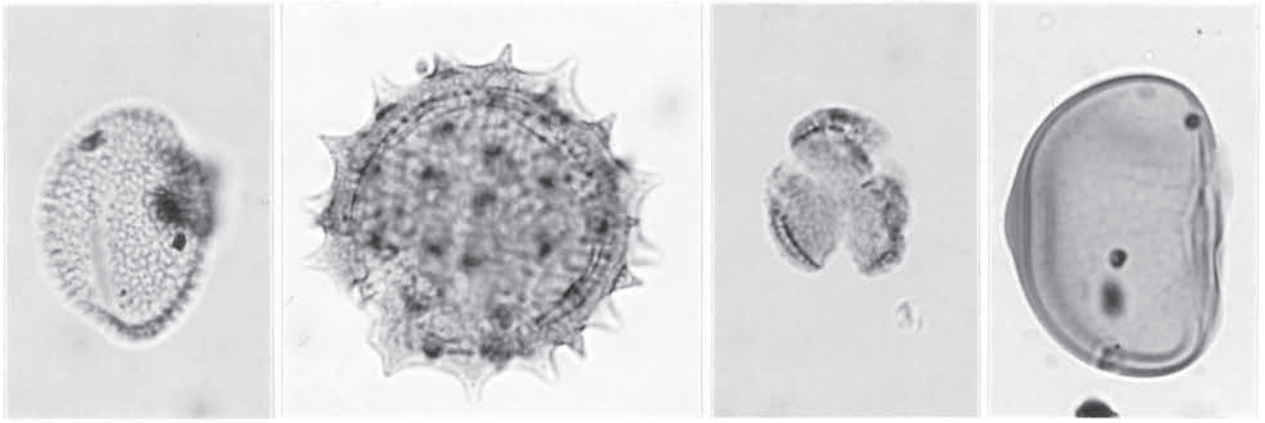
伊坂城跡の花粉・胞子



1　マツ属複維管束亜属　2　スギ　3　コナラ属コナラ亜属



4　イネ科　5　イネ属型　6　カヤツリグサ科　7　ソバ属



8　アブラナ科　9　キク亜科　10　ヨモギ属　11　シダ植物単条溝胞子

10μm

（ー）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

（4）結果

①分類群

出現した分類群は、樹木花粉12、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉12、シダ植物胞子２形態の計27である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、主要な分類群は写真に示した。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属-ムクノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

②花粉群集の特徴

花粉はほとんど検出されず、わずかにSK172、SK182、SK136、SK136付近、SK172付近のみから検出された。イネ科が多く、カヤツリグサ科、ソバ属、アブラナ科、キク亜科、ヨモギ属が検出される。SK172付近では、マツ属複維管束亜属が多く、スギもやや多い。

（5）花粉分析から推定される植生と環境

花粉の検出される試料は少ないが、ＳＫ１７２、SK182、SK136、SK136付近、SK172付近の花粉群集からみて、イネ科をはじめカヤツリグサ科、ソバ属、アブラナ科、キク亜科、ヨモギ属の陽当たりのよい乾燥地を好む草本が大部分を占め、イネ科、ソバ属、アブラナ科は、栽培種を含むことから、近隣で畑作が行われていたと考えられる。花粉があまり検出されないことから、乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境が示唆される。SK172付近の周辺では、マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）が生育していたと推定される。

（木寺きみ子、金原正子　監修金原正明）

［参考文献］

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82-110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

２　伊坂城跡における寄生虫卵分析

（1）はじめに

人、動物などに寄生する寄生虫の卵殻は堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、トイレ遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と識別することができトイレ遺構を確認することも可能である。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることもできる。現状では近年研究されだした研究であり分析例も少ない。

（2）試料

試料は、伊坂城跡より検出された土坑内の堆積物20点である。土坑には、建物に伴うとおもわれるもの（ＳＫ135、ＳＫ170、ＳＫ172、ＳＫ182)、建物には伴わないもの（ＳＫ136、ＳＫ137、ＳＫ181）がある。比較試料として、ＳＫ135壁面の地山、ＳＫ136

第16表　伊坂城跡における寄生虫卵・花粉分析結果

分類群		SK135			SK170		SK172		SK182		SK136			SK135	SK181		SK135	SK136	SK137	SK136付近	SK172付近
学名	和名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉																				
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属										2									7	147
Cryptomeria japonica	スギ										5									4	32
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科											1								1	2
Juglans	クルミ属										1										
Alnus	ハンノキ属										1	1								4	5
Betula	カバノキ属											1									
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ											1									
Castanea crenata	クリ																				1
Fagus	ブナ属																			1	1
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属						1													2	4
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属										8	2									5
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ																				2
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉																				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科										4										
Nonarboreal pollen	草本花粉																				
Gramineae	イネ科						3		7		67	18								16	49
Oryza type	イネ属型										1	1									
Cyperaceae	カヤツリグサ科								1		18	7								2	5
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節										2										
Fagopyrum	ソバ属								1		7									1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科											1									
Caryophyllaceae	ナデシコ科																			2	1
Cruciferae	アブラナ科								1		3	4								17	5
Plantago	オオバコ属											4									
Lactucoideae	タンポポ亜科																			3	
Asteroideae	キク亜科										2	5								1	19
Artemisia	ヨモギ属						1				7	5								7	
Fern spore	シダ植物胞子																				
Monolate type spore	単条溝胞子								1		10	4								11	7
Trilate type spore	三条溝胞子										2	2								1	7
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0	0	0	0	1	0	0	0	17	6	0	0	0	0	0	0	0	19	199
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	0	0	0	0	0	4	0	10	0	107	45	0	0	0	0	0	0	0	49	79
Total pollen	花粉総数	0	0	0	0	0	5	0	10	0	128	51	0	0	0	0	0	0	0	68	278
	試料1cm³中の花粉密度	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.5	0.0	9.8	0.0	9.0	3.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	4.9	1.8
							×10		×10		×10²	×10²						×10		×10²	×10²
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	0	0	0	0	4	0	1	3	0	0	0	0	0	1	0	2	2
Fern spore	シダ植物胞子	0	0	0	0	0	0	0	1	0	12	6	0	0	0	0	0	0	0	12	14

壁面の地山、ＳＫ137壁面の地山、ＳＫ136付近の現表土、ＳＫ172付近の現表土も採取された。

（３）方法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

１）サンプルを採量する。

２）脱イオン水を加え撹拌する。

３）篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。

４）25％フッ化水素酸を加え30分静置。（２・３度混和）

５）水洗後サンプルを２分する。

６）２分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す。

７）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。

８）検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

（４）結果と考察

各試料とも、寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

ＳＫ135、ＳＫ170、ＳＫ137、ＳＫ181、ＳＫ135壁面の地山、ＳＫ136壁面の地山、ＳＫ137壁面の地山の堆積物は花粉も検出されず、ＳＫ172、ＳＫ182、ＳＫ136、ＳＫ136付近の現表土は花粉が検出されるが出現密度は極めて低く、ＳＫ172付近の現表土は花粉密度がやや低い。

ＳＫ172、ＳＫ182、ＳＫ136、ＳＫ136付近の現表土、ＳＫ172付近の現表土は、草本ではイネ科、カヤツリグサ科、キク亜科などの乾燥地を好む草本が検出されている。ＳＫ172付近は樹木花粉も多くマツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）が特徴的に出現しその生育が考えられる。

以上から、各試料とも花粉も密度が低いか低密度であり、乾燥地を好む草本が多く乾燥した堆積環境下が示唆され、寄生虫卵や花粉などの有機物の分解が考えられる。各遺構内の堆積物には寄生虫卵は検出されず、便所遺構である蓋然性は認められないが、分解が考えられ寄生虫卵が当初から含まれていなかったのか分解されたのかは不明である。

（金原正子　監修金原正明）

［参考文献］

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構藤原京7条1坊，奈良国立文化財研究所，p.14-15.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，8，医歯薬出版，p.9-55.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学，考古学と自然科学，2，同成社，p.151-158.

３　伊坂城跡における樹種同定

（１）はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

（２）試料

試料は、伊坂城跡より出土した、SE303の漆椀１点である。

（３）方法

試料はカミソリを用いて、新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（４）結果

試料は、カエデ属　*Acer*　であった。以下に同定

根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

カエデ属　*Acer*　カエデ属

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは２～４個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で１～５細胞幅である。道管の内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。

以上の形質よりカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の形質からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20m、径１mに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

（５）所見

同定の結果、伊坂城跡より出土した、SE303の漆椀は、カエデ属であった。

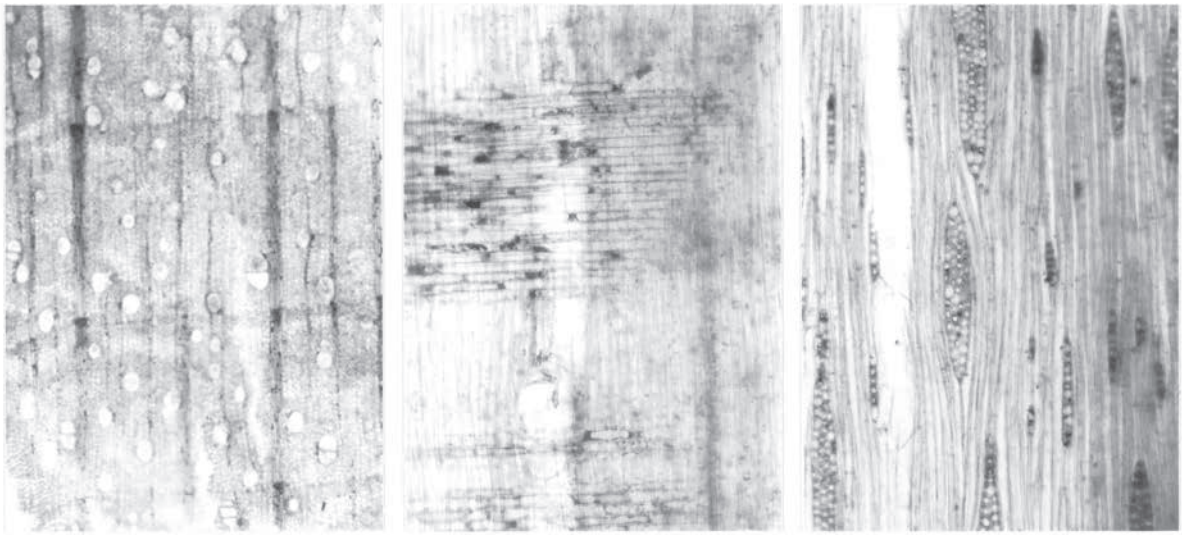
（金原明　監修金原正明）

［参考文献］

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

伊坂城跡の木材



SE303　漆椀　カエデ属

Ⅶ　発掘調査のまとめ

１　遺構のまとめ

（１）発掘調査からみた伊坂城跡の防御の特徴

伊勢国内の中世城館では、集落背後の尾根の先端や山頂あるいは段丘崖上に築城されているものがほとんどである。ところが、伊坂城跡の主郭は、尾根の先端から700mも奥に造られている。したがってこのような主郭のありかたは、通常の城郭立地とは大きく異なっている。それでは、今回の発掘調査で確認された多くの区画群の防御の特徴とはどのようなものであろうか。

内部の区画　各区画には、すべて境界施設が設けられている。境界施設には尾根の斜面を利用したものと、低い土塁によるものがある。ただしこの段差は、平坦面の造成と、屋敷地を区画するためのもので、区画群間での防御に重点を置いたものではない。

外部との遮断

①立地　区画群の外部に対しては、厳重な防御がなされている。区画群は尾根の上に造られており、麓との比高差は最も高いところで約25mある。尾根の両側は現在でも谷水田や溜池となっており、伊坂城の機能していた時期にも湿地となっていた可能性が高い。

②入口の防御　麓から区画群に入る道路遺構（SR301）は、区画群の入口付近で複雑に屈曲している。区画群には、SD43の西側の平坦地（SR125）を通って入ることもできるが、この平坦地内には、進行方向と直交する柵が幾重にも設けられている（SA283・284・285）。

③土塁　区画９の東側、外部に面した部分には、区画内との高さの差が２ｍ、長さ２０ｍ以上の土塁（SA223）が築かれている。また、土塁とするほどの高さはないが、区画12の外部に面した部分も一段高くなっている。

④斜面に対する防御　区画15と16の南西側の斜面には、テラス状遺構が発達している。このテラス状遺構も、外部から侵入してくるものへの備えと考えられる。

テラス状遺構の上には、斜面に張り出すような建物（区画15ではSB233、区画16ではSB204）がある。両者とも同規模のほかの建物と比較して、柱穴が大きくかつ深く、高層の櫓であった可能性が高い。

以上のことから、伊坂城跡では区画群を、尾根上に構築し、その外側から防御するために多くの施設が造られていたと考えられる。その防御の最終的な要害が、最も奥に造られた主郭（城郭部分）とその周辺なのであろう。このことから、伊坂城跡の城郭部分と区画群の一体性は非常に高く、尾根の奥部に造られた城郭部分は、区画群の存在を当初から強く意識して造られたものと考えられる。

ただし、このような防御も完全なものとはいえない。例えば、発掘調査地から西に約100mの所には、谷が大きく入り込んでいる部分がある。この部分から侵入されれば、主郭と区画群は分断され、相互の連絡が取れなくなってしまう。区画群の防御はあくまで小規模な戦いに対処するもので、大規模な戦いになると、主郭周辺での籠城を想定していたと考えられる。

（２）区画間の遺構の比較

発掘調査および範囲確認調査で、17の区画を検出した。これらの区画のうち、建物が確実に存在しない区３・５・７以外の区画は、主郭から続く尾根上に造られた屋敷地と考えて差し支えなかろう。ここでは、それぞれの区画を比較してみたい。

東区と西区　東名阪自動車道の開通前には、区画１～９と区画10の間に約12mの高低差があったと考えられている①。今回発掘調査を行った区画群は、この斜面の東側（以下「東区」と呼ぶ）と西側（以下「西区」と呼ぶ）に二分されると思われる。

区画の規模　今回の発掘調査により全域を調査した区画の規模は、区画１が約340㎡、区画11が約225㎡、区画12が1800㎡、区画15が1050㎡、区画16が1184㎡である。このうち、区画12はSD80を境に南東

部（約900㎡）と北西部（約900㎡）に細分できる可能性が高い。そうなると西区では、区画12南東部・北西部・区画15・区画16の、900㎡から1200㎡の4つの区画・が若干ずれながらも向かい合うように並んでいる。

これに対して東区では、区画間の規模の差が著しい。この規模の差は、尾根が２つに別れるという地形の制約や、後述するように東区に比較的弱小の階層をおいたためであると考えられる。その中で、区画２と区画８は未発掘部分を含めて考える（1500㎡前後）と比較的大きく、これらが２つに分かれた尾根の各々中心的な存在であった可能性がある。

主屋の構造　区画内の多くには、複数の掘立柱建物が存在する。これらは屋敷地内の主屋・倉庫・雑舎などにあたると考えられる。これらのうち、主屋は１～２回程度の建て替えが行われている。

各区画の主屋を比較すると、共通する構造をもつ一群が認められる（第102図）。区画12北西部の主屋SB150や区画15の主屋SB115は、いずれも５×２間の建物（東西の一間分は庇か土間の可能性がある）で、建物の東側近くに建物内土坑を持つ。一部が調査区外に出ている区画８の主屋SB250、区画10の主屋SB246、区画16の主屋SB212も、ほぼ同じ構造を持つと考えられる。

区画２の主屋SB5、区画12南東部の主屋SB107区画11の主屋に次ぐ規模の建物SB103は、いずれも３×２間の総柱の建物である。区画11の主屋SB102も規模はやや大きい（４×２間）が、同じく総柱の建物である。

一方、東区の区画１・４・６では、上記のような共通性を見出すことはできない。

区画間の「個性」　17区画のうち、井戸を持つ区画は区画８と区画12の２つしかない。この井戸はいずれも区画の奥まったところにあり、共同の井戸としては推定しがたい。東区・西区で最も大きい区画にのみに井戸が存在することは、これらの区画とほかの区画との格差を示すものであろう。

区画15には、１×１間で内部に方形の土坑を持つ建物が８棟ある。このような建物は東区には全くみられず、倍近くの面積を持つ区画12でも５棟、区画13でも１棟、区画16でも１棟しかみられない。このほか、区画15のSB239は、前述の建物を２つつないだような構造をしており、うち一つの土坑からは拳大から人頭大の石が多く出土した。このような建物の用途は不明であるが、その用途が区画15に住む人の職業や階層と密接にかかわるものであると考えられる。

また、（１）でもふれたように、区画15と16の南西側の斜面にはテラス状遺構が多くみられる。しかし区画15と16にまたがるテラス状遺構は一つもなく、すべてのテラス状遺構が区画単位で収束している。これは、斜面の防御や管理が、統一的に行われるのではなく、それぞれの区画単位で行われていたことを示しているのであろう。

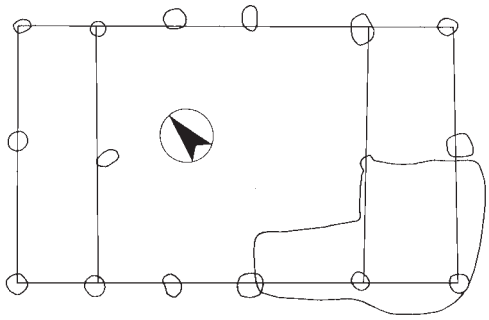
遺構のまとめ　以上、遺構について検討を加えたが、それらをまとめると以下のようなことが指摘できる。

第一に、主郭とその東側の区画群（屋敷地群）とは築城当初から一体的なものであり、旧来の集落（＝伊坂本村）からやや離れた尾根上に、新たに屋敷地群を囲い込んで造られたものであること。

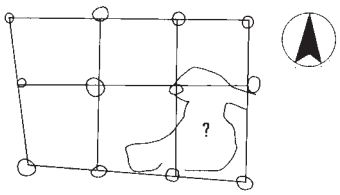
第二に、区画群は現在の東名阪自動車道のあたりで東区・西区に別れる。西区では区画15のように１間×１間で内部に土坑を持つ建物が集中する区画もあるが、ほかの区画にもこのような建物が皆無ではなく、全体としてみれば、区画の規模や主屋の構造が酷似した屋敷地が道路を挟んでならんでいるという景観が復元できる。これは屋敷地の居住者の階層の均質性が高いことを示している

東区では区画２と区画８が西区の区画群のレベルに差があるものの、全体として区画間のばらつきが目立ち、西区に較べて劣勢である。これは区画群の端の一段低いところに比較的弱小な集団を置いたからではないかと思われる。

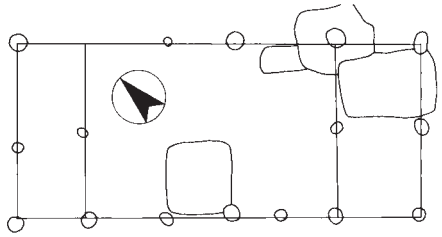
第三に、斜面のテラス状遺構の構造からみてもわかるように、区画群が尾根上に立地するということ以外に、区画群全体を統一したような防御の施設は見出すことができない。むしろ防御に対しては区画間の自律性が強かったと考えるべきである。



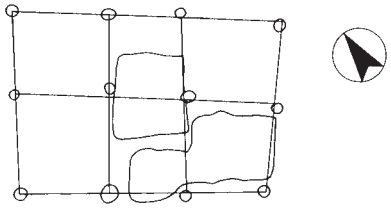
区画12北西部　SB150



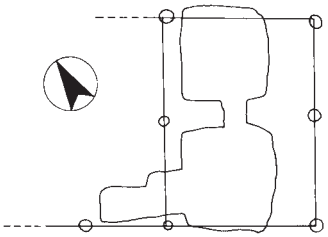
区画２　SB5



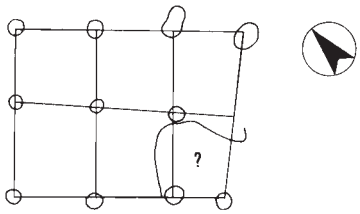
区画15　SB115



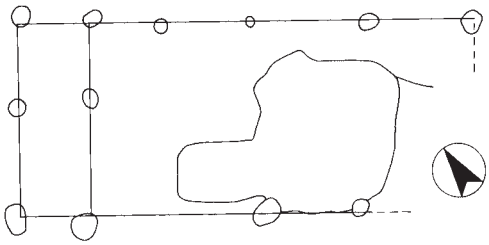
区画12　南東部　SB107



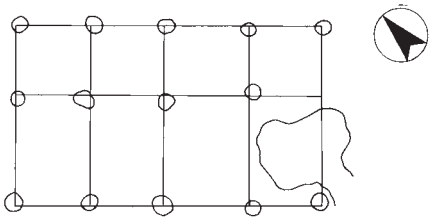
区画８　SB250



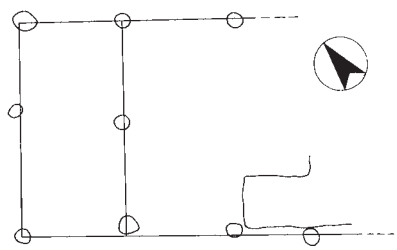
区画11　SB103



区画10　SB246



区画11　SB102



区画16　SB212

第102図　主屋クラスの建物の比較（1：200）

2　遺物のまとめ

（１）出土遺物の様相

出土遺物の全体像を知るため、遺物を産地別・器種別に分けて破片の数を出したのが第103図のグラフ１から５である。ただし薄くてもろい土師器は多数の細かな破片となりやすく、厚くて硬い常滑製品は大きな破片となりやすい。そこで、より実態に近い数量を出すために口縁部の1/12を１としてカウントする方法を用いた。

全体の様相　土師器が最も多く、隣国の尾張からもたらされる瀬戸美濃製品や常滑製品がこれに次ぐ。貿易陶磁には中国産のもののほか、朝鮮産ではないかと思われるものも含む。

伊坂城跡出土遺物の特徴といえるのが、陶器の割合の高さであろう。同じ伊勢国内のほぼ同時代の遺跡である、一志郡美杉村の多気北畠氏遺跡土井沖地区の出土遺物では、９割程を土師器が占め、陶器の占める割合は１割にも満たない[②]。これは、同じ伊勢国でも伊坂城跡が陶器の産地である尾張との距離が近く、流通のルートについても直結していたためと思われる。伊勢国内では北に行くにしたがって遺物全体に占める瀬戸美濃製品や常滑製品の割合が高くなることが予想される。

土師器の構成　土師器の中では羽釜・茶釜・鍋などの煮炊具が約６割を占め、皿が約４割を占める。これも多気北畠氏遺跡土井沖地区のデータと比べると、皿の比率が極めて低いことが注目できる。これについても北伊勢の地域性なのであろうか。

伊坂城跡では、少量であるものの尾張系と中北勢系の内耳鍋が出土している。三重県内の内耳鍋の出土地については伊藤裕偉氏の集成[③]がある。これによると尾張系の内耳鍋は北伊勢と志摩のみで出土している。伊藤氏は北伊勢での分布は尾張と地域的に接近しているためであろうとされているが、伊坂城跡の場合もこれにあてはまるであろう。中北勢系の内耳鍋については、これまで安濃川流域でしか出土しておらず、北伊勢でははじめての出土例となる。尾張系・中北勢系とも非常に少量ながら存在するということは注意すべきであろう。

鉢の比率　今回の発掘調査で出土した、陶器の鉢（瀬戸美濃製品の擂鉢と常滑製品の片口鉢）の比率がグラフ５である。伊坂城跡出土遺物では、瀬戸美濃製品と常滑製品の割合がほぼ半々になった。伊勢国内では瀬戸美濃製品・常滑製品のほかに、信楽製品も少量ながら含まれることが多い。しかし伊坂城跡出土の鉢には、口縁部以外の破片でも信楽製品と思われるものは1点もない。

（２）遺物出土地の分布

つぎに出土遺物のうち、いくつかの器種を選んで小地区ごとに出土位置を示したのが第104～106図である。なお、この図には出土位置が国土座標にしたがって設定された小地区でおさえられているもののみをカウントしており、範囲確認調査（区画９や17）、ＳＲ12やＳＤ43のデータは反映できていない。

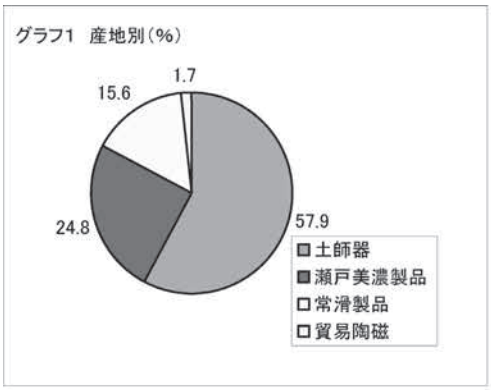
土師器皿　まず、土師器皿の分布を見ることにする。土師器皿の用途は、杯もしくは灯明皿として使用されていたと考えられる。

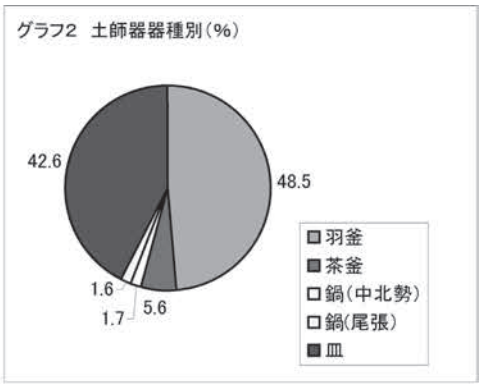
その分布は西区には多く、東区には少ないという傾向を示す。東区の中では、区画２と区画８で一定量が出土しているものの、西区とは比較にならないほど少なく、これは東区に対する西区の優位性と東区内での階層のばらつきを示しているのであろう。

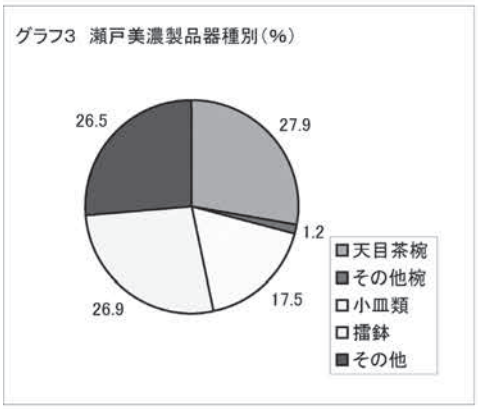
区画内では、主屋の周辺で集中して出土するという傾向が読み取れる。遺物の出土位置は、ほとんどの場合は投棄の場所を示しているため、出土位置が直ちに区画内での場の属性を示すかどうかは慎重にならざるを得ない。しかし、このような特異な出土傾向を示す機種は土師器の皿だけで、土師器の皿が主屋の周辺で使用・保管されていた可能性は高い。

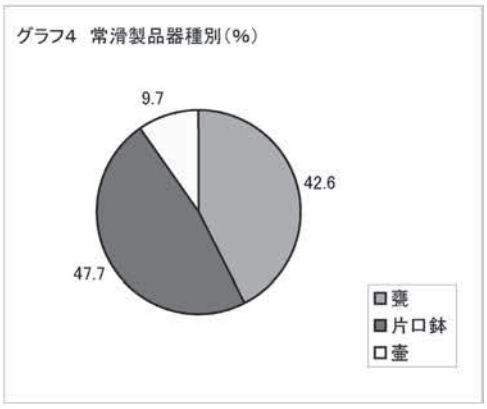
土師器羽釜　次に土師器羽釜の分布を見ることにする。羽釜は皿のように主屋付近に集中するような傾向はみられず、東区と西区の差もみいだせない。すべての区画で羽釜が多数出土するという状況は、区画群が臨時のものではなく、恒常的な生活の場であったことを示すものである。

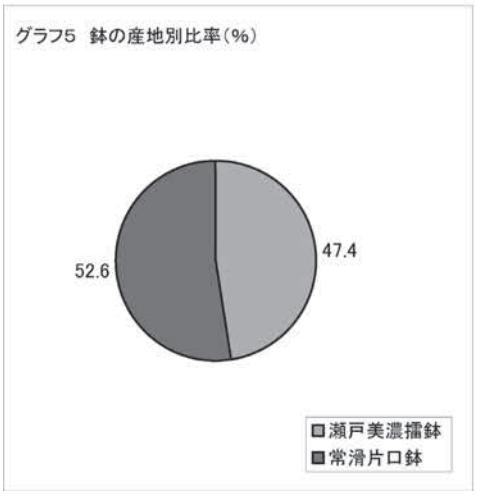
また、隣接する区画との境近くや北東・南西の斜

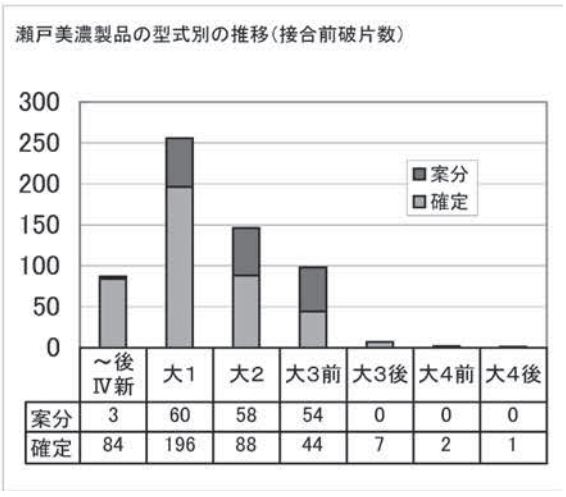








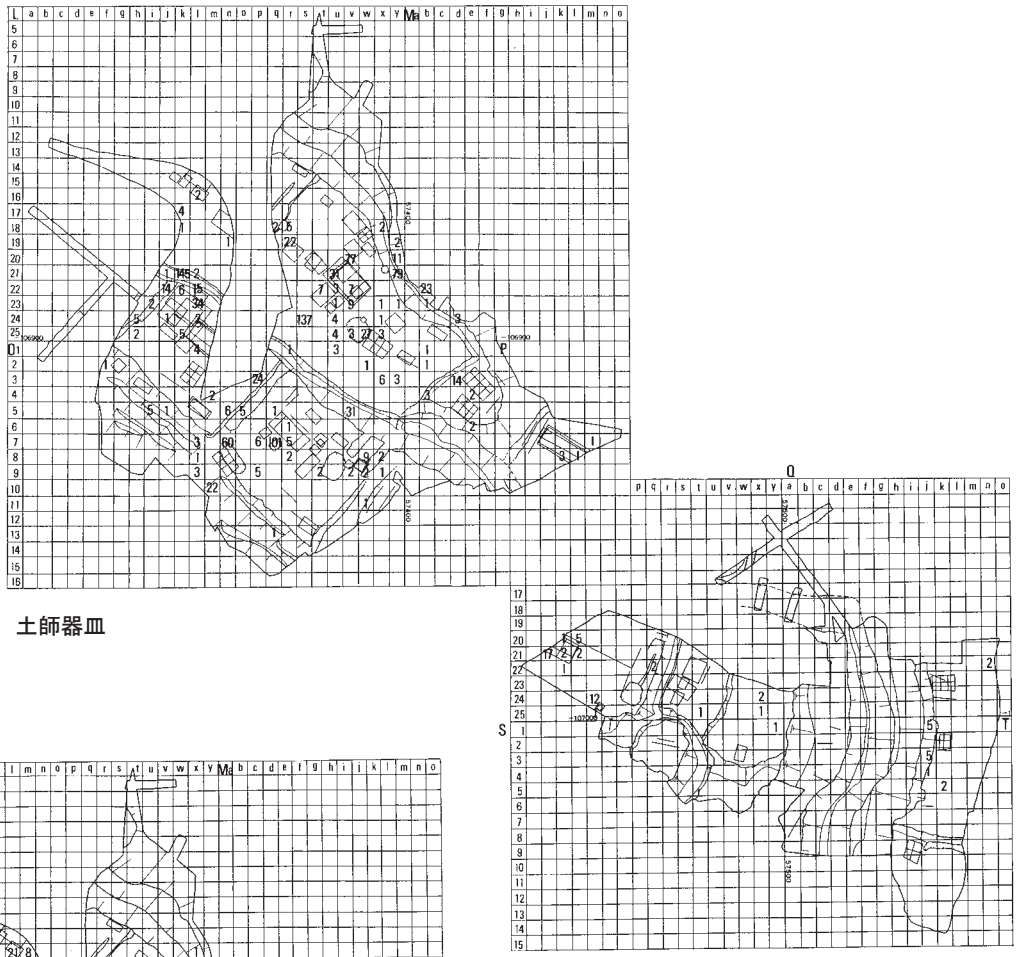


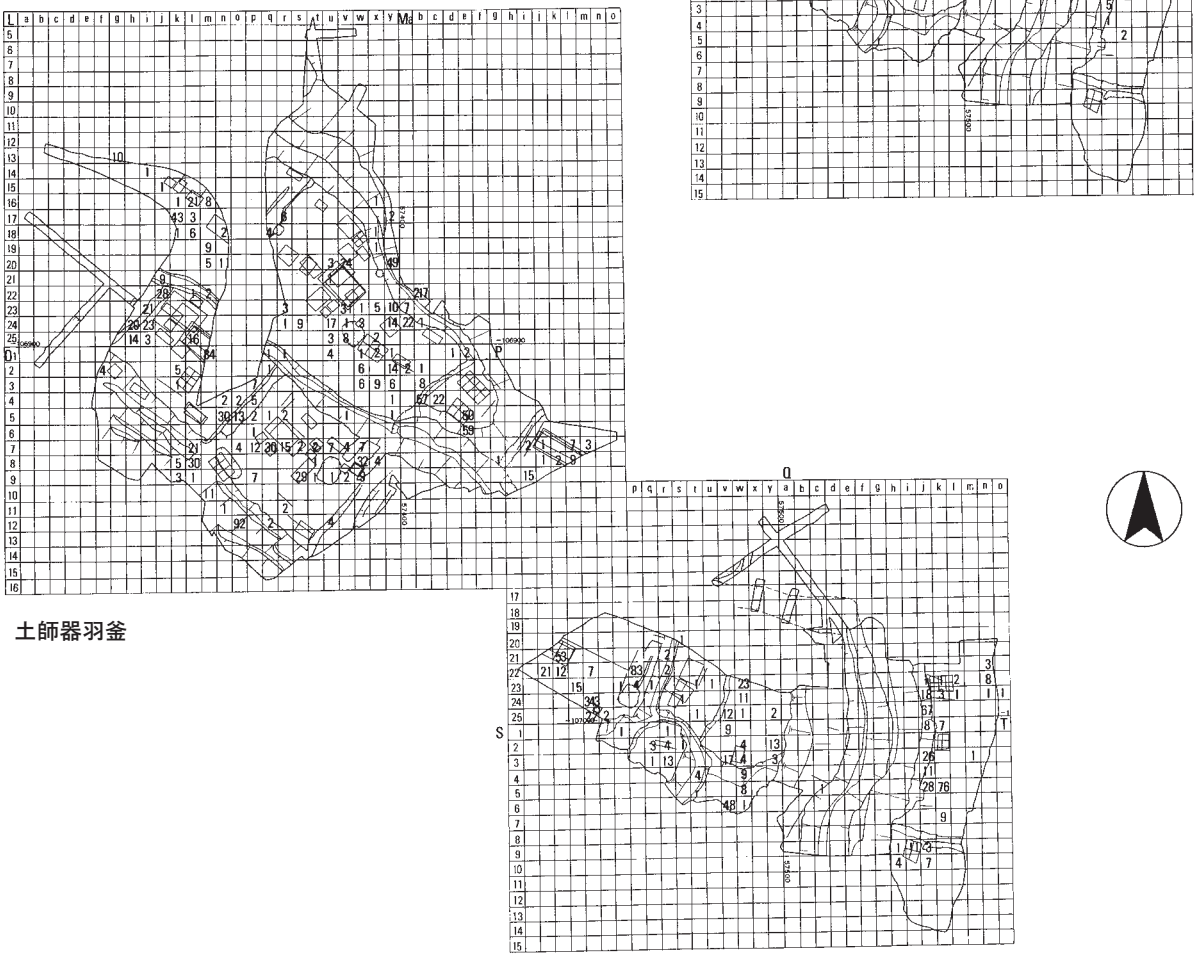


	～後Ⅳ新	大1	大2	大3前	大3後	大4前	大4後
案分	3	60	58	54	0	0	0
確定	84	196	88	44	7	2	1

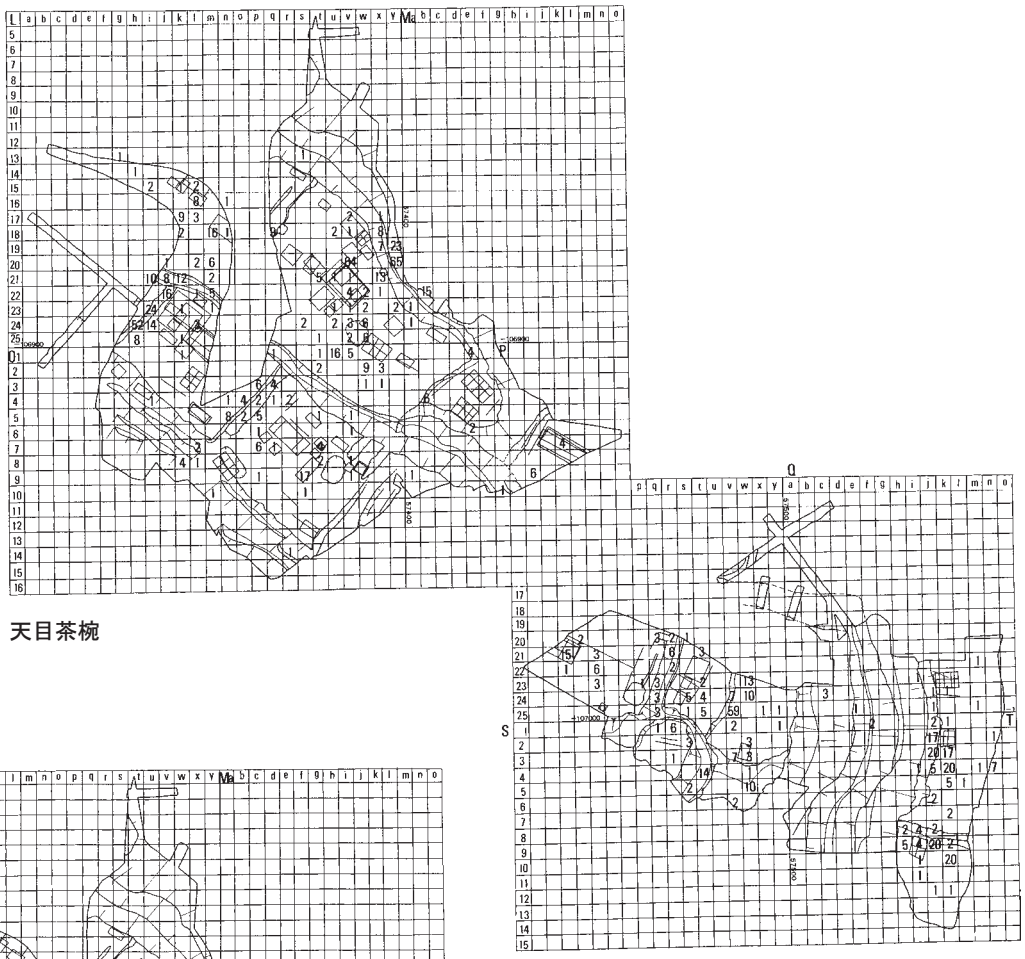
※案分は時期判定が困難なものを等比配分した数値

第103図　出土遺物グラフ

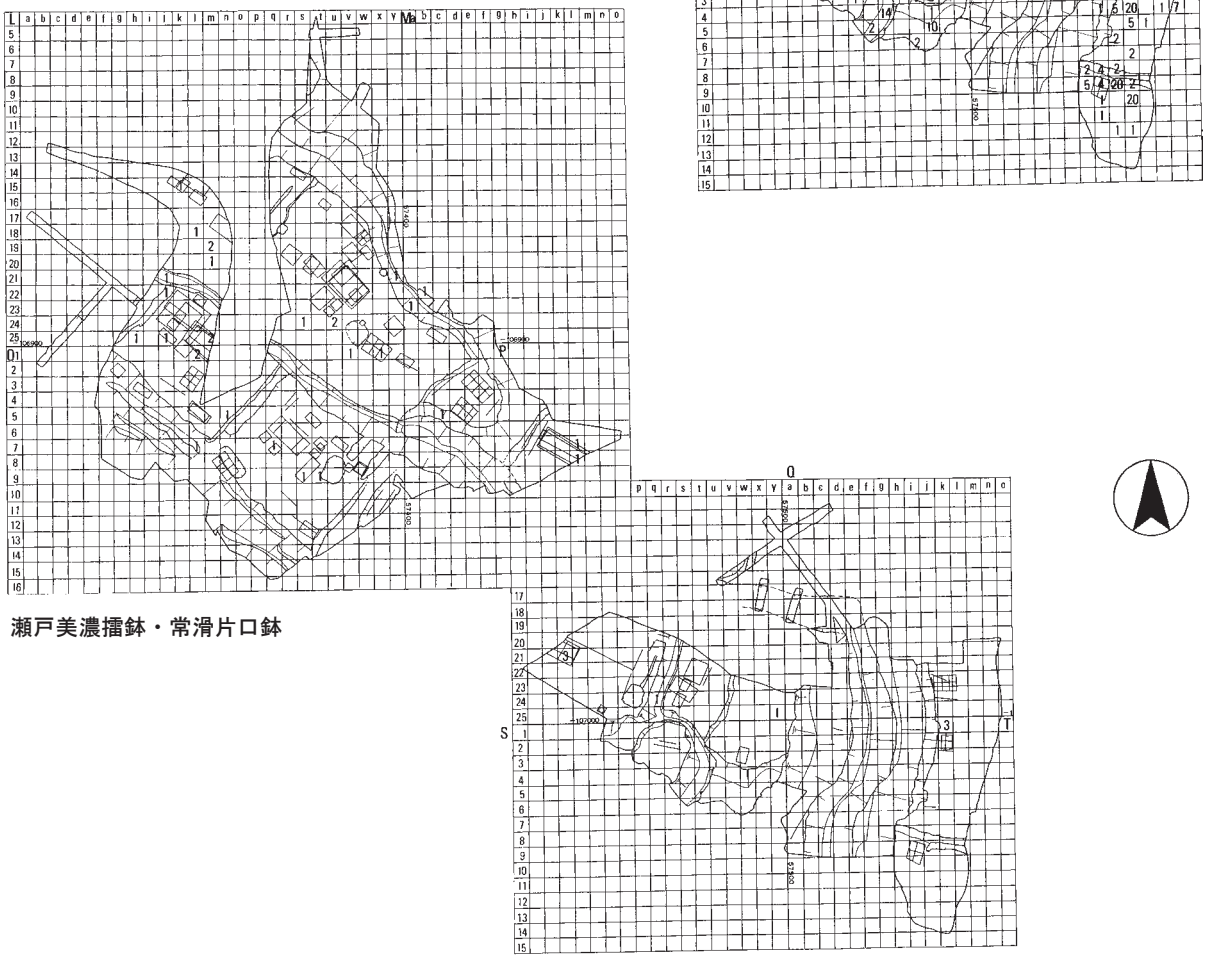




第104図　遺物の出土分布①（1：2,000）



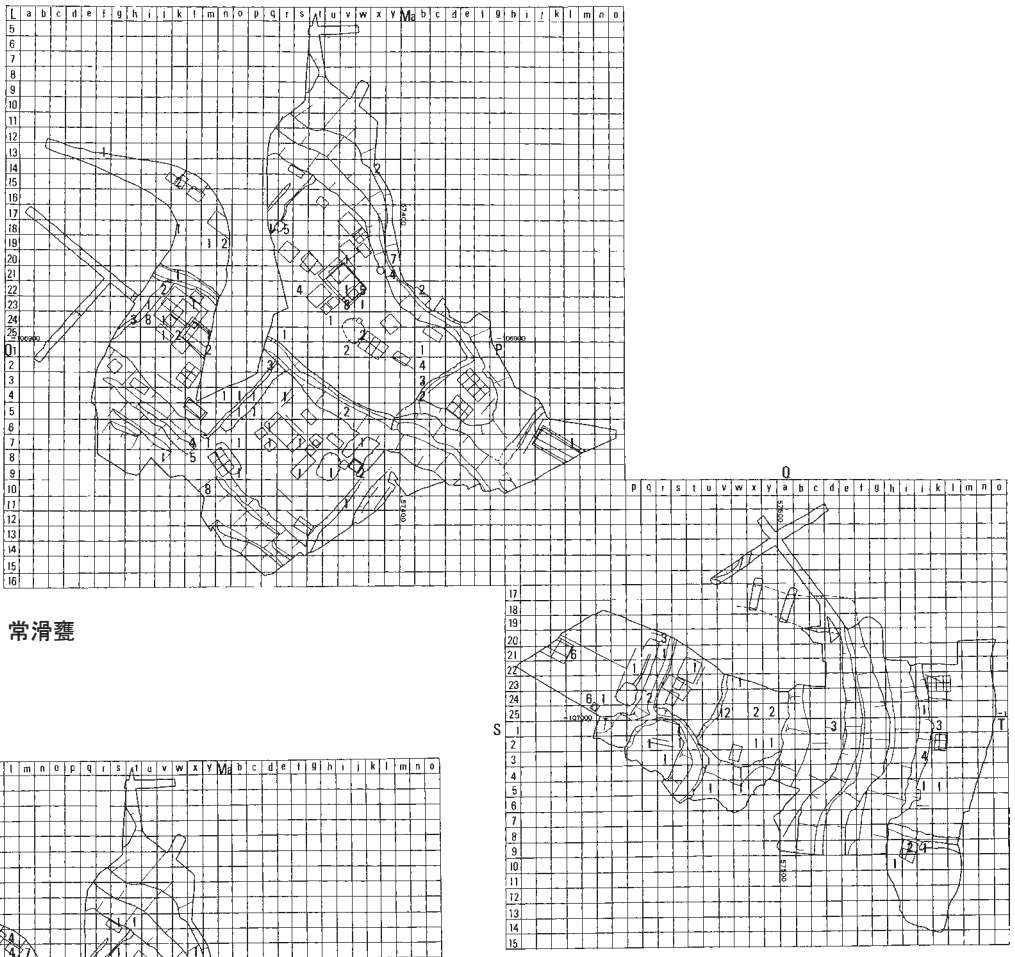
天目茶椀



瀬戸美濃擂鉢・常滑片口鉢

0　100m

第105図　遺物の出土分布②（1：2,000）



第106図　遺物に出土分布③（1：2,000）

面で多く出土する傾向も注目できる。これは投棄によるものであると考えられる。同じような傾向は天目茶椀や鉢類、甕にもみられる。天目茶椀が、土師器の羽釜や鉢類と同じような出土傾向にあるということは、天目茶椀の多くは茶器としてではなく、供膳具として使用されていたことを示すのであろう。

貿易陶磁　最後に、貿易陶磁の出土分布をみてみたい。一概に貿易陶磁といっても、香炉（152）のような高級品から雑器的な皿までさまざまなものがある。これを一様に見ると、西区に圧倒的に多く分布し、東区の分布はまばらで数も少ない。東区では区画８と区画２で一定の量が出土していることは土師器皿の分布傾向とも一致する。

以上、遺物の出土分布からさまざまなことを述べてきたが、それらをまとめると以下のようなことがいえる。第一には、土師器羽釜や天目茶椀・陶器鉢類・常滑製品の甕などが各区画から大量かつ一様に出土していることから、区画は恒常性を持ったものであり、戦時における臨時的なものとは言いがたい。

第二には、土師器皿・貿易陶磁の出土分布から東区に比べ西区が優位にたっていたこと。西区特に区画12・15・16では、土師器皿や貿易陶磁の出土分布が酷似しており、これらの区画が均質性の高いものであったと考えることができる。また、東区では区画２と８が突出しているものの、全体としては西区に較べると劣勢である。これは、前節で述べた遺構のデータともほぼ一致する。

（３）出土遺物の時期的な推移

今回の発掘調査で出土した遺物のうち、瀬戸美濃製品の時期別の出土数を示したのが第103図右下のグラフである。これによると伊坂城跡出土の瀬戸美濃製品は、古瀬戸後期Ⅳ新段階のものが最も古く、大窯第１段階に最も多くなる。その後大窯第２段階から大窯第3段階前半にかけて減少する。大窯第3段階後半には出土遺物は激減し、大窯第4段階のものはほとんどみられない。

ただし古瀬戸後期Ⅳ新段階の遺物の多くは壷類などで、伝世品の可能性もある。

鈴木正貴氏は、尾張の主要城館の時期と出土する大窯製品を比較検討され、出土する大窯製品は、遺跡の廃絶より1段階以前のものが主体をしめること、同時にこれらの現象は普遍的な事象であるとして評価し再検討を行う必要があるとのことを指摘されている④。このことから、出土する大窯製品がその遺構の廃絶時期を決定することは難しく、実年代を決定していくには幅を持たさざるを得ない。

藤澤良祐氏は、大窯第３段階後半は瀬戸美濃製品流通の大きな画期で、その時期に生産地から京都への経路が伊勢道ルートから中山道ルートに変わるとされている⑤。このことから伊坂城跡の区画群での瀬戸美濃製品の激減は、直ちに区画群の廃絶を示すものではなく、むしろ少ないながらも遺物が存在していることを積極的に評価するべきであろう。

それらのことを踏まえた上で、伊坂城跡出土の瀬戸美濃製品を藤澤良祐氏の実年代観⑥にしたがって、区画群の盛衰を考えてみると、区画群は15世紀後半から末にかけて構築され、16世紀前葉に最盛期を迎え、16世紀中葉から後葉にかけて衰退し、16世紀末にはほぼ機能しなくなったと考えることができる。

３　伊坂築城の契機

（１）戦国期の伊坂

ここでは伊坂城跡およびその周辺で行われた発掘調査や城郭調査の成果をもとに、戦国期の伊坂の景観を復元してみたい。

集落　標高20～30mほどの丘陵上に営まれている。現在も伊坂集落となっている部分が、戦国期においても伊坂集落の本村であったと考えられる。「Ⅱ　位置と歴史的環境」の章でもふれたが、この集落の西端で平成12年度に行われた発掘調査で、中世後期の道路遺構や掘立柱建物、区画溝などが検出されており⑦、集落は現在よりも西まで広がっていた可能性が高い。伊坂城跡のある尾根とくらべて斜面がゆるやかで、周囲の水田との比高差もほとんどない。

伊坂集落の南西には千代田集落がある。集落は標

高20m程の微高地に営まれている。集落内の円光寺には、室町・戦国期のものと思われる宝篋印塔や中世後期から近世初頭の五輪塔があり、戦国期にはこの部分にも集落があったのではと思われる。

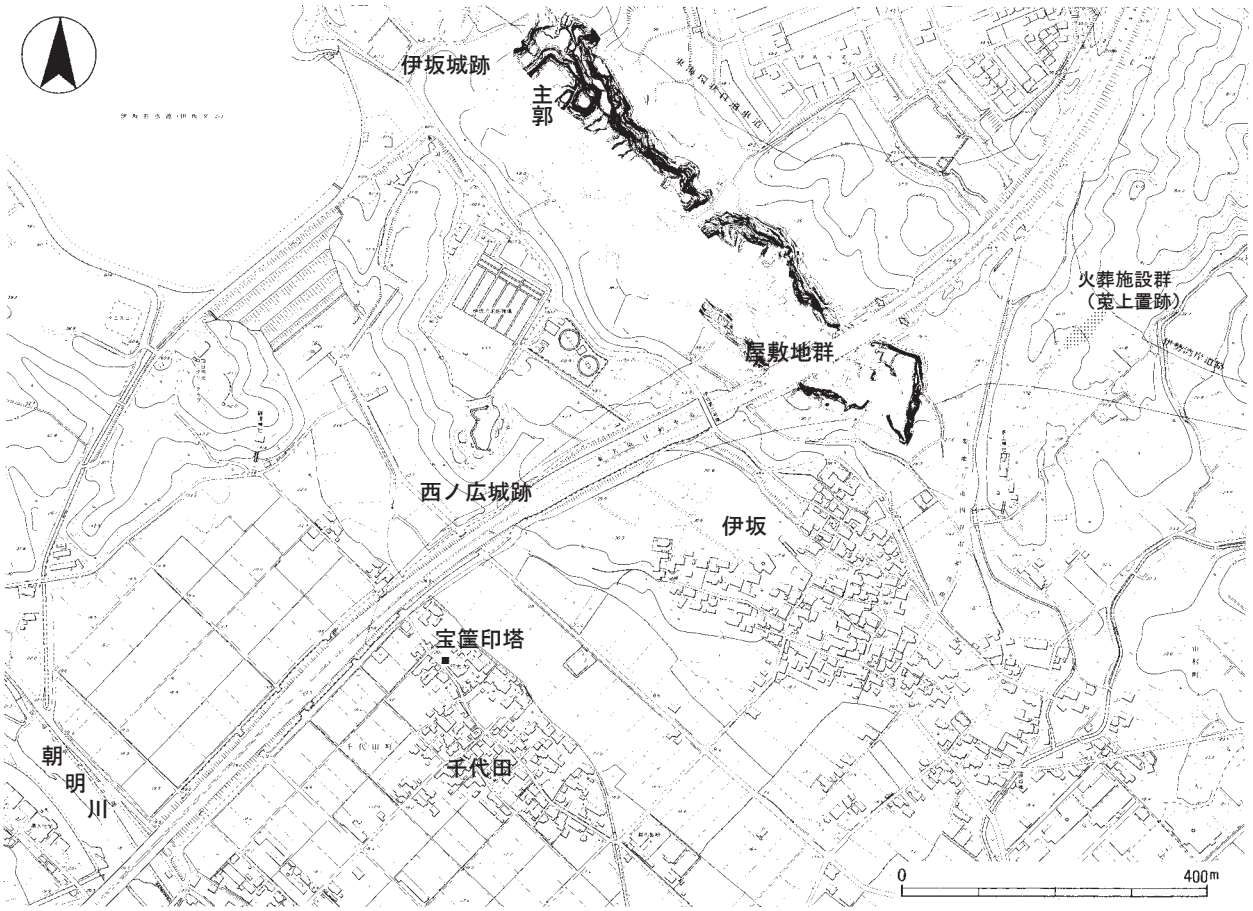
西ノ広城跡　伊坂集落の西端の丘陵頂部にある。伊坂城跡の主郭とくらべると、土塁は低く、曲輪も方形にはなっていない。城の形態としては、伊坂城跡の主郭よりも古い様相を残していると思われる。別名を「千代田城跡」ともいい。千代田集落の西端とも近接している。伊坂集落との関係は前述の通りである。

火葬施設　これについても、「Ⅱ　位置と歴史的環境」の章でもふれたが、伊坂城跡の東にあたる菟上遺跡からは、平成11・12年度の発掘調査で100基を超える火葬施設が検出されている⑧。出土遺物が少なく、正確な時期は不明であるが、室町・戦国期のものなら伊坂城跡や伊坂本村との関連が想定できる。

断片的な資料であるものの、以上で述べてきた遺跡群を地図上に落としたものが第107図である。この図で遺跡群の位置関係を見ると、朝明川に向けて広がった微高地や低丘陵上に千代田・伊坂本村などの集落が存在し、周囲には生産域が広がっていたと思われる。

これに対して伊坂城跡は伊坂本村から、かなり奥まった部分にあり、交通の利便性や生産域との距離からも集落が自然発生しがたい立地条件にある。江戸時代には伊坂城の東端を除くほとんどの部分が山林や畑になっていたことも、この尾根に集落を営むことが困難であることを示している。

このことから伊坂城跡は、15世紀後半から16世紀前半の社会情勢により、伊坂城跡の城主、集落内の一部や近隣集落の者が本村から分離して、人工的に造ったものである可能性が高い。



第107図　戦国期の伊坂（1：10,000）伊坂城跡周辺のみ等高線間隔密

（２）城主の比定と築城の契機

城主の比定　伊坂城の城主について近世の所伝では、春日部氏あるいはその一族の伊坂氏とするものが多い[9]。

文献史学の成果でも、地名の関係から伊坂城＝伊坂氏と直結して考えるのが主流で、『四日市市史』でも、伊坂氏は隣接する萱生氏と同族で、本姓を春日部氏としたという所伝をとりあげている[10]。これに対し高田徹氏は、集落から離れた選地や城郭の構造から、西ノ広城跡が伊坂氏時代の城で、伊坂城跡は築城の主体が異なるであろうと考えられている[11]。

伊坂氏は、近世の軍記や地誌を除けば、享徳２年（1453）の「北方一揆連署状」に「伊坂太郎左衛門之実」と「伊坂左衛門二郎満実」の名がみえる[12]。同史料には「萱生紀四郎実次」の名もみえる。北方一揆には員弁郡の国人が主体で、朝明郡で北方一揆の構成員となっているのは伊坂氏と萱生氏のみである。このような関係から伊坂氏と萱生氏が同族であるという近世の所伝も、まったく根拠のないものではないと思われる。

その後、文明9年（1477）には飯尾弾正が知行する「勢州いさか跡」の年貢徴収について、梅戸氏の助力を得るために幕府の奉書を求めた史料がある[13]。飯田良一氏は、この時期伊坂氏の所領は何らかの事情で没収されており、その欠所をあたえられた飯尾弾正と、現地での伊坂氏の抗争を想定されている[14]。

次に伊坂氏が史料にみえるのは、『織田信雄分限帳』である。ここでは「伊坂五左衛門」・「伊坂才助」・「伊坂長左衛門」・「伊坂太郎一」など伊坂一族の名を見ることができる[15]。同史料には、十ヶ所人数や北方一揆のリーダー的存在であった朝倉氏や梅戸氏の名も見えるが、伊坂はこれらよりも多い所領を持っており、戦国時代を通じて伊坂氏の勢力が伸張していったと考えられる。

数少ない文献史料ではあるが、伊坂氏が室町・戦国期を通じて伊坂の地におり、織豊期まで存続したことは確実で、この時期において伊坂氏以外の勢力が伊坂城を築城したという積極的な史料を見出すことはできない。

今回の伊坂城跡の区画群での発掘調査では、15世紀末から16世紀を通じての遺構・遺物を確認した。すでに述べたように、主郭部分の立地はその東に屋敷地となる区画群を持つことを前提になされていることから、区画群の存続時期は主郭の存続時期とほぼ一致すると思われる。高田氏の指摘された城郭構造の相違は、城が改修された結果生じたものであると考えられる。

以上のことから伊坂城跡の城主は、伊坂氏である可能性が高いと考えられる。

区画群の居住者層　それでは、今回発掘調査がなされた区画群の屋敷地の主はどのような階層の人たちであろうか。

発掘調査で検出された遺構からは、東区の端を除き、規模・主屋の構造・出土遺物の質において、区各間の明らかな格差は見出せない。特に西区については、均質な階層の居住地と考えられる。

前節では、伊坂城跡と区画群が、伊坂本村の北のはずれの尾根上に人工的に造られた集落である可能性を示した。池上裕子氏は、戦国期の村落では村落内の上層の多くの者が侍身分への積極的転身をはかり、大名や国人の被官となる動きがあったとされ、これは全国規模での現象と指摘されている[16]。このようにして形成された地下の侍＝地侍は、相伝・買徳あるいは給恩の所職と、買得の加地子などの得分権を経済基盤とし、基本的に村の構成員でもあったとされる。

伊坂城跡のある北伊勢では、戦国期を通じて大名が存在せず、十ヶ所人数や北方一揆の構成員でもある多くの中小国人が存在していた。村々で形成された地侍層は、これら国人の被官となっていった可能性が高い。旧来の村である伊坂を離れ、山の奥まったところに城郭と屋敷地を築いたのは、国人領主（伊坂氏）の側からの、一族や被官となった地侍たちの屋敷地を囲い込んだ城郭を造りその影響力をおよぼしたい、被官層からの、本村からそれほど離れていない城郭の周辺に集まることによって自らの地位と権益の保全と安全保障をはかりたいという要請に答えるものであったのではないかと思われる。それには、応仁・文明の乱後の争乱や、文明年間の伊坂氏の所領没収と現地での抵抗も要因となったのではなかろうか。

北伊勢の朝明郡や員弁郡では、伊坂城跡や保々西

城跡、大井田城跡のような大規模なものばかりでなく、小規模な城にも主郭にあたる城郭部分の周囲に屋敷地と思われる区画を持つものが多く見られる[17]。この状況からは、北伊勢では城館を持つ「城主」クラスの中小国人や土豪のもとに、その被官となった地侍たちが集住しているという状況が一般的であったと考えられる。

榎原雅治氏は、天文７年（1538）の「丹後国御檀家帳」の分析により、同国には苗字を有する者ばかりの里と、苗字を有するごく少数の者と苗字を持たない多数のものからなる里の、２つのパターンの里があり、前者は有力な国衆の居城の周囲に被官となった中小の地侍たちが集住している状況であることを指摘されている[18]。これを北伊勢にあてはめると、今回発掘調査を行った伊坂城跡の周囲の屋敷地群が前者、伊坂本村が後者のような階層構成となる可能性が高い。

これらは有力な戦国大名が存在せず、中小国人が多数存在する地域での国人とその被官である地侍層のひとつのありかたを示すものと考えられる。

４　伊坂城の廃絶

ここでは、今回の発掘調査で得られた知見をもとに伊坂城が廃絶した時期とその契機について考えてみたい。

他の中世遺跡との比較　平成13年12月に瀬戸市埋蔵文化財センターが主催した、「瀬戸大窯とその時代」シンポジウムでは、各地の中世遺跡で出土した大窯製品の時期別のデータが記されている[19]。ここでは、大窯製品の時期別の割合が％でグラフ化されている（第108図）。これと比較すると伊坂城跡出土の大窯製品の消滅時期は、永禄10年（1567）以前のものとされる小牧城下町新町遺跡（尾張）や岐阜城千畳敷遺跡Ⅱ４層＋３層（美濃）、永禄末から天正はじめに廃絶すると考えられる観音寺城跡（近江）、小谷城跡（近江）あるいは一乗谷朝倉氏館（越前）などよりも新しい傾向を示す。あえて近いものを探せば、大窯第３段階後半に出土量が激減するという終末の状況は天正13年（1585）に廃絶する安土城跡のデータに近い。

信長期の伊坂氏　史料としての取り扱いに注意を要するものの、『信長公記』には、天正元年（1574）の信長の桑名・長島攻めに際して「いさか」らが、「人質進上候て御礼申上候」とあり[20]、伊坂氏は天正元年までは完全に信長に服属していたのではないことを窺い知ることができる。また城郭研究からは、伊坂城跡の主郭周辺が、天正10年代のはじめに改修されたのではないかという指摘がある[21]。

伊坂城跡の発掘調査では、焼土層など戦乱を裏付けるような遺構は検出されていない。また、大窯第４段階の製品もごくわずかではあるが出土しており、区画群が戦乱などにより、一気に廃絶したのではなく漸時的な廃絶であったということができる。

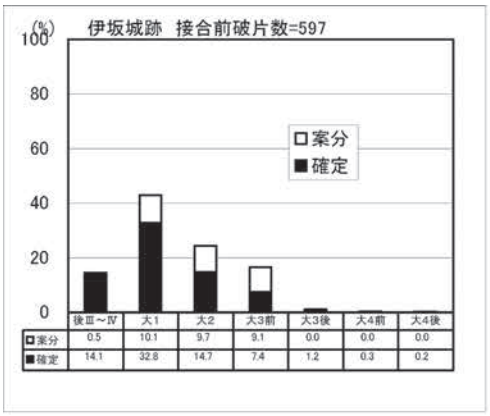
このことから、伊坂城跡の区画群は、永禄末の織田信長の北伊勢侵攻で廃絶したのではなく、天正10年代まで、何らかの形で機能していたとみてよさそうである。『信長公記』には、永禄12年（1569）の南伊勢侵攻後に「国中城々破却」とある[22]が、伊坂城に関してはこのような状況はない。

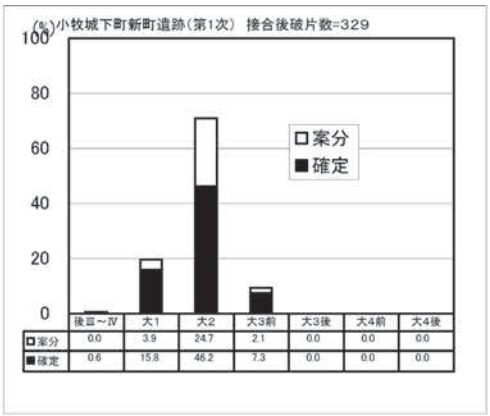
稲本紀昭氏によると、信長は永禄段階では国人たちの本領地を安堵し、天正元年の桑名・長島攻めに際した人質の供出後に国人の在地性の否定が進むとされている[23]が、実際には信長期を通して旧来の在地の体制はある程度温存されていた可能性が高い。

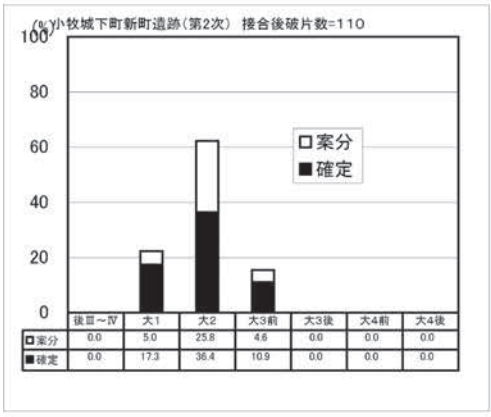
それでは16世紀を通して営まれた、伊坂城跡の区画群が廃絶する理由は何であり、どのような形で区画群は使用されなくなったのであろうか。

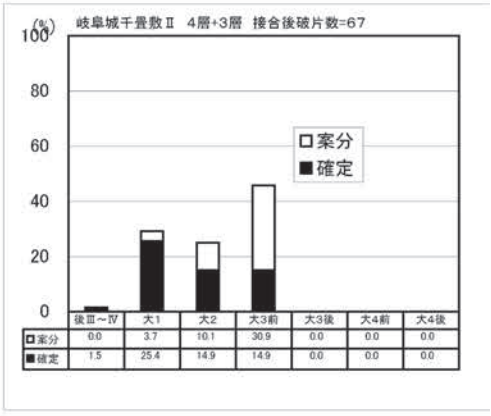
信雄期の伊坂氏　天正10年（1582）の本能寺の変、11年（1583）の織田信孝・柴田勝家と織田信雄・羽柴秀吉の戦い（いわゆる賤ヶ岳の戦い）の後、尾張・伊勢・伊賀の大名となったのは織田信雄であった、加藤益幹氏の研究によると信雄は天正11年８月には領国内に統一的知行制の確立をめざした統一的な検地を行ったとされている[24]。

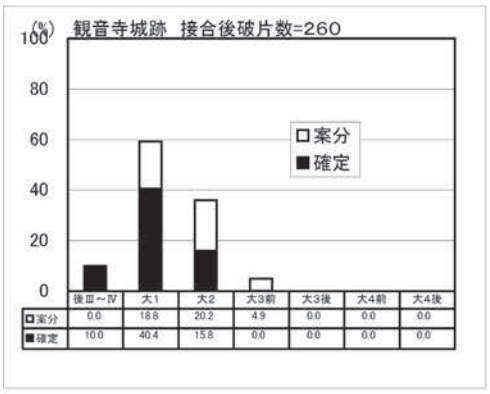
天正12年（1584）の織田信雄・徳川家康連合軍と羽柴秀吉の戦い（いわゆる小牧・長久手の戦い）では尾張・美濃・伊勢が主戦場となった。北伊勢の領主たちの多くは信雄に従ったらしく、天正12年５月

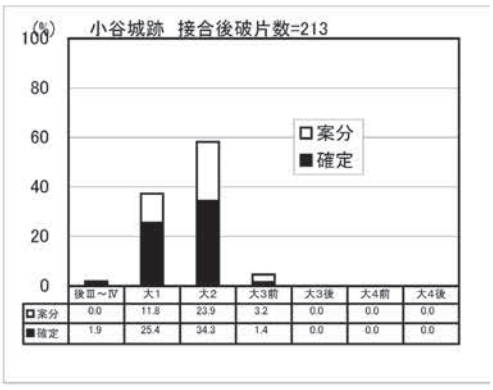


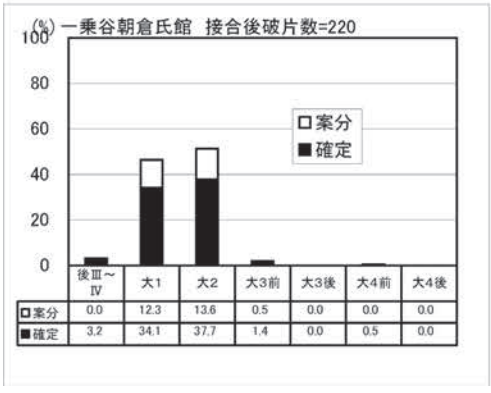


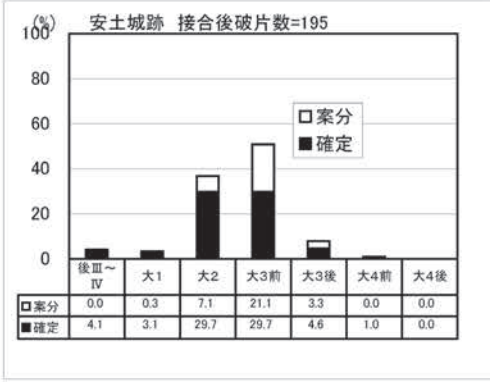












※案分は時期判定が困難なものを等比配分した数値

第108図　各地の中世遺跡出土遺物グラフ（註⑤文献のグラフに伊坂城跡のデータを加筆）

の尾張加賀野井城を巡る合戦では、采女後藤、峯、あげき、楠、千草らが信雄方として討死している[25]。また、北伊勢を巡る戦いでは伊坂城周辺の多くの城が使用されたのは確実である[26]。

戦後、信雄の領地の内、南伊勢と伊賀は減らされ、家臣の知行地は再編成を迫られる。この戦後処理後の信雄家臣団の知行割りを示す史料に『織田信雄分限帳』がある。加藤益幹氏は、この際に信雄の家臣には大幅な知行替が行われたと指摘されている[27]。

『織田信雄分限帳』によると、伊坂の地はこれ以前に「養和」・「高橋彦右衛門」・「後大工　喜左衛門」らの所領となり、伊坂氏は一族の「伊坂長左衛門」が「とヅの郷」、「伊坂五左衛門」が「東金井郷」、「伊坂才助」が「東金井郷」と「あいは」、「伊坂太郎一」が「志知郷内」に所領を与えられている[28]。

加藤氏によると信雄は、さらに天正14年(1586)にも全領国での再検地と知行総入替を行い、各家臣は在地性を止揚されて大名権力に結集せざるを得ない構造が作り出されたとされている[29]。同年に信雄の移った清須では、大規模な城下町建設が行われたことは発掘調査などの成果で明らかにされている[30]。下村信博氏は、やや規模の大きい「支城主層」が北伊勢や犬山などの国境沿いに配置され、中小家臣は清須の近辺に集中したと指摘されている[31]。伊坂に関する文献史料はないが、下村氏の指摘の通りなら、伊坂氏も清須の城下に移された可能性もある。

これらにより、伊坂城跡の主郭部分にいたと思われる領主は、信雄期に至って在地性を否定され、主を失った伊坂城の持つ求心力は急激に低下したと考えられる。

検地の影響　それでは、発掘調査でみつかった区画群の居住者たちはどうなったのであろうか。

前節の築城の契機では、伊坂城跡の区画群の居住者層は国人伊坂氏の一族や被官となった地侍層であると考えた。彼らの経済基盤は相伝・買徳あるいは給恩の諸職と買徳の加地子などの得分権であったと思われる。それこそが本村の近在に城と屋敷地を構える大きな理由であったこともすでに述べた通りである。しかし天正11年・14年の織田信雄による検地により、これらの多くは否定され、彼らの経済的基盤は大きく揺らぐことになる。

同じ時期に行われた兵農分離は、地侍の存在を経済的にも法的にも否定したもので、彼らに兵か農かの選択を強制するものであったと位置づけられている[32]。伊坂城跡の区画群にいた地侍たちも、城主であったろう伊坂らとともに大名城下での生活を選ぶか、旧来の村々での生活を選ぶかという岐路に立たされたであろう。大窯４段階以後の遺物や近世の遺構・遺物がごくわずかにみられることは、居住者の多くが町や村に去った区画群にも少数の人が住んでいたことを示している。しかし、戦国時代の名残をとどめているのはせいぜい大窯第４段階までであり、その後の唯一の近世の建物（ＳＢ251）は尾根の東端に建てられ、建物方位もこれまでの区画の方位を無視したものである。江戸時代になると区画群の多くは山林や畑となり、伊坂城跡と区画群は、近世伊坂の村の周縁部へと変貌していったと考えられる。

（竹田憲治）

［註］

①木野本和之ほか「伊坂城跡」（『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県埋蔵文化財センター、2001年）

②伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1993年）

③伊藤裕偉「中世伊勢・志摩・東紀伊における内耳鍋資料」（『中世土器研究』第70号、中世土器研究会、1993年）

④鈴木正貴「東海地方の土器・陶磁器流通」（『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品　資料集』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター、2001年）

⑤藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通―研究の現状と課題―」（『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品　資料集』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター、2001年）

⑥前掲注⑤と同じ

⑦片岡博「西ヶ広遺跡」（『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）、田中久生「西ヶ広遺跡」（『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』（三重県埋蔵文化財センター、2001年）

⑧田中美穂ほか「菟上遺跡」（『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター、2000年）

⑨『山田城跡発掘調査報告』（東員町教育委員会、1984年）所収の『桑名御領分古城跡之図』（1864年）には、「伊坂村城主　伊坂太郎左ヱ門」とあり、藤堂元甫『三国地志』1763年（上野市古文献刊行会『定本　三国地志』による）、安岡親毅『勢陽五鈴遺響』1833年（三重郷土資料刊行会、1975年）や、宮内黙蔵『伊勢名勝誌』1889年（三重郷土資料刊行会、1974年）などに春日部太郎左衛門の居城とし

て伊坂城跡の名がみえる。

⑩飯田良一「室町幕府の成立と北伊勢の国人たち」(『四日市市史』第16巻)

⑪高田徹「織豊期における北伊勢四郡の城館」(『中世城郭研究』第8号、1994年)

⑫「北方一揆連署状」(『四日市市史』第7巻－301)

⑬「結番日記」文明9年3月5日条(『四日市市史』第7巻－435)

⑭前掲注⑩と同じ

⑮「織田信雄分限帳」(『四日市市史』第7巻－750)

⑯池上裕子「戦国の村落」(『岩波講座　日本通史』第10巻、岩波書店、1994年)

⑰伊藤徳也氏のご教示による

⑱榎原雅治「むすびあう地域」(『日本の中世12　村の戦争と平和』中央公論新社、2002年)

⑲前掲注⑤と同じ

⑳『信長公記』巻六　十七

㉑前掲注⑪と同じ

㉒『信長公記』巻ニ　七

㉓稲本紀昭「戦国期の北伊勢」((『四日市市史』第16巻)

㉔加藤益幹「織田信雄の尾張・伊勢支配」(有光友学編『戦国期権力と地域社会』吉川弘文館、1986年)

㉕「羽柴秀吉書状」(『長久手町史』資料編６－205)

㉖『四日市市史』第７巻－744・745・746・747には浜田城・羽津城などが使用された史料がある。

㉗前掲注㉔と同じ

㉘前掲注⑮と同じ

㉙前掲注㉔と同じ

㉚鈴木正貴「清須城下町研究の現状と課題(1997年覚書)(『関西近世考古学研究』Ⅴ、関西近世考古学研究会、1997年)

㉛下村信博「文献からみた清須城下町の変遷」(『清須―織豊期の城と都市―』東海埋蔵文化財研究会、1989年)

㉜前掲注⑯と同じ

写　真　図　版

区画１（東上空から）

区画１（南上空から）

区画２（北上空から）

区画２（直上から）

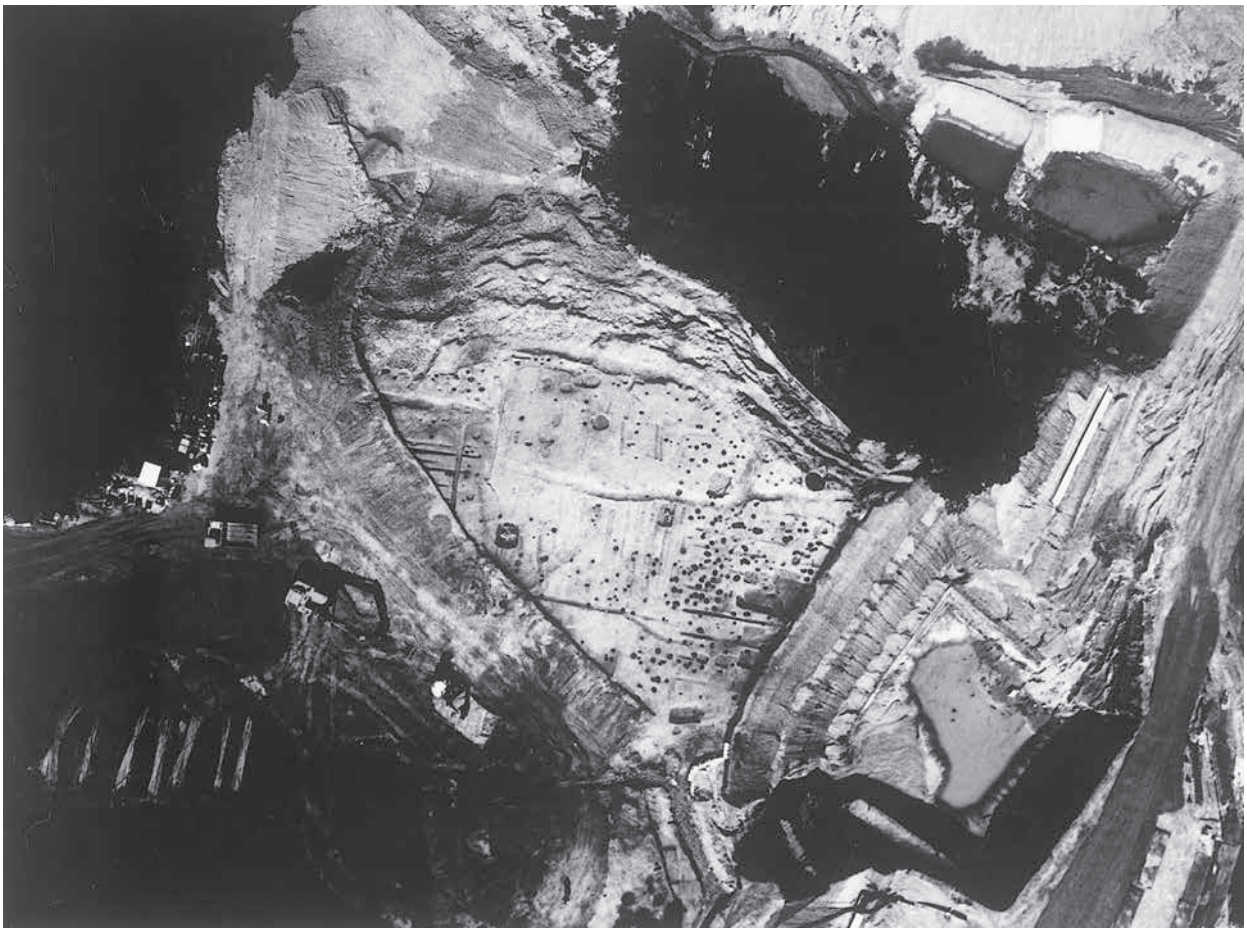
区画２・３（直上から）

区画３～８（直上から）

区画10～12、14～16（直上から）

区画10～12、14～16（北東上空から）

区画10・11（直上から）

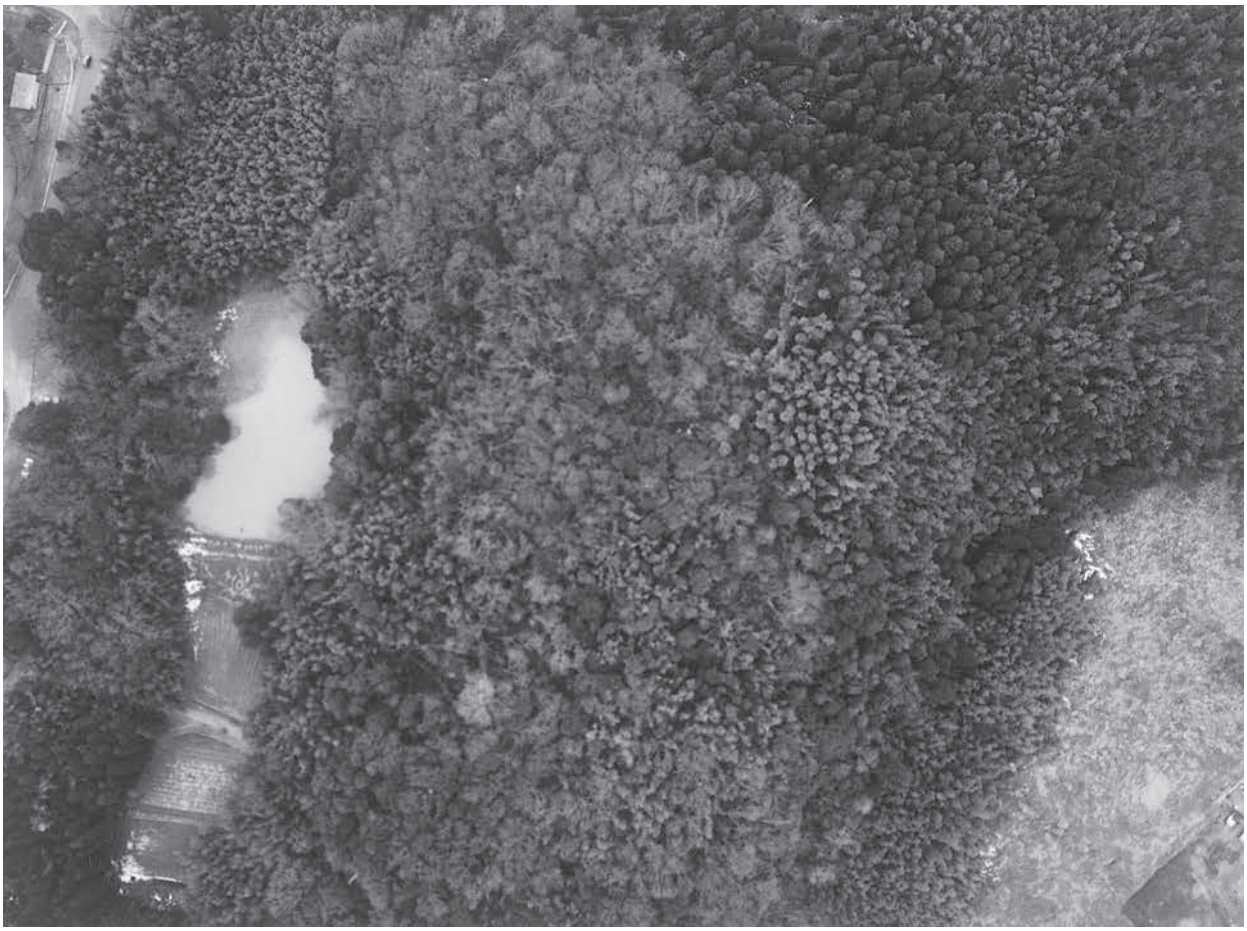


区画12（直上から）

区画12南東部（直上から）

区画13・16（直上から）

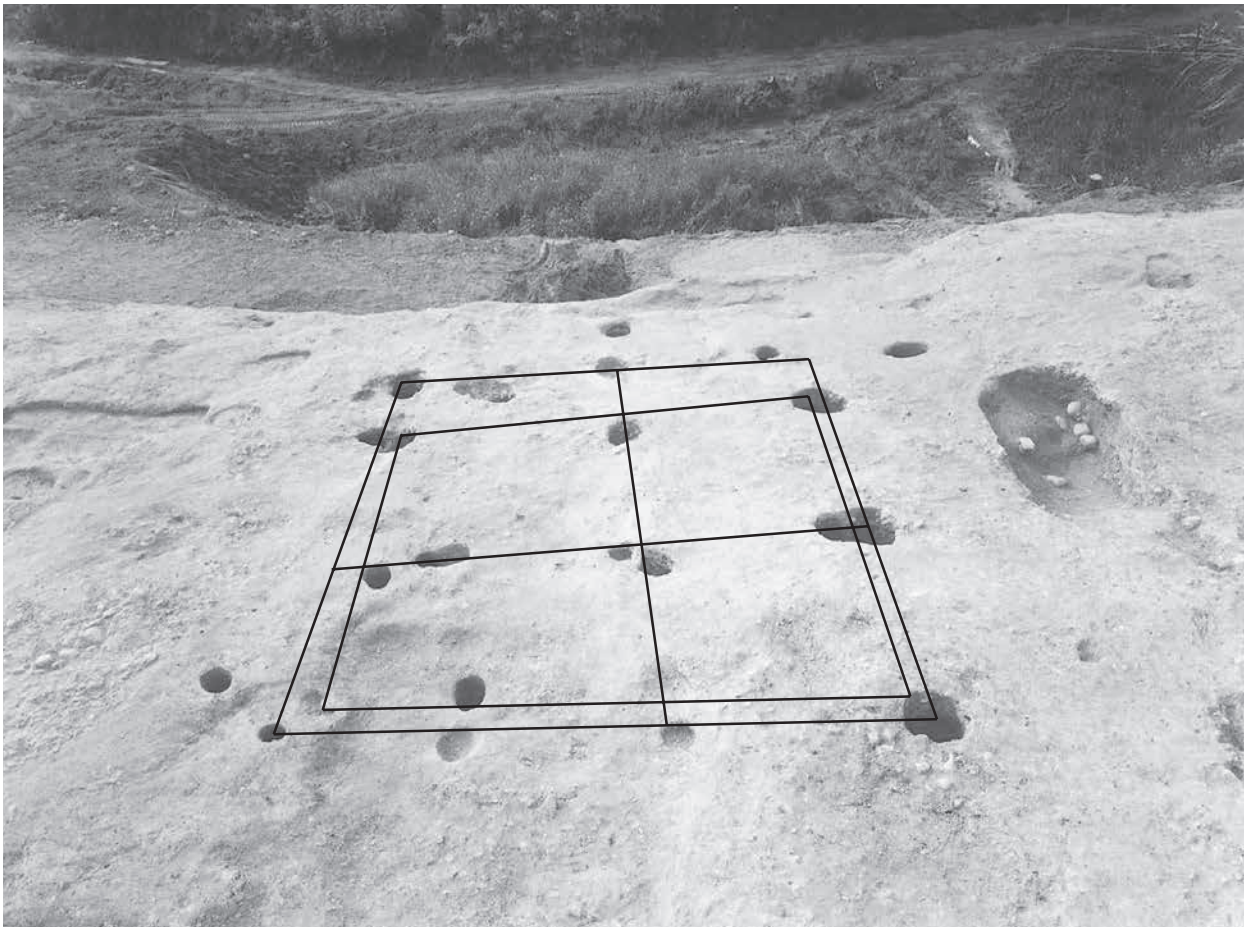
区画14・15（直上から）



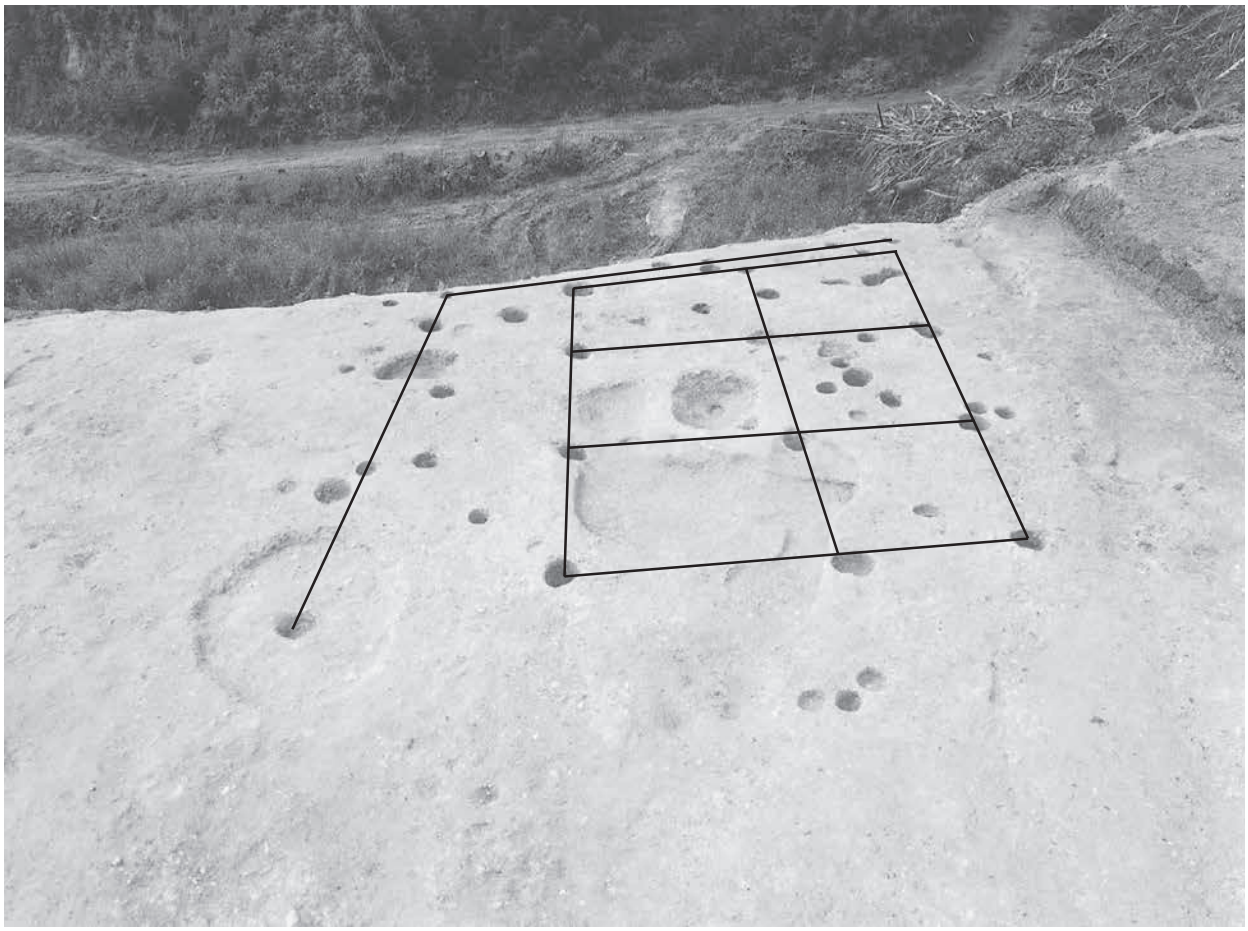
主郭（直上から）

区画１　全景（北から）

区画２　全景（北から）



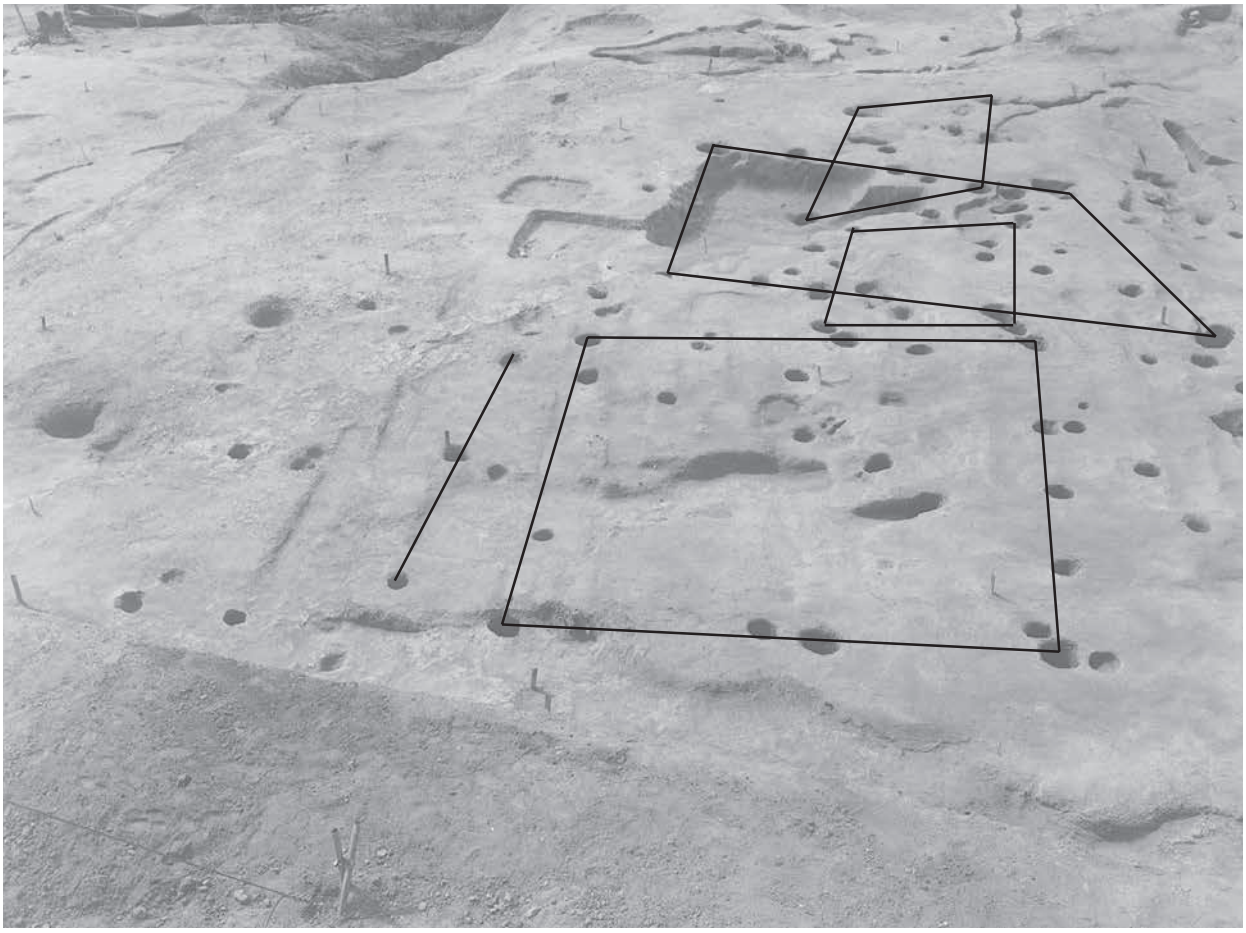
区画２　SB3・4（東から）



区画２　SB5（東から）

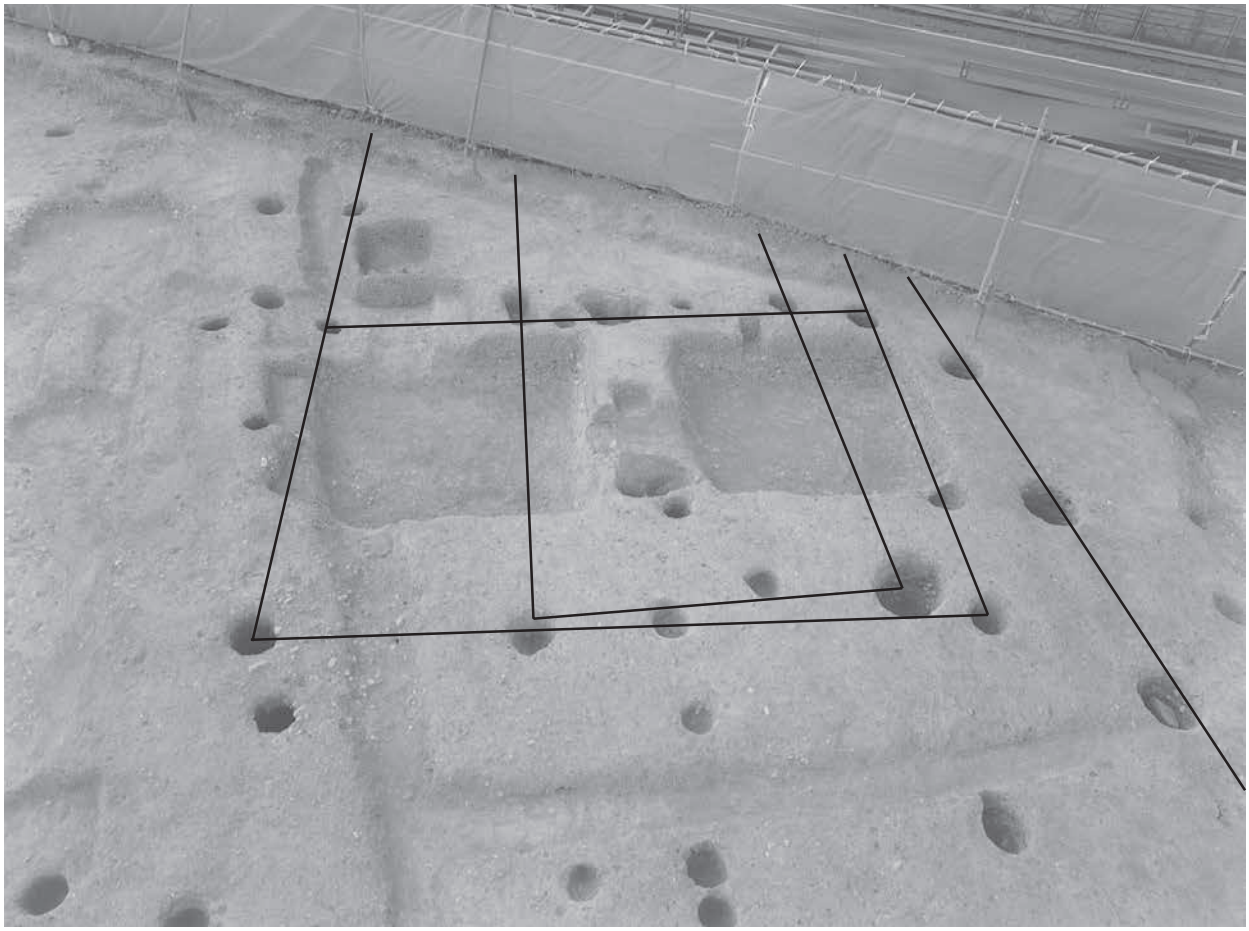
区画３　SD43（北から）

区画３　SD43（南から）

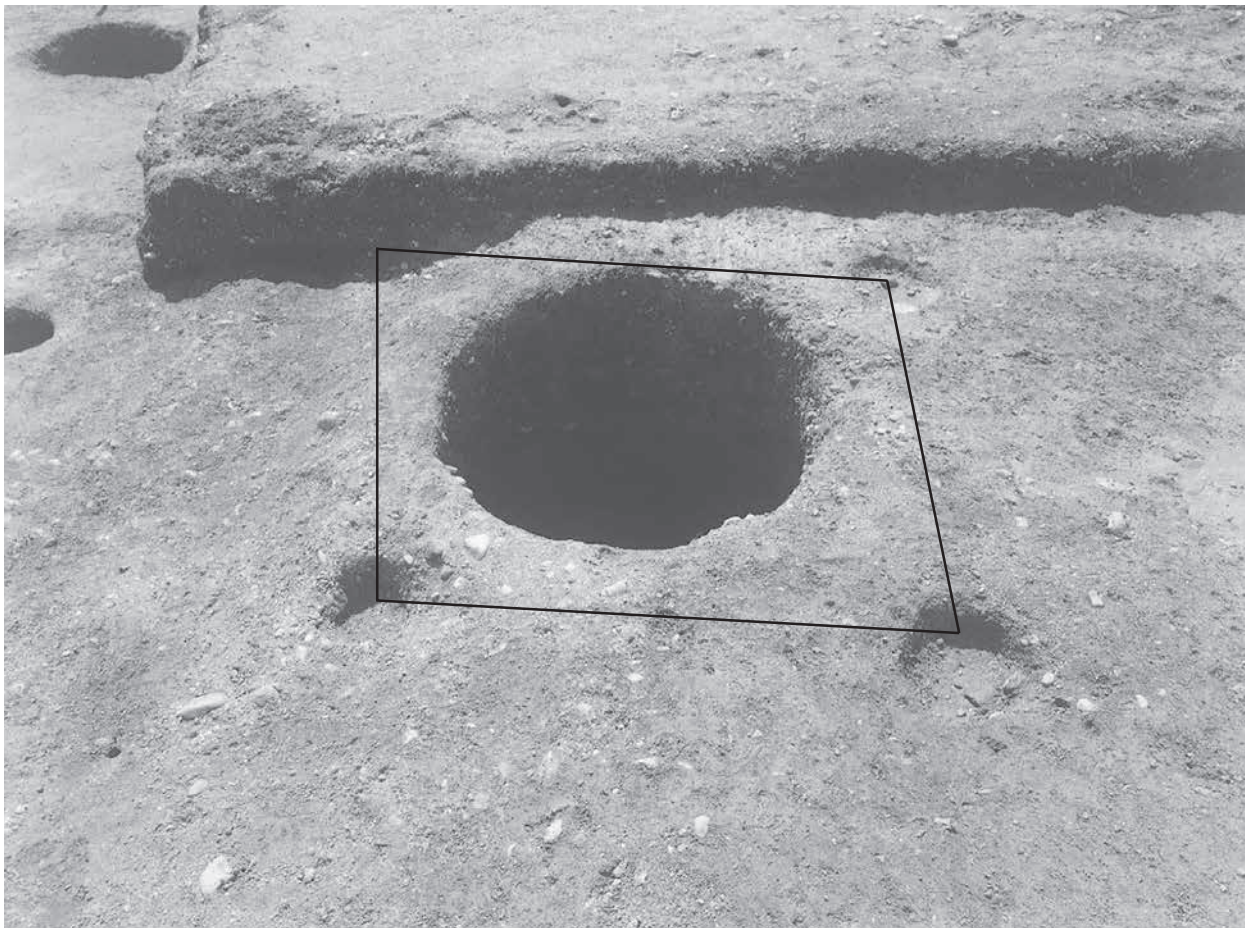


区画６　SB253付近（北東から）

SR301（北から）

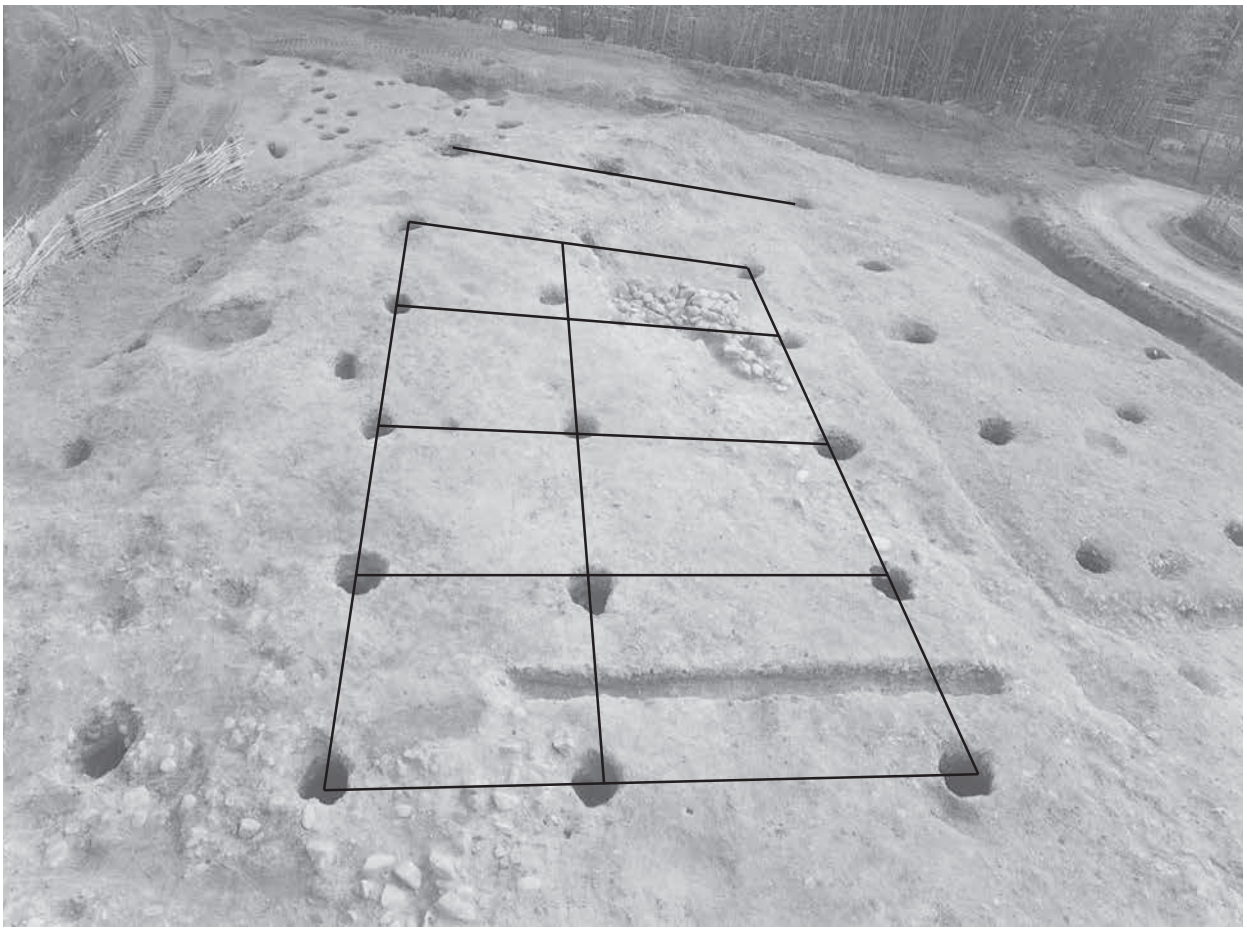


区画８　SB250付近（東から）

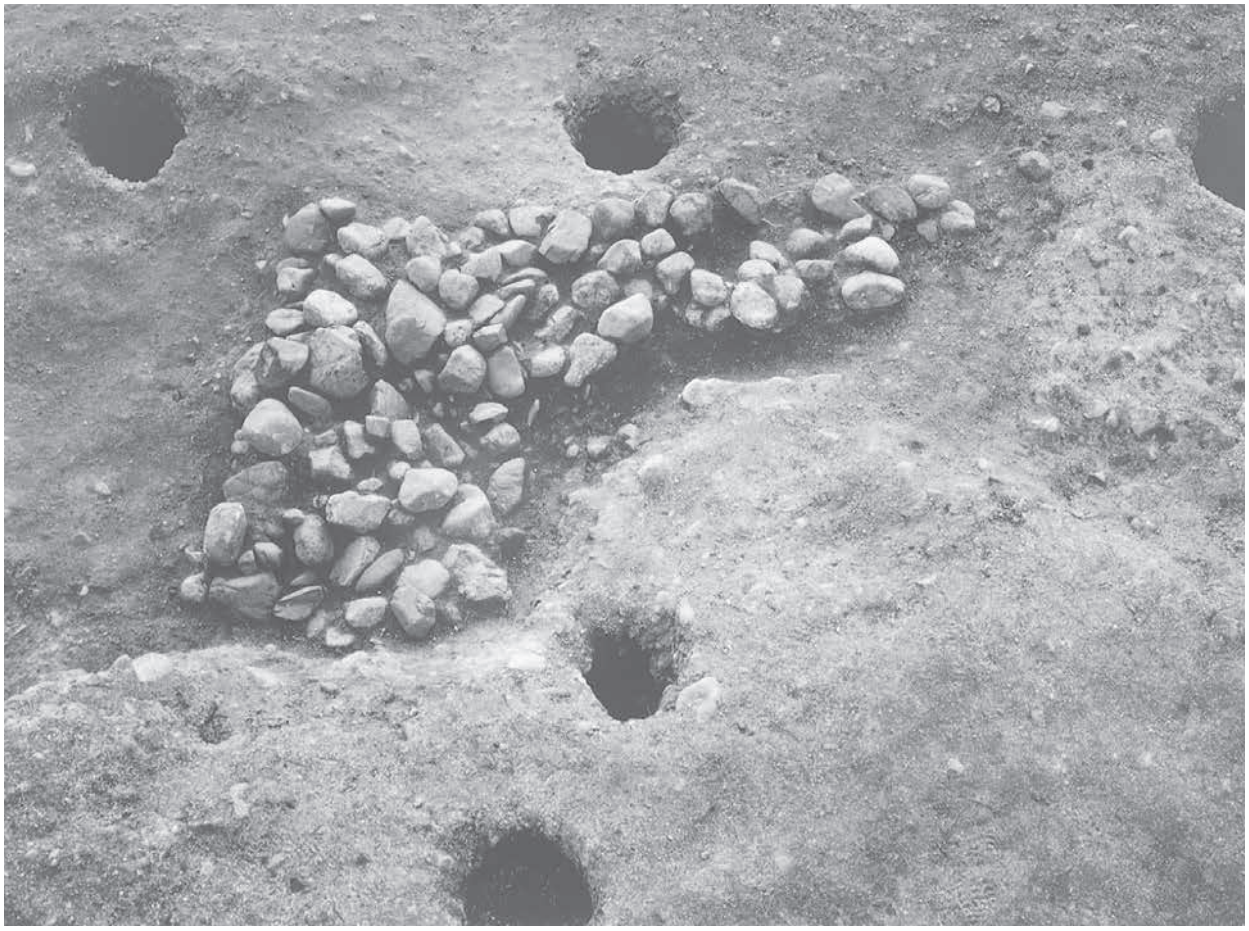


区画８　SE303付近（北から）

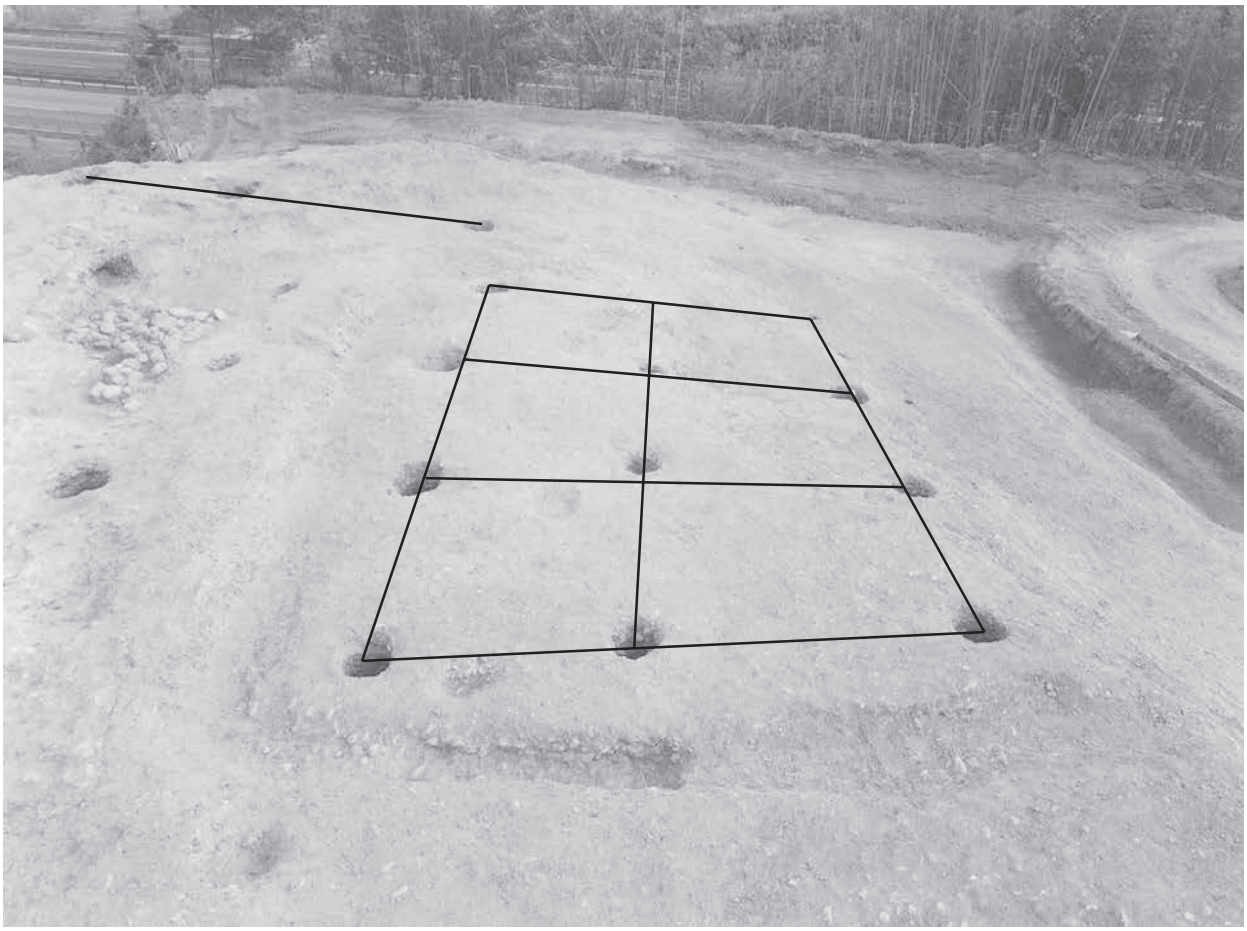
SR12（東から）



区画11　SB102（西から）

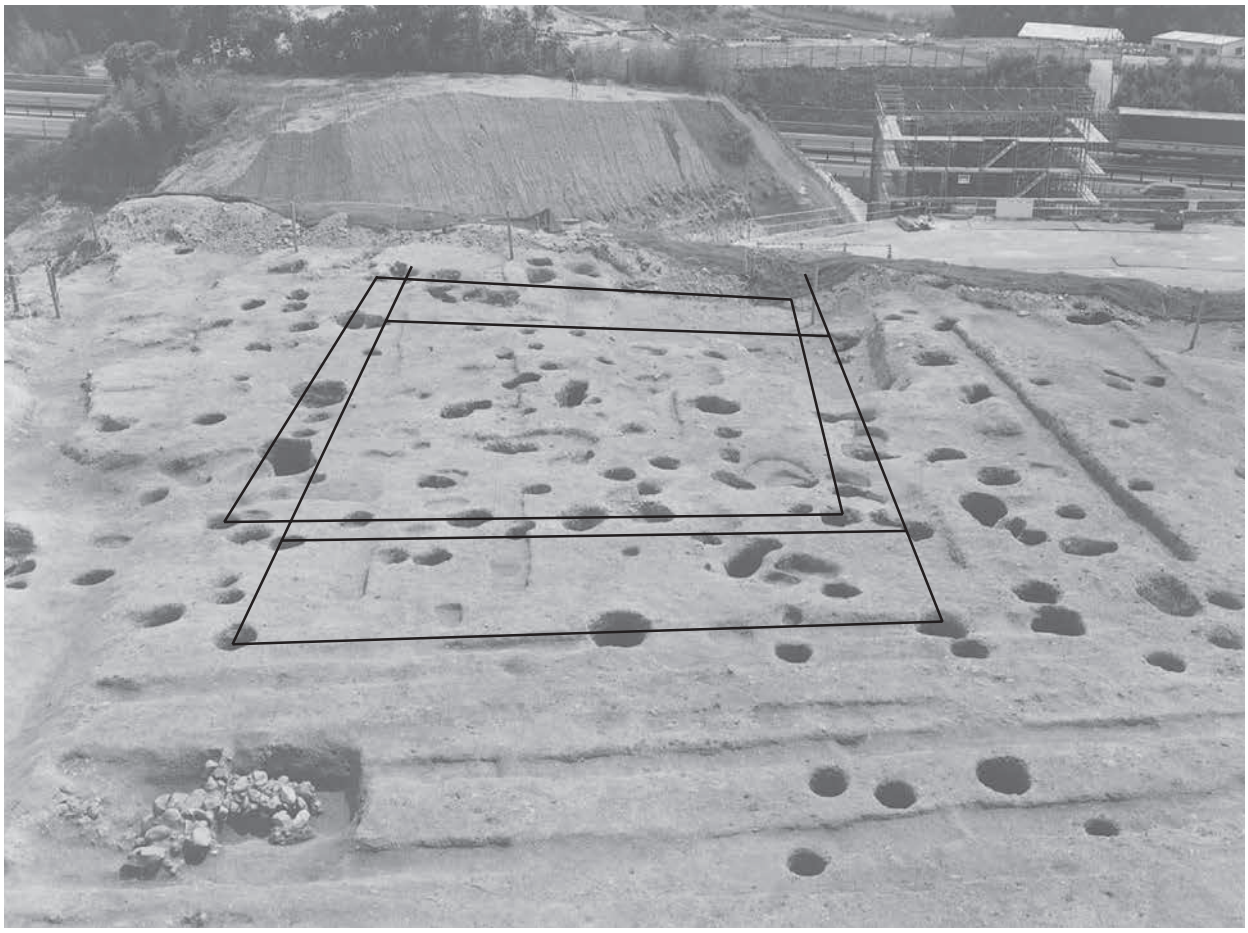


区画11　SK88（北から）



区画11　SB103（西から）

区画12　北西部（北西から）



区画12　SB150・151付近（北西から）

区画12　SK128（西から）

区画12　SE157（北西から）

区画12　SK135礫出土状況（北西から）

区画12　SK135完掘状況（北西から）

区画12　SK136礫出土状況（南西から）

区画12　SK137礫出土状況（北西から）

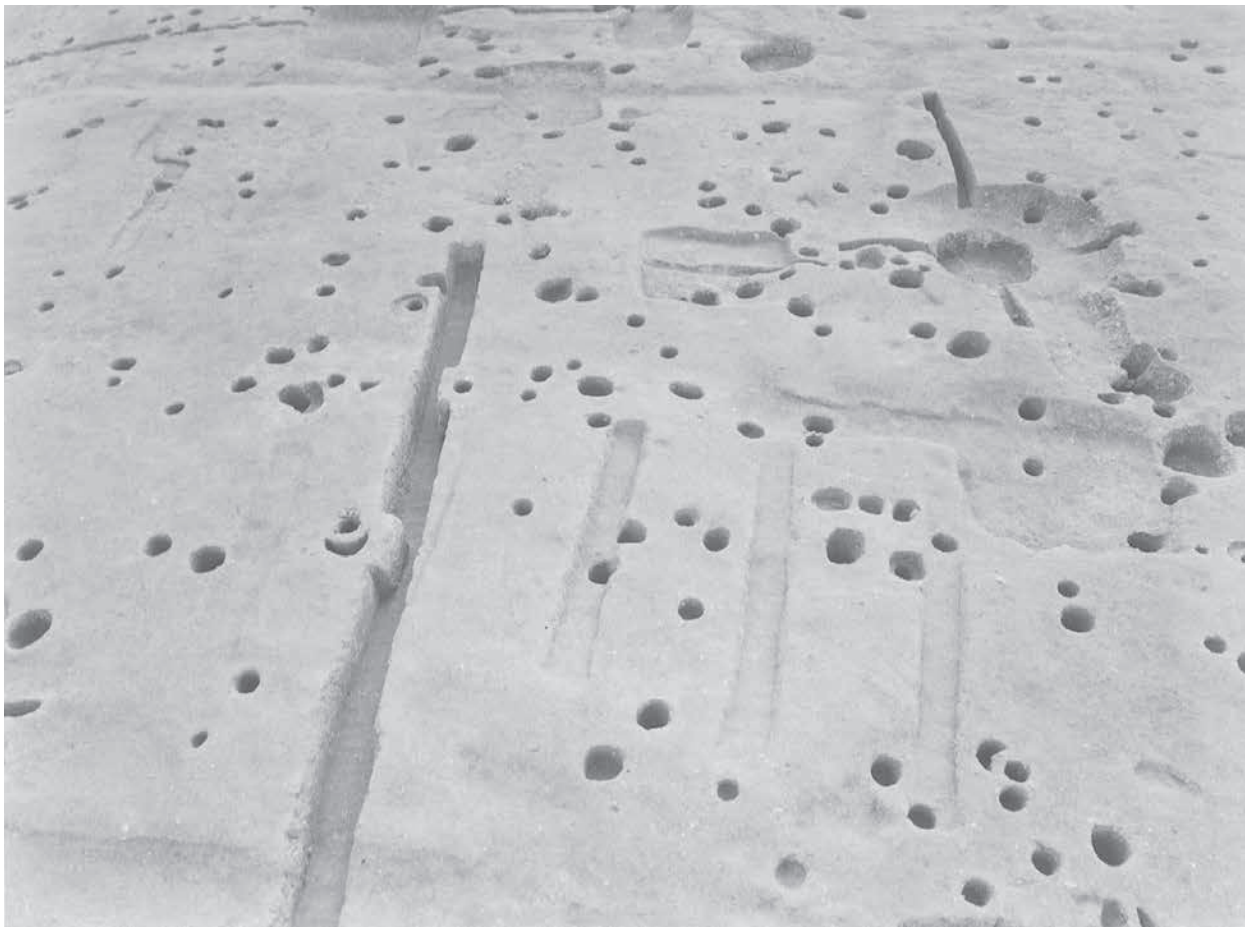
区画12　SR120（南東から）

区画12　SZ79

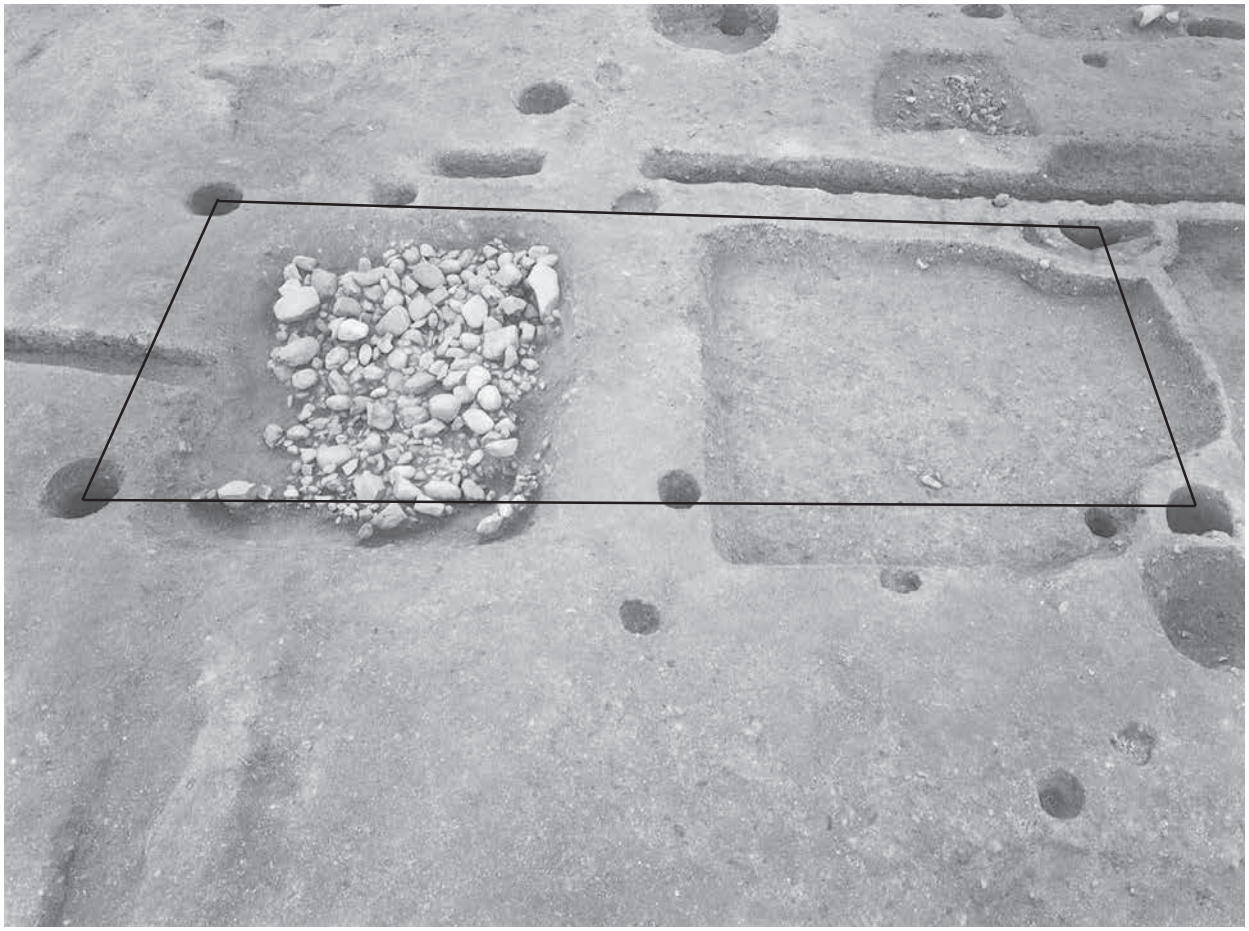
区画13　SB203（北東から）

区画15　全景（北から）

区画15　全景（北西から）



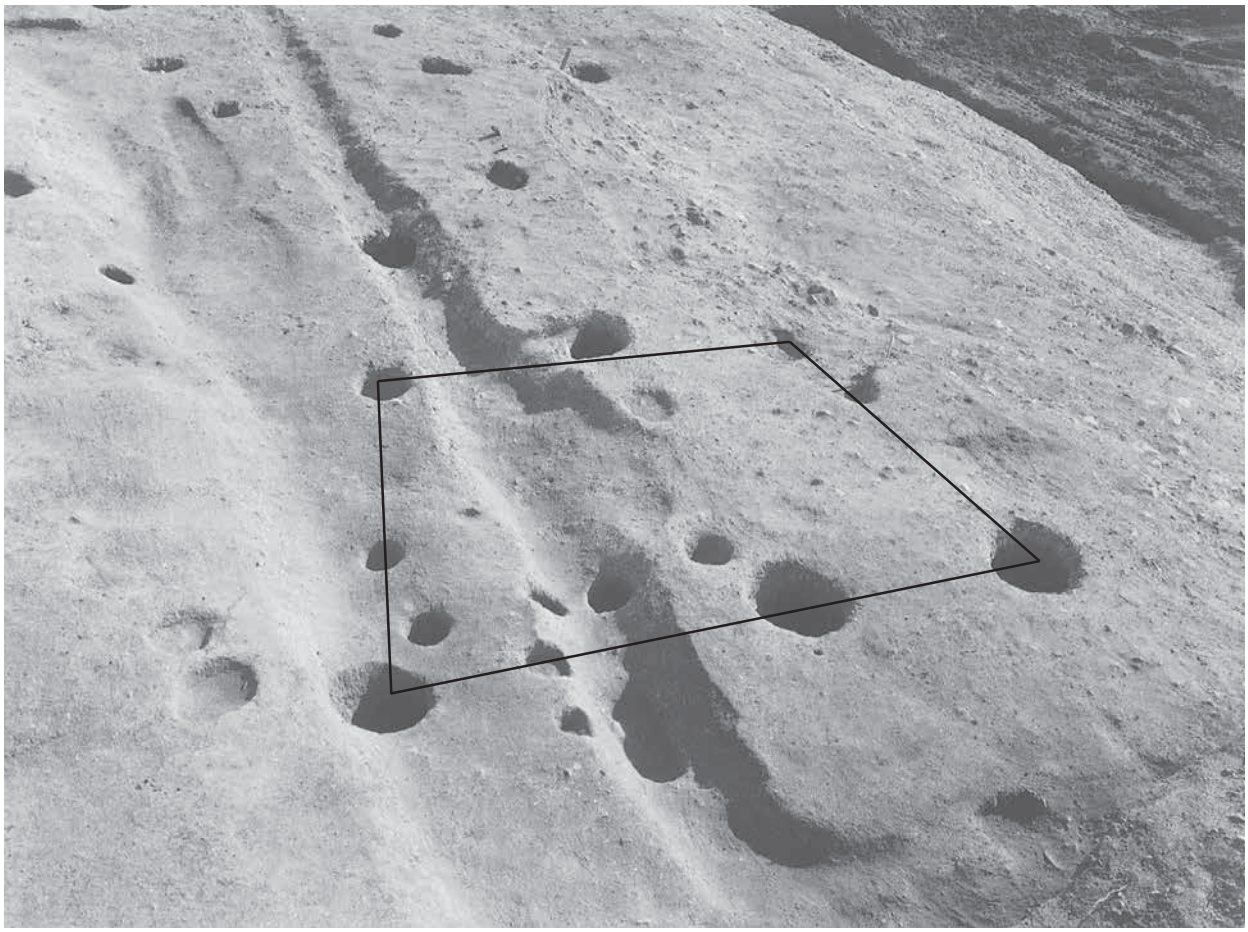
区画15　SB105付近（北西から）



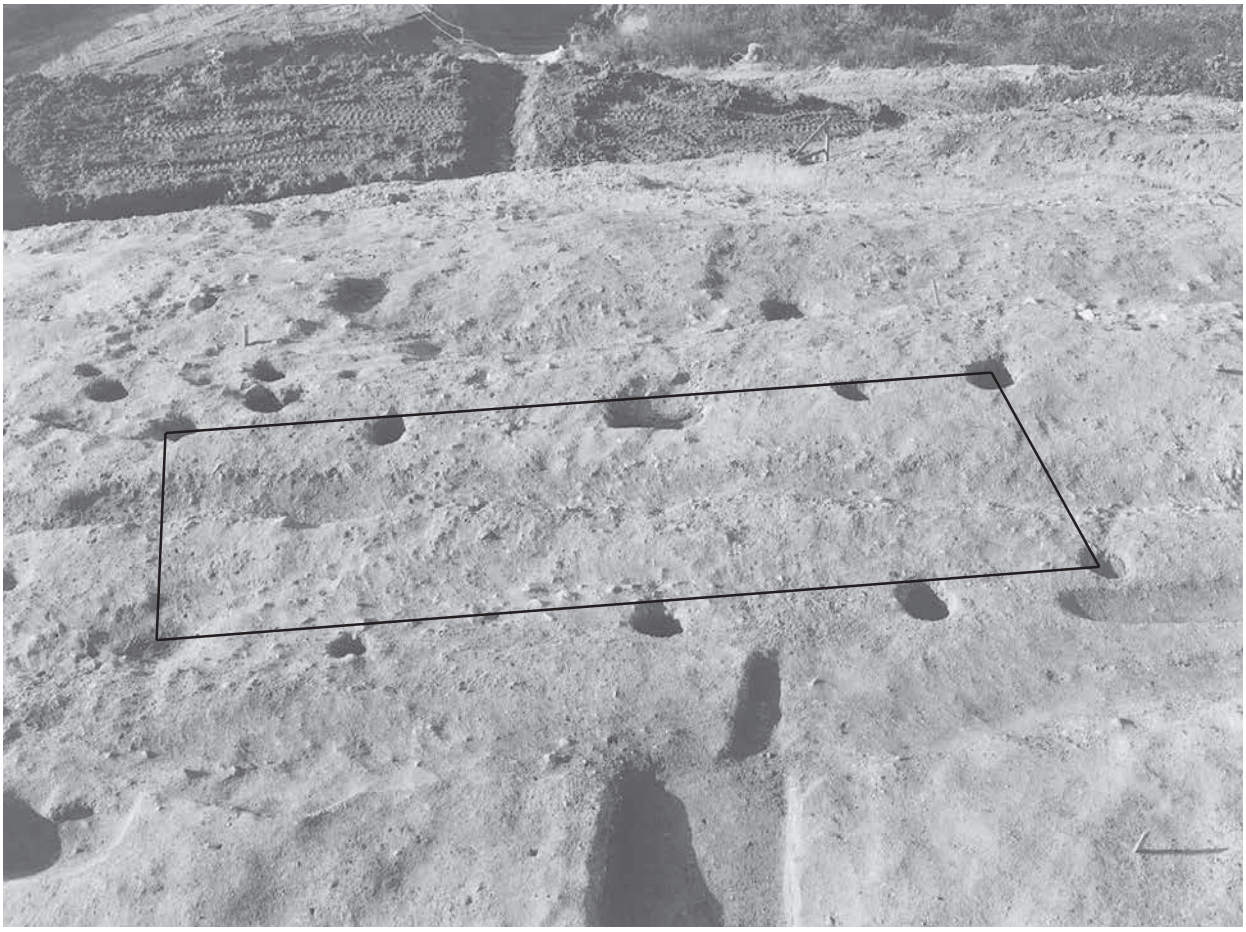
区画15　SB239、SK27・28（北東から）

区画16　全景（北東から）

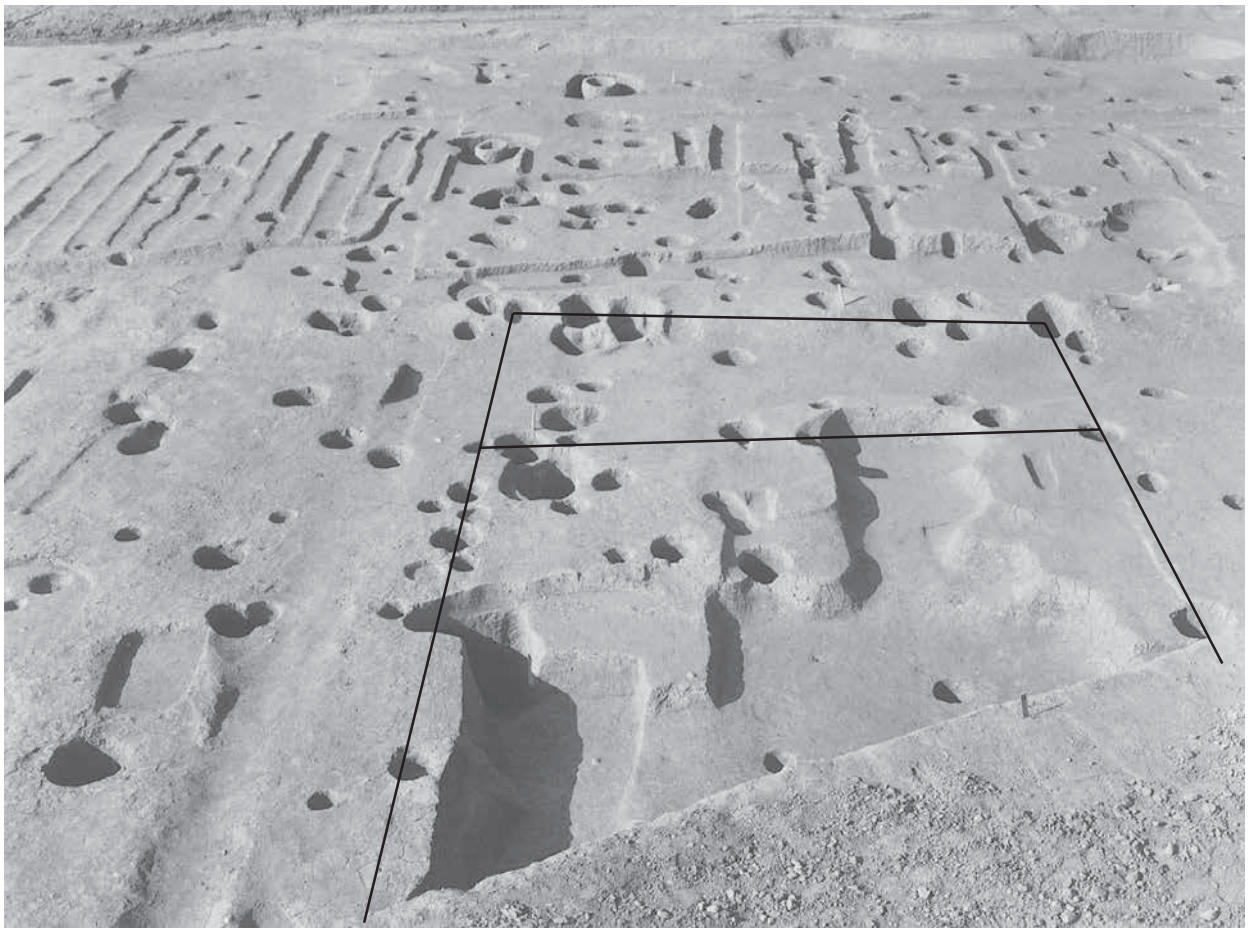
区画16　建物集中部（北西から）



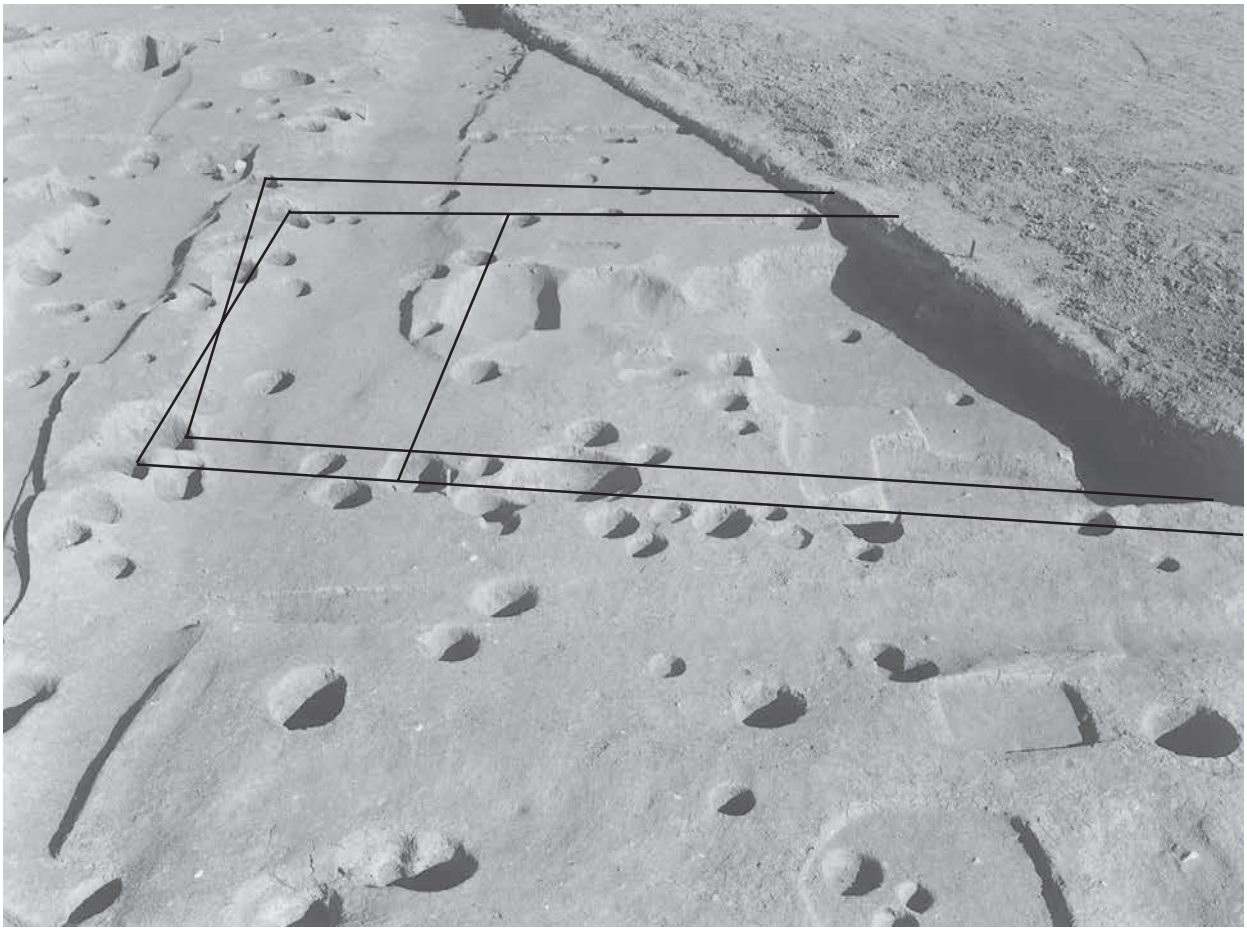
区画16　SB204（北西から）



区画16　SB205（北東から）



区画16　SB212（南東から）

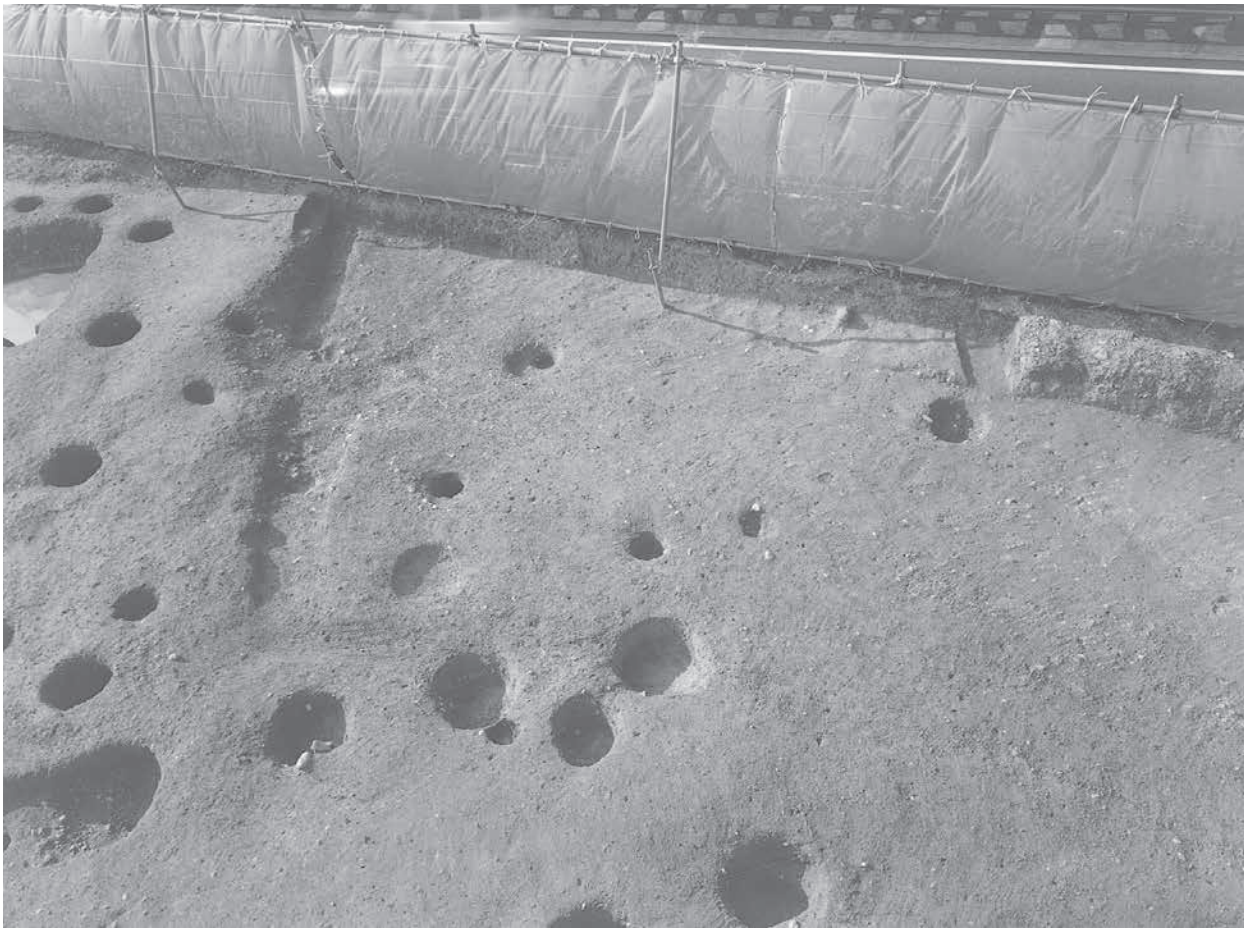


区画16　SB210・211（南西から）

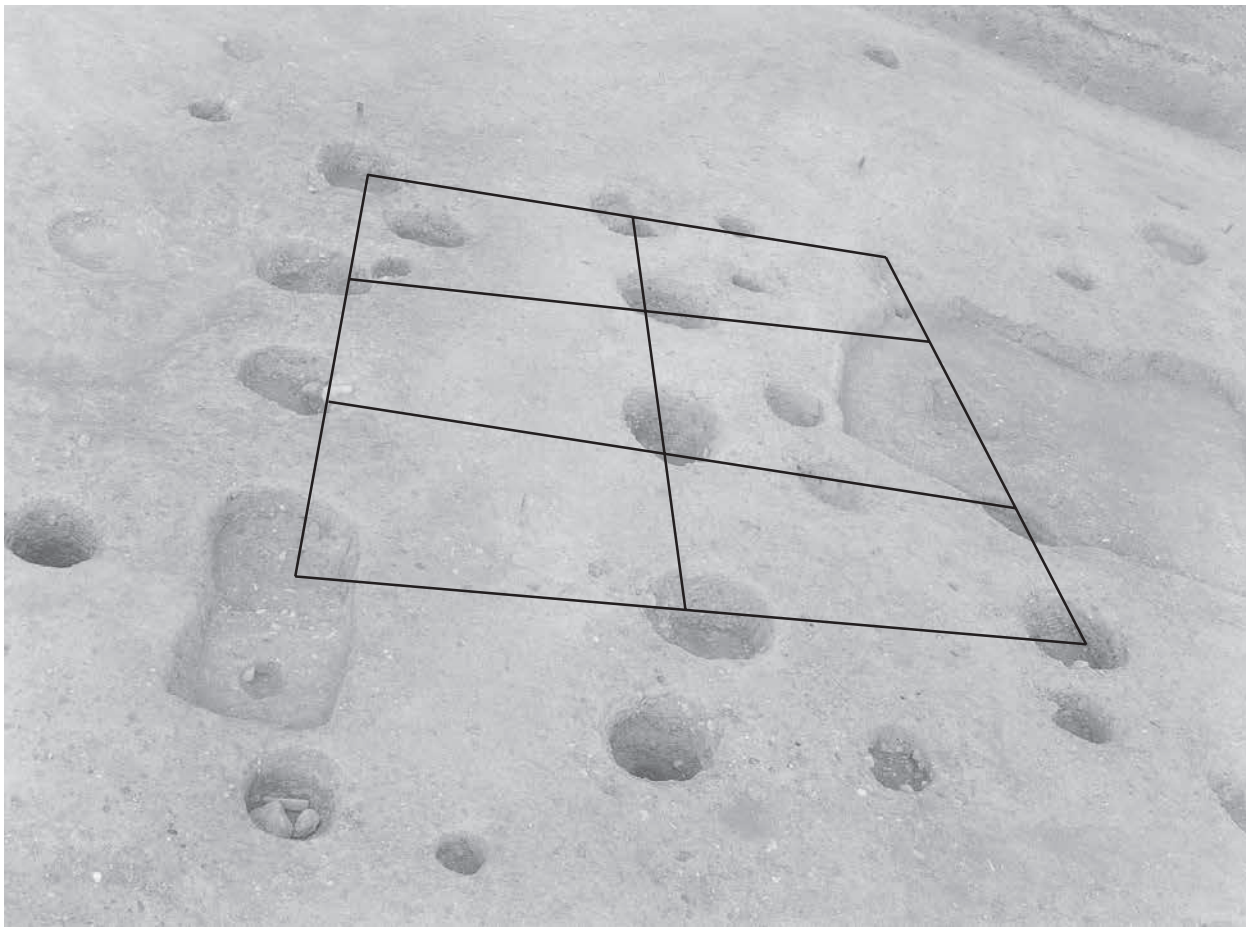
区画16　SK172遺物出土状況（北西から）

区画16　SK172遺物出土状況（南東から）

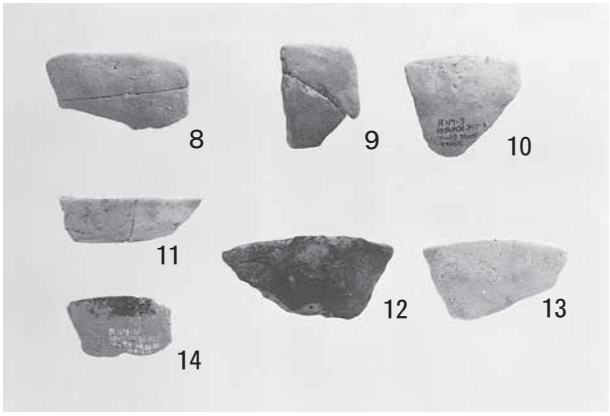
区画16　SK201礫出土状況（北西から）

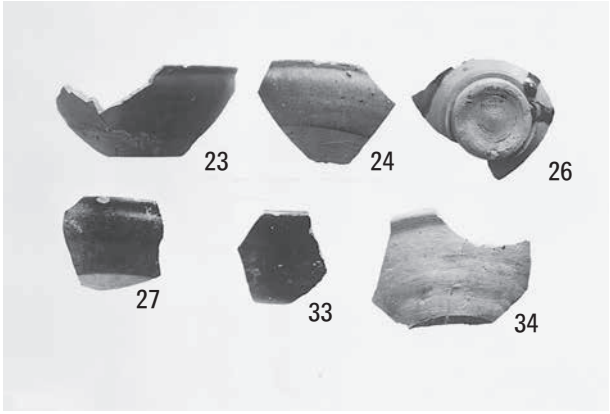


SH312（南東から）

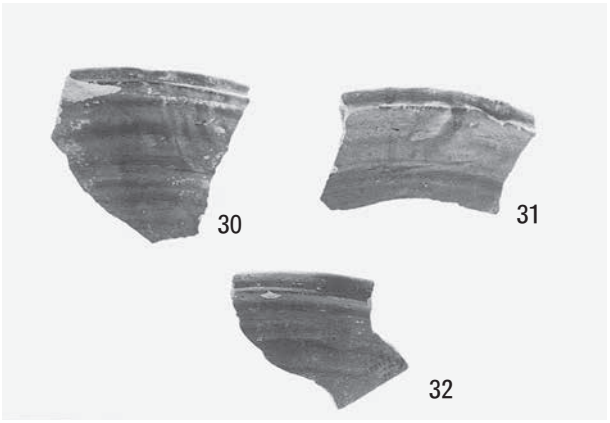


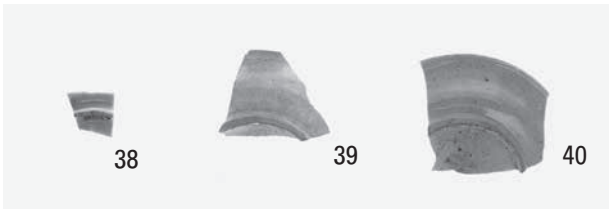
SB311（南西から）

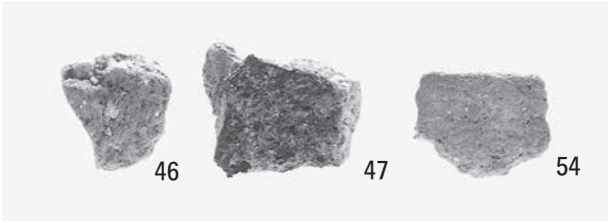




出土遺物①







出土遺物②

55

59

62

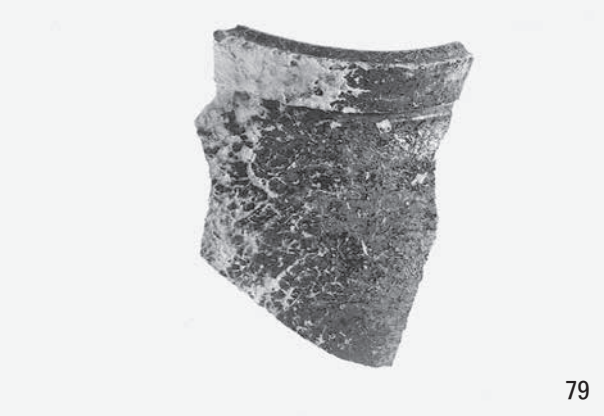
63

74

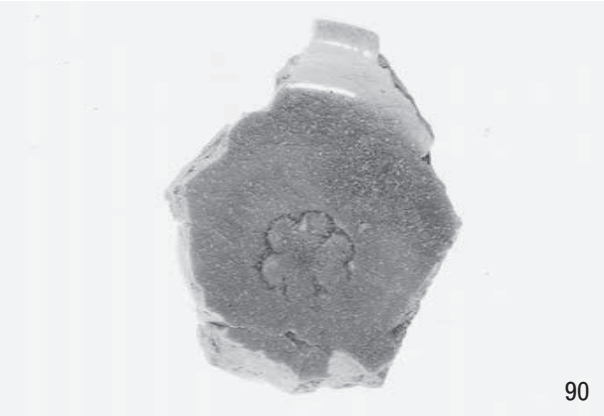
75

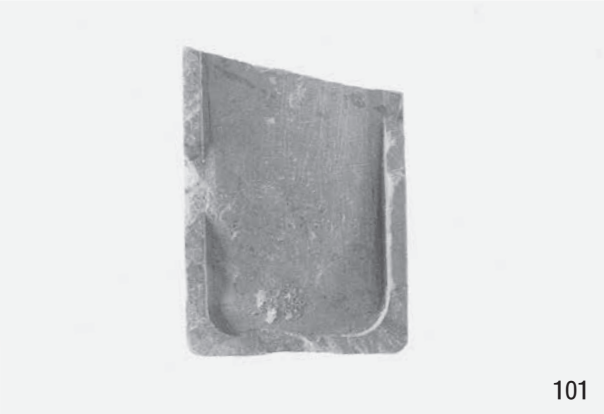
78

出土遺物④


79

83


90


101

102

86

88

100

107

出土遺物⑤

117

121

124

125

126

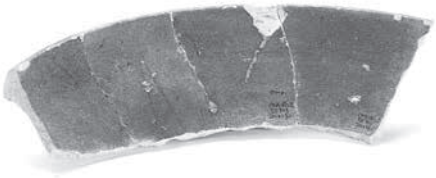
128

129

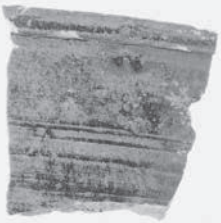
131

132

出土遺物⑥



137



138

140

141

143

144

152

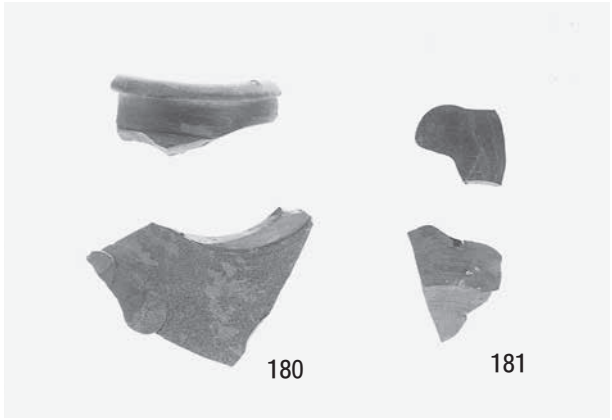
154

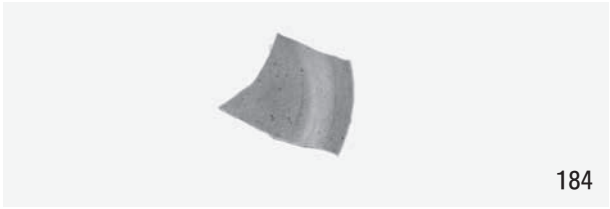
出土遺物⑦

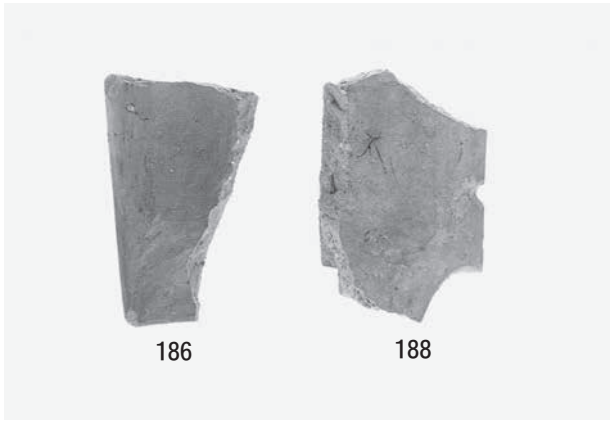
157

161

167


180 181


184


186 188

192

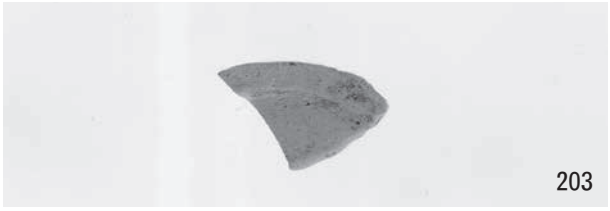
193

197

198

出土遺物⑦

202


203

204

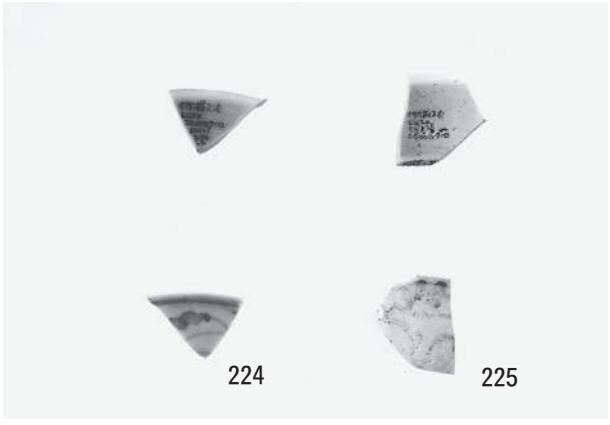
210

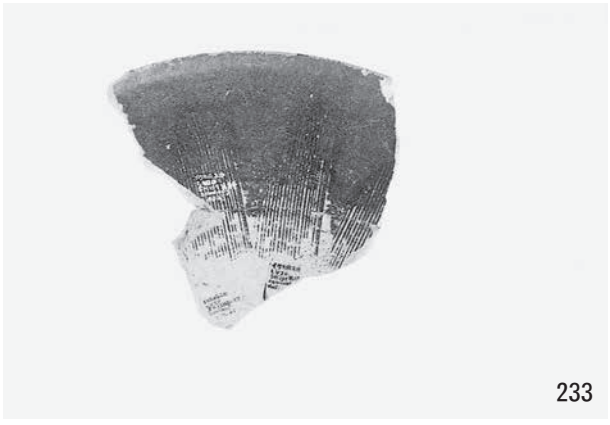
212

214

213

215


224 225

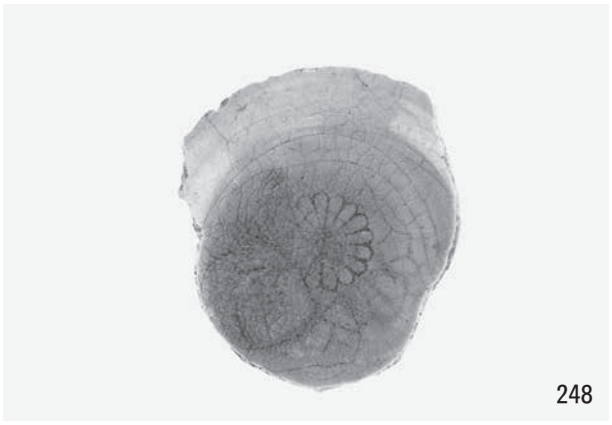

233

出土遺物⑧

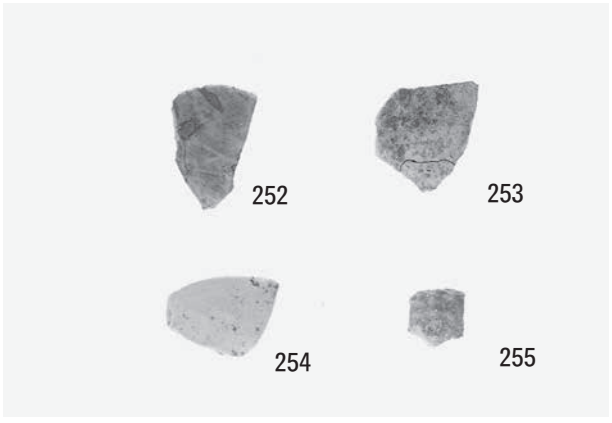
235

240

243


248

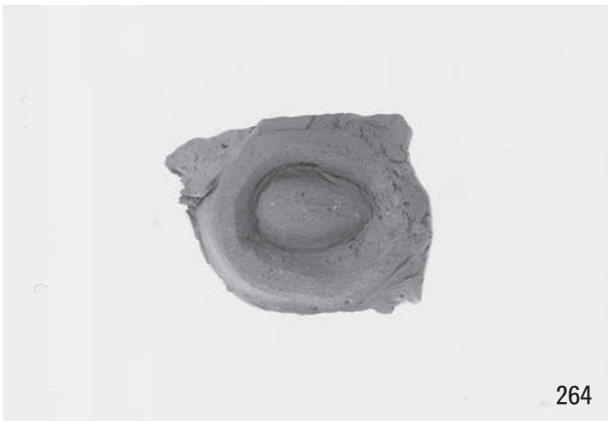
251


252
253
254
255

257

258

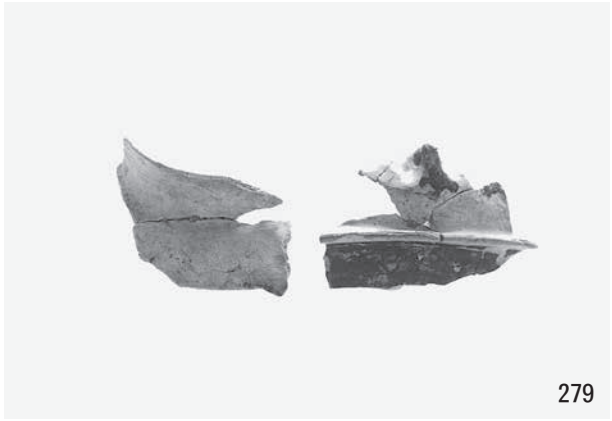
出土遺物⑨


264

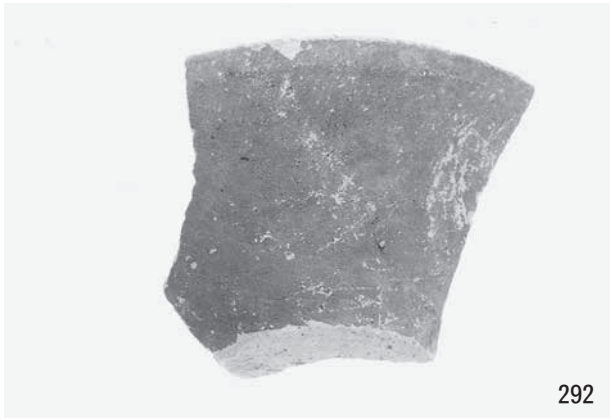
265

272

273

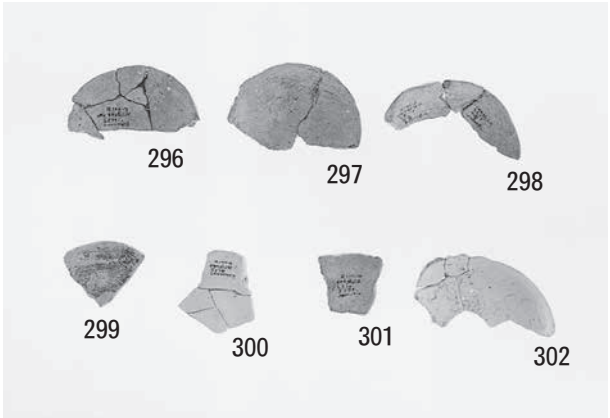

279

282


292

293

303


296
297
298
299
300
301
302

出土遺物⑩

305

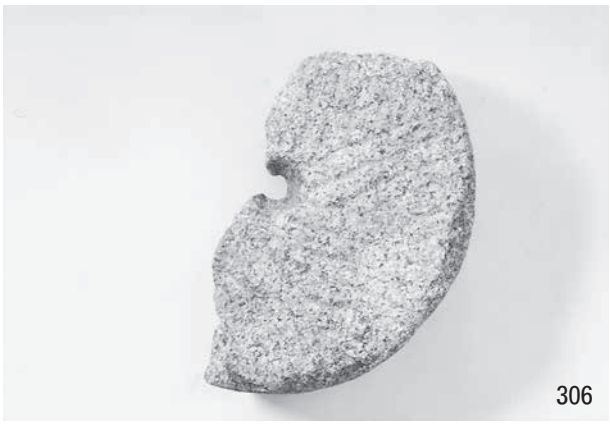
307

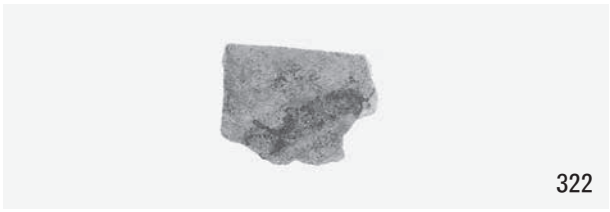
309

329

338

350

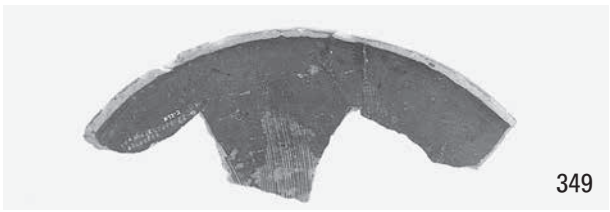

306


322

333

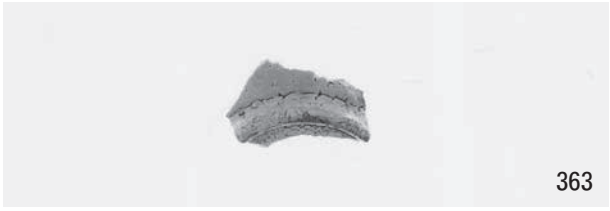
337

344


349

出土遺物⑪

361


363

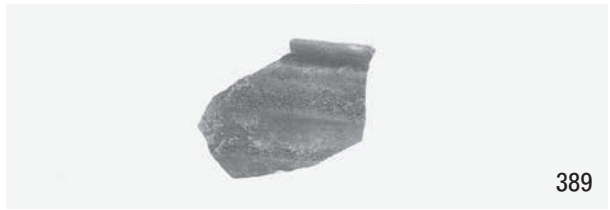
364

365

366

367

368


389

378

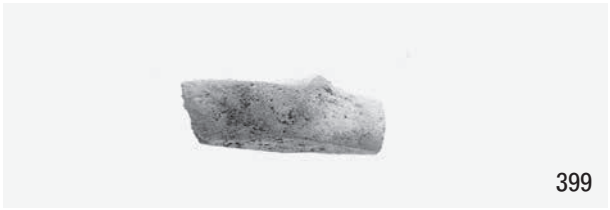
390

392

出土遺物⑫

396

404


399

405

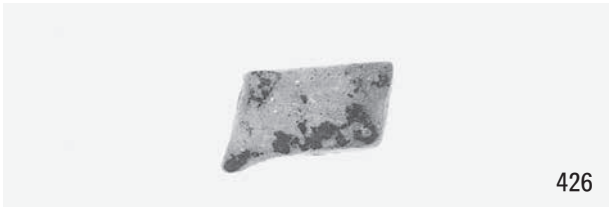
406

412

411

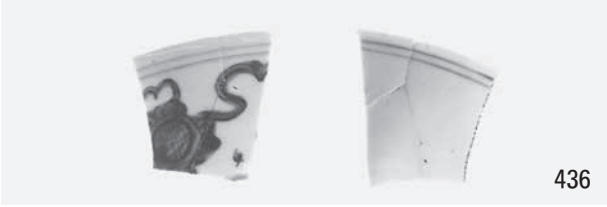
417

422

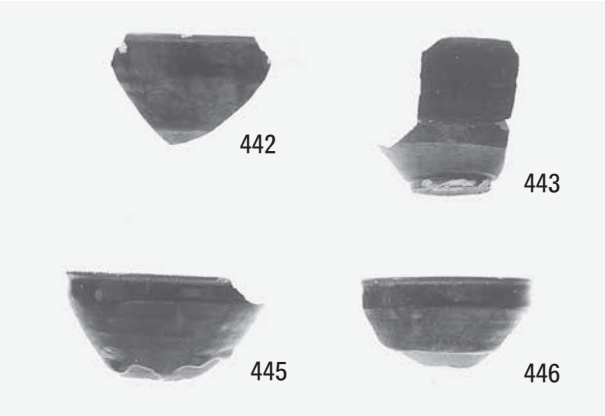

426

出土遺物⑬

432


436

437


442 443 445 446

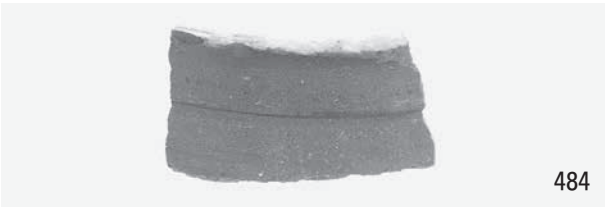
455

465

466

470

479


484

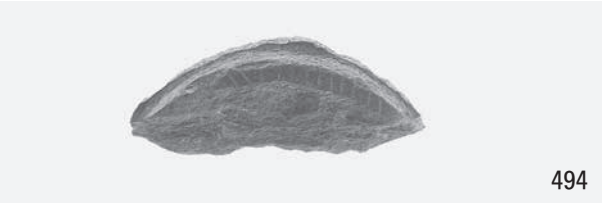
483

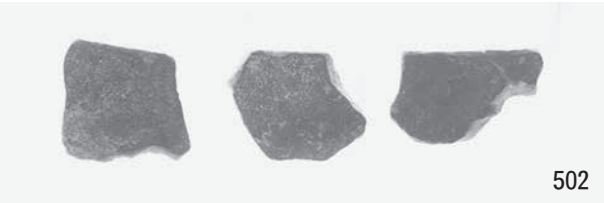
出土遺物⑭

486

488

492


494


502

517

524

529

531

532

536

出土遺物⑮

539

541 551

542

545

547

546

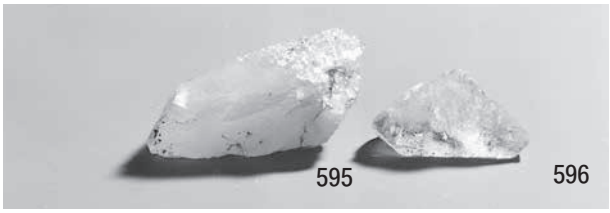
562

563

569

575

579


595 596

出土遺物⑯

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	きんきじどうしゃどうなごやこうべせんだいにめいしんあいちけんきょうからよっかいちじゃんくしょんけんせつじぎょうにともなういさかじょうあとはっくつちょうさほうこく
書　　名	近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT建設事業に伴う 伊坂城跡発掘調査報告
副　書　名	
巻　　次	
シ　リ　ー　ズ　名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２２７－２
編　著　者　名	（編集・本文）竹田憲治、（自然科学分析）金原正明・木寺きみ子・金原正子・金原　明 （遺物写真）　松田珠美
編　集　機　関	三重県埋蔵文化財センター
所　　在　　地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503番地　　TEL.0596-52-1732
発　行　年　月　日	2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
いさかじょうあと 伊坂城跡	よっかいちしいさかちょう 四日市市伊坂町	24202	246	35° 02′ 04″	136° 37′ 48″	19990701 ～ 20010109	14238㎡	近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神） 愛知県境～四日市ＪＣＴ建設 事業
まるうちいせき 丸内遺跡	よっかいちしいさかちょう 四日市市伊坂町	24202	202	35° 02′ 02″	136° 37′ 49″	19990201 ～ 19992026	120㎡	

所収遺跡名	種　別	主　な　時　代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特　記　事　項
伊　坂　城　跡	城館・ 集落跡	室町～安土桃山	屋敷地・掘立柱建物・道路遺構・土塁・土坑	土師器・陶器・磁器	弥生～平安、江戸時代の遺構・遺物も含む
丸　内　遺　跡		〃	なし	土師器・陶器	範囲確認調査